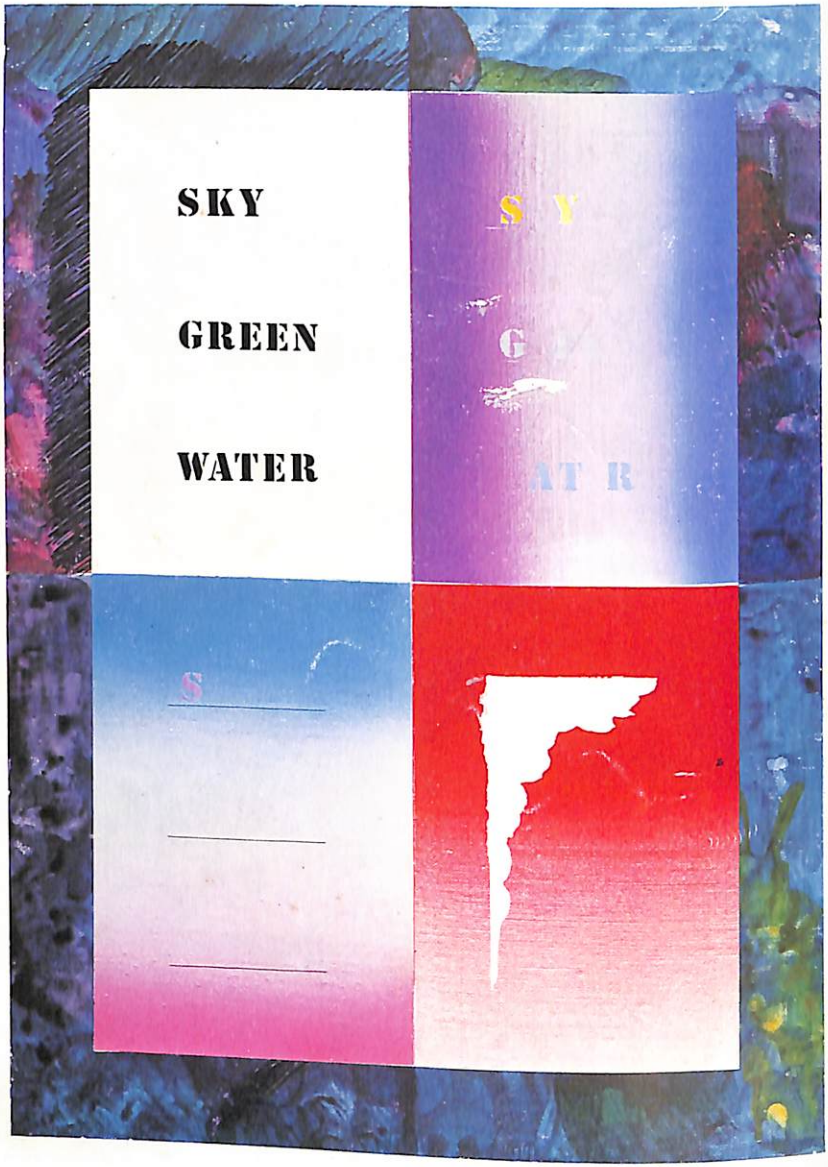
24

KYUSEN



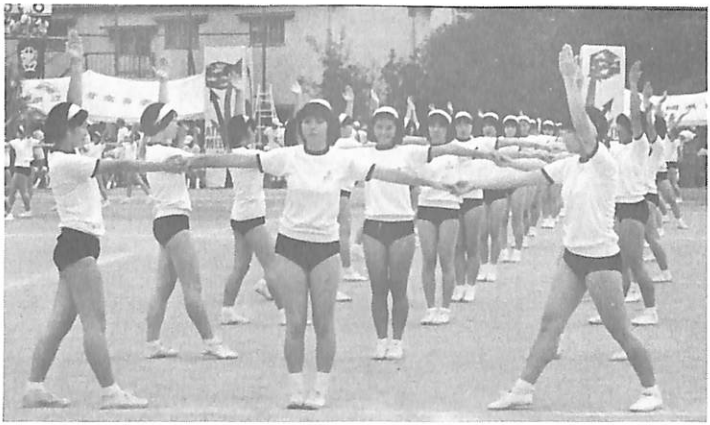
大空涵す玄海の
深き智徳を讃へつつ
足立の山を仰ぎては
愛国の意気いや高し

偲ぶもゆかし先人が
文化の道にしるしたる
光まばゆき栄のあと
いや勝れよと守りつぐ

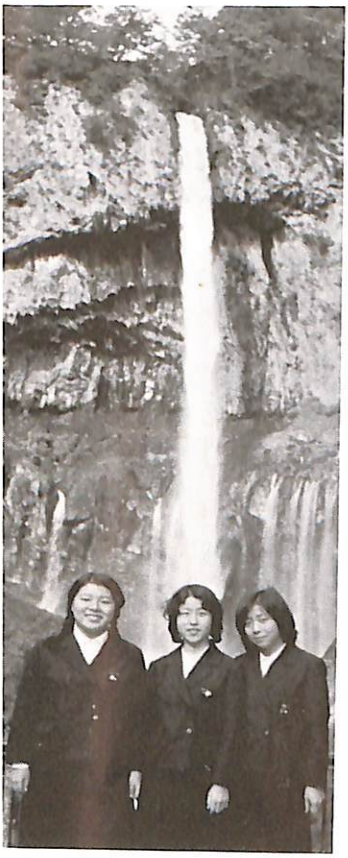
思想の潮は荒るるとも
登る峻阻はばむとも
理想は高く輝きて
我が往く道を照らすなり

撮影：川上　治

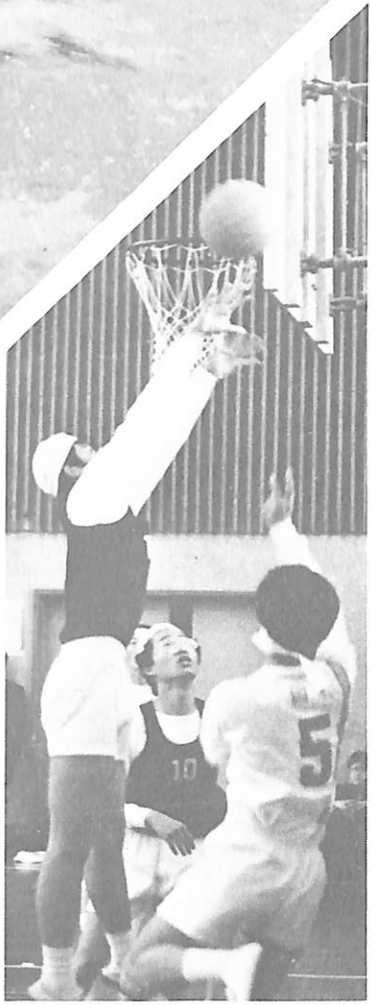
体育大会



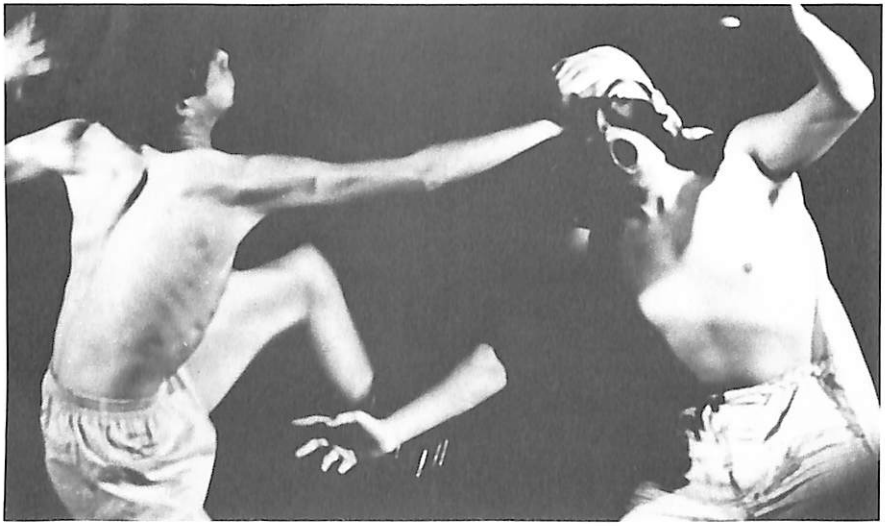
修学旅行



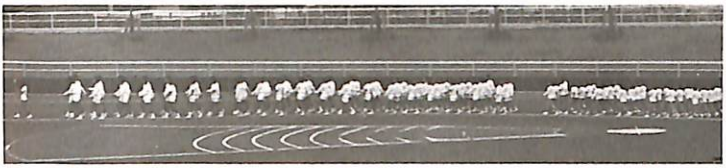
クラスマッチ



文化祭



一年生大会



汲泉24号目次

◇巻頭言

学校長　髙橋　和美……1

第31代総務部長　野口　純一……6

◇生徒会……9

◇クラブ……25

◇特　集……49

座談会

声

◇秋唧集……65

◇文　芸……159

◎雑感・編集後記……194

表紙／Ⅲ－2　寺井　弘典

Ⅲ－8　山野　雅生

題字／Ⅲ－4　吉田　洋介

二年生大会

汲泉24号目次

◇巻頭言

学校長　高橋　和美……1

第31代総務部長　野上　純一……6

◇生徒会……9

◇クラブ……25

◇特　集……49

座談会

声

◇啾唧集……65

◇文　芸……159

◎雑感・編集後記……194

表紙／Ⅲ－2　寺井　弘典

Ⅲ－8　山野　雅生

題字／Ⅲ－4　吉田　洋介

広東24号目次

○巻頭言

学校長　高橋　和美……1

第31代総務部長　野上　純一……6

○生徒会……9

○クラブ……25

○特　集……49

卒業生

○就職者……65

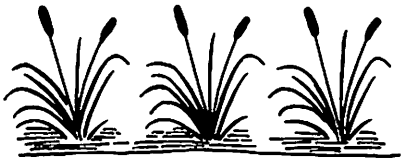
○文　芸……159

○編集・編集後記……194

表紙／III－2　谷井　弘典

III－3　山野　雅生

裏表紙／III－4　吉田　洋介



巻頭言

言葉

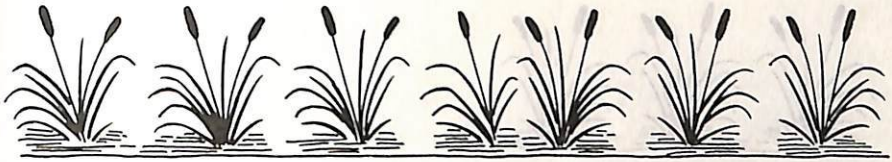
学校長　高橋和美

No totality can contain elements defined in terms of itself.

——*Russel*——

「われ思う、ゆえにわれあり」（デカルト）

私が初めて教師になった頃、ある生徒が次のような質問をしました。「先生、どこも強いところも弱いところもない均質な糸を、両端から切れるまで引張ると、どの部分が切れますか」と、「バラバラの粒子になるだろう！」「それではやっぱり切れたところが弱いことになります」私はさらに「ではいくらでも伸びるだろう」その生徒は「では伸びない糸だったらどうなりますか」私は答に窮してしまった。その日、家に帰りながら一つの盲点に気がついた。それは問題自身が矛盾していることである。切れた個所が弱いというのなら、その糸は決して切れることはないはずである。これは言葉の遊びとも言えるし、あるいは物理学でいうところの決して変形しない仮想物体としての剛体であるとも言え



る。私達は言葉で考えることが多いし、言葉の意味も言葉で説明していくが、大低の場合現実の世界の体験と照合している。現実には存在しないものを言葉で考えることもできる。実用的な糸も、なるべく均質になるように作られてはいるが、完全に均質な糸は決して存在しない。〝完全なもの〟〝無限〟〝すべてに当てはまる法則〟などは、私達の決して到達できない夢ではあるが、それに出来るだけ近づこうと努力していることは確かである。冒頭に掲げたデカルトの有名な言葉も、ラッセルの論理からは矛盾している。つまり、自分で自分を確認する自己規定は危険であることは確かであるが、デカルトの真意は単なる論理ではなかったに違いない。トルストイの言うように「すべての偉大な思想は単純なものである」ならば、私達もデカルトの言葉を素朴に受けとめても差支えはないだろう。この言葉を裏がえすと（対偶をとると）「存在しないものは、考えることができない」と言うことになる。この裏がえしは厳密ではないので補足しなければならない。昔のテレビマンガに「零下千度の星」というのが出てきたが、これは物理学の知識によれば存在しない。しかし、考えることはできるではないか、と反論された場合〝考える〟とは何かということが問題になってくる。いくらでも低い温度を考えることができるが、実際には零下二七三度以下の温度は存在しないということは、その思考が現実世界と無縁であるということになってくる。このような事は日常生活でもよく見られる。特に欲望や希望の実現化の段階において、情報不足や判断の誤りや、性急さの結果として起きることが多い。実験心理学における動物実験として、柵の外に手の届く場所に先ず餌を置き、次にはそれを遠く放してやると、柵の端を廻って餌をとりに行く動物とそうでない動物ができてくる。次に柵をコの字形にすると、殆んどの動物が訓練なしでは餌をとりに行くことが出来なくなることが知られている。この実験から二つの事実を知らされる。その一つは、欲望を実現しようとする過程において、目標から遠ざかることは困難であること、次には、反復訓練によって反射運動を制御し、機能を拡大できるということである。餌は存在するが、餌を手に入れるということは存在しない。日常的な例としては、学ばずして学者になることを夢みること、働かずして金持になることを望むこと、これ等は存在するものを手に入れることが出来ない場合だが、老人が若さを求めること、道具の助けを借りずに空飛ぶことを考えること等は、存在しないものを求めることになる。どちらの場合にせよ、実際的には「存在しないものを考えることは無意味である」と訂正しておこう。

「その理論が経験によって裏付けられない思想家の教訓をさけよ」(レオナルド・ダ・ヴィンチ)

実は存在の有無を確認する方法は個人によって異なるものである。したがって大抵の場合、先人の教訓は個別的である。

「なんじらは我より哲学を学ぶべきにあらず。哲学することを学べ」(カント)

格言を自分勝手な意味に解釈することは危険ではあるが、本来多様な意味を持っているものも多い。フランスの思想家アランは「厳密に定義されていない言葉を使えば、人は何でも証明できる」と言っているが、格言を証明や説得に利用するのは本来誤りであり、それはその人の人生の指針として利用されるべき性質のものであろう。冒頭の二つの言葉のうち、ラッセルの言は証明や論理の法則であり、デカルトの言は人生観の一つの出発点として多様な意味を内包しているもので、両者は異質のものである。

本来、経験の裏付けのない言葉は存在しないが、その言葉を組み合わせて、経験と無縁の架空のものを合成することは極めて簡単にできる。それが理論の中途や、鑑賞のためなら問題ないが、現実の欲望や希望のために利用される場合には危険であろう。それなら思い切って体験の裏付けのない言葉をすべて除去すれば簡単であるが、実際にはそうもできない。

昭和五十四年六月、優れた自然科学の業績に対して第二十回の藤原賞を贈られた数学者岩沢健吉博士は「そういうことは、全然考えたこともないが、物理や化学の対象となる目に見えたり、手で触ったりできるものだけが実在でないことは確かだ。数学の対象は、触れるものではないが、ちゃんとある。人間の性格のようなものだって、見えも触れもしないがやはりある」と。岩沢博士は現在アメリカのプリンストン大学教授として〝整数論の位相的方法による研究ならびにZℓ拡大の研究〟に対して受賞されたのですが「私の研究内容を説明するのは非常に難かしい。やってる分野が違えば、数学者が聞いたってむつかしいんです」と。この二つの言葉は面白い。「偉大な思想は単純なものである」とトルストイは言ったが、体験できない対象を取扱う思想は、その実在を単純には説明できないこと

がある。物理学を知らない人に向って、零下千度の星の実在しないことを説明するのは難しい。そこで「私を納得させないすべての思想は容認しない」という態度は好ましくないと言える。これに似たことがらは、未来の法則については常に起こっている。幼児に向かって「その道を往くと危ない」と大人が注意した場合、幼児はその道を歩いた経験がないので、大人が経験した危険を知らない。厳密な意味では、未来に対する予測はすべて過去の経験による推測であって、多分こうなるであろうという可能性の域を出ないことが多いので、説得することが困難になってくる。未来への推測や、体験できない思想が、実は身近な行動の指針になっていることが多い現代では、失敗のない人生は存在しないのかも知れない。

バーナード・ショーの皮肉は「人間が賢いのはその経験に応じてではない。経験に対する能力に応じてである」と。さらに極論すれば、言葉の領域では、何も経験しない人生もあり得ることになってくる。この場合の言葉とは、思考や経験ではなくて単なる日常生活の投影にすぎない。そこでこの投影を逆にしてみると、つまり、現実の生活が単なる惰性や習慣だけでなく、言葉による思考の投影の部分を持っている場合、頭の中の考える世界と、現実の生活する世界とが一致しないことによる混乱が起きてくる。言葉によって経験することは複雑であり、言葉を経験することは、さらに複雑で危険である。現実を無視した言葉だけの世界では単純化が行なわれ、理想化も完全化も可能になってくる。しかし人は現実体験から離れることはできないので、現実世界を言葉に投影する。そこで、現実の単純化や省略化が行なわれる。

「単純なことに科学があり、複雑なことに芸術がある」（ヴァレリイ）

科学は単純化し、芸術は省略する。そこで人は言葉で生活するための共通の約束――形式――をつくり新しい世界を創作する。しかしこれは現実の世界ではない。創作された世界が存在するかしないかはあくまで言葉の世界の問題であろう。存在しないものを考えることは無意味であることは確かだが、それは体験のみで確認できる問題ではなく、やはり言葉で表現する以外にはない。そこで「われ思う、ゆえにわれあり」という出発点が多様な意味を持ってくる。多様な意味を持つ言葉とは、汲め

どつきぬ泉のようなものかも知れない。

三十一代　総務部長　野上純一

最近、「日本人ほど流行に弱い国民はない。」という言葉をよく耳にしますが、なるほど私たちの周囲を見回すと、「何とかブーム」所謂「流行(はやり)」というものがあまりに多すぎるような気がします。しかもその流行が短期間ですぐ次のものに移っていくからどうもくせが悪いのです。これは流行が深い観察や考えに根ざしていないからだと思います。にもかかわらず、私たちは、流行に乗り遅れるとまるで人並みでないような錯覚に陥り、ついつい流行に流されてしまうようです。そのことが私たちの日常生活から落ち着きというものを奪い、どこかあわただしい生活を私たちに強いているのではないでしょうか。

たとえば著作の世界にしても「誰それの何とか殺人事件！連続何週間ベストセラー！」とかいう宣伝文句を目にするにつけ、本の寿命は週単位になったのかという気がします。

芸能界の話になると、この傾向はもっと顕著になります。たとえば、ほんの一年前までは飛ぶ鳥も落とす勢いで、レコードを出せばヒットという驚異的なグループがありました。彼女らは年末の○○○○大賞とやらもかっさらい、しかもとうとうあの全国民的年末行事の○○歌合戦をも足蹴にしてしまったのです。ところが今年は、昨年国営放送をなめたせいか、逆に足蹴にされそうな有様です。いろいろなヒット曲にしても一ケ月単位でくるくるかわってしまい、私たちはすぐ「新曲！新曲！」ともてはやすのが常です。

もっと身近な例を考えてみますと、あのインベーダーゲームという奴があります。これにしても一時は、猫も杓子もインベーダーというほど流行し、ゲーム代のために盗みをはたらいた人もいたほどでしたが、今では幾つかの会社が倒産したと聞いています。

このような例は他にもたくさんあります。私たちは常に新しいものを求め、今まで熱中していたものにすぐ飽きてしまうようです。そして新しいものは、以前のものより強い刺激をもっていなければなりませんし、次には私たちは、より強い刺激を貪り続けていくのです。マスコミの影響や社会の風潮のために私たちがそうなるのは無理のないことかもしれません。しかし、このような社会の傾向の中でこそ私たち若者は、もう少しじっくりと物事を見つめ、それをあわてずゆっくりとかみ砕き消化するといった態度を身につけるべきではないでしょうか。

話を本のことにもどしますと、長い年月生き残ってきた作品にはやはりそれなりのものがあると思います。しかしそういう作品は一度さらっと読んで理解できるようなものではありません。そ

れで私たちは、読んですぐ楽しめるような作品を好むのではないでしょうか。もちろん読書の目的は人それぞれ違いますから、読んで大笑いできるような本や所謂ベストセラーを否定するわけではありませんし、読書の第一条件というのは楽しめることだと考えている人もいると思います。しかしやはり私たちは、たとえ時間はかかっても、本当に人間の本質に根ざした作品をじっくりと味わうべきだと思います。その作品を消化するのにはずいぶんと苦労を要するかもしれません。けれどその本当の味は、誰にでも簡単に味わえるインスタント食品よりずっと深いものがあると信じます。今ここで私の言いたいことは、読書の本質とか、何が読書に一番大切とかいう問題ではなくて、私たち若者は目の前の困難に恐れをなして、安易な道を選ぶべきではないということです。

現代はスピード時代ともいわれ、私たちの生活はすべての面でスピードが要求されます。又、私たちが試験中に十分思い知らされるように、何もしなくても時はどんどん過ぎていきます。しかし、そういう時代だからこそ、若者はどっしりとかまえて、すぐに安易な道を選ばず、しっかりと大地に根をはった生き方を選ぶべきです。その場その場をおぎなうような生き方より、他人よりは多少遅れても、一つ一つの事をゆっくりと考えられる余裕のある人生を送りたいものです。

もう一つ流行ということに関連して私の感じることは、個性の強い人がもっといてもいいのではないかということです。「他人と同じでいたい。」ということが、私たち一人一人の大切な個性を圧迫しているような気がするのです。この地球上には何十億という人がいますが、一人として自分と全く同じ顔の人はいません。それと同じように、一人一人がその人にしかないすばらしい個性を持っているはずです。でも私たちの中でいったい何人の人が本当に自分の個性を大切にしているでしょうか。「人様がそうするから。」という人が多過ぎるのではないでしょうか。もちろん私のまわりにもすばらしい個性を発揮している人がたくさんいます。たとえば、松下君や秦君、この名前を知らない人はいないと思います。彼らのあのパーソナリティそしてあのパワー……、彼らを見て「またバカしよるわい」と思う人がいるかもしれませんが、皆の中心になって「何かやってやろう」というエネルギッシュなあの個性は、たとえ彼らが職員室に通いづめになっても、決して否定しきれないと思います。それから、野球部の鶴田君…彼の場合野球を離れたクラスの中でも、どこか目立つ奴です。彼の思考範囲の広さというか、考えの柔軟さに感心したのは、私だけではないはずです。これもすばらしい個性だと思います。もう一人、バスケット部のキャプテン千々松君……、彼は本当に男の優しさを感じさせる男です。（別に変な意味ではありませんので…）又バスケットの試合中の彼のきびしい顔…、やっぱりすばらしい個性の持ち主です。

個性といっても、今あげた人のように、人に目立つ者ばかりではありません。例えば私の友人に山田という男がいます。彼はクラスの中でも目立たない方ですが、彼と一緒にいると何となく心が落ち着くのです。多くのことを話し合うわけではありませんが、何となく心が柔かくなります…。これもまたすばらしい個性です。それからコンピューター男の鵜木君。彼の数学的な物の考え方も

そうです。

その他にも私のまわりには、個性あふれる人がたくさんいますが、まだまだ自分の個性を十分に発揮していない人が多いと思います。そのような人は、皆同じ顔に見えてしまいます。もっとアクの強い、一見とっつきにくいような強烈な個性を持つ人がいてもいいはずです。

流行ということからずいぶん話がとびましたが、私は流行そのものを否定しているわけではありません。皆が同調するのであれば流行にもそれだけ人をひきつける部分があるのでしょうし……。ただ私の懸念しているのは、それによって物事の真の姿を見つめ、ゆっくりと考えるという態度を失ったり、自分の個性を軽視してしまうようになりはしないかということです。

この「青春」という時期は二度とかえってきません。また「青春」とはあっという間に過ぎてしまうものかもしれません。だからといって、駆け足で走り過ぎてしまっては……という気がします。自分の個性を大切にして、大地にしっかりと根を張り、ゆっくりと生きたいものです。そうすれば、いろんなことがもっとはっきりと見えるようになるのでは……と思います。

生　徒　会

この一年　('78〜'79)

3月
- 終業式

4月
- 始業式
- 入学式
- 応援練習（一年）

5月
- 開校記念日
- 文化祭

7月
- 夏季クラスマッチ
- 総務部長改選
- 終業式

8月
- 修学旅行（二年）

9月
- 始業式
- 体育大会

10月
- 区内総体（一年）

11月
- マラソン大会

12月
- 終業式

1月
- 始業式
- 寒中訓練（一年）

3月
- 卒業式
- 冬季クラスマッチ

生徒会

総務部長　野上純一

生徒会の活動や機構に特別にくわしかったわけではない私が総務部長という大任を引き受けてから、早くも一年間が過ぎてしまいました。総務部長になるまでの私個人の印象は、生徒会というのは行事の準備をするところであり、しかも係の人が一生懸命になって夜おそくまで働らいている割に、全校生徒の皆さんの生徒会活動に対する意識が低いということでした。そこで、私が総務部長になって最初に目標としたことは、自分のように生徒会に関する知識をあまり持っていない者でも、自分の考えを自由に発表することができ、皆が自分に関係のあることとしてとらえられるような生徒会をつくること、そしてただ行事の準備をするということでした。

ところが、実際に活動してみると、はたで見ていた時とは全く違っていて、私の甘い理想などは、たちまち吹きとばされてしまいました。初めて行ったアンケートの回収率は、一割もなかったことを覚えています。千三百五十枚もの印刷をして、わずか百枚そこらしか戻ってこなかったことは、私には大きなショックでした。体育大会が三十分もの遅れを出したことについても、その大きな原因が選手の集合に予想以上に時間がかかったことであったことを思えば、全校生徒の皆さんに、十分に意識を浸透させることができなかった私の責任は免れられません。

その時私たちはもっと深く突っ込んだ討議をすべきでしたが、そういった話し合いをしたりしても、行事の計画に流されてしまうことがしばしばでした。それでも何とか、美化コンクール、公聴会、HR委員会の強化ということを行うことができました。美化コンクールは校内の美化ということの他に、皆さんに生徒会活動というものを身近に感じてもらうことを目的としていましたし、公聴会は言うまでもなく、皆さんの意見を直接耳に入れるためのものでした。HR委員会の強化ということは、ここでは詳しい内容は省略しますが、各クラスHRが生徒会活動の基盤である以上、次の代でHRをさらに充実させてほしいと思います。その他広報なども使用して、できるだけ総務部と全校生徒の皆さんの距離を短くしようとしましたが、それらのことが十分な効果を上げたと言い切る自信はありません。

それでも、文化祭にかけて、少しずつですけど、皆の意識が高まってきたような気がします。もちろん、そう感じたのは私の自己満足であり、皆さんにとっては相変らず親しみの薄い生徒会であったかもしれません。しかし、文化祭の時、係以外の方がたくさん手伝いにきてくれた時には、本当に嬉しく、頼もしく感じ、自分の目標が、わずかでも達成されつつあるのかと思いました。クラブが終ってから疲れた体で手伝いにきてくれた人もいますし、廊下ですれちがった時に「がんばろうや。」と声をかけてくれた名前も知らない人もいました。そのようなことが、どれだけ私たちを励ましてくれたかしれません。

今、私たちの最後の行事である夏のクラスマッチが行われています。各クラス、四十五名がひとつになって競技している姿を見て、このクラスの団結力が早く学校全体の団結に発展してほしいと思います。

一年間いろいろと力の及ばない点があっ

たと思いますが、皆さん御協力どうもありがとうございました。

副総務部長

高田直明

〝物事を実行する際に〟

ぼくが、九大ドイツ言語学助教授から直接聞いた言葉である。彼がドイツ留学をしていた時一番痛切に感じたことだそうだ。「日本人とドイツ人の思考構造の顕著な違いは、ドイツ人は実行にあたって実行を仮定して行動を決定する。日本人は行動を仮定して実行を決定する。」全く真理を得たものだと思う。

これと同じことがこの一年何度かあった。「それは、成功の見通しが少ないので、計画実行をみあわせるべきだ。」という声が、それである。これは完全主義でもない。彼等が見ているのは〝成功〟だけ……結果でしかない。「どんな汚ない手を使っても勝ってみせる。」とわめく野心家とどれほどの差があるだろうか。実行を決意した彼のほうがまだしもましだろう。すべての評価されるべき点は、結果ではなく過程にある。善戦して敗北しようともその健闘を讃えられる如くに、成功されたときにその成果が問われるのではなく、成功させようとしたときがそうである。このことに気づかない限り、いつまでたってもイタチごっこなのである。

書記

勝野美則

倉高生徒会三役にまさかこの私がなろうとは、夢にも思っておりませんでした。それが去年の七月、ふとしたことから野上君の推薦責任者になり、それから、書記長を任され、早いものでもう一年になります。そこで、ちょっと反省などをしてみたいと思います。

反省といっても、私はこの一年間何をしてきたのでしょう。頭に浮かぶのは、

「気をつけ。只今より全校朝礼を始めます。礼！」

の、全校朝礼の司会ぐらいのもので、しかもその司会も失敗ばかり、何度、

「礼！」

を抜かしたことでしょう。（あの時校長先生の顔は忘れられません。）

その他、総務部会、公聴会（今年からの新企画）、クラスマッチ・文化祭の開閉会式、生徒会説明会、他校交流会など『会』のつくものは、たいてい司会をしました。千三百人を前にして、『ようやりきったものだ』

と我ながら感心しております。

でも、「司会」だけではありません。体育大会・文化祭ともに燃えました。準備不足のためか、文化祭直前は相当遅くまで残ったりもしました。しかし、私の力など、たかが知れてます。やはり、この二大行事ともに納得すべき成果をあげることができたのは、皆さんの力でした。各係長の方々、それと各係で夜遅くまで頑張ってくれた生徒の皆さん、お疲れさま。

この一年間、いろんな人と会いました。倉高だけでなく、他校生とも話すことができました。このことが一番嬉しく思うことです。

そして、一つの目的に向かって、十数人の係長を中心に、数十人の係員が力を合わせていく、途中、口論などをしたりして、気まずくなったこともありましたが、最後は、「やるだけやった」の充実感でみんなが一つになる――これは、忘れられない貴重な経験でした。

最後になりましたが、縁の下の力持ちとして議事録や書類整理などバチッとしてくれた城後君、山下さんどうもありがとう。おかげで私は思う存分に、「目立とう精神」を発揮することができました。一年間、勉強だけでは得られない体験ができ、よかったと思います。これが私の反省です。

城後　修
山下典子

学校における生徒会の位置というものは、その学校の方針と校風により決められると思います。文化祭他校交流会で県下の六校が集い、生徒会のあり方について予想以上に活発な意見が出された時、私は特にそれを感じました。

まず驚いたことは、生徒会は生徒の主張を通すために先生方と対立すべきであるという考えの学校が多かったことで、「自治の実践」という言葉さえ用いられました。

反面、T校では、いわゆる「シラケの時代」と称して、やればできるのにしようとしない、生徒会の活気のなさを訴えました。

そういう中で倉校の風紀面での自主性は我校の校風を示すものとして質問攻めに合い、この討論で、普段は気づかないことを教えられたように思います。

この一年、議事録とプリント整理に終ってしまった私達ですが貴重な体験をノートを通して残すことができました。みなさんどうもありがとう。

庶務委員会

日野　公嗣
宮野恵理子

総務部の仕事をさせてもらうようになって早くも一年たったものの未だに庶務委員会とは、日ごろどういう活動をやればいいのか分からない状態です。というのもその活動というのは、その名の通り様々な雑務と、とかく疎遠になりがちな生徒会と一般生徒とのつながりを保つという二つの活動に分けられると思いますが、そのいずれもが、はっきりとした形をもっておらず、これといって限定されておらず、しかも、こちらの積極性が欠けていたからだと反省しています。

ただ、この一年間にやったわずかな事のうちでこれはやってよかったと思っているのは、『公聴会』でした。一年前、この役目についたころにはすでにそれまでの『庶務ノート』は、低俗をきわめており、その存在すらも知られていなかったために、高田君を中心に『公聴会』を設ける方向で準備を進め、やっと実現することができました。生徒の皆さんの声をじかに聞くことができ、思っていた以上の成果もあげられ大変うれしく思っています。

最後になりましたが、第三十二代の庶務委員の方は何事にもしりごみせず積極的に活動して下さい。

HR委員会

宇野　和之
竹下　美香
牧村つたえ

去年の七月以来、HR運営の仕事に携わって約一年、いろんな事がありました。就任して最初のHR委員会。いやあ、たまりませんでした。その後しばらくの単調な日々。いやあ、退屈でした。しかしこれではいかん。ここまで低迷しているLHRを何とかしなければ！我らの名前を後世まで残さなければ！そこで考案されたのがHR運営委員会でした。はじめはこちらの手違いで却下されたものの、それもついに成立し、ついでHR委員会としては画期的な出来事である「HR通信」の発行にまで到ったのであります。

それにつけても、副委員長の竹下女史、補佐の牧村女史には多大な御苦労をおかけしました。僕が怠慢であったので、ほとんどの仕事はすべて彼女らが消化してくれました。口頭でも文句は言われましたがそれ以上に腹の中は、煮えたぎるようであったでしょう。本当に御苦労さまでした。そしてありがとう。

最後に、我らの活動に協力してくれた総務部ならびに全校のみなさん、我々はあなた方に心からの感謝の念を惜しみません。本当に、本当にありがとうございました。

こうして一年を振り返ってみると、いったい自分は何をしてきたのだろうかという気持ちになります。それほどこの一年間は、わたしにとって短かったのです。

この任に就いてからしばらくの間は、まだ勝手もよくわからず、先代の方から教わ

ったままを見よう見真似でやっていました。しかし、HRの実情を見る限り、これはどうしても、運営面での改革が必要だと思うようになったのです。

その改革が具体的な形となったのが、HR運営委員会の設立でした。しかし、この運営委員会をつくっただけで、わたしたちの当初の目的が完全に達せられたとは思えません。やるべきことをやり残したまま、この仕事からおりるような気がして、それが少し残念です。

けれど、まあとにかくこの一年なんとか無事に終わったようです。この間、何かとご迷惑をおかけしました方々、本当にありがとうございました。

保健美化委員会

清田　徳明
桜井　幸恵
川上由理子

光陰矢の如し……、こういう言葉をよく耳にしますが、まさにこの一年は、何をなすべきかと思案にくれることに終始し、それだけに終わった一年でした。

倉校入学以来のくされ縁である野上氏が総務部長になってから、この野上総務部長の片腕にならずとも、何とか手伝いたいと思い、私達三人張り切って頑張ったものの先輩諸氏が歩まれた行事を繰り返しやったにすぎません。毎日放課後にやる清掃状態の点検・大掃除の時の道具の貸し出し、十二月にやった美化のコンクール、今振り返って見てみると、全くその保健美化という仕事をまっとうしたとはいえない活動ぶりでした。漸新的な発想が頭の中で交錯するものの、それを実現するに至らなかった私達の無力さに情けなくさえ思われます。

しかし、私達はこの一年で一つのことを発見しました。保健美化、特に清掃方面においては、いくら先生や私達が清掃をしろと言っても、生徒諸君がやらないとどうしようもないということです。これはそのまま総務部の活動にもあてはまることだと思います。総務部の活動がその目的を充分に果たしえるためには、どんなにすばらしい役員が選出されることよりも生徒全員の参加・実行の方がはるかに大事なのです。そのすべての行事を企画するのは我々でも、実行するのは皆さん自身ですから……。

この事をよく頭に入れ、後輩諸君がもっと活発ですばらしい生徒会の活動を行うことを望みます。私達三人もすぐそばの明陵学院にて、一年間諸君らの発展を見守っております。

一般体育委員会

安田和夫
山田紀代

ひと言で言えば、一時的に異常に忙しくなるのがこの一般体育委員会です。仕事といえば、昼休みの運動具の貸し出しと、冬と夏のクラスマッチだけですが、このクラスマッチが大変なのです。総務部の皆さんといえば、手伝ってくれるのは数えるほどで他は総務部室に顔も出してくれません。（なかには「今度のクラスマッチは俺も手伝っちゃるで。」と言って、結局顔も見なかった人もいるくらいで……。）しかたなく、総務部でないやつらをこの『悪の巣』にひきずりこんで、こきつかってやるしかないのです。

あの日、野上が俺の所へ来て「安田～やってくれ～。」とさえ言わんかったらこんなつらい思いせんですんだのに。だいたい一般体育委員長になったからといってエゴまる出しで自分のクラスを優勝に導くというわけにもいかんかったし、必死で作ったメンバー表はいつのまにかグランドの上に泥まみれになって落ちてるし、ちょっとメンバーが違うといって負けたクラスがうじうじと文句言うし、ろくなことがない。一時は「野上がリコールされればやめられる。」なんてことまで考えました。そこで今年は一般体育委員会になる時の覚悟について、いくつか掲げてみたいと思います。

○部活動をしている人は、それを犠牲にしなければならない。（俺の実感）
○いかなる文句やヤジにも耐えなければならない。（やってみればわかる）
○あの体育教官室へ何十回と出入りしなければならない。（いうまでもなく、これが一番恐しい）
○みんなが手伝うなどと考えるな。（へたすると委員長と副委員長の二人だけでやるはめになる）

まだまだ言いたいことがありますが、あまり文句を言うとあとが怖いのでやめときたいと思います。それでは32代の一般体育委員会の御冥福を祈って終わらせていただきます。南無阿弥陀仏……

体育部幹事

島田寛之
辻　敬子

野上氏に拝み倒されて体育部幹事となって早や一年が過ぎた。振り返ってみるとまず思い出されるのは体育大会である。第三十一代総務が発足して初めて手がけた仕事であり我々は実行委員会の中核となったのだが、多数の人が協力し、幾多の困難を乗り越え、なんとか成功に終わった時には、本当にホッとしたものであった。しかし体育部幹事に栄光のスポットライトがあたっていたのもこの時までで、その後は……の感じであった。まあひとえに怠慢の結果であろう。恐ろしいもので、体育部幹事の仕事というのは、やろうとしなければ別にやることはないし、それで何ら問題は起きないのである。そんなことで怠慢が伝統にな

る気配すらみせているが、本来、体育部の活動の現状を調査し、内在する問題点を生徒会という大きな単位のもとで各部ごとではできない解決をしていくといった仕事を進めていくべきであろう。このままへたすると、体育部幹事会というものの存在自体が疑われかねないので、来期の人々の活躍に大きな期待をかけたいと思う。

あっさり話は変わってしまうが、文化祭、体育大会、クラスマッチといった行事が成功するか否かという鍵は生徒全員がその行事を押しつけとしてではなく、自分のものとしてとらえるかどうかということだと思う。要するに生徒一人一人が目標を持つことである。それが文化祭で「俺は絶対、講堂で倉校のヒーローになってやるけんね。」でも、体育大会で「走ってどんべにならんようにしょ――。」といった小さなことでも各自が、何か自分をぶつけるものを得た時、我々の若い力というものは燃焼し爆発してゆくものである。

今期の体育部幹事の二人に欠けていたものは、この目標を定めるということであり、新しい何かを創造していこうとする気迫であった。しかし我々は、その時その時の状況の中で力一杯がんばってきたし、この一年で得たものは実に多かった。故に、第三十一代総務部体育部幹事の出来は上々であったということにしておこう。

みなさん、どうもありがとう。

文化部幹事

浜田　寛昭
高力美由紀

文化部幹事・副幹事として、あっという間に過ぎ去った一年でした。(実につき並みな言葉ですが、本当にそう思っています。)

うまくいったこと、いかなかったこといろいろありましたが、何とかやっていくことができたと思っています。

文化部対抗ソフトボール大会。これは初めての仕事で、とまどったこともありましたが、それでも各部の熱意に支えられて、好評のうちに終わることができました。今年からは二年生の修学旅行が夏休みになることで、できるかどうかわかりませんが、文化部としてのまとまりを保つためにも、こういう行事を有効に使ってほしいものです。

秋の文化部発表会では、今年は例年以上の文化部が参加しました。しかし、やはり同じ日にするものでもないし、何となく内輪に小じんまりまとまってしまったようです。悪いこととは、いちがいには言えませんが、多くの人に、文化部の日頃の成果を見ていただきたいというのが私たちの考えでした。各部ともそれなりに一生懸命やっていて、自分たちの〝部〟をはっきりと見せてくれたのは、とてもよかったことと思っています。

最大の行事はもちろん文化祭でした。今年は早目にと思ってやったのですが、それで、ちょうどよかったようです。文化祭においては、各係の人が本当によくがんばっ

てくれました。詳しくは「文化祭」で書かれているので、省略しますが、全校生徒一人一人の努力の大切さを痛切に感じました。一人の人がいくつもの仕事をかけもちしたり、それかと思うと、ぶらぶらしたり、早々と帰る人がいたり……。

仕事に差ができるのは仕方のないこととは思いますが、目立たなくても、本当に必死になって取り組んでいた人もいるのです、そういう人たちにも心からお礼を言いたいと思ってます。

最後に文化部一般のことですが、やはり記録ノート、など作っても、成果はあまりあがらなかったという気がします。ただ、文化部は地味ながらもコツコツと活動している所が多いので、これからの活動を期待しております。

それと、文化祭や文化部活動や、その他いろいろな行事についても、もう一度、その根本的な意義を見直してほしいと思います。

新文化部幹事・副幹事さん、しっかりがんばって下さい。！

放送委員会

池田利夫
阿部祥子

はやいものです。放送委員をつとめ始めてもう二年半になります。だいたい、放送委員などというものは、一度なったらやめられないというもので、一年のとき先輩に「一年間は続けてなってね」と言われ、二年になってからは「もう一年ぐらいやってね。」と言われ、三年になるときはもう何も言わないでもなってしまい、とうとう三年間も続けてしまいました。だから顔なじみが多いので休み時間は放送室をひまつぶしの場として利用している人もいたようです。

仕事のことについて書きますと、体育祭前の音楽のダビングから、文化祭みな歌のミキシングまで結構大変なのです。講堂の放送器具は去年新しくなって、やっと操作も楽になりましたが、放送用のレコードは年代物ばかりで、プレーヤーにかけられない状態で校内放送用の機械も時々接続がおかしくなって、機械のボリュームがあがらないかわり、アナウンサーがマイクの前で大声をはりあげて放送しなければならないこともありました。文化祭のときなど男子は講堂に一日中入りっぱなしで出られなかったり、女子は次から次へとくる放送依頼を声のかれるまで放送し続けたり…。失敗も多かったです。私など、授業中に生徒を呼び出したり、マイクの前で笑い出して放送を切ってしまったこともしばし…。みなさんにお聞き苦しかった点をおわびします。でも、なんといっても顔の見えないのは強味ですネ。なんて……。

最後に、先輩方からしつこく言われた部再建の期待を、一・二年の方々にかけて、ペンを置きたいと思います。

計理委員会

市橋精史
高野京子

私が計理委員になって早や一年、特に思

鵜木昌行
寺本由美

い出となったのは、やはり予算の折衝です。各クラブの幹事さん、予算委員のみなさん、ごくろうさまでした。おかげさまで今年もま～るくおさまってホッとしています。お金の問題ってあまりいいものではありませんね。××クラブが増えるのに○○クラブが減るのはおかしいとか、もう少し増やしてくれとか、話しあっているうちに目つきまで変わってしまいます。なにしろ〝真剣勝負〟なのですから。私自身、この折衝で人間がせこく……いえ、社会勉強になったような気がしています。

他の計理としての仕事といえば、体育祭、文化祭の予算決算etcですが、ほとんど市橋君にまかせっきりでした。もう少し積極的にどんどん仕事をしてもよかったのに……と反省している次第です。

「市橋君どうもありがとう」面と向かってはなかなか言いにくいこの言葉、紙面を借りて、あらためて申し上げます。

広報委員会

岩熊淳一
大屋幸恵

文化祭も終わり、はやくも汲泉の原稿を書く季節となりました。

ところで、広報委員会の仕事というのは「広報」の発行と総務部関係の雑多な印刷業務で、とにかくあまり表面には出ない委員会です。総務部をより広く知ってもらい生徒会活動への関心を少しでも高めてもらうために発行している「広報」も、すでに20号を突破し、当初の目標の23号発行も、どうやら実現できそうになってきました。この「広報」がどの程度読まれているかについては疑問の残る点ですが、今まで読んでいなかった人、計算用紙にする前に是非一度目を通すようにしてください。

また、それ以外の印刷業務が最も忙しくなるのは、何といっても文化祭前です。みな歌の歌集制作では、印刷状態や製本が悪かったり、みな歌係との連絡がうまくいかなかったりで、かなりのムダを出してしまい、でき上がったものにも歌詞の誤りや誤字があったりしてかなり苦しかったのですが、なんとかすべての仕事を終えることができました。

最後に皆さんに認識して欲しいのは、「広報」は「明陵新聞」とは全く性質の違うものであるということです。あくまでも行事等のお知らせ、結果報告に徹するのが目的の「広報」には、〝××を斬る〟如き評論や事態を深く掘りさげた名文はあまり期待しないでほしいということです。ほら、選挙などで配られる「選挙広報」というやつがありますが、あれと同じ役割だと思ってください。それが「広報」の命です。とまあ、それほど目ざましい活動もしなかった我々が、こんな大見栄をきってしまって恥ずかしいんですが、とにかくそういうことですので、これから「広報」の文や内容をつまらないと一蹴しないで、もっと暖い目で見てやってくださいませ。

求ム！顔を人前にさらしたくない、もしくはさらすことができない種々の事情のある方で、印刷、ガリ切りが大好き、もしくは大いに興味をもっている方。経験、年齢不問。待遇はあなたの腕次第！「広報」に生き甲斐を見つけてください。がんばれ32代広報委員会！

七十周年記念行事

小倉高校は、今年で創立七十周年を迎えました。その間に多くの先輩方によって、一年一年、倉校の歴史が織りなされ、伝統が築かれてきました。しかし、伝統や歴史とは私たちにとって、どのようなものでしょうか。

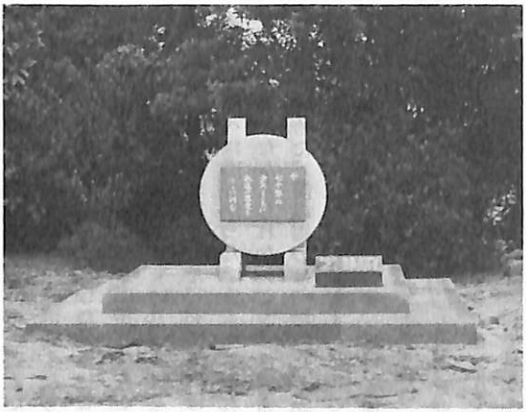
七十年の歴史といっても、私たちの学校生活の中では、それほど関係がないように思われます。しかし、実は大いに関係しているのです。それも私たちの学校生活の奥深い部分で影響しているのです。私は何度かそのように感じたことがありました。

たとえば一つの行事を行う時に、倉校生は、放っておいても（放っておくという表現はよくないのですが）ある程度までやってくれるという感じがするのです。〝ある程度〟というのは、だいたい前年並ということで、今までやってきたことは、わりあいうまくいくようです。特に本番に強く、その前日までうまくいかなかったものが、当日になって、驚くほどぴったりと合ってしまうようなこともありました。これらのことも毎年受けつがれることが、生徒一人一人の心の中に影響しているからだと思います。しかし、見方を変えると、このことは新しいことを行いにくいということにもなります。何か新しいことをやろうとすると必ず、反対の方が多いようです。それも、その新しい事が面倒臭いから、という理由が強いように感じられるのです。伝統とかいうものは、元来そういう性質をもっていると思います。今まで行われてきたことは惰性でやれるけど、新しいことをむやみに拒絶するという傾向があるようです。

この例にも見られるように、伝統とか歴史とかいうものは、私たちの中に生きているものだと思います。七十年の歴史とかいって、その間の出来事を振り返るのもいいのですが、そういった記録だけが倉校の伝統・歴史だとは言えないと思います。もしそんなものだけが伝統歴史だとすれば、それは私たちと全く無関係なものになってしまうからです。

七十年の間、毎年々々倉校生一人一人の心の中にあるものが、伝統歴史になるのだという気がするのです。一人の人間が決めた規則は、それが多くの人々の共感を得ないことには歴史にはなり得ないと思います。そういう意味で、私たちは、学校生活の中の、歴史伝統の影響をもう一度見直してみるべきだと思います。

七十周年という、倉校の歴史の一つのくぎりは、私たちにとってそういう事を考えてみる、よい機会だと思います。とにかく歴史とか伝統とかは、私たちが持っているもので、文章の中とか、校史記念室とかにあるものではないのですから。



応援練習

「応援練習」僕はこの言葉を聞いただけで、背中に何か冷たいものが走り、気分が悪くなってしまうのだ。どうしてかって？それでは今から僕が、僕の三日間の応援練習ぶりについてお話ししよう。（今から僕が書くことは、そのほとんどがノンフィクションである。）

まずは一日目。僕は逍遥歌どころか白帆も校歌さえもろくに覚えずに学校へ着いた。教室では何人かが校歌などを歌っているし、友達に尋ねると結構みんな覚えてきていた。僕はあせった。毎休み時間ごとに生徒手帳を開き必死で覚えようとした、しかしあせればあせるほど覚えられない。そしてとうとう恐怖の放課後がやってきた。「ハンドボールコートに集合」とのことである。僕は、ハンドボールコートへの道を恐怖と半分あきらめの気持で歩いていった。突然、「ドン、ドン、ドン、ドン」というあの腹の底まで響くタイコの音。「走れ走れ～。」と叫ぶ応援団の声。僕は今さらながら応援練習が僕の思っていたものより数倍も数十倍も恐しいことに気がついた。それから恐怖の応援練習が始まった。まず、遅れて来た人たちのために正座である。これは普段から慣れているのであまりこたえなかった。しかしあの校歌をしどろもどろで歌い終えてから手を上げたままの状態にするのはとてもきつかった。特に腕力のない僕にとって堪えられるはずがない。だんだん腕が下がってきた。すると突然横で「おらおら腕が下がっちょるしっかり上げんか！前のもん見てみいみんな上げちょるやろ！」という声。僕はこの時から応援団ににらまれたのである。この日は最後に校歌で占めくくったが、逍遥歌はなかった。僕の美声は全くの悪声になってしまった。僕の高校生活は、いっぺんに灰色になってしまった。

二日目。根性のない僕は、昨日逍遥歌がなかったのをいいことに、白帆は覚えたものの逍遥歌は全く覚えず出席した。そしてついに逍遥歌がやってきた。応援団の人が「歌えんやつらは前に出て来い!!」と叫んだ。むろん僕は歌えなかった。その時僕は迷ったが前へは出なかった。そもそもこれが間違いだったかもしれない。ついに逍遥歌を歌い始めた。僕は端のほうにいた。先輩が僕の名を呼ぶ、するとますます上がって歌えなくなった。その時である、昨日とは違う応援団の人が僕の横に来て止まった。僕は「しまった。もう終わりだ」と思った。応援団の人いわく「おまえ覚えてきたんやろうな？」僕いわく「は、はい。」「うそ言え、そんならなんでもっと大きい声で歌わんのや？」「……」その後どんな事を言ったかなど気が気でないので全く覚えていないが、応援団が「もう一回歌うけ、聞いとくぞ」と言った。僕は必死でごまかして歌った。すると「よし、こんどから大きい声で歌え」と言って去っていった。この時のうれしさ、安心感は一生忘れないだろう。そしてその日は何事もなく終わった。

三日目。この日は、校歌から逍遥歌、白

帆に至るまですべて覚えた。一日目・二日目とも、目をつけられている僕は、この三日目こそは、という心意気で望んだ。（この日は講堂で行われた。）復習混じりの練習で、途中までは何事もなく順調であった。しかし、二度あることは三度あるもので、あれは「一・二・三拍子」か何かの時だった。拍手の間違いで大勢の人が正座した。僕は、「この三日目で応援練習は終わりなのだ。あ～よかった。」という気のゆるみからか、何がおかしいのかつい吹き出してしまった。これがあの二日目の人に見つかって前へ引きずり出され、ついに足上げ腹筋の洗礼を受けてしまった。あのステージの上から、まわりを見渡したときの屈辱感、周囲の人の目。僕は苦しかった。体力のない僕がどうなったか察しはつくだろう。何分たったろう、ようやく下におろされ、席に返された。その後は何も起こらなかったが、僕は、一躍クラスの有名人になったこともないが、けっこう騒がれた。今でも時々応援練習の話がでると、僕の事が出る程である。

これで僕の話は終わるが、この応援練習は大変僕の生活を変えてくれた。それで是非、来年は、新一年にきびしくして、期間も一ヵ月くらいにしてやりたいものである。来年は、絶対ヤジるぞ。

英彦山合宿

倉校の英彦山合宿、先輩の話ではうさぎ飛びがあるとかなぐられるとかいって、そうとうしごかれるみたいやったけど、あんまりたいしたことなかった。

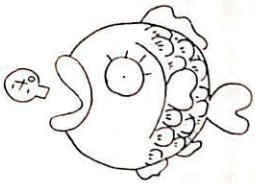
まあ、朝起きるのがちょっといっつもより早いのと寝るのがちょっと早いということと先生が何かと口うるさいことぐらいで食事もまあまあだったし自由時間もあったし、これといって居心地は悪くなかった。しいて言えば、少々、行事つめこみぎみで消化不良といった感もしたんやけど。

そやけど、二日目の登山はわややった。朝からどんよりした黒い雨雲がたれこめ、今にも泣きだしそうでした。そやのに、先生方はまあみんながガンバレば雨は降らへんといって予定変更せずに北岳コースを登り始めた。案の定、北岳に着く前に雨が降ってきた。英彦山の頂にやっとのことで着いたけど昼飯を食べられる状態やない。風は吹くは雨は降るがで、追いたてられるようにして下山する。今になって思えばよくあんな山の中を二時間あまりうろうろして

いたと思う。

ああ、それからもう一つあった。着いたそうそう体育館で先生方のお話があったんやけど、その後、部屋の状態を見てきた先生いわく、2のA号室、2のB号室、2のC号室といった調子で片づけの悪い部屋を読み上げ、いわれた部屋の班長は出てこいという。何人ぐらい出たかわかりませんが15人ぐらいやったかなあ、それで一人ずつ平手打ち、見ていられんかったわ。

もちろん、例にもれず僕のおった部屋の班長もなぐられました。そやけど、連体責任というやつなんでしょうが、たまたま、出席番号で班長になった人たちこそいい迷惑だったと思います。



まあ、そんなことより、一とうおもろかったのは、やっぱし二日目の晩の倉校と宇佐校合同のキャンドルサービスやった。

たった三日間しか合宿はなかったんやけど、合宿生活に慣れた僕らはまだ居たい気持ちを押えつつ、倉校への帰路についたのですよ。あああ、しんどかったなあ。

クラスマッチ

ここで今さら、クラスマッチの意義なんて真面目くさってもしらけるし、クラスマッチ前の総務部員の血と汗の話なんぞをウダウダ書いたっておもしろくもなんともないので、クラスマッチのちょいとした横顔をふり返ってみよう。

燃える人がいるもので、クラスマッチの一週間前ともなると、率先してどこぞの体育館を予約して練習に繰り出す。あきれている間もなくペースに引込まれていつの間にかこちらも張り切っている。はっと気づいて、一生懸命になっている自分の体がヒカリゴケみたいなので我ながら感激したりする。つまり、よく漫画のシーンで主人公が放射線を放っている、ああいう感じ……そんなことってないだろうか。思いあたる人もいるだろう。そんな人にこそ言いたい。君は充分クラスマッチを解ってくれている。そして、それをきっかけとして、いろんな方へ飛び出して行って、積極的に駆け巡って欲しい、と。

前回のクラスマッチがちっとも楽しくなかった不幸な諸君、次回は、自分自身で、あと味のいい汗が流せるように努力してみてはいかが？

それから、もう一つ。応援のこと。世の中の人間には二つのタイプがある。つまり応援されると張り切って勝つ人種と、声援がとんでくると却って照れてズッコケちまう人種。だけど、二種類の人間の共通点はやっぱり暖かい応援はうれしいってこと。後者だってうれしいからこそあがってしまうんだから。女生徒諸君、男子の試合には応援に行くのを忘れずに。筆者の如くあまりにヤジをとばすのは下品だけれど……。

クラスマッチは説明書をよく読んで、マナーを守って行いましょう。

文化祭

第三十一回の文化祭――5月26・27日――天気のほうはぐずつき気味で開会式の最中にかなり降った時には、これでOUTかと思いましたが、なんとかもちなおし、特に影響はありませんでした。ただ装飾係のほうはせっかく作ったものが雨でぬれたり、接着部がはずれたりして、たいそう困っていましたが……。

文化祭の内容は振り返ってみると、まずクラス展示のほうでは、なかなかおもしろいものがありました。特に「創意工夫展」「百円玉」2-10の「倉校生の実態」という映画も多少わざとらしい感じがありましたがなかなか実態をとらえていたと思います。2-7の葬式については取りあつかったものも賛否両論がありましたが、意欲が感じられてよかったと思います。ただわれわれ実行委員のほうの指導もわるかったのかもしれません。クラスによって力のつぎ込み方にかなり差があったようです。それとどのクラスも今年は中間試験が終ってからの10日間が主な準備期間となったため、廊下の装飾物まで手がまわらなかったようで少々殺風景な感じもしました。文化祭は内容で勝負しようというふうにみなさんが考えたと理解したいと思います。

特別企画のほうは、昨年一昨年のように記念碑を建てるというような目的もなく、校内の備品をそろえようということでしたが、みなさんの御協力で予想をはるかに上回りました「趣味の部屋」の方も、はじめは品物が集まらずに出来ないかと思ったのですがみなさんの御協力もあってなんとか展示場をうめることができました。なかなか珍しいものもあって多くの人の足をとめていました。

つづいて今では文化祭のメインになった「みな歌」ですが去年までの経験をいかし「みんなで歌えるみな歌」をめざしてかんばった成果があらわれ会場にはいれない人もいるほどで大成功だったと思います。ただ特別活動班の席取りの際に演劇部に迷惑をかけたことは残念です。この文化祭にあたって目標としたことは「全員が参加する充実した文化祭」ということでした。そのために実行委員一同たとえばいろいろな係の作業のさいに100％出席させるようにするなどの対策を考えたのですがなかなかむずかしいものです。それでもさすがに一週間前になると学校が終わると家へ一直線という人の姿もほとんど見られなくなり、日々にふんい気が盛り上がっていく様はなんともいえなかったです。こういうときにこそ倉校に来てよかったなあと感じるのではないでしょうか。

このようにいろいろなことがあった文化祭ですが終ってみてみなさんの心に残ったことはどんなことでしょうか。

昭和54年度生徒会予算

歳入の部　一金 7,131,358円
歳出の部　一金 7,131,358円
差引残高　一金　　0円

昭和54年　月　日

総　務　野上純一
経理委員長　市橋精史

歳入の部

(単位　円)

科　目	54年度予算	前年度との増減
生徒会費	6,408,000	0
雑収入	20,000	0
前年度繰越金	703,358	− 42,770
合計	7,131,358	− 42,770

歳出の部

(単位　円)

	科　目	54年度予算	前年度との増減		科　目	54年度予算	前年度との増減
本部	1．生徒会総務費	50,000	＋ 25,000	文化	11．華道	25,000	− 10,500
	2．応援団	60,000	− 15,000		12．茶道	25,000	− 3,000
	3．汲泉	245,000	− 5,000		13．ＥＳＳ	20,000	− 5,500
	4．行事	250,000	0		14．弁論	0	0
	5．一般体育	200,000	0		15．演劇	70,000	− 9,500
	6．放送	100,000	＋ 10,000		16．文芸	13,000	− 1,000
	7．保健美化	30,000	0		文化部小計	1,138,000	− 46,800
	8．臨時施設	80,000	0	体育	1．野球	320,000	− 10,000
	9．大会遠征	2,900,000	＋ 12,610		2．ラグビー	180,000	− 5,000
	10．石灰費	60,000	0		3．テニス	160,000	＋ 15,000
	11．用紙費	100,000	0		4．バスケット	140,000	− 8,000
	12．予備費	331,358	− 50,080		5．陸上	80,000	− 13,500
	本部小計	4,406,358	− 22,720		6．バレー	135,000	＋ 32,000
文化	1．ブラスバンド	230,000	0		7．登山	57,000	− 72,000
	2．新聞	250,000	0		8．水泳	55,000	＋ 25,000
	3．科学	90,000	− 800		9．剣道	85,000	＋ 1,000
	4．考古学	55,000	− 5,000		10．弓道	60,000	− 12,000
	5．生物	85,000	− 11,000		11．柔道	60,000	＋ 1,500
	6．美術	55,000	− 5,000		12．卓球	80,000	＋ 1,000
	7．写真	80,000	＋ 16,000		13．体操	50,000	＋ 27,000
	8．音楽	55,000	− 9,500		14．サッカー	125,000	− 1,500
	9．無線	55,000	− 3,000		運動部小計	1,587,000	＋ 44,300
	10．書道	30,000	− 17,000		合計	7,131,358	− 42,670

CLUB
Shinishi

卓球部

卓球部の紹介文を書くにあたって、昨年の汲泉を読んでみると、我々二年（当時一年）のことがほとんど書かれていませんでした。それで簡単に補足しておきますと、まずキャプテンの宮崎君（彼にはファンクラブがある。）、エースの斉藤君、卓球部を支える生田君、いつも無気力の真那子君、頑固な高橋君、音声多重放送で23時ショーを見ている諸富君、その他大井君といった男子部員の面々。その上今年は女子が豊作で、安部さん、小河原さん、黒瀬さん、田生さん、祐徳さん（五十音順）と個性的な女性が五人も集まりまして、卓球部も新たな時代をむかえようとしています。

さて、卓球部の練習内容は、一昨年の汲泉に書いていますし、年間の行事についても、昨年の汲泉で詳しく説明していますので、今年は練習場について書こうと思います。室内には卓球台が四台あって、部屋のすみにはロッカーがあり、そこには竹刀が一本立てかけてあります。（これを見るたびに背筋が寒くなり、恐しい想い出が脳裏をよぎるのは、私だけではないでしょう。）そのロッカーの上に温度計がかけてあり、夏は練習中にそれが40℃をさすこともあります。それでも練習中には窓を開けられないのが我々の悩みの一つであります。一つであるということは、他にも悩みがあるということで、その大きな悩みというのは、実は一年生が二人しかいないということで、男子・女子仲よく一人ずついるのですが、もし我々二年生が引退したら今の一年生はどうなるのでしょうか。

ところで、どういうわけか我々卓球部はランニングがとても好きで練習が終わるとみんなで校外を走ります。走るコースも色々あり、大抵の日は板櫃コース、時々走る川沿いコース、めったに走らない金比羅コース、男子の好きな西南コースなどといったぐあいです。

長々と部の紹介を書きましたが、要するに卓球部は卓球をしているわけで、卓球ばかりしていれば、上達するのは当然ですが、特に、今年の二年生は近年に例をみない優秀な人材に恵まれ、九州大会、全国大会をめざして、毎日、2・5グラムたらずの白球を追い、今日もあの板櫃の坂をかけのぼる途中、大井がこけるのを見て、大声で笑っているのであります。

追伸

卓球部入部希望者は2の1の宮崎まで。

初心者大歓迎！

テニス部

テニスは楽しいものです。鋭いショットが決まった時のそう快な気分、また相手のすごい球に必死でくらいつき、ポイントを取ったときの満足感、素晴らしいものです。

テニスとは本来娯楽のためのものです。心地よい汗をかくのはとても気持ちがいいですし、友人の輪を広げることもできます。

しかし私達はそのためにテニスをやっているのではありません。試合に勝つために日夜練習に励んでいるのです。試合に勝つと一口に言ってもそれはとても難しいことなのです。テニスをよく知らない人は、テニスなんか簡単だと思っているかもしれませんが、実際はとても一筋縄でいくものではありません。たとえいいショットを一発決めても、ミスばかりではすぐ自滅します。それに根性がなくては絶対勝てません。根性というものは、時折不可能を可能にします。たとえ5－0で負けていても試合をひっくり返すこともできるのです。その根性をつけるために、雨の日のトレーニングが待っているのです。私達はそれに必死で耐えているのです。

なぜ厳しい練習に耐えているかというとみんなテニスが好きだからです。好きだからこそ耐えられるのです。何もすき好んで嫌なことをする人はいません。その証拠に放課後になればすぐコートに飛び出して行きます。○○部みたいにできるだけ遅く行こうなどとは考えていません。クラブの中では始まりが最も早いのではないかと思います。

現在部員は三十名ほどですが、2面しかないコートにも負けず頑張っております。そろそろもう1面くらい増やしてくれてもいいのではないかと思うのですが、現実はそうもいかない。早くコートを造ってほしいと思います。

テニスは本当に素晴らしいスポーツだと思うのです。

弓道部

弓道部は、弓道（広辞苑には、「弓で矢を射る術。古代より射芸として行われ、明治以後は武道の一つとして一般に普及。弓術」とある。）をする部です。これではあまりにもおもしろくないので、弓道の効用について述べてみたいと思います。

まず身体面について

張りつめた気持ちの中からグーッと弓を引き分ける。それが一瞬のうちにスパッと離れる。すると気持ちがスーッと静かになる。これが人間の体に生理的にこのうえない刺激剤となって健康を増進するものであります。弓道をやる人に長寿の人が多いのはこういうことからくるのであります。みなさん、長生きをしたかったら弓道をしましょう。

次に精神面について

結論から先に言いますと、弓道をしたら必ず精神つまり心が充実します。なぜなら弓道というものは、常に心を静め、欲にとらわれず、自分自身を見つめていなくてはならないからです。

このように、心身の成長過程にある私たちにうってつけのスポーツ、それが弓道であると思います。

話はかわりますが、現在の部員数は二十名。その内訳は、

三年生、5名
二年生、11名
一年生、4名

（昭和54年4月30日現在）

であります。人数からいうとちょうどよいくらいですが、来年（つまり今の二年が引退した時）のことを考えると、一年の部員がたいへん少ないということです。ですから一年生のみなさん（特に女子の方）、是非弓道部に入って下さい。

サッカー部

サッカーは、御存知の通り世界中の人々に最も親しまれているスポーツです。なにしろ北米や東南アジア、その他ごくわずかの地域を除いては、ほとんどの国で国技として認められているのを見ればおわかりでしょう。あの王様と呼ばれたペレがアメリカのプロチームに移籍した時の契約金、その他の合計（三年契約）が何と二十七億円にのぼるといわれています（灰色高官もまっ青！）現在の日本は底辺の拡大がうたわれ、特に高校サッカーにおいては正月の全国大会がすっかり定着していますが、残念なことにその頂点であるナショナルチームの活躍が今一歩といったところです。

さて、このような状況の中で、我サッカー部は常に世界のトップレベルのサッカーを、と日夜練習に励んでいます。（ほんとぞ）

活動は、毎日放課後約二時間半の練習ですが、その他土曜・日曜には練習試合もします。毎日の練習は、基礎トレーニングを中心に充実したものですが、夏の合宿を抜きにしては考えられないでしょう。容赦なく照りつける太陽、矢のように飛びかうOBの愛のムチ？などに耐え、ひたすらグラウンドをかけまわるのです。その苦しいことといったら……。

このような練習をしてチームの和をつくっていくのです。

今年度の県大予選では、昨年の新人戦の屈辱を見事はたして三年生を中心に八幡南を破りました。が、次の八幡戦で惜敗し、惜しくも本大会出場はなりませんでした。

現在のサッカー部は、部長の藤本先生（最近VSOPというウワサをちらほら聞くが）、副部長の中村先生を中心に三年も含め二十七人です。新入部員もはいり、きたる一次予選を突破し、合宿をのりきろうと頑張っています。

尚、新入部員を募集しています（特に一年）。また女子マネージャーも大歓迎です。よろしく。

陸上部

陸上とは孤独なスポーツだ。暖かな声援はおくれても、必死に走る者に手をさしのべることは誰にもできない。頼りになるのは自分自身だけなのである。だからこそ我々は黙々と走り続ける。太陽の照りつける中、風の吹き荒れる中で自分を鍛え、自分を磨く。そして最も自信のある自分になろうと努力するのである。ストップウォッチを十分の一秒でも早く止めるために、白いゴールテープをきるために、時には恨めしくなるような三百米トラックを繰り返し繰り返し、動けなくなるまで走り続ける。だがそうした努力にもかかわらず、ストップウォッチは無情にも時を刻んでゆく。一・二五米のセパレートコースでの結果が、そこに表わされる。すべては自己との闘いなのである。あ～疲れた。しかし実際、我々陸上部にはこんな悲壮な感じは全くない。大体今の陸上部員の多くは、野球をやらせりゃ三振王、サッカーをさせれば地球を蹴る、プールに飛び込めば浮かんでこないというような、運動神経が悪い方にすぐれているくせにスポーツが好き、そんなやつらが、これなら俺にでもやれると入ってきた者ばかりだから。皆それぞれ独特な個性の持ち主ばかりで（顔の方がもっと独特ですが）、一見誰がキャプテンやらわからないほどだ。（言っときますが、キャプテンは柴田君です。お間違えのないように。）こんな風だから、練習中笑いの絶えたことがない。どんなに辛く苦しい練習も笑ってごまかして？しまう。一時は、片手の指で足りるほどしかいなかった部員も、多くの一年を迎え両手両足の指でもまだおつりがくるぐらいの大世帯となった。現在陸上部は黄金時代を迎えつつある。今年こそは、壮行会に陸上部の面々が顔を連ねることになるだろう。（ワイはこの時が来るのを待っていた。）

グランドの消えかかったトラックを、優しいマネージャーの声援をうけながら走っている我々を見つけたら声をかけてほしい。すぐに部室に引っぱり込むから。

走ることのできる方、是非陸上部へ！

ラグビー部

『楽苦備院』多分ラグビー部を漢字で表すとこのようになるであろう。しかし、このことを俺は大声でいう資格はない。楽な道ばかりを選んできたからだ。三年になって誰もがそれに気付く。そして慌て、必死にラグビーに取り組む。だがもう遅い。力がつかぬうちに試合がやってくる。そしてもう一息のところで県大会への夢は絶たれるのだ。悔しい！本当に自分に腹が立つ。女と共にした時間、積木ならべに費やした時間がとても後悔される。だからなおさら、かわいい後輩ラガー達には、その思いをさせたくない。新入生諸君、二年生はこのことをよく覚えていてほしい。

さて堅苦しい話はここらでやめ、具体的な内容に移ろう。

倉校のラグビーは伝統もあり、権力もあ

る非常によかクラブである。FWは県北でも上位にランクされる強力FWである。つい先日行われた対若松戦でも敵ボールをすばやく盗みとり、ホイールしながら自軍のものにしてしまう、まさに生活と密着したプレーであった。中心はなんといっても押しのゾンビー小原、盗みどりの九工（中富）、走りの岡田とペナルティーの中村である。

一方、BKの方も近来まれに見る好バックメンで、県北最多の15種のサインプレーをこなしている。やはり三年中心の構成である。ダスキン・ホフマンを自称する左CTBの成沢のハンドオフ、阪神の小林（実は明石家さんま）になりきっている右CTB中林のステップ、花田先生からも本名をタモリとしか覚えられてない谷守、そして、あのナゾの怪人、パントのマンコーシェンこと馬場、SH中野のダイブパスなど、個人技の切り札をもっている。これで負けるわけなどないんだが、そこは世の中の難しさで、いつも勝つわけにはいかんのである。現在は九州大会の予選中で、我等ラガーメンは、若松を32対0で下し、次の門司戦に備え、足の折れた奴も腰を痛めた奴も、医者の診断を無視して、日夜ボールを追っている。

よく友達が言う――バカな奴等。あんな野蛮なスポーツのどこがおもしろいんやろう？

いいじゃないかバカでも。

雨の中を走り、風に向かい、またOBのしごきに耐える。本当にバカにしかできないことかもしれない。しかし俺はそう言っている奴らに言うんだ。――大人になってこんなことできるか？　カゼひくのわかって雨ん中走れるか？今しかできないんだ。今しか！どうだ、悔しいだろう。

――だから泥まみれのジャージに誇りを持ち、汗に感謝する。美しい夕陽だって三年間見れたんだ。倉校ラガーは幸福だぜ！

野球部

八月・・新チーム結成。一・二年のみになる。夏の甲子園大会には目もくれず、目の前にはジュースとクーラーがちらつく。

（鉄見君も大石さんからエースをゆずり受け、闘志を燃やす。）

九月・・秋季大会目ざして練習にも一段と気合が入る。一回戦は若松商にコールド勝ち。出足はいいぞ。

（甲子園ではさわやか14番の河野君もレギュラーで頑張っている。）

十月・・予選で優勝候補の門司工と対戦、大方の予想をうらぎって快勝。修学旅行には例年のごとく行けず。

（門工勝利の原動力となった土田君。四打数四安打と大活躍。さすが～～～。）

十一月・・準々決勝で伏兵八大付に負ける。この月はもう書くことなし。

十二月・・一般生徒にとっては何かと行事の多い月。しかも我々部員にとっては恐怖のサーキットトレーニングの月

（マラソン大会で二位となり一躍ヒーローの大楠君。もくもくと減量作戦開始。）

54年一月・・全員で愛宕神社におまいり。ある人は甲子園出場を願う。おっと、こんな人もいた。恋人が出来ますように……。

二月・・部員にとってはある意味でもっとも苦しい月。バットを鉛筆に持ちかえ、一年で一番授業が耳に入る時。

三月・・野球シーズン到来。プロ野球開幕より一足お先に。

（秋はスランプに悩んだ船津君も四試合で本塁打三本と大当り、復活だ。）

四月・・新一年生も入り春の九州大会突入。三回戦までは進むが又々伏兵小倉南に3対4で苦杯。

（小倉南戦の三回に手を骨折した鶴田君。そのまま出場し二安打と大活躍…もう尊敬の的。）

五月・・昨年の今ごろを思い出しては、なつかしむ。招待試合が多かったなァと。

（唯一の女子マネージャー沖さんはもうベンチに入れないと悔やんでいた。本当にごくろうさん。あと三ヵ月頑張ろう。）

六月・・選手生活が日一日と短くなる。夏が来るのがこわくなったりする今日このごろ。練習試合は連戦連勝。

（秋・春の汚名挽回とひそかに練習にはげむ楠君。夏はきっとやってくれるでしょう。）

七月・・「甲子園」我々にとってこんなに輝やいている言葉はない。夏の大会の予選がいよいよ始まる。もう言葉では言いつくせない感情がこみ上げる。誰かが叫んだ…「よし！甲子園に乗り込むぞ！」……。

最後に・・応援団の方々をはじめ在校生のみなさん。我々野球部員を一年間通して応援してくださって本当にありがとうございました。不満もあるかとは思いますが、そこはじっとこらえ、これからも一・二年生をあたたかく見守ってやって下さい。ほんとうにありがとうございました。

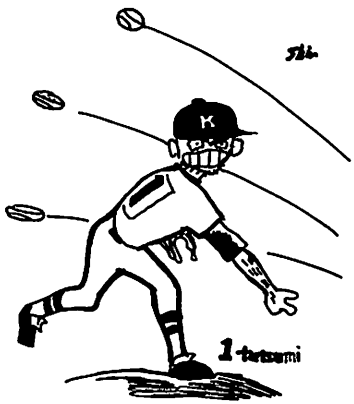
（作・鶴田）

野球部メンバー

・監　督　津江弘允
・部　長　矢野先生
・副部長　島津先生
・選　手
　主将　土田秀夫
　マネージャー　沖佳奈恵

〈夏のメンバー〉
1 池松真也(右)
2 大楠征哉(遊)
3 鶴田浩之(三)
4 土田秀夫(捕)
5 船津　浩(二)
6 鉄見浩次(投)
7 楠　冬紀(左)
8 奥野高弘(一)
9 森　勲(中)

河野・本田・池田
鍋島・望月・和方
寺村・副島・恵良
平野・小林・名本
坂村・山口・池永
〈計25名〉



剣道部

「剣道をやるにしても、何にしても少しずつでもいいから地道に毎日コツコツと続けていくこと、これが一番大切なんだ。」と、顧問の屋久先生は言われます。俗にいう、「継続は力なり」というヤツです。ですから我々剣道部に日曜・祭日はもとより、盆休みも正月休みもありません。一年三百六十五日、竹刀を握ることがない日といったら定期考査前の試験休みと、三月中旬の高校入試による登校禁止日ぐらいなものかも知れません。

ところで、みなさんの中には、剣道は、いかにも動きが少なくて消極的で体力の消耗が少ないスポーツだという印象を持っている方が、わりと多いんじゃないでしょうか。ところが、これが全く違うんですね。剣道は、みなさんの思っている以上にかなり過酷なスポーツなんです。(最もスポーツに楽なものなんてあるはずがないのですが。)

夏――分厚い稽古着に長い袴、その上を防具で完全武装してしまえば、これはもうまさに、〝蒸し風呂〟です。おまけに目に汗がはいっても、ぬぐうことすらできません。じっとがまんです。リポDを飲みながら、苦しみに耐えた日もありました。

冬――夏とは逆に稽古着一枚、おまけに素足とあってはあまりに寒すぎます。足の裏がひび割れや赤ぎれでボロボロになり、出血することすらあります。それでもじっとがまんです。まだ真暗闇の早朝六時から氷のように冷たい床の上で、吐く息を凍らせた雪の日もありました。

そんなぼくたちも他の人から見れば、「なんであんな竹の棒ばかり振りまわしとんのやろ。」と思われるかもしれません。実際のところ、ぼくたち自身も、「なんで剣道やしよんやろ。」と思うことがあります。しかし、よくわからないけれど、わからないなりにもはっきりと言えることは、「オレたちは剣道が好きや。」ということです。竹刀を振り回すことがやはり、何よりも好きなんです。相手と向かいあって、カシャカシャと竹刀を触れ合わす時、「ああ、オレは生きてるんだ。」という実感めいたものをひしひしと感じるんです。また、「もう、体がだらしいのお。今日はサボろうでえ。」と心で思ってはみても、悲しいかな、足はいつのまにか道場に向かっているのです。

いわゆるぼくたちは、〝剣道バカ〟というヤツかもしれません。「一日に一度は竹刀を握らないと気が落ち着かない。」そんなヤツらの集団なのかもしれません。そしてそのバカどもは、誇り高きバカぶりを発揮して、今日もまたあらん限りの声をはりあげ、竹刀をひたすらに振り続けることでしょう。

登山部

去年の汲泉の「登山部」の欄をお読みになった方の中には、その冒頭の文章に「廃部」の二文字が光り輝いていたことを覚えている方も多いでしょう。私達はこの「廃部」という問題とは完全にお別れしたつもりでした。ところが、我が登山部は、あの幽霊部員と掛け持ち部員の豊富なＥＳＳを尻目に再び部員不足に悩むことになったのでした。部員数は三年生を除くと、なんと……「一名」だったのです。しかし、やはり神は正義に味方をしてくれました。「ＥＳＳさんよ、神様はあくまで正義に味方するんよ。悪はいつかは滅ぶんよ。むっふっふっふっ……。」

ところで、登山部室を覗いたことのある方は御存知かと思いますが、我が部室には真新しい二枚の賞状と古びた一本のピッケルがあります。これは福岡県北部登山大会で二連覇した時の賞状と、トロフィ代りのピッケルです。もっとも、この汲泉がお手元に届く頃には、ピッケルはなくなっているかもしれませんが、とにかく登山部は至難の業ともいうべき「二連覇」を成し遂げたのです。中には「ふん、県北で二連勝したけっちいうて、いばんな。」と思う方もいらっしゃるかと思いますが、県北だからといって馬鹿にしちゃあいけません。野球部は市内大会にも勝てないのですから。

しばしば「登山大会ち、どんなことするんか。」と聞かれますので説明しましょう。まず、テントの張り方。テントはドーム型のテントはだめです。それに、灯油コンロの取扱い方、調理の仕方、天気図作成、観天望気、地図の見方、コンパスの使い方、荷物の重量制限（男子で二十八キログラム以上）、歩き方やチームワーク（四人一チームですので）など山で必要な技術のすべてを競いあうのです。

さて、登山部は登山大会にのみ命をかけるのかというとそうではありません。夏休みには、残雪いっぱいの北アルプスへ遠征します。下の世界の暑さや騒がしさが恋しくなるほど、雪渓を渡る涼しい風や、雪解け水の冷たさや静けさが、心に泌み入ります。まさに別天地です。しかし楽しいことばかりではありません。いったん山に入ると、その山が足立山であろうと、常に生命の危険を伴います。落雷や落石事故などがそのよい例でしょう。ただの雨でさえ、防寒などの対策が良くなければ疲労凍死という惨事を招き兼ねません。こういう事があるからこそ、私たちは、山に登ることにより心身を鍛え、いざという時には、瞬時に判断を下せられる精神力と忍耐力を養うことができるのです。

それからもう一つ。山での楽しいことといえばやはり山頂を征服したときにどっと押し寄せる何ともいえない感情を味わうことです。特に、その山に登るのに苦労すればそれだけ、その感情は大きいものとなります。山に登ったことのある人なら誰でも味わったことがあるでしょう。

とまあ、いろいろとくだらん事を書いてきましたけれど、この読みづらい文章を最後まで読んで下さった方、我が登山部に何か御質問などがございましたら、御遠慮なく部室まで聞きに来て下さい。それに新入部員は常時大歓迎致します。（特に女子の方へ。女子の登山大会は、割と県大会に出場しやすいですから入部してみてはいかがですか？）

柔道部

我が柔道部は、三年六人、二年九人、一年六人の総勢二十一名。顧問の先生は新婚ほやほやではあるが、なんと柔道五段の寺西先生である。

ここで一つ書き忘れたことがある。それはこの栄光ある柔道部に女子生徒が一人もいないのです。部員になれとはいいませんが、ぜひともマネージャーになってもらいたい（他校には必ずマネージャーがいるのだ。）

さてここで柔道というものを紹介しておこう。日頃我々が、放課後、端っこの武道場へ行ってみっちり二時間、汗を流しているのは何のためか。それは部員全員で〝勝利〟の二字を勝ちとりまた、その喜びを得んがためにやっているのである。

だいたい柔道ちゅうもんは勝つだけがのうやない、一般でもよく「礼に始まり礼に終わる」といわれている。しかし勝たなければ何にもならない。ところが相手がいるのでそう簡単には勝たせてくれない。たとえ技がきれ、パワーがあっても〝己〟に勝てなければ試合に出ても勝てないのである。まさしく柔道とは自己との挑戦である。（へン、マラソンだけじゃないんばい。）つまり柔道で勝つには心・技・体の三つが備わらなければならないのである。

もし、おそろしくもこの三つがパーペキに備われば、あの偉大な山下五段のように日本選手権で三連覇できるのです。

とにかく柔道は、りくつ抜きに楽しくやりがいのあるスポーツである。どんな人でもきっとやれるでしょう。例えば我が部にもビルマから留学したといわれるまっ黒な人から、熊、豚、兎、猿などの顔をした人まで実際にやっているのです。

さあみなさんも柔道というものがこれでわかったのではないでしょうか、とにかくみなさんもやってみませんか。卒業までには、絶対に、どんな人でもあのカッコイイ黒帯をしめることができるでしょう。さあ初段をめざしてがんばろう。

水泳部

「え？おまえ水泳部？アホか!!」と皆さんそうおっしゃる。なるほど僕みたいな繊細な人物が水泳部だなんて信じられないのは当然である。なしか？それは他の部員を見てもらえばよい。みな化物のような体格を

している。しかし彼らだって最初から怪物だったわけではない。(ただし二の四のT君を除く)それは、一年(実をいうと半年)の間の苦しい練習に耐えてきた結果なのである。

四月。初練習。(と見せての耐寒訓練)

この時になるときまって他の一般人どもが変な目で見る。しかし僕らは明日への栄光へ向かって泳ぐのだ。

五月~七月。練習強化。試合。

多いときで五千M。練習がHARDになってくる。そして県北・末広杯・県体・九州大会と続く。昨年は県北完全優勝、県体総合4位、九州大会多数参加という数々の好成績を残した。特に県北では、

「倉校は初めから相手にしとらんわい。」

といった完全にあきらめの言葉が他校の生徒から聞かれたほどである。

八月~九月。インターハイ、合宿、新人戦。

倉校が6年連続出場を果たしているインターハイ。(来年で終わる気もするが。)そして合宿。昨年は水不足で合宿は今年に延期になったため、今年はかなりの覚悟が必要である。一年間の最後の試合は新人戦。先輩達の残した実績をいや勝れよと一、二年が頑張る。

十月~三月。陸上トレーニングが。(と見せかけた冬期怠慢期間。)

一応トレーニングはするが、冬に試合がないのをいいことに他の部と違って、ソフトボール、卓球、Y談、六虫、サッカーなどでゴージャスなムードを味わう。

以上が一年間の主な活動である。我々はこの一年間の訓練に耐えてたくましく育ったのである。身も心も怪物になったのである。怪物と言って笑ってもらってはナンセンスだ。真の怪物になることはむずかしいのである。そうなのだ。我々は水泳部に入ることによって人間を超越して神に近づいたのだ。水泳部は偉大なのである。明陵への最短距離ではないのである。

現在、水泳部は三年生2人、二年生7人、一年生1人の10人である。顧問の先生は弁ちゃんと、時々暖かくなるとやってくる実ちゃんである。ご覧の通り一年生が1人というのが苦しい。何となく水泳部の未来を反映しているようで恐しい。又、部員10人のうちマネージャーが2人なので実際泳ぐのはたった8人である。N君(実は僕)なんかは体をこわした(?)ために一度は部をやめる決心をしたのだが人数が少ないということで、その意見はうやむやにほうむられたのである。

そんなわけで、みなさん、水泳部に入って下さい。

応援団

部　長……鈴木一生教諭
団　長……右田隆雄
副団長……丸木保和
　　山田真徳
　　小島丑三
　　釘丸道保
　　前田造一
旗手長……坂口隆裕
　　以上三年　七名

冬の酷寒の日も、夏の炎天下のもとでも毎日厳しい練習を繰り返し、我々は応援に青春をかけてきました。

夏の高校野球大会では、飛び散る汗をものともせず、野球部の勝利を願って必死に声援を送り続けてきました。

――勝利を呼び込む一回の「燕返し」
快い拍手の渦「一・二・三拍子」「三・三・七拍子」
団結心を見せる応援歌の大合唱。
伝統の六回を得点に結びつける応援歌。
「愛宕おろし」
チャンスに野球部と一体になって相手チームをやっつける「コンバットマーチ」
そして待望の得点には甲子園の六万の大観衆をうならせた「愉快ナリ」――

こうして倉校応援は甲子園で築かれた技に更に磨きをかけ、野球部と共に不滅の伝統を受け継いでゆこうとしています。

応援団も倉校生の心意気と共に永久不滅です。

茶道部

「茶道」この言葉に、多くの人が堅苦しいイメージを持つ。みんなに茶道のすばらしさ、楽しさを知ってもらうにはどうすればよいか、悩み続けること数時間、結局何も浮ばなかったので、思いつくまま書いてみる。

茶道を全く知らない級友たちが「茶道部なんか、茶を飲んでお菓子を食べるだけやろ。」と言う。これは全くの誤解である。だいたい乏しい部費で、そんなに茶やお菓子が飲み食いできるわけがない。

茶道には、その手前の一つ一つに深い意味があり、心に安らぎを与え、自分を見つめさせる力がある。一つの手前を自分が納得するまでやる。そして出来た時、心の底からこみ上げてくる満足感、充実感は、言葉にはとうてい言い表すことが出来るものではない。

活動は、毎週火水土で、火曜日には先生がおいでになられて、御指導をうけている。教室は、広さ、設備の点で他をよせつけない日本間を使用している。そして、例年、

文化祭と文化部発表会の時に茶会を催している。この際、みんなに協力してもらって茶券を売っている。中には、「茶券一枚が、百円とは高すぎる。」と言う人もいるが、日頃触れることのない日本の価値ある伝統美に触れることが出来るのだから、決して高くはない。

また顧問の先生も、あたたかさのルーツ今戸先生に加えて、英語の渡辺先生が加わり、国際色豊かなクラブになるだろう。

最後に、青春とは何か。結果を恐れずに何かに情熱を傾けること。それもいい。しかし、自分を見失なった者には、何も生まれない。流れゆく時の中で、われわれは、静寂に浸ることが出来るだろうか。自分を振りかえってみることが、出来るだろうか。老いてから、自分を見つめ直して、何になる。過ぎてしまった物は、返りはしない。この価値ある一瞬、一瞬を大切にしよう。茶の心を大切にしよう。

我々茶道部は、永遠に不滅です。

演劇部

みなさんは演劇部についてどのようなイメージを持っているのでしょう。今年も他のクラブ同様新入生の勧誘をしたのですが、「あんた、演劇部に入らんね。」「いや、あんなの！。」「そんな俺しきらん！。」「親が何か言うけ。」このような答えが圧倒的に多いのです。幸い今年は多くの一年生が入ってくれたのだが、このような事を言われると、つくづく、演劇というものが理解されていないような気がするのです。考えてみてください。一つの劇はいくつのものから成り立っているのか。そうなのです。劇とは総合芸術なのです。華やかな栄光を支える影の男、そんなかっこいい人間になりたい人はどうぞ演劇部へ顔をだしてみませんか。今からでもいいのです。ヒーローになる時、それは今です。

ところでみなさんは演劇部の部室がどこにあるのか知ってますか。説明しよう。演劇部室は新聞部室前の扉のついた細い階段を上った所（これを塔屋という）にあるのだ。そこは決して屋上への出口でも休憩室でも応援団への通路でもない。歴然とした我が部室なのだ。では、そこでいったい何が行なわれているのでしょう。四月から五月にかけては、文化祭にその全力をつぎこみます。他の部や、またみな歌にまぎれていじらしく?まじめに??がんばっているのです。そして、文化祭が終わると、他の部のようにソフトボールだけに熱中してしまうのでしょうか。はい、そうです。しかし、その間にも、11月にある大会へ向けて、6月から地道な活動をひそかに始めているのです。そして、9月になると、読み合わせや打ち合わせがいそがしくなり、10月になると、夜おそくまで、熱心にがんばるので

す。昨年はそのかいあって、みごと地区大会に勝ち抜いて県大会に行ったのです。八幡市民会館二〇〇〇の大観衆を興奮と感動のるつぼにたたき込み、数ある強豪をものともせず倒したのです。あのときの感動は生涯忘れる事はないでしょう。みなさんこの感激をみんなに、命あるものにわかちあおう、共に謳おう、そう願わずにはいられません。

最後に、現在部員はあわせて20人以上、みないい友ばかりです。そしてIMAGE 1980で個性あざやかに、質の演劇部の日本一を目ざして、日夜?邁進しているのです。

書道部

書道部は昨年の十二月より『新生書道部』として生まれかわっている。

そこで新規蒔直として、提案されるべきことがあると思う。それは、書道部の活動が、もっと他の生徒と関ってゆくことだ。書道部の活動は芸術追求の一つとして、内に肉迫してゆくことは結構だが、内に留まってはならない。それ故に、他の生徒からの注目を受けると共に部員らは書道の内容をアピールしてゆくことが最も大切だと思うのである。

では、具体的にはどういったことを実践すべきであろうか。ここで一例として、書道の芸術性を一気にレタリングのところまで引き下げてもよいと思う。街を飾る看板にどれほど書道を通した字のセンスがいるか知る人は少ないだろう。

だから、諸々の行事等のとき、書道部へ文字を書くことを依頼して欲しい。そして実際に書くところを見ていることを望む。こうして書道部との接触をはかり、部員らは努めて、字というものへの関心を高める義務があり、皆の注目を受けねばと思う。

話しはかわって、この残り少ない紙面を借りて、申し上げたいことがある。

それは、若い部員の勧誘である。はっきり言って、現在の部の体質は古い。筆者も含めて体質の改善を望むのであるがそれは、やはり素人の入部者を募ることであろう。これは部のにぎやかさを増やすのに絶好といえるからである。

書道というのはにぎやかにやってゆくものだと思う。部員は、書道を通して交わってゆくうちに、適切な指導を受け、そして『違い』を悟ってゆくのである。この三つの段階さえ踏んでゆけば、書道という摑み難いものの楽しさを知り深みを知ってゆくことだろう。後には書道が僕らに生きる指針をも与えているのに気がつく。こうした貴重なものを得るにも、第一に、にぎやかさ、言いかえるなら気楽な雰囲気があってこそと思うし、芸術の追求という真剣さも手にとってわかるのである。

いろいろ未熟者の筆者は勝手にぶってしまったが、是非とも新しい力を借りたいものである。

写真部

我が写真部の歴史を年表にしたら、受験生が泣いて喜ぶほど白紙が続く平和な、悪く言えば平凡なクラブであった。

ところが、今年は共通一次の影響であろうか、日本史・世界史などとの平等化が叫ばれ、写真部の歴史年表の一九七九頁を開くと活字が所狭しと並んでおり、百頁に一つ出てくるかこないかという太文字の事項が四月末現在で三つもある。

その三つを順に読んでみると、

一月　北九州　高校対抗写真コンテスト入選。

三月　新暗室完成

四月　女子部員四人も入る

と、なっており、最後の「女子……」には、入試出題予想事項の♡印までついている。

そして特記すべきことは、その四人が四人とも可愛いということです。

もし彼女達が、グループを結成してデビューしたら、芸能界も大きく変わるでしょう。（今やっと、首筋に当てられた四本のナイフの冷たい感触から解放された！）

ところで、あなたの回りを見渡してください。

どうですか？　あまりにも多くの写真があるので驚いたことでしょう。

思い出の写真、情報伝達の為の写真、人の心を和ませてくれる美しい風景の写真、等々、数えれば限りがありません。

そんな写真の、どれを取っても、カメラが瞬きした瞬間に、フィルムが、レンズを通して見えた外の明るい世界を自分自身に焼き付けてやろうと必死で光を感じて出来たものです。・・・・そんなことを思うと悪戯でシャッターは切れません。

写真部員が、ファインダーを覗く時、まるで別人のような真剣な顔をしている理由もここにあるのです。

ちょっとでも写真に興味のある人は、高校時代の思い出を青春という、どんな事にも感じやすい超高感度のフィルムに、一コマ一コマ刻んでゆきませんか。

最後に、後輩へ。

君達を一見すると、それはもう勝手な方向に、いろいろな大きさで表された、処理

の仕様もないベクトルの集まりだ。
しかし、僕は、たった今ある重要な事に気がついた。
それは、総てのベクトルを合成すると、始点と終点とが同じで、見事に閉じた多角形になっているということだ。
即ち、つり合いがとれていること。

ここまで言えば、賢明な君達は、僕の言わんとしていることがわかったと思う。
そう、それは、君達が協調・協力してこそ、他のどんなクラブにも負けない、すばらしい写真部になり得るということに他ならない。

新聞部

私達新聞部は昨年めでたく三十周年を迎えたわけですが、皆さんも御承知のとおり特に目立った活動をしていません。年三回発行のたった一枚の紙きれ。これが私達の活動の全てです。人々は私達を「怠慢」とか「ソフトボール部」とか言って謗りますが、これは全国的な傾向なのです。戦後的な風潮である「言論の自由」に乗って全国に広がった学校新聞は、唯一の学校事項報道の手段として大いに栄えたのですが、やがては、生徒会報などにとって変わられ、退潮的になったのです。ある人は、「新聞部とか、つぶしたらどうか。」などと言いますが、例えば戦時中に弾圧された各新聞社の自由の徒は、そのペンをふるうことを禁じられ、新聞の存在を否定したでしょうか。彼らは、いつの日か又自由を得られることを信じて活動していたのです。私達は別に弾圧されている自由の徒という訳ではありませんが、いつの日か学校新聞の再興を信じて、地味ながらも活動しているのです。

無線部

基礎編（一年生諸君もしくは無線部を全然御存知ない方々へ）
本編では、無線部の年間行事について述べることにしよう。一応列挙してみると、
・オールJAコンテスト　（四月）以下
・文化祭　（五月）
・フィールド・コンテスト（八月）

・エキスポ・コンテスト　（九月）
・農閑期　（十～三月）

と数は少なそうだが、この合い間にアンプ・ラジオ製作、通信、コンデンサー爆弾、バドミントン、テレビゲームと色々忙しくセセコマシクしている。特に年平均3回のコンテストは全て全国大会である。年間に3回も全国大会に出場するのは無線部位であろう。（予選がないのが強みであるが）エキスポではS50・51と九州一位を獲得しているのでマンザラ捨てたモンでもなさそうである。（ハハハ自画自賛）それと農閑期。この期間に我々は勝手に好きな事をする。バドミントン、雑談、凧揚げ。無線に縛られる事なく自由かつ創造的な（大袈裟！）活動をするのである。そして段々する事がなくなってきた頃、新入女子部員の数が気になりだしてくるのである……。

応用編（二年生諸氏もしくは無線部室を覗いた事位はある方々へ）

本編では無線部のコンテスト模様を公開しましょう。

夏も盛りの泊り込みという事で何といってもフィールドコンテストが一番面白く、キツイ。場所は例年「手向山」という小倉と門司に挟まれた丘。テントを張って、キャンプファイヤーをして、ギターでも弾きながらと思ったら大間違い。テントは体育大会の時に使うアレ。蚊に刺されない為に蚊帳を吊ります。そして蚊取り線香の煙る中、タマネギ水を飲みながら皆無線機とニラメッコ。この間二日で、消費するジュースが百数十本。（何にもしないでジュースだけはガッポリ飲む朋輩がいるので始末が悪い。）寝る時は寝袋。原則として寝る事は禁止されるので当然蚊帳から追い出されて外に出ている顔だけムチャクチャに刺されます。こんな異常としか思えない生活の中で唯一救われるのは、YL（無線界では女性の方をこう呼びます。）の手料理であります。

昨年は我が部唯一のYLとそのお友達さんが我々のお世話をしてくれました。何故に我々が女子部員を欲しているかが理解してもらえるでしょう。

受験編（三年生の方々もしくは無線部の実態をよく御存知の方々もしくは科学部さんへ）

前二編、猫をかぶり虚勢を張って我々の紹介をさせて頂きました。あなた様方にはもう我々の醜態がバレているので、この際恥も外聞もカナグリ捨てて、実の所を（やや盗作気味に）述べさせて頂きます。

無線部とは……

百鬼夜行　無我夢中　一心不乱　馬鹿丸出
才気煥発　酒池肉林　質素倹約　清少納言
疑心暗鬼　狂喜乱舞　怨憎会苦　愛別離苦
単刀直入　一期一会　切磋琢磨　口先三寸
佳人薄命　笑胡麻化（ッチセ）　鶏口牛後　無知白痴
沈思黙行　貧民救済　人間失格　金色夜叉
偶像崇拝　孤立無援　天真爛漫　全員陰険
乾坤一擲　五里霧中　徹底整理　完成現国
明陵確定　頭脳明晰　明朗快活　嘘言八百
日和見男　大和撫子　多端紛雑　倉高健児

なのです。もう申し上げる事は御座居ません。以上三編を完全に習得せられたならば

皆々様は必ずや我々に温かい嘲笑を以って接して下さるであろうと自負している次第で御座居ます。では次号までサヨウナラ。

文芸部

文芸部室を見よう。そこに文芸部のすべてがある。未来がある。希望がある。勇気がある。これをわかりやすく説明すると、廃部にされるおそれがある。このくらいのスペースでもあるという希望がある。このくらいちらかす勇気がある。ということなのです。しかし僕は思うのですが、今こう言ったのは自己を謙遜しただけであって、実をいうとこれが高校における文芸部のあり方としての最も理想的な状態であると思うわけであります。完全な個人徹底主義と一貫した放任主義。小室寡部員、無為自然大道をゆく。我らの部としてのあり方は、あの老子を思わせるものがあります。そうです。これも一つの「実践体系」なのです。

大体、文芸部にくる奴には「男」と「女」がございまして、その「女」とかいう人種は大抵その○○といたしましてはメルヘンとかラブポエムとかを書く泪ぐましき知的お嬢さん、男には大体変なのが多く、一般定式化は不可能である。ところで一体何人いるんやろう?それさえ大体ですらもよくわかっていないというこの不可思議の美。

一年生のみなちゃん。高校生活を黒色に染めたいと思う方、頭をおかしくしたいと思う方は皆文芸部に入りましょう。文芸部に入ったら知的生活がおくれます。いいぞ。しかし一つ確かな事は、何も文芸部には拘束力がない。それは実体がないからである。大体文芸部に入ったからって音楽部や演劇部のように毎日の練習もなくはいっているからといって強制的に作品を出せとかいうことがない点で自由と認められる。

僕の観点からすれば、文芸部が「つぶれる」ということはない。毎年やっぱり好きな奴がいるんだもの。だから現状で僕はよしとするのである。

ところでもしあなた方、特に一年の方、自分の作品を読んでほしいと思ったら汲泉の文芸欄に送ろう。この雑誌は、生徒会直属だし、ずっと残るよ。それに比べて今の予算では文芸部に雑誌を復活させることは少々無理ではなかろうかというのがもっともな見解である。出せる!ガリ刷りという手がある。しかしその場合は発行部数20くらいにしよう。部外者で読みたいというのがいたら、まずその真偽を確めよう。そして相手の脳を疑ってかかれ。まずいないだろうというのが私がこの年にしてたどり得た、もっともな見解といえる。

さっきも言ったように、文芸部には実体がない。はいったところで、作品の出し場所、責任者がいない。雑誌もいつ発行するかわからない。発行できるかどうかわからない。君たち、これからは自分自身がしっかりしなくてはだめだ。諸君のその目が明日を切りひらくのだ。

—文芸部秘話—

時たま、文芸部員同志が、文芸部室であるいはまた講堂において、きわめて白熱した議論があると聞く。しかも日がとっぷり暮れるまで、だ。しかも内容も実体もいまだにナゾであると聞く。このナゾを解き明さんと思う者はだれでも文芸部の戸をたたけ。

最後に一言。

「文芸部の存在価値は自分が文芸部員であるという自覚と他人に文芸部員であるという認識をもたせるという意味でのみある

ものであって、単に文章を書くとか、雑誌を執筆するとか狭義において解されるべきものでない。」

このことを真に悟った時、あなたは真の倉校生になるであろう。

美術部

A：お前、何書きよるんか。

B：文化祭のポスター書きよるんよ。この空書くのに無限級数使って二時間もかかったけね。

A：お前、根性入っとるのー。

B：そうなんよ、絵画くちゴッツ大変なことで全く個人的作業なんよね。

A：言えちょるのー絵ちゃその人自身の内的問題やもんね。それがキツイけ美術部のロッカーを、駅前百円ロッカーと勘違いしちょる、全く絵を画かず、部の恩恵に巣喰う江川。海部的人間が部員面するのは全くゆるせんが美術の厳しさをよく物語ちょるんよね。

B：しかし去年の文化祭や運動会の装飾は漢文の予習的、八甲田山の神田隊的に無茶苦茶きつかったっちゃ。

A：そうちゃ総務部ちいったら金色に輝くブタ的四大婦人雑誌の表紙みたいな顔して頼みこんでから、高級官僚的に利用する人よ。

B：しかしお前、そんな反体制的な事言よったらヤバイんやないんか。

A：いいっちゃどうせ今年で最後やん、言いたいこと言っとかな寝起きが悪いっちゃ。

B：しかし美術部ち言ったら活動はやはり地味やけのーまあメジャーにはなり得ないとしても美術部の展示には皆さん見にきてほしいのー。

A：倉校ちゃ民度が低いけしょうがないんよ。大体俺は芸術的とか美術的とかいうけど、実感として分からんのよ、まあ人間の根本的な視覚上の快楽とかイメージとかは漠然として誰にもあると思うんよ、それを俺なりに美術という方法で具体化していくわけだけど……。

B：しかし、なかなか難しいもんね、俺はいつも自分の未熟さからの壁にぶち当るし、美術にへばりついとるようなもんなんよね。

A：まあ、何と言っても美術部がこれからも今までの様な隆盛を極めるには絵が好きな人が入ってくることよ。

B：いや、そんなもんでは生ぬるいんよ。とにかく絵を描くことはきつい、もう美的センスなんちどうでもいいんよ、要は迫力よ、ヤル気なんよ。

A：そうかのー。

B：当り前やないか、もうインテリ・エリートが世の中を制する時代は終わった。今や土方の時代よ、根性があれば野球のボールも消えるんよ。土方の素質のある人はぜひ美術部へ、やわな人間は地球から永遠に去れ。

そう言って二人はモノリスを指さしSTAR CHILDが誕生するのを待つのであった。

華道部

今、華道部は三年生8名、二年生1名で活動しています。どうしてこんなに部員が少ないのでしょう……？

みんな華道という言葉に「私なんて習ったこともないし、全然できなかったらはずかしい」とか、むずかしそうだし…とか思っていませんか？でもそんなことは決してありません。部ではみんなワイワイと楽しく勝手に生けていますし、ちょっと出来が悪くても先生が直して下さったのを自分一人で生けたかのごとく顔をしていればよいのです。先生も適切に、やさしく指導してくださいます。だから初心者大歓迎です。

かく言う私めもそうでありましたけど、なんとか、かんとかやってます。ほとんどの先輩がそうなんですから…！

それでもっと真面目にアピールしますと華道の良い点はいろいろありますが、なんといっても心がとっても落ち着きますし、美しく出来上がった花を前に、やさしい気持ちになれます。…といって女らしくなれるとは限りませんが…。可能性はあるのです。（私に関しては効果ゼロでしたが…まあそれはいいとして…）

今戸先生も時々、本当に時々差し入れして下さることもありますし、第一、一番心配な費用もそんなにはかかりません。

ちなみに昨年は一回二百五十円でした。でも家庭で生けるよりずっと安く豪華なのですよ。

だからとにかく皆さん華道部に入りましょうネ！

週一回ですから、かけもちもOKです。男子の方もジャンジャン入って下さることを願っています。

この汲泉が出た後、たくさんの入部希望者を夢見つつこれで終わりにしましょう。

考古学部

ハーイ、考古学部です。もしかしたらそんな部なんか知らんわい、ちゅう人もおるんやないかと思っとりますので、そんな人のためにも紹介しておこうと思います。

まず、活動の内容は（ううう、冷汗が出る言葉やなあ。胸がちくちく痛みよる。）一応のところ、土器の復元や遺跡の調査、さらには書物による研究などをしているのです。そして、考古学の醍醐味である発掘はというと、実は最近ムニャムニャというのが実情です。しかし諸君、悲観することなどないのです。何といっても怠慢の旧幹事K氏も定年引退された今、必殺の三村氏によって大改造がなされようとしています。

これから我が部は復活するんぞ！ほら見て、光が見えてきた。文化部の頂点に立つ日は近いぞ。（注・筆者はここで錯乱状態に陥ってしまいました。皆様に大変ご迷惑をかけたことをお詫び申しあげます。）

ところで、我が部に入った者は、たちどころにじいさん臭くなってしまうという噂があります。なぜかというと、何といっても部室には数多くの出土品が保管されていますが、これを清掃するときなどが大変だからなのです。特に甲冑（よろいかぶと）を動かす時が地獄のさるまわしです。これを持ち上げた時に、ミシッという音がした時などは顔面蒼白（これがまた快感なのです）になり、生きた心地がせんのです。（誰や、ちびったろうがちゅう奴は。）これによって、一度に十才位老けこんでしまうのです。もし部員で若々しいのがおったら、それはきっと怠け者です。

ごたごたと部員が逃げ出しそうな事ばかり書いてきましたが、ここらで我が部の長所を一つ。それは何といっても部室の広さじゃ！だから君も入部したならば、きっとゴージャスな気分を味わい、優越感に浸ることができるだろう。（陰の声――劣等感に浸っとる時のほうが多いやないか。）こんな部を再建しよう（ぶち壊そうと思っとる人は遠慮してください）と思う人は今すぐにでも部室に来てください。入部したその日からあなたの人生はバラ色になりますよ。ウフフフフフ。（部室には時価〇〇万円の宝が、あ、おっと口がすべるところやった。）

音楽部

新入生の諸君、コニャニャチワ。大部分の人は胸をはずませて、倉校に入ったと思います。さて、これから頑張って、東大を目指すか、なんて思っている人は、そうざらにはいないと思います。でも、やる気は十分に、持っていると思います。そこで諸君の若いパワーを勉強だけでなく、クラブにも打ち込んでみては、どうですか。勉強で疲れた時、大声を張りあげたくなる。でも、教室で、そんなことをするとバカみたい。そこで大声をあげてもおこられない所、そう、そこが音楽部です。欲求不満を解消するのには絶好だと思います。そんな理由

で入った人も今までには、少なくないようです。

さて、わが音楽部では、文化祭、夏のサマーコンサート、キャンプ、クリスマスコンサートなどが主な行事ですが、特にキャンプでは、いろいろな思い出が生まれているようです。ところで、これは諸君への忠告だが、あんまり、かけ持ちクラブは、しない方がいいよ。とある先輩も、よく言っていました。このクラブの特徴というと、学年の区別が、あんまりないことかな。たとえば、一年生が三年生を呼びすてしたり、まあ、そんなに気を使わなくてもいい点はよいかも。みんな寛大な心を持っているのかな。中には、こわい人もいますけど。特に、高校生というのに、心は純粋で、ちょっとしたことにも率直に反応する人が、多いようです。みんな、世俗化されては、いけませんよ。ハイジのように明るくって、誰か、言っていたみたい。

さて話題が、ずれちゃったけど、昼休みなんかも何か、いっしょにさわいだり、歌ったりしているようです。音楽の好きな人に、かかわらず、関心のある人は、さそい合って音楽室へどうぞ。女子目あてでも、かまいません。（但し……――）

吹奏楽部

この春、部員がついに60人を越えました。吹奏楽部にも補欠ができる時代になったんです。今我が部は、人数の面から見ても、コンクールの成績から見ても、確実に上り調子であると言えます。この雰囲気がいつまでも続いていくように努力したいと思っています。

さて、昨年はうちの部の風俗・習慣についてお知らせしましたので、今年は我々の〝試合〟ともいえるコンクールについて書きます。

コンクールは毎年8月にあります。（因みにこの時期の練習時間は6～7時間以上）年に一度しか自分達の実力を試すことができないというのは、なにかもの足りない感じもするんですが、やはりそれにはそれなりの価値があると思います。というのは、それによって年間を通しての大きな目標を定めることができるからです。事実、コンクールでやる曲のひとつである〝自由曲〟には、ほぼ一年といっても過言でない程の時間をかけます。コンクールが全てだという考え方は必ずしも正しくはないかもしれませんが、それ抜きにしてはうちの部の活動は成り立たないと思います。

こういう意味を持つコンクールで、僕達が演奏する曲は、ひとつは自由曲、もうひとつは連盟から配布され限られた時間でしか練習できない課題曲です。

苦しい練習を乗りこえ、この二曲をつくりあげて上るコンクールのステージ。僕達にとってはたまらない魅力があります。出演する前に楽屋で控えている時の、あのどこかぎこちない心と体。暗いステージの上で椅子や楽譜を準備する時のあせり。スポットライトがともされ指揮棒が振り上げられた時、まぶしさと緊張で客席が見えなくなるようなあの一瞬。そして、いつの間にか自分達の作っている音楽に酔いしれてい

る自分。そんな僕達をほっとさせてくれるあの梅氏の微笑み。最後の音符を吹き終え、指揮棒の動きも止まり、会場から拍手が起こる瞬間の感激。「ブラスバンドをやってててよかった。」と思うのはこの時です。そしてライトが消えてステージを降りると、緊張のあまり体がくたくたになっているのに気付きます。何よりもこの疲れをいやしてくれるものは、「よかったぞ。」という友達の一言です。

この2曲の演奏時間は、合わせて12分間。『12分にかける青春』誰が考えたのか、かっこいい言葉です。

こんな風にして、一度コンクールを終えると部員の生活には、大きな節目ができます。ブラスバンド部員は、コンクールの度に一つ年をとるんです。そしてその興奮もさめやらないうちに、再び楽器を手にして次の〝12分間〟を目ざしている、これがブラスバンド部員です。

式典でポカミスをやったり、いろいろと御迷惑をおかけすることもありますが、これからもどうぞ吹奏楽部をよろしくお願いいたします。

科　学　部

最近、ようやく科学部＝化学部といった誤解もなくなったようです。というのも、一時、隆盛（横暴？）をきわめた化学班が、第二の黒幕と呼ばれるT君の相次ぐ失政で没落したためです。数名の二年生が懸命に復興に努めていますが、今のところ停滞気味です。

それに代わって、今では天文班が全盛期を迎えており、年数回の遠征観測会（星がとてもキレイ）をすべて成功させ、「天文班にあらずんば部員にあらず」の声すら出るほど。しかも、二ケタ班員はここだけです。文化祭の内容も立派なものです。

その独走をかろうじて食い止めているのが物理班で、三年前の学生科学賞全国三位の栄光を背に、細々とではありますが活動を続けております。ただ、班員不足が悩みのタネで、わずか三名の二年生が、怠慢を決めこんでいる三年生の分までやってくれているようです。

が、これぐらいで驚いてはいけません。もっと悪い状態に陥っている班があるのです。人呼んで、「円鏡一人の気象班」で、つい先日までは、献身的努力を続ける三年のY君の助けで、なんと〝円鏡〟が一人でやっていたのです。まあ、最近になって慈悲深き一・二年生が四人ほどはいりましたが、限界ギリギリ、いや、限界オーバーなのです。一刻も早く新入班員を迎えたいのです。さもなくば、あと二年で班が消滅してしまうかもしれないのです。

以上が常設の班ですが、特設班として、文化祭の時にはパズル班が、夏休み頃にはソフトボール班がこれに加わります。特に、ソフトボール班の活動は目ざましく、一昨年は四位、昨年は惜しくも二回戦で敗退し

ましたが、1点を争う好ゲームを演じ、今年もまた期待されています。チャンスは十二分にあるので、我こそはと思う人はどうぞ御入部ください。

とにかく、楽しいクラブです。来たれ、新入部員よ！

生物部

生物部というと誰れでも、あの解剖やら何やら、おぞましい事ばかりやっているクラブと思いがちですが、倉校生物部を知っている人ならそんな事はないと思います。しかしそれらの中にもまだよく理解していない人がいるような気がします。

たとえば検鏡の事。よく言われるのですが「生物部が何で顕微鏡の事まで教えるんか。」などと。これは我々にとっては心外な事で、プランクトンを研究している我々生物部では、当然覚えるべきものですから誤解のないように。

ところで、我々はどうしてこう毎日顕微鏡をのぞき続けるのかというと、プランクトンには言うに言われぬ美しさがあって、それが部員の心をとらえてはなさないからだと思います。

とにかくこれは、一度じっくり顕微鏡をのぞいた人でなければなかなかわかるものではないと思います。

具体的に言わんとピンとこんと思いますから、ほんのちょっとだけお話しますと、肉眼では直接見る事のできない世界にも人工では作れぬ細やかな模様があるのです。これが言うに言われぬ美しさというものです。もしこれらの美しさを味わいたい人はすぐに生物部室へ。

また、我々生物部は、かつて部室面積が最も広いクラブとして有名でした。しかし今では写真部の部室が拡張されたので写真部といい勝負です。

とにかく、決して「ムゴイ」事をしない生物部をヨロシク。

特集

あらまほしき人間

◆座談会

◆声

汲泉は今まで倉高を、いかにしてよくするかを中心に特集を組んできました。

近年の汲泉の特集では「大学について」「重い鞄（教科書について）」「コウモリ（三無主義について、高校生活について）」などについて考えてきました。今年の汲泉も前年度にまけぬように、昨年の十二月頃から部員一同張り切って話し合いを続けてきました。

倉高を改善するには制度とか、何とか他律的な事でなくて自己を改善するべきだ。誰にも文句を言わせない人間を作ればいいんだ。別に優等生面する必要はないから、自分達の望むような人間になればいいんだと。

ところで一体、自分たちの望む人間とは、どんな人間なのでしょう。

一体、我々はどんな人間を望んでいるのでしょうか？

今年の汲泉の特集「あらまほしき人間」とは、この『人間』を導びいていこうというのです。

単に「あらまほしき人間」と言っても、個人〳〵によってその見方が違うでしょうが、汲泉としては、全体的な見方、その『人間』を導びいていきたかったのです。

前の文章は、前にあって前書きにあらず。大きなテーマを打ち出していたくせに、非力であった汲泉のおたけびです。

最初、どのように特集を組もうかと、当時一年生だけだった我我は考えた末、月並みながら、アンケートを取ることにしました。そして十二月から一年越しに計画を立て、三月にそのアンケートを出しました。結果は見事失敗。綿密に立てたはずの計画も集められてきた用紙を見ると、穴だらけ。

しかし、くじけずに次には座談会を予定しました。それも、今度は落ち度のないように、二回に分けて。一回目は希望者だけ、そして二回目は、先生方や総務部を招いて、それに一回目の人達。そんな事を熱っぽく論じ合いました。

「人数、どうしょうか？」

「希望者とったら、多いやろな！この学校、意外とそんなん好きな奴多いけ（と言いながら指を折る）。」

「10人？ちょっと少ないかなァ。」

「まあね、20人は多くて意見がまとまらんけ、15人くらいか。」

「集まるね！。」

「希望者多すぎたらどないしょ。」

「先着順か何かでしぼれば？。」

「で、二回目は。」

「ンー、一回目から5人くらい、総務部から5人、先生2人そんくらいやろ。」

などと、予定は、バッチリでした。そして参加者募集をアンケートの隅に入れたりしてガンバッタのです。

そして、〆切の二日前、一日前と時は刻々と確実に過ぎていく中で、汲泉のドアをたたく音はついに聞かれませんでした。

結局、汲泉の第一回座談会は、中止せざるをえなくなりました。自然と二回目も中止となり、汲泉の一年越しの仕事も、水の泡と消えたのです。

集まると思って、信じていた我々が甘かったのでしょうか？

やはり、我々が非力だったのでしょうか？
結局、今年の特集は、原稿に身を任すことになったのです。
生徒四人、先生方二人、〆切を守りこういう物を書いてくれると我々が信じた人を……。
〆切は、四月の初めでした。それが延々と延び、現在六月半ば。その六部の原稿のうち来たのは二部、最初の〆切を守ったのが一部。
特集のイントロ、弁解と言い訳と愚痴、書きたい事を書いてしまいました。読み苦しかった事をおわびしつつ、まずはペンを置きます。

前の方で、どうのこうの叫び、そんでもって、その後に、失敗にもめげずすぐ座談会を企画したのが、汲泉のエライ所であります。
汲泉が、エライかどうかはさて置いて、この座談会、結果的には、大成功でした。
六月十八日に、突如誰かが言い出し、十九日汲泉部員は出席者捜しに走り回り、二十三日の土曜二時から二年二組の教室で行いました。
その様子を、全部、文にしてここに載せてもかまわないのですけれども、それはそれ、至極きついので、怠慢とも何とも言われようとかまいませんが、簡単にかいつまんで書いていきたいと思います。

☆ 座 談 会

司会　宮本（汲泉）　　出席者　秦　（一年二組　汲泉）
書記　大神（汲泉）　　竹山　（一年四組　汲泉）
…クラスも名もダメッテ…
吉永　（一年五組　汲泉）
中村　（二年三組　ブラバン）
菊池　（二年三組　ブラバン）
能丸　（二年六組　無線）
早見　（二年六組　汲泉）
前川　（二年九組　汲泉）
以上九名　敬称略
三年生は残念ながら試験中だったので出席していただけません

でしたし、一年生のほとんどが汲泉なのは、全て汲泉の怠慢のせいであります。

座談会は、二時五分過ぎに、始まりまして司会のあいさつ、出席者の自己紹介などで開かれました。

最初は、「倉高らしさ」と言う事を中心に進みました。

早見「ナガリとか行って『オイ、ドケッ』とか言ったら、のくのが、倉高生。」

この言葉に始まり、それぞれの倉高論を語ります。

菊池「倉高にそまるってことは、いかにも倉高ですって言わんばっかりに胸を張って歩くような……やっぱりこれは、女子の立場から……

この学校にはいる女子は、男子から見たら生意気にみえるかもしれません。とにかく女性らしさが欠けてないこともありませんし……。

男の人は、ユーモアーがないというか、話したときも、勉強の話しかないというか、それはちょっとオーバーですが、みててイメージが…これが倉高とは言い切れないけれど……。」

竹山「個人〈いろんな人がいるでしょう。たまたま、この学校にはたくさんの、個性を持った人がきたと思うんですよね。そしたら倉高とかはいったら進路が決まってて、固定化されて、それに、それに対する目があるから。女の子ならすごーいとか、倉高に来たらどうのとかいいうより……私は、そんなに型にはまったというより、個人〈その人の決まった道というのを自覚してもらいたいし、けど、いくらヤリたい事と言っても、やっていい事と悪い事があるし……。」

早見「俺の場合、どこに行っても中にいるのは一緒だと思うんよね。倉高の人間自体が、そうじゃないけど、70年という伝統というものの考え方…俺たちが中心やなくて、その考え方を中心に倉高らしさが作られとんじゃないかな。」

時間が流れるにつれて『倉高らしさ』が『外部の目　伝統』と移り変わっていきます。

それと、先にことわっておきますが、ここに載っている分は、この座談会においての『名言集』とでも、とらえておいて下さい。言葉と言葉の間に省略した言葉も多いのです。

宮本「自分たちのおる立場から見たらね、今僕だん、この学校におるやん。だからその、客観的に見ることはできんわけよ、けど卒業した先輩たちは、過去のことやけね、かえって客観的に見れるけね。高校生としてある立場がはっきりわかるんやない。それが、その倉高の伝統というものにつながるんやない。」

前川「多分、俺たち、今年いれて後二年やん。そやけ、二年分の伝統を作るやろ。そして作った分だけ、俺たちの後輩を美化した目で見るんやない。」

……「そしたら、エゴによって築かれた伝統?。」

能丸「学校というのは、ボク達にも、OBにも家族みたいなもんじゃないかなァ。」

話は『まとまり』という問題、そして『友達』へと、

竹山「勉強するんはいいんだけど、

まとまる時にまとまらんというのは…ちょっと。」

早見「いや、あれを(文化祭)まとまりと、そのまま受け取ってはよくないんよ。なぜならね。まとまりという形でねみんなが、やらなイケン時にね、みんながやる場合が、あくまでまとまりでね。一番手近に『みな歌』をとるよ。あいつら、すごくまとまった。多分、あいつらのまとまった力というのは、もう本当に偉大だと思うよ。けど、あいつらが、まとまった条件考えてん?

まとまるんが、当たり前の条件で、まとまったんやない。そやろ、あくまでも歌を通してやりたいことをやる。今まで勉強ばっかりにある程度押されてしまう。このふんいきから、みんながパァーと騒ぐことによって、何かできるという、そんで又、友達通しとかお互いに、ああいうことをやるのが好きだとか、そういう連中がああやってまとまったんじゃないか。そしたらね、本当のまとまりというんはね、誰か学級の45人の人がいるとしたらね。45人全員の利益になるとは限らんやん。その不利益者にとって何らかの利益がかかってきた、そういうみんながまとまることによって何らかの利益がかかってきた。そういうみんなが一緒になった事をまとまるというんやないん。」

能丸「この学校に入って一番腹の立ったのは、うわべだけで、付き合っていくような形があったことなんです。」

前川「倉高に入って誰かある一人の事を、何人かで話すやん。そしたら結局、最後には『わからん』の一言になるっちゃっ。この学校には、わからん人間がゴロゴロしとるっちゃっ。結局、こっちからもわかろうとせんのかもしれんけどさ。しまいに変人扱いしていくようになるんよ。かといってさ、ここやと誰か一人注目される事が多いやろ。クラスで先生がさそうとしたらさ、みんなでコールするようなのが、結局さ、そいつはもうみんなが半分くらい奥までわかっとうって気がするけやがぁ。やけ、みんなが、そうなればいいんよ。ここはさ、みんなが心を探ろうとせんしね、心を誰にでも開こうとせんのよ。開かないけんのよね。手つながないけんのよね。」

竹山「友だちっていっても、ただ表面だけの友だちならすぐにできますよ。けど本当に自分を知ってもらう、見てもらうってなったら……こわい。」

早見「俺が言いたいのはね、一緒よ。みんな、どこの学校に行っても。同じ様な人間が、同じように。個性は、みんなが、ばらばらにもってるんだけどね。ふんいきって言うかね、同じ様なふんいきを持った人間が、同じ様なこと

をしているよ。
もっとみんな、本当に外に目を向けてん！
いろんな事があると思うけ！」
以上で打ち切ります。当初一時間の予定だったのが熱に熱が入って二時間半。
二組で勉強してた女の子たち、おい出してゴメンナサイ。
で、コーラ汲みをしてくれた、大石さん、川上君。完全的傍聴人だった吉田君、三浦さん、その他いろんな人、ゴクロウサン。
次に原稿に移りたいんですが、完全に汲泉の手落ちで大和君の原稿を紛失してしまいました。相すいません。本当に、本当すいません。
さて、原稿に移ります。

あらまほしき高校生活

梶原辯二

人生いかに生くべきか、常に問い続けられながら、永遠に明確な答の得られない問題です。
何故に、その答は容易に得られないのか。それは、すべての人が、各々全く異った性格、能力、価値観、そして可能性を持つためでしょう。最大公約数的な模範解答みたいなものは、いつも用意されそれでほとんど間違いないのですが、現実には、なかなか問題解決という訳にはいきません。殊に、すべての面において暗中模索の青年期にあっては、どの先人の与えてくれるそれも、決して満足なものとはなりえません。(実際問題として、ここで真に提起してみたいのは、どれだけの人が〝模索しているか〟という問題ですが、それはしばらく措きましょう。)
青年期は、〝己〟が最も絶対視される時期だと思います。そして、その絶対視すべき己が、ほんとうには最もわからない時でもあります。高校時代という時期は、頭初の命題について、はじめてその存在に気づき、悩みはじめる時期です。多くの場合、この問いは終生つきまとう筈です。しかし、青年は性急に解答を求め、絶望という名の答に幾度となく行きあたります。どの解法を用いても、それにしか行きつかないという、それでいて決して正解とはなりえないという……意地悪な問題です。
この問題の解法は無限であり、そしてただ一つしかありません。これは、すべての人に共通に与えられた問題であると同時に、己だけにしか与えられない問題ででもあるからです。ここで考えた

く、肝心なのは、言うまでもなく後者です。自らに与えられた一度限りの人生、その人生を最大限に生きているという実感、一度限りの人生など、あまりに抽象に過ぎるならば、ただ今のこの刹那は再び戻っては来ないという認識を前提として現在を生きているか、という問いを自らに投げかけて今日を生きることです。

その今日の日を、満ちた思いを持って生きる生き方は、どこから生みだされて来るのでしょう。それは、己の生きるべき道を、自らの目で（これが何としても、最も肝要なことです）確かに見定めた生活の中からのみ、得られるものでしょう。

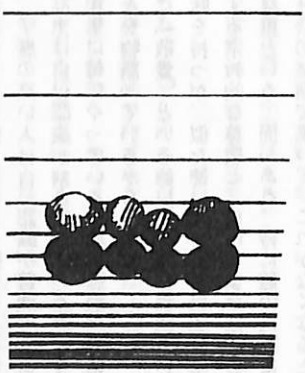
毎日の生活、このあまりにも多忙な勉学に追い回される日常は、ほとんどの諸君にとって、自己の意志など介在する間もないほどに多忙この上なく、苦痛でこそあれ、決して楽しいものである筈はありません。しかし苦しみの日常から――そこに確かな将来の展望さえあれば――苦しみの中からこそ、真の充実、生きていることの確かな手ごたえは、得られる筈です。言いかえれば、自らの生きるべき確かな展望を現在に持たぬ人の日々のその苦痛は、苦しみ以外の何物でもないでしょう。極言すれば、真の意味での人生は、そこには存在しないとも言えます。それはまさしく、灰色の青春そのものに違いありません。

いかなる青春の苦痛も、それが将来の展望に支えられたものである限り、それは決して苦しみだけで終ることはありません。ここで断っておきますが、将来の展望を持つとは、将来にバラ色の人生が約束されているとか、大きな可能性が保障されているとか、ということでは決してありません。それはただ、はっきりとした自己の望ましき生きる道を、見定めているという事でいいのです。

毎日の勉強を終え、放課後の激烈苛酷な練習に打ち込む者の姿を見給え。自らの求めた、苦しみにゆがむ彼等の顔には、確かな充実感、生きた眼を見ることができます。殊に練習の終ったあの瞬間の顔には、明らかに満足を見ることができます。これは青春の全エネルギーを、完全に燃焼させた者のみの知る、真に生きていることの喜びそのものです。勉強も全く同じでしょう。

確かな展望のもとに現実を生きる。われわれは、高校時代という将来への可能性を、最大限に追求し得る時期に生きています。その実現の可否は、この上ない苦痛を、確かな充足感として実感し得るか否かにかかっています。

現在の苦しみを恐れず、敢然とそれに向かって行く。目的は直ちに定まらなくてもいい、暗中模索でいい、それを自らの手で求めつつ、現在を生きたいものです。



望ましき人間像　倉高生のあるべき姿

南　学

第51回選抜野球大会は終った。倉高は第50回大会には出場できたが、今年は出場できず残念であった。倉高は、野球も強い進学校として全国的に知られている。

近代野球では、チームプレーということが強く要求されている。昭和53年度のプロ野球において、ヤクルトが日本シリーズに大方の予想に反して優勝をなし遂げた。広岡ヤクルト監督の指導理念であった『チームプレイ』とか『管理野球』ということが問い直された。一回も優勝したことのない弱小球団を、また、個性の強い一匹狼的な野球選手達をまとめて、初優勝へ導いた指導者としての手腕があらためて評価された。

野球チームは九人の集団である。多くの場合、我々の属する集団はそれ以上に大きな、また複雑な集団である。現実の社会では、個人の力ではどうにもならないことが沢山ある。チームプレーの根底にある『協力・協調の精神』が必要となってくる。競争社会において、協力などしては生きていけぬ、と言うかも知れない。しかし、協力・協調なしに問題の解決や大きな業績をあげることができないのも事実である。過去にヤクルトにも個人的にすぐれた選手は多くいたが、優勝はできなかった。倉高の出身者は個人的には能力のある立派な人物がいるが、まとまっていない。そのため力が発揮できないという事をある企業経営者より聞いたことがある。政治の世界で派閥がしばしば問題になる。しかし、一つの政策集団の存在が必要となる。

次に諸君に期待するのは、「畏敬する」ということである。畏敬するということは、先づ自分自身を知ることから始まる。ある心理学者の研究によると、学歴の高い人は自己認識が普通の人より優れているという。倉高生は自己認識が割合できていると思う。その理由は一年生と二年生に毎年やっている生活実態調査の結果が、その能力の高いことを物語っているからである。

倉高の教育方針の中に「敬愛」という徳目がある。畏敬という徳目の方が若干広い意味を持つが、似た徳目である。畏敬には人間の力を超えた者に対する宗教的な尊敬と、自己および他人の人間的尊厳に対する尊敬尊重という二面がある。特に他の人間に対する畏敬は現代の法的社会の基盤であって、これがなくなると、力の論理がまかり通り、平和な社会は崩壊する危険がある。友人関係でも、本当の意味でのそれは畏敬なしには成り立たない。単なる一時的な利害関係に過ぎぬようになる。というのは、人間の尊厳に対する根本的な尊敬の念がある時のみ、人は他人に対して真心のこもった態度で接することができるからである。最近離婚が多くなったり、親子関係が冷却しているというのも、お互いに敬愛するということの欠除のためと考えられる。同時に、畏敬されるものを持った人間になる必要がある。

次に一つの価値観（思想）を持とう。特に東洋的価値観（伝統）を持ってもらいたい。日本人は外来の文化・思想に対して常に白紙の立場で接すると言われている。新しいものが善で古いものが

悪であるかのように捨ててしまう。やがてその行き過ぎに気がついて日本的なものが生まれるというパターンを繰り返している。敗戦後、民主主義の導入によって、自己中心主義的な価値観の多様性ということがよく言われている。そのための混乱も多く見られる。例えば、軍国主義の反動のためか、国の防衛問題によく現われている。日本の国を守るのは日本人のみであって、米国人が守ってくれるわけではなく、ましてロシア人ではない。政策としてのアイデンテイテイ（同一性）を確認しても良い時期に来ているのではないだろうか。

西洋文明の基調は基本的人権、即ち、個人の生命が最大最高の価値となっている。勿論生命の尊重、基本的人権を否定するものではない。しかし、現実に生命の尊重や基本的人権の確保ができない場合が起り得るのである。

国際社会で力の論理がまかり通る場合が、数多く起こり得る。南ベトナムは指導者達の腐敗も手伝って、遂に国が滅び、その難民は自由を求めて多数亡命している。場合によっては、個人の生命より大切な守るべきものがある。これが東洋的伝統である。親は子のため、子は親のために死ぬこともありうるわけだ。特に国家社会の指導者となる人物は、真の平和・自由を確保するため、この東洋的価値観を持ってもらいたいものだ。

「期待される人間像」としてその他多くの徳目がある。昭和四十一年十月に文部省の中央教育審議会より答申されたものがある。ここではそれに触れず、中国のものを参考に紹介したい。中国には「国民公徳」としての「五愛」があり、青少年のための「三好」がある。小学生の日常生活のための指導原理である「小学生守則」がある。

五　愛

一、祖国を愛し　二、人民を愛し　三、労働を愛し　四、科学を愛し　五、公共財産を愛護する。

青少年のための三好

身体好（体をきたえる）　学習好（よく学ぶ）　工作好（よく働く）

小学生守則

一、よい生徒になるように努力し、健康で、勉強がよくでき、行いが立派な人になるように努める。
二、国旗を尊敬し、人民領袖を敬愛すること。
三、校長や教師の教導に従うこと。自分の学校、自分の学級の名誉を守ること。
四、時間までに登校し、きちんと授業をうける、遅刻をしない、早退しない、みだりに欠席しないこと。
五、登校の時は必要な教科書と学用品をちゃんと持ってくること。授業の前に、授業に必要な用品をちゃんと準備すること。
六、授業のときは、きちんと、しずかに、姿勢を正しくすること。教室を離れる時は教師の許可をうけること。
七、授業の時は、真面目に勉強し、熱心に教師の講義と友達の問答を聞くこと。みだりに話合ったり、他のことをしてはならない。
八、授業の時は、問題に答え、問題を提出するには、まず手を挙げなければならない。教師が発言を許したら、立って発

言する。教師が坐ることを許したら坐ること。

九、教師が指定した課外作業は、時間までに熱心にやってくること。

一〇、当番にあたったら立派にやること。積極的に課外活動に参加すること。

一一、校長、教師を尊敬すること。授業のはじめと終りには教師に礼をすること。校外で校長や教師に遇ったら、礼をすること。

一二、友達と友愛団結し、互いに助け合うこと。

一三、登校・下校のときに道草をくわない。危険の発生を防ぐこと。

一四、父母を敬愛すること。兄弟姉妹はいつくしみ合うこと。自分でできることは自分でして、父母の手助けをすること。

一五、老人を尊敬すること。老人・子供・病人・行動困難な人に対しては、道を譲り、坐を譲り、できる限りの援助をすること。

一六、他人に対しては礼儀正しくすること。他人を罵らない、喧嘩しないこと。公共の場所でさわがないこと。他人の仕事学習・睡眠を妨げないこと。

一七、嘘をいわない、人をだまさないこと。賭博しないこと。他人の品物を私有しないこと。自分に対しても、他人に対しても、有害な事をしてはならない。

一八、公共財産を愛護すること。椅子や卓、門や窓、塀や垣根、床やその他のものをもてあそんで壊してはならない。

一九、時間通りに、食事・休憩・睡眠すること。いつも遊戯し、運動し、身体を鍛錬すること。

二〇、身体・飲食・服装・用品・寝床と住所はすべて清潔衛生を保つこと。公共の場所の清潔衛生にも注意すること。

小学生守則を読んで諸君は倉高で指導されている事とその類似性に驚くだろう。共産主義の国でも人間の縦と横の関係を重視している。人間は社会的動物といわれているように、宗教・文化・思想・体制等の差異はあっても、所詮人間と人間の間の関係をどう生きてゆくのかという点になってくる。

国際化社会に生きてゆく諸君（日本人）にとって、どういう人間になるかという事は大きな課題である。

私たちは、今、どう生きるか

高力　美由紀

私たちはどう生きるか・・・なんて、何となく気恥ずかしい題材なんですが、しかし誰でも心の奥深くに秘めていることではないでしょうか。18年ほどしか生きていない私が、こんなことを書くなど横着な、と自分自身思っております。けれど、18年しか生きていないから、これからも生き続けるからこそ、やっぱり考えてしまうことです。

「生きる」というのは、文字通り「存在する」ことだけど、単に存在するのは、この世の全ての物に共通で、私たち故のものではないわけです。私たちが目指すもの、理想とするものはやはり、私たち自身の価値を発揮することではないでしょうか。「価値」という言葉には、ちょっと疑問があるし、実につきなみですけど結局、自分なりに一生懸命生きることが、私たちの目指す生き方だと思ってます。私が、素晴らしいと思う生き方は他人のために自分を犠牲にしてまでも生きようとする人と、自分自身の極限まで自己を貫き生きる人です。（といっても、人は皆、根本的には自分の為に生きてますけど）全く、正反対に思えるかもしれませんが、ひたむきな生き方って好きなのです。しかし、これはあくまで私の考えであり、人生というものを一方からしか見ていないと思うし、人に押しつけようなどという、偉そうな気は全くありません。参考にでもなれば、と思っています。

しかし、これは自分勝手に生きる、ということではないのです。あくまで、人間としてのルールに従ってのことなのです。

私が、これだけは絶対に考えてほしいと思うのは、「人に迷惑をかけない行動をとる」ことです。これは、生活する上での基本でしょう。実に幼稚園の時から、様々な形で教えられていることだと思います。単純なだけに、なかなか気がまわらないというのは、私たちの大きな弱みというべきでしょうか。本当にわかっていながら、こうすべきだと思いながら、それができないというのは、一つの矛盾です。私たち人間というのは、絶えず色々な矛盾に出会っていて、でも、もしかするとそれが矛盾であることすら理解しえずに、時を過ごしてしまいがちなんですよね。

話を元に戻しますと、人に迷惑をかけるならば、それがどんなに自分にとって充実した時であっても、何の価値も得ないということなのです。色々な社会運動にしても人間たちにとっては「正義」と「充実」とにおいてしているかもしれないけど、それがハタ迷惑なものであってはならないはずです。いつでしたか、貧しい人たちを救うために、と一個千円の鈴を売りつけられたりしました。善悪はあくまで自然におこるものであり、強制ではないのです。その人は、私のことを何と冷たい人と思えたかもしれません。けれどそれはあまりにも一方的でしょう。私にとっては、その人のしていることはとても良い事とは思えませんでした。人に迷惑をかけないというのは、他人を思いやる事につながります。

全体的な「生き方」とは関係ないけど、人生は日常の人に対する思いやりがもっとあってもいいと思います。

私自身こんなこと言えるかどうかわからないけど、なぜもっとやさしくなれないのだろうかと思うことが、たびたびです。常識的に考えてもわかるぐらいのやさしさも他人に与えることができないことほど悲しいことはないと思います。それは、単なるき

れいごとでしかないのかもしれません。しかし世の中はきれいごとじゃ済まんといいつつ、私たちは絶えず理想を、夢を追っていると思いませんか。私は、誰もがやさしさを持っていると信じています。それを表に出すのが恥ずかしい人もいるでしょう。それはそれでいい、けど、もう少し回りの人に気を使おうと努力すべきではないかと思います。そういった人間として、ごく普通のあたり前の感情を素直に出せること、大切だと思います。すぐ私たちは、ひねくれてしまいませんか？素直さというのは、そういうやさしさ、思いやりをひき出す元になるようです。ひねくれずに素直になってみて初めて他人を思いやることができるでしょう。他人を思いやることは同時に、他人を見つめることです。そして他人を見つめる目が、いつしか自分自身に戻ることに気づくと思います。自分自身を見つめて、初めて他人を見つめられます。そして、自分自身を見つめることによって初めて、自分自身がどんなに違いものであるか、気づくはずです。自分というものは、得体のしれないものなのです。けれど、何よりも「生きる」のは自分であり、私たちは絶えず自分を押さえ、誘導せねばなりません。時には、気づかぬうちに、自分自身に誘導させられている時もあるでしょう。ふわふわと宙に浮いたようになっていることも、あるかもしれません。その実体をつかまえること、もしかすると、それが真に生きることになるのではないでしょうか。

私の中の自分、他人の中における自分、何よりもとらえようのない自分を正確につかみとろうとする努力が真に生きる努力かもしれません。

私も今、こんな風に書いていながら、何が何だかさっぱりわからなくなってしまっています。自分自身の心って本当に矛盾だらけだからです。

こういう風に生きるべきだと言っていながら、できるはずがないと思っているし、夢を追いたいと思いながら、現実は現実と割りきっている自分を考えるとゲッソリします。私は一人では生きていないというのは事実でありながら、他人というものがまるで理解できず、イヤになったり…。

はたして、こんなことでいいのかなあと思いつつ、やっぱり私は生きてるんです。

私は私なりに一生懸命生きていきたい、と思ってます。そしていつかは「自分」をつかめるようになりたいと。

☆　☆

「人間て　本当はみんないい人ばかりなのよね。」――アンネ・フランク――

この言葉を素直に疑うことなく信じることができたら、本当にすばらしいのに！

私の理想なのです。

反抗のすすめ

片岡正二郎

小倉高校に入ってから、もう一年余りたった。自分では、精一杯生きているようであったが、実際、ワァワァと自分の考えを、言いまわっただけのようである。しかし、そうしているうちに、この小倉高校というものが、少しづつではあるが、だんだんと見えて来た様に思える。それで、この僕の、とりとめのない言動の為かどうかは知らないが、汲泉人に原稿をたのまれたので書いてみたいと思う。

君は、小倉高校の現状に満足しているか?。これは僕が皆に聞きたいことである。たぶん、大多数が「満足していない」と答えるであろう。中には「満足している」と言う人がいるかもしれないが……いや、僕の考えるには、現状に満足している人はすでにその時点で、若者という自分の立場を投げ出したことになろうと思う……で、皆、一様に不満感をもっているものとして話を進めようと思う。

現在の状態をじっくりと見回してみよう。朝は、受けたくもない補習を受け、朝礼となれば長い長い先生のありがたいお話。

「倉高生なんだから、ちゃんと勉強しなさい。

「倉高生たるものが、インベーダーゲームにうつつをぬかしてはいけません。

僕には、これがどうも「倉高生はまじめに、他の高校生は、ふまじめでよろしい。」とおっしゃっている様に聞こえてしかたがない。それから、帰る時になれば、やれ「靴に青いラインが入っている。」とか「倉高バックを持っていない。」だとか、僕たちには全くもってそのようなことを決めた記憶のない、一方的なきまり。文化祭や体育祭（これは失礼、体育大会でした）に於ては、実に、毎年、変化のない事を繰り返している。変えようとすると、高い所から伝統という壁がおりてくる。（以上は、僕の考えている不満ですから、独断と偏見に満ちていることは、充分認めます。皆さんには皆さんなりの不満があるでしょう。）

では、この現状に対する僕たちの態度はどうであろうか。誰かが不満を言っても、多くの人が冷やかな態度をとるのではなかろうか、以前、三無主義ということがよく言われた。無関心、無感動などにより、僕らは不満に対して、それを知っていて、知らぬふりをし、ただなんとなく普通に生きるために、避けていたのではないだろうか。無関心であればいつか、時間と共に不満も流れていくのではないか、と目をつぶって通りすぎて来たのではないだろうか。本当にこれで良いのか?

僕は反抗すべきだと思う。不満に思ったものがあれば、それに反抗し、自分で満足のいくようにすべきであると思う。すべての現実を現実と割り切って、「まあ、しかたがないさ。」と言うのは、冷たい大人のすることである。「でも、反抗すると、いろいろと不都合なことが身にふりかかってくるから。」と、そう言って大部分の人が反抗できないままでいる。どうしても、自分の位置を安全にしておきたいと思う。ちょうど、役人が自分の地位を守るために、あらゆることに目をつぶって、ただ、自分を守るためにそうするように。やはりそれは、大人の生き方だ。家庭をもって、どうしようのない、冒険のできない大人の生き方であると思う。若

い時には、そんな事を考えてはいけないと思う。現実を見るのは大人にまかせて、僕たち若者は、もっと理想を追って生きていくべきだと思う。若い時にまで、大人の様に現実的であれば、将来、昔を思い出しても、何も残っていないんじゃないだろうか。自分を投げ出して、がむしゃらに生きれる若い時代を、なんとなくただすごしてきた。悲しいことだと思う。

反抗すれば、やはり他からまた反動がくると思う。まず、倉高で考えられるのは、〝伝統〟である。霜降り廃止を叫んでも、「長年の伝統であるから」と言われる。僕には、〝霜降り〟という、形だけの伝統であるように思われる。霜降りを着ると、どんな風に伝統をうけついだことになるのか。ただ他校と区別し、一部の人間の優越感をわきたたせるだけではないのか。愛校心は必要だと思うが、それが、他校を見下したものになってはならないはずだ。それに、伝統とは変わってゆくものであり、そうして本当の伝統とは、外見に表われて見せびらかすものではなく、その学校の生徒の心の中に伝わってゆくものだと思う。そう思えば、今、倉高にはどれだけ本当の伝統があるだろうか。「昔の先輩方はすばらしかった。」という話を、霜降りや、その他の有形化したものと共に受けとり、そしてまた、後輩にそれをながめただけで手渡している様に思えてしかたがない。伝統は手渡すものでなく、自分たちで作っていくものでなければならないと思う。「これが倉高の伝統だから。」といわれたら言い返せば良い。「これが僕たちの伝統なんです。」と。倉高という高台にある一本の長い道の、その途中のほんの一部分で僕たちは終わってしまうのか。どうしてその道を曲げたり、下らせたり、上らせたりしてみないのか。どうして遠くから見て、あそこが自分たちの作った所だとわかるようにしてみないのか。倉高は倉高人間の大量生産の場なのだろうか。僕には型どおりの人形を、カパカパと作り出しているように見える。反抗しろ！型どおりの人間になるな!!

行事を考えても同じようなことが言える。例えば「開校してからずっと体育大会で他の校のように体育祭になったりしない。変わらないことに誇りを感じる。」これは去年の体育大会で、ある先生がおっしゃったことである。しかしこれは大人の考えなのだ。僕たちまでもこのことに誇りを持ってはいけないと思う。若者は若者で変動することに誇りを感じるべきで、変えてゆく時に、現状から後退することを恐れてはいけないと思う。今、倉高のすべては、直立状態である。後に引かないし前にも進めない。この際勇気を出して『後退するかもしれないが、今までと全く異なった事』をすべきなのだ。前進すればそれで良いし、もし後退してもそれは次に前進するためのエネルギーとなるだろう。「後退し、前進しもとに戻るなら、始めから動かない方がいいじゃないか。」と言う人がいるかもしれないが、僕たちに必要なのは動くことであり、立ち止まることは一番恥ずべきことなのだ。それに、一度下がってまた進めば、前よりもっと進めるのではないだろうか。

取り留めのない事を書きなぐってきたが、最後に、僕たちは著者なのだと言うことを、もう一度言っておきたい。何でもいいから不満を持って、反抗しろ、後を見るな、他人の造った常識を打ち破れ。多分、反抗すると先生たちが『学生の本分を忘れるな。』と言うだろう。しかし僕たちは学生である前に若者なのだ。「若者の本分を忘れるな！」

汲泉の特集『あらまほしき人間』は、先ほどの四人の原稿で最後です。

このテーマは、我々の手には大きすぎてあふれてしまっています。しかし、又何年か後の後輩たちが、あふれてしまった分を、汲み上げてくれるでしょう。

始めに言ったように一つにまとめあげる事は、できませんし、又、各自それぞれの感想を聞いたとしても、みんなが、みんな違うでしょう。しかし、この特集を読んでくださったあなた方の心の内に何かが育ってくれそうならば、汲泉として満足です。

最後に、協力してくださった、先生方、倉高生諸君に、本当に感謝しております。

おわび

昨年の汲泉二十三号におきまして、今村先生（現春日高）の原稿の、落丁がありました。つきましては今年の汲泉に掲載することで、勝手ながらおわびにかえさせていただきます。

坂道

今村八洋

三月二十八日、重い雲が空を覆っている。甲子園の若い歓声の渦から一人抜け出し、K市についた。S駅は昔ながらの古い建物であった。この古さは私にはとてもうれしかった。それは薄れかけた記憶をかすかではあるが、しかし確実に今の私を三十年前の数々の思い出と結びつけてくれた。駅から六甲のふもとにまっすぐに通じるゆるやかな坂道をゆっくりと歩きはじめた。しかしその道は大きく右にカーブしはじめ、私の記憶からまで遠ざかってしまうような気がした。小さなタバコ屋で「Y通りはこの道ですかね？」と尋ねると若い店員は、「私も最近来たものですから、よく知りません。」という。そのとき奥の方にいたおばあさんが、「それはここより二つばかり西側の通りですよ。と教えてくれた。

テレビドラマで有名になった異人館の前の細い道は大勢の観光客が行き来していた。いつの間にか足早に歩き始めている自分に気がついた。シャレた西洋風の建物にはさまれた道路のつき当た

りに、広い庭園の石垣が見えはじめた。外人クラブの建物である。気持ちの高ぶるのを感じた。あの建物の前からまっすぐに港に向って下りる坂道があるはずだ。その坂道の下りはじめの石側には大きな中華料理店があるはずだ。そして、その斜め前には三十年前、私達が住んでいた門構えの家が……。

その坂道の上に立ち止まり、港までまっすぐに続く坂道と、その両端に並んだ建物、そしてその坂道が終るあたりは高架線のガードと交わっている。大きな建物に一部分は遮られてはいるが、大きな港が目の前に開けていた。そしてそれは私の目の中でにじんでしまった。

右手の中華料理店は古めかしい木造の建物であった。左手斜め前には緑色のバスが停って数人の客が乗り降りしていた。そのバス停のすぐうしろに、コンクリートの色のあせた門が見えた。家はすでに取り壊されており、朽ちかけた扉には古い貼紙が一枚ついていた。

数人の部下の方を引きつれて大声で歌いながらその門を開く制服の父の姿が思い出された。坂道を疾走する進駐軍のジープをこわごわと門のすき間から見ていたこと、私達三人の兄姉全員が百日咳にかかり、診察に来た医者の白衣を見つけて、大声で泣いたこと、裏庭の小さな苺畑の板塀に登って、遠くの高架線を走る夜汽車の窓明りの流れを、いつまでも眺めていたことなどがつき上げるような懐しさで思い出された。門柱に手を当てたまま立ち尽くしている自分の姿にふと気がついて、慌てて向い側にある小さな喫茶店に入って道路に面した椅子に深々と腰をおろした。

三十年前の父ならば丁度、今の私と同じ年令だったのか、と妙な一致におどろいた。船乗りだった父の最も良き時代をここで過ごしていたはずである。当時二十三、四歳だった母が、この裏手にあるお寺の幼稚園まで、私の昼寝用の布団をはこんでくれた。しかし、私の記憶は、父の突然の失職によって、このあたりで切れている。そのあとは病床に臥した父の姿と、その父をリヤカーに乗せて通院する母の姿など、急変した私達家族の福岡での生活が、切れたフィルムをつないだように、不自然に続いている。

喫茶店の静かな音楽がかすかに耳に入ってくる。三十年という年月の流れの中で、いつも頭の中で想像していた、あるいは作り出していた周辺の光景が、しっくりと一致した喜びにゆっくりと浸っていた。三十年間、母は一度もここを訪れてはいないし、多分これからも来ることはないだろう。母にとってはつらい思い出の方が多い所かもしれない。とふと思った。

喫茶店を出て、お寺の幼稚園に行ってみた。幼稚園は春休み中で、孫をブランコで遊ばせているお婆さんがいた。「いつごろ建ったのかな、以前はなかったはずだけど。」と本堂横の建物について聞くと、「そうですね。でも十年くらい前からありますよ。」とお婆さんは答えた。なぜかとてもうれしくなった。

お寺を出て。また外人クラブの門の前から坂道をながめた。三歳の時、勤め帰りの父を一人で出迎えに来ていたと聞かされていた。S駅までの坂道を、古い絵日記の頁を一枚一枚めくっては、そっとクレヨンの色を指でのばすような気持ちで、ゆっくり歩きはじめた。

啾卿集
しゅう しょく しゅう

『今、思うこと』

二組　勝野美則

入学してまもないころ、ある先輩がぼくに言いました。

「オレにとっちゃ、倉高は灰色一色やった！」

そこで、ぼくは思いました。

「たしかに倉高は、何もせんやったら灰色一色や、何かやって色をつけちゃろう。」

そして、今、ぼくは次のように思ってます。

「倉高は、オレにとっちゃ……オレンジ色や!!」

れっつ　りーど　ざ・びっくりはうす！

三組　奈倉宏治

えーっと、啾唧集を書くにあたって、何かカッコイイことをぱーっと書いて、派手に有終の美を飾ろうと思っておりましたが、ガラではないので、ちょっと変更して書籍紹介をやることにしました。

えー、どうも倉高生にはこの本の読者が少ないようなので、ペンをとりました。その書名は、『ビックリハウス』といい、出版はあの雑居ビル会社で有名な、パルコであります。倉高生にはこの知性と教養のあふれるコニセプチュアルマガジン（概念的雑誌）がピッタリです。昭和54年7月現在で通巻55号を誇り、昭和50年6月11日には第3種郵便物認可、昭和52年5月24日には国鉄首都特別扱承認第3240号の由緒あるものです。

さて、この雑誌は主に読者からの投稿によって成り立っています。投稿と言ってもマジなものではありません。現代の流行の先端をゆく雑誌ですから、要求されるものはユーモアのセンスあふれる作品です。

一応どのようなジャンルがあるかとそのジャンルの最優秀作品、説明などをしておくつもりでしたが、『禁無断転載』とありますので、ヤル気がなくなりました。

要するに、試しに一冊買っていただければいちばんよくわかるのであります。そして、オモシロそうだなー、来月も買おうかなーと思ったときからあなたはもう全国に666万人いるビックリハウサーの仲間になるのです。そして、努力の結果、もしあなたの作品が載ったならば、クラスの皆に見せびらかして回りましょう。尊敬される事はもう絶対ありません。バカにされるのがオチです。（現に僕がそうです。）

「なんかおまえ、こんなん全然おもしろくもなんともねーやんか。アホやねえんか。」

ちょっとこの変な雑誌の読みすぎで分裂ぎみになってきたので、このへんでやめときます。気が向いたら読んでみて下さい。あ、値段は300円、毎月12日頃発売予定になっとります。尚、原稿料などは一切ありません。またこれは僕の独断で書いたものでパルコ出版には一切関係ありません。

Let's read the Bikkuri House!

続ベニスに死す

五組　片岡俊子

アッシェンバッハがベニスで死亡し、盛大な葬式が同地で行われたが、その葬式の最中にアッシェンバッハは生き返ったのである。人々は恐れおののいて棺桶のそばから離れ、一目散に教会から逃げだした。アッシェンバッハには何が何だかわからず、ひとまず棺桶から出て滞在中のホテルにもどった。ここでも、彼は迫害された。彼の顔をみるや、支配人は逃げ去り、はるか遠くの大木によじ登り、そこからこう叫んだ。

「あなた様のお荷物は、もうドイツに送らせていただきました。手前どもも客商売でごぜえまして、その、何とぞ、お帰りを…ああ、恐ろしや、恐ろしや。」

これを聞いて、アッシェンバッハは憤慨し、そんなら帰ってやるわい、と旅仕度を始めた。そして、髪をときつけようとして、鏡を見た時、彼は驚愕した。彼の髪は上半分黒く、下半分白く、真中あたりは黒白まだらで、顔は黒まだらになっていた。(黒まだらとは何か？これが想像できない人は、スイカを思い出していただきたい。)そのため、彼は目をつむって髪を整え、ゴンドラ乗船所に行ったが、ここでも彼は乗船拒否され、そして船頭に悲惨な事実を告げられたのだった。その事実とは――彼は既に死亡したものとされ、そのすべての財産は国家が没収してしまった、という事だった。アッシェンバッハには帰る家もなくなってしまった。彼の家族はどうなったかというと、そこの所は考えないでほしい。とにかく、こういうわけで、アッシェンバッハはベニスにとどまり、そのうち金もつき、ベニスの浮浪者となってしまった。

彼はその容貌のため、人々に忌み嫌われた。(言い忘れたが、彼がスイカのようになったわけは、きわめて化学的なのだ。つまり、死ぬ前につけた白髪染めが、気温の高さのため顔に流れ、アッシェンバッハの発熱によって化学変化をおこし、顔と髪に色がしみついてしまったのである。)初めは彼は昼間に市をうろついていた。しかし子供たちが彼に石を投げつけたので、彼はそのうち夜行性になってしまった。ゴミ箱をあさって食物を探し、昼間は人のいない空き屋で眠った。このような惨めな生活を続けていたある日、アッシェンバッハは世にも恐しいニュースを知った。彼はインテリだったので、毎夜マッチをすって、その明かりで雑誌を拾って読んでいたのだが、その中に「超ド級大金持ち未亡人、インゲ・ホルム、ポーランドの少年と婚約！」という記事があったのだ。そして、その少年の写真は、まぎれもない、あのタドゥツィオであった。この時のアッシェンバッハの怒りは、いいようもない。あのタドゥツィオが、俗も俗、大俗な境遇に堕ちていくことに対して、頭から火が出るほど怒ったのだった。彼はこう思った。

「私も、フォン・アシェンバッハだ。このままタドゥツィオを放っておけば、男がすたる。殺してやるぞ。そして、俗と縁を切らせてやる。」

彼は暗殺の方法を考えに考えた末、コレラ菌入り毒まんじゅうをタドゥツィオに食わせる事にした。赤痢菌でもペスト菌でもない。コレラ菌を使わねばならない。この理由は、ドイツ観念哲学の思想が理解できる者には、すぐにわかるであろう。そして彼はコレラ菌を探した。しかし、ベニスのどこにも、コレラ菌はなかった。それもそのはずである。コレラ菌はすでにヨーロッパから消え、各地の流行もおさまり、残っているのはインドのガンジス河三角州だけだったのだ。やがてその事実を知ったアッシェンバッハは、インド行きの船に密航し、インドへと旅立った。船の中で彼はねずみを食べて暮らした。実はそのことは、後にアッシェンバッハに大きな不幸をもたらしたのである。

長い航海ののち、アッシェンバッハを乗せた船はとうとうインドに着いた。彼は見事に船から抜け出して、インドの土をしっかりと踏んだ。これからコレラ菌を探して、長い旅に出るのだが、なぜか彼は体のだるさと不快感につきまとわれていた。重い足を引きずり、彼はコレラ菌を求めてさまよった。約二ヶ月の後、とうとう彼はコレラ菌を見つけたのである。そして、まんじゅうの材料である小麦粉を集めにいった。ここで、ある点に疑問を持たれた読者もおられよう。つまり、なぜ彼にコレラ菌を見つけることができたか、という疑問である。しかし、少し考えると、この疑問は簡単に解けるのだ。ごく単純な理由である。言う必要もなかろう。

当時インドは雨季の直後であり、疫病がはやり、飢餓がおこっていた。そのため、毒まんじゅうをつくるための小麦粉を集めるのは、大仕事であった。しかし彼は、この世のものとも思えない苦労をして、小麦粉を手に入れた。これをコレラ菌とともにこねて、航空便でポーランドに送れば、アッシェンバッハの復讐は遂げられるのである。しかし彼は小麦粉をこねる力もなかった。疲れたためだけではない。彼はペストにかかっていたのだ。襲ってくる悪感の中で、アッシェンバッハは根性を出しきった。そして、とうとう、毒まんじゅうをつくり、箱につめ、宛名を書き、郵便局に出しにいった。局員にその箱を手渡した瞬間、彼は息絶えた。そのまだらの顔には、満足げな微笑がうかんでいた。

しばらく後、その小包は結婚式をひかえたタドゥツィオのもとに届いたが、彼の家の女中が箱をあけたところ、まんじゅうはすでに腐っていたので、そのまま焼き捨ててしまった。悲劇的な結末である。

おわり

紙があまったので書いておくが、三年六組の衣笠、川畑、坂本（別名小松）が、名まえを書いてくれ、と嘆願したので、書いておく。

卒業論文 "HERO"

四組　高橋勝博

汲泉に自分の名前も写真も載らない事態を恐れてこの原稿を書いている。例えば、小学校六年の卒業文集にはこう書いた。

「僕は大博士になり、ノーベル賞を資金にして、火星に一番のりしたい。」

当時から私がいかに「図々しさ」を究め尽しておったかがわかる。その頃私が最も尊敬しておった人物は豊臣秀吉であった。

でも、JAPAN史を欠点もらわん程度にやっとると、実は秀吉は、要領の悪い真面目人間明智光秀を悪用し、大恩ある織田信長を打ち破った悪らつな人間であるということが推量されるだろう。

中学校卒業の時の寄せ書きに次のように露骨に書いた。

「英雄の運命」

ベートーベンの曲を鑑賞した直後、こういった言葉が浮かんでくるところに、当時から私がいかに「でたらめさ」を究め尽しておったかが浮き彫りにされている。その頃の私の将来の希望職は中学校の教諭であった。すなわち、私は生徒を一人も落ちこぼれさすことなく、身体にも十分に鍛えさせて、Mr. SACHI・江藤氏の如く陽々たる人間にしてしまうつもりであった。実際全国の教諭達がその強固な意志と実行力を持っていれば、日本全体は健全になっていくと考えていた。日本丸の浮沈は教師の双肩にかかっている！

このくだらない文章を読んでいる暇な人の中にも将来小学校か中学校の先生になろうと考えている人がいると思うけど、絶対に落ちこぼれは造りださないで欲しい。

話は全然関係ない方向に進んでいくのだが、現代のHEROについて考えてみたい

私は芸能人の中では矢沢永吉が最も好きである。素直に自分の求める道を歩いていく、誰も彼を馬鹿にする者はいない。こういう男の生き方に俺はシビレルのだ。

何もいらない、孤独のさすらいの中で弱者を見つけてはその者を助け、皆の感動のなかをまた荒野に孤独で去って行く生き方は・・・・・・・・・・。

自分を偽った無理な生き方だと書こうとしていたのだが、やはり溜息を誘う。

・・・いいねえ。

諸君は谷村新司のESSAYを読んだことがあるだろうか。「冬の稲妻」を売り出す以前のものである。彼はその中で自らを「エエカッコシイ」と評し、その軽薄さを認めていた。もちろん彼の謙虚さから出た冷評であるが、私は大変不快であった。でも彼の文章には十分人間味が感じられた。サエナイ男がせいいっぱい気取ってる、その心情への共感もあった。私が彼のDJを聞きだしたのもそれからである。

今では彼は音楽界の"HERO"である。しかし"HERO"の余裕は昔の彼のHUNGRYは、何かを求めてやまないような若者の熱を感じさせなくするのだ。アリスのファン層はガラッと変わってしまったようである。

僕が最も好きな、頑張ってしまってもらいたい発展途上人は、江川卓君である。恐らく他の啾唧集の作品中に、何かというと江川が引っ張り出されて、「言葉のWIT」とやらに惨々いじめられてることだろう。

例の事件は、巨人のちょっとしたエゴと彼の親父の欲が、突っつかれ突っつかれして、肥大しただけのことなのである。明らかに過重な非難を浴びて、さらにそれを金

儲けの種、冗談のヤリ玉にされては江川君がふてくされるのも、仕方あるまい。

彼は幼児の頃から野球にホレこんでいてそれに関しては誰にも負けない自信を持って自分の人生観を膨らませてきたのである。

一つの男の生き方の理想的な姿ではないだろうか。誠実な人間にはありがちな優柔不断さが彼の失敗を招いてしまったのだが、元来人間とは欲の固まりで、それを個人差の大きい理性という弾性体が包みこんだものであって、欲というエネルギーは人間を進歩させる原動力なのだから、彼の失敗は一方的に非難されるべきものではないと私は思っている。

人間社会の秩序を守れという理性を錬磨することが人間にとって最重要ということはわかるが、全体的意見がそうだからといって、それに単純に付和雷同してしまうことはどんなに危険なことか、また少々の悪事で皆にいじめられている人間への同情も欲しかった。

彼の初登板以来、巨人は六連敗。しかし、江川よ逆境に屈するな！　理想は高く輝きて君行く道と我が行く道を照らすのだ。

雨あがり

一組　浜田真基子

誰ですか？
雨あがりがさわやかだと言ったのは。
さわやかさなどみじんもなく
ただ
なまぬるい風が吹いているだけ……。

ガラス窓をつたうしずくは
私の心をいらだたせるにすぎない。
唯一の望みの虹さえ
この重い空のどこにも見あたらない。

誰ですか？
雨あがりがさわやかだと言ったのは。
さわやかさなどみじんもなく
ただ
なまぬるい風が吹いてるだけ……。
そう。
まるで……
涙も出ない　私の心。

バス＝クラリネット狂騒曲

八組　平賀由多可

第一章「夢と憎熱」

や、やったあ！ついにできたんぞ、ほんともう辛い日々やったのう。うっうっうっ何ができたって？決まっとるやろ、女よ、女。く～～～。ざまーみろっつうんよ。こればっかりはできてみんとわからんけの～～～。わっはっは、これで人生バラ色やあ～～～！

なんて、3年になったら啾唧集に書こうと思っていたのだが、結局絵空事に終わってしまった。虚しいのお～～～。

昔は、アベックが歩いてたりすると、ただ羨望の眼で見ていたにすぎなかったんだけど、このごろ羨望が嫌悪、否、憎悪に変わり、一度モロに石を投げた記憶すらある。ほんと、そんな時の自分の姿ってのはみじめなもんだろーなと思うんだけど……。

汲泉二十三号の一七三ページに、こんな言葉を吐いた人がいる。

「青春時代に失恋しない奴はアホだ。果たして本当にそうだろうか……？　いや、俺はそう思わないし、そう思いたくないんだ。そんなのは口実に過ぎん。本当の意味で失恋……とりわけ、全くの片想いで、やっとの思いで相手に告白して、みごとにフラれたなんて経験のある人は、もう二度とそんな思いはしたくないと思うのが当然だと思うんだ。ましてや、そんな事が二度もある人間にとっては……。失恋なんて、しなくてすむなら、しない方がいいに決まってるんだよ。少なくとも俺は、そう思ってるんだ。

第二章「翔べ翔べ、金の鳩！」

八月半ば過ぎに、日本テレビ音楽祭っうのが行われるのですが、その中に金の鳩賞という、二年目の歌手に贈られる賞があるのです。去年の新人賞は、渡辺真知子とさとう宗幸に惜しくも奪われてしまったものの、今やどちらもやや低調。そうです、そこで我が石野真子の出番となるのです！

彼女の「熱愛一家ＬＯＶＥ」(知らん奴はいい)でのあの演技なんてのは、ファンならずとも賞賛すべきものだと思うし、まァまだ歌はあまり上手くならんけど、そこはあの極限値的可愛さでカバーできてるから、この調子で行きゃあまちがいなく金の鳩賞は真子ちゃんのものに……ネ。

第三楽章「青春と俺とバスクラと」

この二年余り、俺みたいな男をよくもまあ飽きずに置いてくれた倉高吹奏楽部。

クラブをずっと続けた人にはよくわかると思うけど、やっぱり良かったと思うよ。音楽、とりわけ俺の選んだ吹奏楽ってジャンル。これに没頭することで、他の悩みなんかみんな忘れることができたんだ。

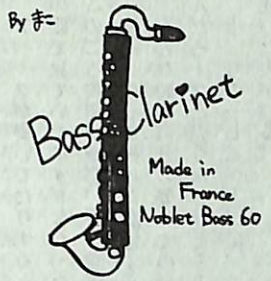
そして、また確かに、ここに集まった男たち（すまんの～～～女もおったらしい？）はみんな、個性の固まりのような奴ばかりだった。

文化祭、最後のステージ。お決まりのクロージング・テーマ、「イエスタディ」が流れる中での三年生紹介。ステージは暗転し、三年生ひとりひとりにスポットがあたってゆく。――― 釘丸の声、「バス＝クラリネット担当、平賀由多可君！」―――

俺は、起立して礼をしながら、目頭が熱くなってゆくのを必死でこらえてたのを覚えてる。

よかったョ、本当に。とても感謝してるんた、みんなにも、そして俺の恋人だった

バス＝クラリネットにも。でも、もう彼女とも、お別れしなきゃならないなんて……。



第四楽章「大空へ、宇宙へ」

小さい頃から人一倍空への憧れが強かったのか、飛行機がとても好きなのです。あの合理性の集積である姿の中にも、どこかとても暖かみを感じるんです。それが大空に対する男の夢だからだと思うからかも知れません。

ところが、その「夢」も、ある時期の間は、「涙」と変わってしまったのです。それが第二次世界大戦でありました。

皮肉な事に、その戦いのために、飛行機というものは飛躍的に進歩したんです。初めてジェット機を実用化したのは、ドイツでした。また、有人ロケットを戦争に使ったのもドイツでありましたし、現在のＩＣＢＭ（大陸間弾道ミサイル）の原形となった、Ｖ２号ミサイルをつくり上げたのも、ドイツだったのです。これらの技術は、戦後各国によって受け継がれ、現在に至っているのです。ドイツ人はすごいのう……。

でも、俺としては、飛行機やロケットは戦ったり、人を殺したりするものであって欲しくはないです。いつも、人々の夢を大空高くのせて行くものであって欲しいと思ってるんです。

話はもっと上の方になりますが、小学校五年の時だったかな、ねだって６㎝の屈折経緯台を買ってもらって、それからというもの、毎晩空ばかり眺めてたものでした。木星のシマと衛星が見えたとか、土星には本当に輪があったなどと当然のことにひどく驚いてたのを覚えてます。今でも俺の部屋の一角にあるのですが、全然使わないのでホコリをかぶってます。まあ夏になったら気晴らしにまた星でも眺めてみましょう。

ボイジャー一号のおかげで、木星の神秘のベールがしだいにはがされつつあるようですが、俺としては、いつまでも未知のままで、あのホルストの描いた雄大なイメージの星であって欲しいと思うんです。

まあ、大空にしても、宇宙空間にしても、いつまでも夢を追い続けられる場所であって欲しいと思うのは、俺だけでしょうか？

第五楽章「ワルプルギスの夜の夢」

こうやって想うと、今までの出来事があたかも分子の運動の如く、乱雑に飛び回っているような気がする。

一年の時体育祭の代休にスケートしに行って見事にコケて「膝関節内出血」ちゅうやつで四日休んだ。その時、わざわざ片田舎の小倉・戸畑から大都会門司の我が家までノートをもって見舞いに来てくれた一刈駒井嬢、酒井、菅原、那須、縄田各氏。本

当に嬉しかった。
そして甲子園。良かったョ。在学中に行けるなんて夢やないかと思うたっちゃ。
修学旅行。岩本、入口、津崎ら後輩のくれたせん別に泣き、そして富士の美しさにまた泣き、目もハレ上がった旅。もう一度行きたいよお〜〜〜。
まだまだ多くの楽しかった事や苦い想い出なんてのもあるけど、そんなの書いてたら啾唧集が「平賀くんの想い出のおと」になりそうなんでやめよう。でも、一言いえば、「倉高に来ざらましかば、我が青春かくの如くなからまし。入学せし価値、十二分に見つけたり。」なんつって。
これで華やかに文壇にデビューすることができた。あとは文芸春秋から原稿依頼があるのを待つのみだ。しめしめ。

第六楽章「SNAKE LEG」

去年から、野球の応援に来てくれて、ブラスの演奏を聴いてくれた人、ほんとうにありがとう。俺はできる限り楽しい曲をブラスで演奏して、野球部を応援しに来てくれたみんなに楽しんでもらおうと思って、この一年棒を振っていました。(多少選曲にエゴはありましたが)その割には、ブラスが曲を始めると相手に打たれるというジンクスを背負ってしまいましたが、もう俺が棒振ることも無いだろうし、そんなジンクスもなくなるでしょうナ。
いつか、コンバットマーチを聴いた時、前で棒振ってた男のこと想い出してくれる人がいたら、感激です……。

――○――○――○――

第一・第五楽章の表題は、ベルリオーズ「幻想交響曲」第一、第五楽章から無断で借用したもの(返す気など毛頭ないが)であることをおことわりしておきます。

――幸あれ!永遠に
小倉高等学校吹奏楽部!――

ナンチャッテ人間・ベスト10
―西鉄電車の巻―
掛橋君と赤道君

皆さん、ナンチャッテおじさんを覚えていますか。電車にも面白い人がたくさんいるので、ランクを付けてみました。

第10位　「有名人に似た人たち」
青空はるおおじさん、玉の富士おばさん
双津竜ねーちゃん、今福おじさん(3の6の今福君に似とる)
第9位　「ダミアン吉田」
3の8の吉田君に聞いて下さい。
第8位　「呼び込みおばさん」
魚町から乗ってきたこのおばさん、座ったのだけれど隣に誰も座らない。そこで大門で一人のおじさんに「おにいさん、お座んなさいよ」おじさんが無視したので、このおばさん、行商のおばさんをつかまえて強引に座らせてしまった。
第7位　「イモリにいちゃん」
3の3の岡本君に聞いて下さい。
第6位　「エヘへにいちゃん?」
?が付いているのは、顔だけ見たら年が

分からないからである。この人は、後ろの運転台に座って、機械をいじっては、「エヘヘ」と笑うのであった。そこで近くにいた九工のにいちゃんが「すごいやねえか、拍手しちゃらんか。」と言って拍手してやると、とても喜しそうに笑った。

第5位　「魚町のゴキブリおじさん」

これは、電車の中から見たのだが、魚町の電停のところに自動販売機があって、その横のゴミ入れで一人のおいさんが何かしよる。やがて、捨ててあった缶を二本取り出すと、わずかに残っているジュースを飲み始めた……。

第4位　「口紅おばさん」

年のころなら、もう五、六十になろうかというおばさんで、口紅を真赤に塗りたくり、赤い帽子をかぶっている。このおばさん、座るのが上手で、赤坂から乗って砂津に着くまでには必ず座っている。降りる時もギリギリまで座って、「ちょっとどいて下さいよ」と言いながら、立っている人をかき分けて行く。しかし、このおばさん、区役所で働いているらしいので、バカにできない。

第3位　「びっくりにいちゃん」

その名の通り、いつも、びっくりしたような顔をしている。いつも電車の後ろの所に立って、乗ってくる人の顔を見てはびっくりしている。この間、突然、一人言を言い出して、五分間くらい、わけのわからん事をオネオネとしゃべっていた。

第2位　「へびおじさん」

はっきり言って、へびみたいなおじさんである。電車に付いている鏡の前に立って、じっと見ているかと思うと、突然、首を振り出す。時々、舌をペロッと出す。これがまた、不気味である。日明で降りるから、また恐い。このおじさんは、最近、急に一部の間で脚光を浴びはじめた。この人に会いたかったら、砂津を七時十分ごろ出る門司から来た戸畑行きに乗ろう。

第1位　「栗本くん」

朝の電車で、彼ほど有名な人はいないであろう。上富野三丁目から魚町まで乗る。はっきり言って、全く性格がわからん。とにかく、よく一人言を言うのである。例をあげてみると、相手もいないのに、「どこ行っとったん？ハイ。」とか、「水野君と沢野君とみやこさんです。ハイ。」とか、「整理券を取って下さい。ハイ。」とか、とにかく、やっていることがわからん。こっちまで頭がおかしくなる。そういえば、バスに向かって何か言いよった。また、服の内ポケットから、突然、トランシーバーのアンテナみたいなのを出して、わけのわからん事を言いよった。めがねをはずしてキョロキョロしては、九工のにいちゃんに大笑いされた。とにかく、わからん人である。ところで名前がどうして分かったかというと、彼の持っているカバンに刺しゅうがしてあったからだ。彼のお母さんも見た。立派そうな人だった。よけいに、わからなくなる。とにかく一度、会って見よう。まず笑わない人はいないだろう。なお、栗本くんとびっくりにいちゃんと柳本君（3の4）は友だちである。

B君の敗北

四組　山田公彦

小倉高校一年九組のB君は、入学早々数学で欠点を取ってしまった。そのため夏休み前の暑い中、特別補習を受けに、あの一年一組の教室に向かったのである。これが欠点を取ったくやしさから勉強一筋に燃えようとしたB君の人生をすっかり変えてしまったのだ。それは、運が悪かったのか、いや、B君の人生に微かな光がさしたのかもしれない。そう、そこで遭遇したのは、B君の心を生まれて初めて動かし、目をくらませた人、一年一組のYさんであったのである。

人生とは皮肉なものだ。中学の頃は、女などには、目もくれずに過ごしてきたB君にとって、Yさんは必要不可欠な存在となったのである。それ以後B君は勉強にも手がつかず、毎日、Yさんのことだけを思い続けて暮らし、夏休み終わりの実力テストの前日には、バス停で2時間もYさんの来るのを待ったこともあった。ところが、夏休みも終わり秋になり、そして冬が訪れると、いつの間にかYさんのことも忘れて勉強にうちこみ始めたのである。（注1・B君は夏が発情期である。注2・確かに一度に三百番以上成績がのびたようである。）そして、B君はなんとか進級した。当然Yさんも進級した。

始業式の日、B君はYさんと同じクラスになることを願って登校したのだったが、その願いはみごと打ち砕かれ、Yさんは二組そしてB君は、7組となってしまった。そしてまたも発情期である夏がやって来たのだ。しかも今度は、一年のときよりひどく、満たされない愛と夏の鋭い暑さのために地獄のような日々をおくっていた。そしてB君は、とうとうYさんに、告白をすることを決心したのである。

B君が近づこうとすると、Yさんは避けたが、無理やりに近づき、

「あ、あ、あのう、お、お話ししたいことがあるんですけど……。」

「なんですか？」

「一諸に図書館へ行きませんか。」

「何しに行くんですか？」

「勉強。」

「いつですか？」

「できたら今日がいいんですけど……。」

「明日なら……。」

そのときのB君の気持ちは、恋をしたことのある人なら誰でも想像できるでしょう。その日は、B君の高校生活の全盛時代であった。そのウキウキした気持ちで、友人を誇らしげに誘い、明日着ていくものなどもろもろのものを買いに繁華街に出たのである。（結局は、新品の制服とアップシューズで行ったのであるが。）ズボンの丈を合わせていると、ふと、明日はどこの図書館で、また会う時間さえ決めていないのに気がついた。B君はすぐに、友人とも相談せず、不注意にもパチンコ店で軍鑑マーチが高らかに鳴り、昼下がりの楽しげな人々の声でにぎわっている中で、公衆電話の受話器を取ったのだった。

「あの、Yさんいらっしゃいますか？」

「どなたですか？」

ガ〜ン　なんとお母さんでは、

「二年七組のBという者です。Yさんいらっしゃいますか？」

「何の御用ですか？」

やはり年頃の娘を持つ母親の気持ちは察したが、無理やり

「Yさんいらっしゃらないんですか？」

なんとか代わってくれて、
「はい。」
「あの、さっき場所も時間も言ってなかったでしょう。」
「あ、はい。」
「戸畑図書館ってどこにあるか知ってますか。」
「いいえ。」
「それじゃ、中央図書館で一時でいいでしょうか」
「はい。」
時計は一時を回っていた。まさか…。二時を過ぎた。そんな…。三時半。ああ。三時とうとう電話をかけてみた。
「Yさんいらっしゃいますか。」
「まだ学校から帰っていません。」
（名付けて、MOTHER STOP）
B君は、かき氷を食べて帰った。
次の日、B君は友達からもバカにされ、夢も希望もなくし、虚無感にうちのめされる日々を過ごすことになった。しかし発情期であるB君は、次第にまた精気がでてきて、セカンドトライをするに至ったのであった。
「Yさんいらっしゃいますか。」
ここでは弟?が出た。
すぐに代わってくれて、
「明日の対稲築の野球の応援に行きませんか」
「明日はテストがありますから。」
そうだ。明日は進研があるんだ。成績優秀者ランクに載るんだ！あ――あ、むなしい。そしてまた、だらしく○○○○にふける毎日が続いた。ここであきらめて、発情期の夏が過ぎ行くのを待てばよいのに、B君は、「俺は男だ！最後まであきらめないぞ！」と意気込んで、ラストトライをやる決意を固めたのだった。さすがに今度は、B君も慎重であった。心をときめかせ、電話で話すことを紙に書いておき、声を震わせ、しまいには半泣きの状態で、
「図書館にお誘いしたBという者です。
このたびは、そちらの事情も考えずに無理やり誘ってすみませんでした。今度、夏休み中ならいつでもいいんです。図書館に宿題をしに行きませんか。」
「どなたですか。」
ええ！もう忘れたのか。そんなに俺はカスのような存在なのか。
「今度、図書館に誘ったBです。」
「あ、同級生ですか。」
「いいえ、あ、あの、Yさんじゃないんですか。」
「私、姉です。」
ガガガ――ン！
姉、Yさんにかわってくれて
「はい。」
前と同じように声を震わせて
しまいには半泣きの状態で、
「図書館にお誘いしたBという者です。
このたびは、そちらの事情も考えずに無理やり誘ってすいませんでした。今度、夏休み中ならいつでもいいんです。図書館に宿題をしに行きませんか。」
「宿題は終わりました。」
ナ、ナント、宿題に手もつけていないB君にとっては、当然予想もできなかった言葉でした。しかしB君しっこく、
「それなら何の勉強でもいいんです。」
「夏休みは暇がないんです。」
ドクッ・ドクッ・ドクッ・ツーツーツー。
御臨終です。B君は、その亡骸を前に、永久の別れに一粒の涙を落とした。（注・

B君は、現在受験勉強に励んでいる。）

○読者の皆さんへのお願い。

1　Yさんには読ませないように。

2　Yさん・B君のため、二人が誰だか追求しないように。

ところで、真実を語ると、B君は作者ではない。といいたい所だが、作者そのもので……ある。キャー・イッチャッター！ちきしょう、ここまで言ったからには、俺は言いたい事を言わせてもらうぞ。

「俺は今でもYさんが好きだ！しかし一旦ふられたからにはきっぱりあきらめた。いや捨てた。俺は一生女と口をきかない。

「イヨ――――。男キミヒコ！」

「あたりめえよ。」

私の敗北の原因

やはり僕が、見かけ上幼すぎたからか、数学で欠点を取ったため、僕がポンであることがバレたからか？……いや、やはり僕があの電話で、お母さんに対して印象を悪くしてしまったからだろう。しかしあの時、お母さんだとわかったらすぐに切ればよかったのに、俺は何も悪い事などしようと、自己肯定し、きみひこぶり出しで、きっぱりと名前を言ってしまったのも敗因の一つになったなあ。

やはり女に関しては

「決断と慎重」

これやなあ！

LOVE　IS　BLIND

&

YOUR　QUESTION

三年の夏は発情せんやったかというとそれがしたんや。あんなに啖呵を切った俺だが、またもYさんの事で苦しんだんや。（予想確定率99％）大学入試くそくらえ。

汲泉「あきらめきれんやつやのう。こんなに書きよるとカットするぞ！」

「いや、頼む、これが最後の一言や。」

「よかり。」

LOVE　IS　BLIND

もう一言。

「Yさんごめんなさい。」

装飾集十α

三組　宮崎　真

いつまでも既往を懐かしんでばかりいるなどとよく言われるが俺にとっても他の十人の僚輩にとってもこれほど充実感が漲り、成功の満足感を味わったことはなかろう。仕事の途中のいろいろな出来事。Yの妹を馥郁の地下倉庫に入れてからかったり、Yを暗闇の中で大いに苛めたり、そして、夜遅くまでの仕事、みな楽しい思い出である。

又今回、人を指導する立場に立って初めてその難かしさを知り、対象としての人間の扱いにはほとほと手を焼いた。一年の集合状態の悪さに幹部一同怫然としたものだった。しかし副次的な二年に大いに助けられたことも今回の収穫だったといえるだろう。

下級生諸君、今倉高の先生の⅔は文化祭に反対していることを知っているか!!諸君らは先輩の覆轍を再び踏むことなく、多くの輝かしい業績を亀鑑として、このすばらしい文化祭を永く続けてほしい。

一組　神谷淳子

七月二十日、本日バスケット部引退。後ろ髪のひかれる想い。後に残した、少人数の後輩達のことが心配でなりません。

あれは、私が一年生の十一月のこと。バスケットを通して心をさらけ出すことのできた三人の友と、一人の先輩との独断で決めた女子バスケット部解散。後悔することの大嫌いな私だけど、それ以後一日として後悔しない日はなかった。胸の中がぽっかりあいたというよりも、泥沼へ突き落とされたような心境だった。

でも、毎日毎日苦しくて、泥沼の中でもがき、泥まみれになって、やっと自分の道を見つけた。それからというもの、ただもう無我夢中。一度した失敗を繰り返したくはなかったから、私にとって、あの苦しい毎日は、以後の私のエネルギーとなるいい薬になったけれど、ただ半年という日々はあまりにも長すぎた。二度と戻って来ない時間なのに。でもそのおかげで、私のバスケットに対する愛情が深まったのだし、無駄に過ごした分だけ、余計に頑張ろうと思わざるを得なかった。

そして、二年生の五月、女子バスケット部復活。本当は、一人で始めた頃は、覚悟していたにもかからず、想像以上に苦しかった。練習中の苦しさは当然だけれど、チームメートはいない、私一人なんだっていう寂しさ、空しさ、孤独感。バスケットはチームプレーなのに、一人でやっても何にもならないんじゃないかっていう不安、焦り、いらだち――etc。

でも、そういう雑念は、必死に練習することでいつのまにか消えていった。練習の前には必ず、「今日はこれ一つだけでもうまくなろう。」と心に決めて練習するように心がけた。「私はバスケットが好きだ。うまくなりたい。強くなりたい。」というその心だけは、忘れたことはなかった。技術もセン

スも体力も何もない私を、最後まで支えてくれたのは、ただその心だけだったと、今確信をもって言える。

私の後を継ぐ大切な後輩達、あなた達には、技を競い合える、苦しさをわかちあえる、勝利をめざして手をとりあえる、時には部室で悩み事を相談したりできる、そんな仲間がいるでしょう。どうかお互いを理解し磨きあい、励ましあって、努力して自分に強くなってください。そしてやるからにはバスケットを心の底から愛してください。

最後になりましたが、口には出さなくとも、私の情熱を理解し、他人の目も気にせずにそれを燃やせるよう、厳しく御指導して下さった谷口先生、そしていつも一緒に練習させて下さった男子バスケット部の皆さん、本当に、言葉では言い尽くせないほど感謝しています。それから、精神的にも肉体的にもダメになりそうな私を、いつも暖かく励ましてくれた私のたくさんの友人たち、ほんとうに、みんなどうもありがとう。

高校三年間で見た
最も不思議な夢

四組　徳島正昭

リーダーの時間、単語を調べていると急に眠くなってしまい、間もなく夢の世界へ落ちていった。

夢の中の自分は、ビルの屋上から下界を眺めていた。今迄小さく見えていた行き交う自動車が、段々拡大されてきた。全く距離感は感じられない。僕は飛び降りた。

と同時に、距離感が元に戻った。僕は頭を「ガン」と殴られたようなショックを感じながら真逆さまに墜落していった。僕は極度の恐怖の中で、これが夢であることを願った――果たしてそれは夢だった。僕は文芸部室にいた。傍らで水の流れる音が聞こえたので、それを止めようと蛇口へ向かったが水は流れていなかった。ふと外を見ると真っ暗で、校内には誰もいないようだった。流石に恐くなり、一目散に逃げた。

図書館に通じる廊下をかけ抜けたとき、そこに宇宙があった。一歩進むごとに何千もの星を跨ごせた。僕は、日頃『人間は所謂有機物に過ぎないし、そんな人間に関与している物も物質の域を出ないだろう』と考えていたことを思い出した。でも宇宙は余りにも偉大すぎて、僕はその不可解な偉大さの奥に潜む絶対的なものに興味を持っていた。今、それがわかったのだ！僕は最後の可能性に胸をときめかせながら歩いていた――。

「徳島、あのな、そこから言ってくれ」S先生の声だった。場面だけが急転し、まだ興奮の余韻が残ってて、頭が混乱していた。聴覚だけは働いていたが。立ち上がると、夢だったことがやっとわかった。

しかし僕は宇宙を眼下におさめた時のあの心持ちを今でも不思議に思う。生命の奥底のもやもやした曖昧なものが一掃された爽快さだった。これをとどめておけば、人間について面白い考えが出来るかもしれない。しかし――あれは一体何だったのか。

切り捨てごめん

七組　二村浩史

さてさてみなさん、只今から、わたくしめの役たたずの子分どもを紹介いたしましょう。めずらしいのが五人ばかりよってますので、中には知っているのもあるでしょう。もし、日頃からしゃくにさわっておる奴がおりましたら、どうぞどうぞ好きなように料理してくださいませ。それでは…。

まず第一の下僕。七組西田聖剛。彼の名は、「せいごう」と読まずに「ひじりたけし」と読む。実にめずらしい名だ。一番役に立つ男で驚くほどのガンバリ屋である。実に頼もしい。しかし彼ほどだらしのない男もめずらしい。見たまえ。体操服はよれよれ。上ばきは卒業生のおさがり。そして何より風呂が嫌いという。ここが何より風呂が好きという清潔な私との違いなのだ。わっははは〜。

第二の下僕。七組江本源一。人は『えもげん』『えも』『げん』など簡略化して呼ぶ。ちまたの噂によると彼はティーンエイジャーではないらしい。オイ、3の7の文化祭の劇を見たか？あのサングラスをかけ、さりげなく現われ、さりげなく死んだ劇の男を見たか？あれよ、あれ。あれが、この「おにいさん」なのですよ。女性の間で意外にもさわがれておると聞いたが、なんと彼はまるで興味なし。スゴー、ニヒルー。ちまたの噂では、「女殺しの源」と言われているそうだが、あんまりでたらめ言うと後が恐いのでやめた。あっとそれからジャズのことなら彼になんでも聞きなさい。彼は十年前からジャズを聞いていたそうだから。

第三の下僕。七組古賀睦弘。愛称「コメオ」。その由来は誰も知らない。ただ女子までもそう呼ぶのは、なんとなく、なんとなくである。彼を知らん奴はおるまい。劇で空手着を着てアホなことばっかりしておった男といえば「ハハァ」と思いあたるでしょう？彼は典型的なオプティミスト（試験に出る英単語P33・意味ー楽天家、反対語ペシミスト・意味・悲観論者。わはは、すごい！）であり、誰からも好かれておる。（弓道部の吉田君以外は）彼と話しておるとスカッとさわやかで、また最近、頭を鏡のようにしておるのでまたまたスカッとする。そしてその姿が、また実にかわいい。まだ彼と談笑したことのない人は一度やってみてくだされ。コカコーラを飲んだようになること請け合うことなしでござりますから。

ほで、第四の下僕。十組中山英樹。彼はいわば、私の第一の親友であるわけで、彼を子分とみなすのは、どうもかわいそうな気がする。彼はコメオとは一風かわった意味で気持ちのよい性格をしておる。こっちが話し上手なら、あちらは聞き上手。マスクはニコニコマスク。いつもニコニコしている。めしを食う時も、テストのときも、いつでもニコニコ。それが、彼のトレードマーク。もしかすると彼の母上のお腹にいるときもニコニコ。生まれた時もニコニコしていたのかもしれない。いや、絶対そうだ。そうにちがいない。うん。とにかく、ニコニコは気持ちがいいものである。

最後に第五の下僕。十組浜田寛昭。通称「いも」といったらすぐ怒るから言うまい。けど「ねこ」と言われると非常に喜ぶ。み

んなも一度、「ねこや、ねこねこ」と呼んでみなさい。「ニャンニャン」と言って振り向くから。ところで、ちまたの噂によると彼はどうもドラキュラの末裔らしいのである。あまり大きい声では言えないが、彼が笑ったとき、口元を見てごらん。ほらほら。にょきっと2本八重歯が飛び出とるでしょうが。おっとろしー。みんな気をつけてくれよ。特に女の子は。彼は狼じゃなくってドラキュラなんだからね。そういえば、女子を見るとき、例の八重歯をニョキッと出して、ニニッと笑うあの顔。どこか血なまぐさい気がしていたが、やっぱりそうだったのか。そして一挙一動を目をじっと細めて見やる姿なんか、ねこというよりドラキュラだもんね、ほんと。ああ。妙なる男を子分にしたもんだ。

　ところで一人忘れていた男がおる。私の使い走りがまだおった。二組浜中俊宏。なぜかみんなから、「ちか」とか「ちかこ」と呼ばれている。うそと思うが、割に女子にもてるらしいのでその「ちかこ」というのが気になる方はどうぞ二組の有村にお尋ねくだされ。実は私もなんのことかぜーんぜんわからないのです。彼はまれにみるピアノ弾きで、あの、あの八神純子とかいう人の大ファンで一見まじめそうで実はいやらしい男なのである。しょっ中私の家におしかけてきては、すぐ人の机をガサガサあさってみたり、問題集の悪口を言ってみたりもう、本当に世話のやける坊やだこと！あの「えもげん」とは対称的に、どうみても17歳とはみえない。まだまだ「坊や」である。その前に男なのか女なのかまだまだよくわからない。確かめる方法はただ一つ。いつか、きっと『確認』しようと思う。

　というわけで、ずらりずらりと紹介してまいりましたが、どうです？みんな変な奴ばっかりでしょう？しかし、みんないい奴ばっかりなんですよ。特に西田なんか、なんと生まれは鹿児島イブスキの先、なんとか村だから「ごわす男」であるわけで、田舎者めえに人間がよく、また私も後藤寺の田舎者だから、田舎者同志で気があったりするわけで、まあ、へんなもん同志で、やっぱり仲がようなるんでしょう。

　とにかく親友というもんはやっぱしもつべきですな。彼らとは、大人になっても親友でありたいもんですよ。みなさんも、一人二人、仲のよい、本当に仲のよい友達をつくってください。特に三年のこういう時期になると、色々とはげみになるんじゃないかと思いますよ。もし、自分に対して牽制するような態度をとったら、そんな奴、絶交してしまいましょう。そのかわり、自分も相手に対してはそんなことしないようにしなくてはなりませんね。私の場合など彼らはみんな優等生ですから、私も追いつけ追いこせで大いにはげみになっているのです。

　じゃあ、長くなりました。どうもおつかれさま。

　さばら。

二組　新田正弘

PART1――卒業

Y師「ほら、そこ、何しよるんかね！左から、イチ、ニイ、3番めの、前から、イチ、ニイ、サン、4番めのめがねえ！足が違うやろうがねぇ！……」とまあ、かの英彦山にて倉高式準備体操の特別講義を受けてはや三年。卒業が近くなり、朝講習が激化した今となっては、自分の年齢をつくづくと感じている。学校に来て何をするにつけても、眼前に「卒業、卒業」の二文字がちらついている。ああ、本当に三年間は楽しかった、いろいろな意味で。

ぱあと　つう――ともだち

俺は一、二年の時、男子クラスだった。三年間、いろいろな友達に会った。素行のいみじう悪しき人、極度に太った人、かなりスケベな人、たいへん背の低い人、等。彼らの中には、かなり俺に悪影響を与えたのもいるけれど、やっぱり、みんないいやつばかりである？！……

やはり男女クラスより男子クラスが良いヨ。いろいろと気を使わずに何でもできるから。(中には「女子がいるから何でもできるんだ。」と言うやつもいる。)しかし、俺は三年二組なんよ。男女クラス……。「男女クラスだけにはなりとうない」と心に誓ったつもりやったけど、結局は「つもり」やった。くやしい。おまけに二組は成績がトップやそうやない。秀才クラスとかに入れられた者の身にもなってくれ。それに文系クラスで唯一のW師のさんすうの御講義があると。もう地獄っちゃ。ほんじゃ、ここでかの数学の授業のひとこまを……。

――バシッ！「いやなやつだねえ。遅刻の理由は何か。」――ゴツッ！――「別に理由はありません。」「理由はないんか。それでどの問題をしたんか。」「あれです。」「あれだけか？あつかましいやつだねえ。」――ブスッ！――

注1「バシッ」「ゴツッ」「ブスッ」についてわからない人がいたら先生にお聞きください。

かなり話が逸れてしまったけれど、倉高でたくさんの友達ができて、ほんとに良かった。気の合った人どうしでは、俺はかなりばかげたことばかりしてきたので、それだけに楽しい友達ばかりで、あと一年で終わりだとは思えないなあ、ほんとに。

バス通学している人はわかると思うけどバスの中で友達と大声でしゃべるのほど楽しいものはないよお。特に帰りのバスなんか、その日一日の面白い出来事なんかを教えたりなんかして。時折、自分たちの声が大きすぎるのに気付いて、急に静かになるけれど、すぐ隣りにいた女子の方がまだ大

声をはりあげていた時なんかもあった。そんな時は、「まだ俺たちより上手がおったのう。」とか言ってまた話し出す。――「バスの中の恥はかき捨て。」などという言葉はないけれど、バスの中は、なぜかあまり人目が気にならないから、たとえば、運転手さんが、「次は○○でえす。あーりませんかあ、ありませんかあ。」としっこくおっしゃるので、「あーりませえん。」と答えたことがあった。そのとき、前に坐っていたオバサンが、必死で笑いをこらえていて、そばにいた俺の友達なんか「信じれんっちゃ。」を連発していた。しかし、二度とやってみようと思わないのはなぜなのだろう。

パート・スリー――一・二年生へ

一・二年のみなさんへ。三年になったら、絶対一組から四組のうちのどれかのクラスになると良いよ。なぜかというと、遅刻しそうな時に、階段を一階分余分に登らないので、教室の到着時間が微妙に違う。「自分は絶対に遅刻なんかせん。」と思っとっても、三年は毎日朝講習があることやし、一度は遅刻するものだから。我が二組では、遅刻でもしようものなら、朝のHRの時、先生に、「うーん、○○君は遅刻だねえ。昼休み私のところまで来なさあい。遅刻するようではいかんぞぅ。」とまあ、昼休み○○君はどうなるかは知らないけど、やっぱり、遅刻はいかんぞぅである。それに、二階にいると、倉高唯一の「ベランダ」があるのだ。

それから、先生におこられることも良いことだよ。おこられている時は嫌だけど、卒業すると良い思い出になるに違いないから。

最後に。この文章を読んでくださったみなさん、くだらんことばかり書いてすみませんでした。

雑

四組　中村慎一

六月三日、宗像高創立六十周年記念招待ラグビー。前日の筑紫丘戦で疲れた身体にムチ打っての試合。小倉は、相手ゴール前まで迫っていましたが、その時、ノーサイドの笛がなりました。この瞬間に、三年生九名は一応現役を退くことになり、我々はOBとなったのです。そして、全試合を通じて、トライを記録していないのは、僕と○○とみ君の二人だけになりました。

○○とみ君は、一年生の時、不満のはけ口菅原、露出狂平賀らとともに一緒のクラスでした。そのふけた顔立ちと実にしぶいヘアスタイルで総務として前に立つ凜しい彼は、皆から「浪人やないんか。」とか一部の女子からは花形選手みたいと言われていました。しかし、いつ頃からでしょう。次第に悪の道にひきずりこまれていきました。背中の牌のいれずみが動かぬ証拠です。修学旅行の新幹線での根性麻雀、あれは先生をメンバーに入れてのなかなかのものでした。みなさん!!彼には寄りつかないようにしましょう。（この物語はやや架空のもの

で、実在の人物と関係はないとは言えません。追伸、小原君はゾンビです。寄りつかないようにしましょう。

「越境通学」―中学時代、戸畑ですごしてきた僕にとって、まさか自分がこの越境通学をするとは夢にも思っていませんでした。朝講習に間に合うためには六時に家を出なければならない鹿児島本線沿線の住宅地に引越ししたんです。ですから、ストの時は、足がないために、知り合いの方の家に泊めていただいたりして大変です。

そして、しもふりの季節、僕はじっと耐えねばなりません。他校の生徒（主として博多方面）が珍しそうに僕を見ます。うわ――――ったまらん。はよおー廃止してくれんー。

入学当初は、世間の冷たさ、現実の厳しさを知らず、東大も夢やないのおーと思っていました。しかしこの学校で次第にぬるま湯につかっていき、今日も一日がむなしく終わろうとしています。ラグビーしよる頃は、母君に「心配せんでええっちゃ。引退したら、成績やらぶりぶり上がるわい。」と豪語していましたが……。やっぱ勉強せにゃだめですばい。

友人

七組　増喜竜一

僕の知っている人に原田徹底整理という人がいます。本当は徹という名前らしいのですが、一年の時「化学計算問題の徹底整理Ⅰ・Ⅱ」というのを使っていて、化学の先生がそれを「徹底整理」とよんでいた関係上、誰かが「原田徹底整理」と言い始めたのです。まず、この原田君についての話をしたいと思います。

彼は迷門戸畑中学出身で一年の時は僕と同じ十組でした。初めの頃は彼のことをよく知らなかったので、坊主頭でなかなかマジメそうだと思っていました。文化祭の係を決める時、彼は写真部に入って、うまく難をのがれましたが、要領悪の僕は「みな歌」係にされてしまいました。僕は一時期彼の顔が野口五郎に似ていると思ったことがあり、それを友だちに話したところ大笑いされました。それでもその頃は似ていると信じていたのですが、今考えてみるとあの頃ちょうど視力が落ちていたことに気づき、その考えを改める結果に至ったのです。

彼の足の短かさには定評があります。単なる短足ならいいのですが、彼の場合、ゼロと言っても過言ではありません。また、これは説明しにく現象ですが「逆にめりこんでいる」という説もあり、本人も少なからず認めているようです。二年では、彼は十組、僕は九組とクラスが別々になってしまいましたが、この二つの教室の位置を考えれば二クラスの結びつきというものが理解できると思います。僕はよく十組に行ったので十組のほとんどの人の顔を覚えました。ただ、高橋毅君という人だけは知りませんでした。二年の時は、やはりクラスが違ったので不明な点が多いみたいです。三年では彼は九組で少し離れすぎたので、九組には日に一～二回くらいしか行くことはありません。だから九組の人は半分くらいしか顔を覚えられないだろうと思います。でも「石田君」と「日野君の面白い顔」だけは忘れないでしょう。以上、主に原田君の〝人にないようなスバラシイ事柄〟について述べてきました。

もう一人、僕の知っている人に三年六組の岸本岳史君という人がいますが、この人については不明な点が多すぎるので省略したいと思います。

男松下亮次郎その三年間を顧みる

三組　松下亮次郎

○その一（学校内において）

おれはこの三年間何をして来たのだろう。勉強？　確かにおれは無我夢中に勉強をした。とは全く言えないだろう。（人生とはこういうものだ。）

そうあれはまだおれが純真だった一年生の体育祭の時だった。おれはいつでもこうであった。

三年生がおれの友達に、とにかくおもしろくてバカな事のやれる奴をつれてこいと言われ、おれは急きょ応援係とならされてしまった。

そして当時流行していた電線マン扮する電線音頭をやってその場をわかせたものだった。それがおれのスターへの第一歩であった。

二年生の時の体育祭もそうであった。おれの許可も得ないのに、かってにみんなでおれをかつぎ出している。おれは『もうしたくない。おれにだって羞恥心というものがあるんだ。やめてくれ』と言ったにもかかわらず、またまたピンクレディー扮する『モンスター』を恥も外聞もなくやってしまった。

文化祭もそうだ。二年生の時は、山根・荒井というあのいかがわしい先輩から出演の依頼が来て『鉄人28号』『アタックNo.1』と二曲もおれの底に眠っている心を呼び起こしてしまい、この前の文化祭もおれの必死な出演拒否にもかかわらずみんなでおれをいじめて……もうおれはいやだ。たくさんだ。おれは本当にいやなんだ。いやだいやだいやだ――。

舞台に上がると足はすくんでしまい、心臓は脈打ち、踊りどころではないのに、おれはもって生まれた内気な性格なのだ。おれの心は非常にデリケートに出来ているのに。とても大勢の前では、話も出来ないし、歌う事だってましてやあのようないかがわしい踊りなんかとてもおれには出来ない。もうたくさんだ。やめてくれ――。

おれは三年生最後の体育祭だけは何もしないぞ。そうだ、おれには内気な性格をいかして自分の学力をのばそう。おれには学問というものがあるんだ。勉強して、勉強して、勉強しまくって、真のお笑いタレントめざしてあの芸能界におれは絶対に入っ

てみせるぞ。そして歌って踊って笑える、息の長いコメディアンになるのだ。そうだおれには芸能界しかないのだ。ラジオがテレビジョンがおれの活躍出来る場所がまっている。そうだ男松下亮次郎その世界でおもいっきりあばれるのだ。松下旋風を巻き起こすのだ。そして銭を銭をガッポリ儲けてみせるぞ。

みなさん、将来おれがテレビのブラウン管に登場する時が来たら応援して下さいね。そして『スターご対面コーナー』にどんどん出してあげますよ。何せ君らはおれと同じ倉高健児なのですから。

○その二（おれの友だち）

ここではおれがかかわる友だちを上げていくことにしましょう。

友だちと言ってもおれには三年間友だちがいなかった。おれは無口だし、人とのつき合いも悪く、極度の神経質、それに何といっても内気な性格だ。ただ毎日〳〵、規則正しく学校へ行き、もちろん遅刻などしたことがなかった。休み時間となると左手に『しけ単』をもち右手に赤エンピツをにぎっていた。授業中ともなれば、人が話しかけてくるのにも無視して先生の話に体全体で聞き入っていたものだ。もちろん居眠りなどしなかった。おれは校舎内でも静かだったし全くといっていいほど目立たなかった。そんな理由で当然こんなおれなんかに友だちなどいなかった。――たぶんこのようだったと思う。

そんなおれにも友がいるのだ。

まず誰から話題に上げるか問題だが、年代順に上げて行こう。

倉高に入学して一年六組になる。もちろん男子クラスだ。六組の団結力は強かった。六組軍団を結成して大いにあばれまわった。当然おれが団長である。

その中にあの江藤君がいる。江藤君とはギャグ面での善きライバルだ。しかし奴のはすこしワンパターン化しすぎる傾向がある。当然おれの敵ではない。次にあの空手の古賀と卓球部の東だ。彼らとは体育祭でがんばった。なお東君とは二年生の時も一緒だった。二年生のクラス換えの時東が一番いやな顔をしていた。多分二年間もおれと一緒のクラスになったからだろう。

ほかには千々松・北條・上田・戸塚・中山・中村(造)・井崎・末永・福富……etc.よく遊んでやった。

千々松またお前の家に遊びに行くけの待っとれよ。北條については何も書きたくない。お前は人間やないぞ。中村よお前には一言書こうかと思ったがやっぱし書くまい、井崎女のような男。おこった?平井よくいじめたの〜。

二年になってあの野球部の土田・大楠と知り合う。とにかく土田はよくおれを非難してくれたな。おれのおかしなギャグにも無理してこらえ『松下このごろ落ち目やの』と言っていた。くそだれが。それからバレー部の松山だ。松山とはいろいろあったなあ――。君はよくおれの補佐をしてくれた。文化祭ありがとよ。お前のゴアはよかったぞ。(それにくらべ秦は)松山よもう欠点取るなよ。そしてカンペー・高橋・かわの・星野・平櫛・平江・バレーおしかったの。増田よ君には一言いいたい。あんまりするな。難波江のじいさん。安田よ修学旅行はいろいろあったなあ――。市山好きなら好きっちいえっちゃ――。そして四組の女どもお前らは女か。高杉晋作の女『おうの』をみならうのだ。

そして三年になり、あのフンドシの秦と

一緒になる。お前とはつき合いが浅いが、一番気楽に話せるぞ、まだいろいろお前について書こうと思ったが時刻が二時半になったのでやめる。それから清田（ゴキブリ子）丸木・実成・下迫・市橋・高田・勝野・宮島（宮島子）岡本・秦・千々松……etc.そして大道具などの裏方。おれたちの劇はよかったの。何といっても悪魔がよかったうん。うまかったよ本当。

それからクラスは一緒になったことがないけど心にとまった奴を書く。

まずは吉田洋介。お前とはいろいろありすぎて何も書けん。ただ何年たっても気のない返事だけはかわそうぜ。それに真子・村上・釘丸・平井・池田・野上……etc.みんなみんなすばらしい奴よ。文化祭みんな泣いたの。あの涙だけは一生わすれんぞ。西田お前はすかん。というのはうそ。

それに宮崎・宮武㈱・三留・メロウな鈴木。東・のりあき・かじ・また四人でしょうの。そして最後に応援団の坂口君よ。お前は男の中の男。いやがうえにも男らしくて男そのものだ。大学に入ったら二人してとことん飲もうぜ。

以上いろいろと書きまくったが、みんなおれの事を忘れんでくれよ。

最後におれの詩を書く。

男松下亮次郎

男松下亮次郎
お前は何処へさすらふのか
お前の意志とはかかわりなく
明日というものが
お前には待っている
過去をふりむくな
お前は男
お前は男松下亮次郎

個性の再確認

三組　実成俊二

日常自分らがあまり意識して考えることのない〝個性〟という事について、その言葉のもつ真の意味をもう一度よく考える必要があるのではなかろうか。

社会が複雑化していく一方の現代で、人それぞれの持つ個性は、増々単純化しているように思えてならない。ある物事についての反応の仕方が、単一化しているからだ。自分自身の判断に従って問題に接すればこういうことも起こらないのではなかろうか。

以上のことは自分ら高校生をとり上げてみるとよくわかると思う。大学入試を例に上げると、ただ回りの者が大学に行くから自分もそこに行くというのをまったく当然に思っている者が割合い多いようだ。かく言う自分も、まったくそういう気持ちがないでもないが、少なくとも大学に入っての目標はある。(ただしうまく大学にはいれればの話だが)専門学校に行ったり、就職をしたりして、自分の長所を磨くこともまた重要なことだと思う。服装のことを取り上げてもまたしかりである。(制服制帽が原則で

ある学校の一生徒である自分が、このことを述べるのは恐縮だが）町を歩くと右を見ても左を見ても同じ格好をしているように思えてならない。似合おうが似合うまいが流行だけを追っていくのはそれこそ〝没個性〟ではなかろうか。自分が本当に好きで自分に合った服装をしたいものである。

個性がはっきりとしているということは無論、特別にニヒルを装ったりシャイになったりすることではなく、自分の存在というものをもう一度確認し、他人にむやみに追随しないことにほかならないと思う。

みな歌のお話

十組　真子隆志

その1

ーケサラ　ケサラ　ケサラ　俺達の人生は、涙とギターを道連れにして、夢みていればいいのさー　平野と肩を組んで歌いながら、俺はこの一ヶ月のことを思い出していた。功の家で、洋介と井崎と功と俺とで徹夜して脚本を書いたこと。応募者が少なくて、困ってしまったボーカルオーディション、試験前から試験中にかけての先生との話し合い。その他、色々なことが頭の中を駆け巡った。洋介、やつれたな。俺も5キロやせたんだぜ。西田、道城、末永、井崎、深江……。みんながんばったかいがあったな。真青な顔で眼の下に隈をつくって学校に来てたな。毎日、昼食を抜いてやった公開練習。何度も逃げ込んで寝ていた保健室。スタッフの奴らは、みんな平均睡眠3時間でようがんばったのう。10人以上の人を殺しかけた緞帳事件、緊張した渉外、その他、もう言いようのない苦労を一人、一人がしてきたんだな。野上が泣きながら俺の名を呼んでいる。野上、俺はここだ。お前も苦しかったろう。学年集会での、お前の涙は悔し涙だったな。しかし、今見せている。その涙は、うれし涙だろう。俺まで泣きそうになるじゃないか。幕が閉まってきた。客席のみんな、ありがとう。そんな思いを込めて手を振った。幕が降りきった時、舞台の上では、みんながそれぞれ歓声を上げ、抱き合い、喜こびあっていた。虚脱感。みんなが俺に「よくやった」と言ってくれた。声が出なかった。何かしゃべると泣き声になりそうだった。出てくるのは、ため息ばかりだった。

その2

洋介…脚本の時、功の家で徹夜して以来、ずっと俺とコンビを組んで来た。お前がおったおかげで、とても心強かったぞ。また特活班の指導ごくろうやった。実際、お前がおらな、俺はくじけとったかもしれん。本当にありがとう。

功……バンドマスターであるとともに、スタッフの話にも首を突っ込み、大変やったのう。お前のやつれ方は、見よって痛ましかったぞ。けどお前には来年がある。しっかりやってくれ。最後に

暗号「ろどんの子象」

平野…大道具、照明、総合演出と、こっちが見よって寒けがするほど多くの仕事に手を出しとった。お前の根性と才能には、頭が下がる。功同様、来年も、がんばってくれ。

西田…お前は、試験が終ってからスタッフ入りしたので、最後までそのことを、気にしとったのう。しかし、その後の仕事量は、やっぱりすごかったぞ。家にも帰らんと。ようやってくれた。ほんとうにごくろうさん。

池田…本番のミキサーのことは、お前の責任やねえ。気にすんな。あん時、お前は、バンドの奴にすまんやったと言うて泣きよったが、お前以外の誰があそこまでしきるか。本当にありがとう。

末永…貧血気味で、構造的に俺達より一回り小さく、虚弱な体でようがんばってくれた。実際、徹夜の仕事は、お前には酷やった。あん時俺は、お前が死ぬかと思うたぞ。また歌集の長と調整の補佐もようやってくれた。ありがとう。

浩尚…お前の司会、かなり好評やったやねえか。お前の個性にまかせて良かった。個人発表との兼ねあいで大変やったろうし、楽しみにしとったコンサートまでキャンセルした。やっぱし男やのー。

井崎…脚本書いた時、お前は冴えまくっとった。お前がおらなできとらん脚本やで。そしてお前は、何も言わんと、めだたんごといろんな仕事を手伝ってくれよった。本当にありがとう。

深江…来客用の歌集を、ほとんど一人で製本してしもうたお前の根性もすごかった。そして本番やリハーサルでは、ミキサーの補佐でがんばりよったのう。体の調子が悪うても、一度も休まんでやってくれた。ありがとう。

平井…お前も最初からスタッフの一員でようやってくれた。ミキサーの仕事も立派に、池田の補佐をつとめとった。どうもごくろうさん。

道城…もう少しで忘れるところやった。……お前はそんな奴だ。いつも目立たずに人のやらないような役ばかりやりよった。何も言わんでも、みんなそのことをよう知っとる。ようがんばってくれたの。

松下…真剣になった時のお前の顔は、芸人

松下とは、全く違った「男」の顔やった。人の気持ちを考えたり、当日、秦のことを本気で心配したり…。やっぱりいい奴だと思ったのう。

秦…沈みがちなスタッフの雰囲気をいつも柔らげてくれた。当日は、本当に残念やったのう。けど日頃「泣くのを見られるのは恥だ。」と言いよったお前が「みんなにすまない。」と言うて見せた涙を俺は忘れんぞ。

村上…ボーカルの指導、いや父親役ごくろ

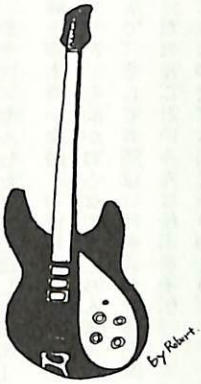
うやった。お前は、ボーカルの心をようつかんどった。俺達が、リハで、ボーカルに文句つけた時のお前の態度は、本当に、「親父」やった。ただ下らんギャグだけは、もうやめてほしかった。

阿部…村上が、ボーカルの親父役なら、あんたは、ボーカルの姉御役やった。スタッフのうち唯一人の女でありながら女子ボーカルの統率力にはすごいものがあった。まさに、姉御の貫禄充分やったよ。ごくろうさん。

バンドの方々…いつもにこやかな菊川、個人発表、ブラバン、クラス劇、みな歌のかけもちをやってのけた高橋、指先のまめがつぶれ、膿が出て穴がほげても練習しよった折田、同じく手がはれあがってもずっと練習しよった中江、功でさえ頭が上がらんほどセンスがすごかった海老田、釘丸からいびられてもめげず、ひたすら「ラ」の音を出し根性で練習した矢野。特別参加の助っ人中山、みなさんごくろうさん。

男女ボーカル諸君…エリーで評判の司、しぶくせまった岸本、大道具の頭サイ、のりの細川、ギャグの村上、みんな声からしてまでようがんばった。また、よく二年をひっぱっていった三年女子と、それに従った二年女子、帰れと、何度言うても、自分から残って練習したがったみんな、ほんとにごくろうさん。

サイ&職人…今年の大道具はみごとやった。お前らは、本当に職人という感じやったぞ。サイのいい所は、みんなと一緒に自分も働くことだ。終り頃は、ボーカルとの兼任で、それもできにくくなったが、岡田達がようやってくれた。舞台で活躍せんでも、あの無台を下から支えとったのがお前らやけの。サイも、みんなも、来年がある。またすばらしい大道具をみせてくれ。



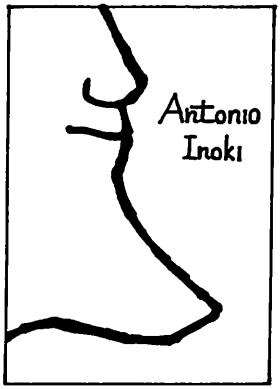
アトラクション一同…俺達が徹夜で考えた一部のアトラクションを、必死にやってくれたみんな、どうもありがとう。また秦が来んやったのに、何とか穴埋めをしてやり通した二部のアトラクションのみんな、ごくろうやったな。えらくうけとったやねえか。おかげで一段と盛り上がったぞ。

田原と照明一同…お前らも職人と同じや、みな歌を盛り上げ、いい雰囲気をつくってくれた。そのことを、自分達で誇ってくれ。いろいろ悩みもあったようやのう。俺は、あまり仕事ぶりを見に行けんやったけ、すまんやったのう。本当にごくろうさん。

特別活動班諸君…お前らの力も、本当にでかいぞ。特に、特活班の心得のプリントを作ってくれた溝口、とものり、上村の3人、どうもありがとう。リハの時は、みんなを待たせてすまんやった。そして本番の時は、よう歌ってくれてありがとう。

総務部御一同…予算から何から、いろいろ

心配をかけたのう。最初は、煮え切らんお前らが、はがいかったが、途中から歌集その他で協力してくれたり、差し入れを持って来てくれたりで本当にありがたかった。さすが、野上の率いる総務部やのう。



その他…俺の体を心配してくれたクラスメイトや、歌集作りの助っ人に来てくれた人や、差し入れをくれたり、励ましの言葉をかけてくれた人や、俺の分まで予習をしてくれた人に、お礼を言いたい。

しかし、やっぱし主役は、当日会場に来てくれた人達やけ、みな歌の成功のお礼は、その人たちに言うべきだろう。来てくれたみなさん。そして野口・島津・瀬口の3先生、どうもありがとうございました。

その3

この文を書いている今は、みな歌が終ってもう5週間が過ぎている。その間いろいろなことがあった。ケンカしたり女にふられたり…。今、俺の生活は、ようやくみな歌をやる前に戻って来た。一時は、精神が老化現象を起こして、何も手につかんやったが、最近ようやく、そうでものうなった。

俺の心の中で、ずっと続いていたみな歌は、今終った。そして、目を閉じてみるとケサラの大合唱とともに閉まっていく緞帳が見えた。

告白

二組　宮野恵里子

『いのちなき砂のかなしさよ
さらさらに
握れば指のあひだより落つ』

私がこの詩をとても気に入っているのは、きっと私が歩んできた18年の人生が、この詩の中に凝縮されているからだろう。こんな事を書くと、私の性格を知っている人間には吹き出されるかもしれない。けれども、友よ、どうか私の本当の心を知って下さい。

いつだって何をする時でも、私は夢中になって身を投じてきたのは、自分の心の中には支えになる何物もない事がわかっていたから。ふと我に戻ってみた時、そこには掌から崩れ落ちる砂のような虚しさしか見えない。今までたくさんの人を苦しみながら愛してきたけれど、たくさんの人を悲しめてもきた。このやりきれなさは、この虚しさは一体どこに持っていけばいいのか。ただ私は自分の存在を確かめるために何かにぶつからなくちゃあ、とても身が持たなかった。ただそれだけの事なんです。

＊　＊　＊

私は中一の時から友人に〝さん〟づけで

呼ばれた事があまりない。いつも「ミヤノ」と、言い切りのよい口調で呼び捨てにされる。事の起源は、一組のMさんのせいではないかと思われるが、「ミヤノ！」とあの命令されるような口調で呼ばれると、どうしても「ヘイヘイ」とこっちが召し使いのような気分になって腹がたつ。一言でいい、「エリ」と呼んで欲しかった！

＊　＊　＊

倉高で一番好きだった先生は、もう今までは古の人となってしまわれた古文のK先生。あのやせ具合といい、バサバサのヘアスタイルからオールバックへ急にイメージチェンジをした事といい、キラッと反射する黒ぶちのメガネの下に隠されている優しい目といい、非の打ちどころのない良い先生やったのに、どうして八女なんかに飛ばされたんやろうか。

倉高で一番嫌いな先生は、（教科は敢不レ言）F先生だった。あのネクタイとスーツの色のコントラストといい、シラケまわったジョークといい、自分が一番えらいんだと言わんばかりの豪慢さといい、全てが好みに反しているのに、どうしてまだ倉高におるんやろうか。

＊　＊　＊

夜中に、そっと夜空を見上げると、あの果てしない宇宙に手が届きそうになることがある。何故こんなに必死になって生きようとするのか疑問に思う。

生きる喜びは、きっと人との出会いにあるんだろう。ただ死ねないから生きているだなんて、あんまり悲しすぎる。ネェ、みんな、この広い宇宙でめぐり会えただけでもすばらしい事じゃない？だからみんな、知らんふりなんてしないで、もっと気軽に話してみようよネ。

おほんしら

有村浩一

この3年の間にあまたの教師たちのかはるがはる。皆、様々な姿を持つことおもしろし。

まず一人。忘れ得ぬ教師のいる、その正体知り得ぬようなふるまいにて、はなはだ愛嬌あり。先輩等の彼を馬留場呂易と言ふもあり。残念なことに一年の時に退職されたが、その最後の授業でいつもの如く「あ——じゃあ、あとは後回し」と言った話も有名に、折角その話術になじんだ頃であったのに重ねて残念。あの「りんご、りんご、りんご」の歌が忘られぬ。

次に一人、この先生、蜚蠊と言ふ。これは我等が学年のつけた名である。その所以は、彼の面構えを見れば、一目瞭然とする所である。油ぎった、褐色が良い。野球の試合の次の日の授業で黒板に得点表を書いておくだけで、試合を詳細に解説して下さる。豊見城戦などはその最たる所、その弁によれば、九回が何としても惜しまれてならぬらしい。されどこの先生も甲子園については多くを語らず。負け方がちょっと面

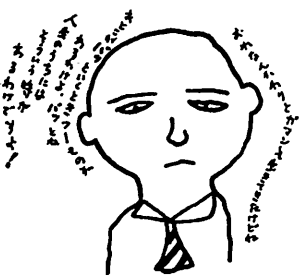
白くなかった為か。

また一人、我が恐怖の的、本当の所、あまり登場せぬが心安らかなる人なれど、二年続けての担任となれば書かずばなるまい。ところで我は二年で済んだものの、三年連続という者がいる。こんな不幸があるものか。こうなると「はぶな」「あずな」「さっちな」「ういずな」の影響も多大にならいでか。読み方知らず、いとしびあなり。ある人彼の車を戦車という。ふふーん。

さらに一人、この人は「おーさん」という。何とも御義理で義務的で、そんな感じで、そんな感じで授業をなさる。反面、誤りには情熱にお叱りになる。難解なれど、その理由はつまる所、今年定年ということか。ところでこの人物にはやや敬語が出てくるのも、我と師との合相が非常に悪く、何回も打たれ、一番恐い先生であるが、でも時折、亜米利加や仏蘭西の話が出てきたり、将又、授業を往なして、ごるふへと、をかじき教師か。

そして一人、行橋に住み馴れたるこの先生、恐らくは、先日の水害で浸水されたことと思ひ、お気の毒やら、うれしいやら、菊のほうは大丈夫だったろうか。むふ。この先生の授業は特に次亜空間に向けて宮葉を放っている。だから時間の観念が異なるのかな。それから、それから、一度、他のクラスから説明済みの授業のノートなんか借りてきて、それを板書して、彼のきな封じをしてみたかった……などと。

こんな事、徒然に書きつけてみたものの、人事だから色々言ってるけど、我自身まちがえて、教師になる破目に陥るやうなことにならば、何といわれることやら。他にも様々、控えているけれども、まあ当り触りのない所を書いてみたものの、それなりの奇妙奇天烈さを持ち何とも面白い人々。ともかくも、以上が、我、三年間の御恩師等――おほんしら。



リンゴの木の生き方

九組　亀田英明

広い緑の野原には、大きなリンゴの木が一本立っていました。

ある明るい陽の朝、一人の小さな男の子がやってきました。

「のどがかわいたなあ。」

すると、緑の木の葉がゆれてリンゴの木が優しい声で言いました。

「じゃあ、わたしのリンゴをお食べなさい。それはとても甘くおいしいリンゴでした。

時が過ぎ去り、小さな男の子はたくましい青年になりました。

そしてまたリンゴの木のところへやってきました。

リンゴの木は言いました。

「のどがかわいたでしょう。わたしのリンゴをお食べなさい。」

すると青年は言いました。

「いいえ、僕は忙しい。ただ、巨石を動かし荒野を開く丈夫な木の棒が欲しいのです。」

「それでは、わたしのこの腕を切って行きなさい。」

リンゴの木は優しい声で言いました。
時が過ぎ去り、青年はりっぱな大人になりました。
そしてまたリンゴの木のところへやってきました。
リンゴの木は言いました。
「のどがかわいたでしょう。わたしのリンゴをお食べなさい。」
すると彼は言いました。
「いいえ、私はとても忙しい。ただ私は海を渡る船が欲しいのです。」
「それでは、わたしのこのからだを切り倒して船を作りなさい。」

リンゴの木は優しい声で言いました。
時が過ぎ去り、彼も年をとってしまいました。
そしてまたリンゴの木のところへやってきました。
リンゴの木は言いました。
「のどがかわいたでしょう。でも、わたしにはもうリンゴはありません。」
彼は言いました。
「いいえ、私はもう疲れました。」
「それなら、わたしの切り株に座りなさい。」
リンゴの木は優しい声で言いました。
老人はリンゴの木の切り株に腰を降ろしました。
そして、彼の顔には、やすらぎのある、落ち着いた、幸福な表情がありました。
空には、美しく星が輝やいていました。

三部作

四組　東　隆介

こういう文章を書くのは慣れていないせいか、〝書き出し〟というのはなかなか難しいものである。そもそも、文才の無い自分がこの啾唧集なるものに手をつけたのは、この三年間何ともなしに過ごしてきて最後に何かしなくては……という義務感がこんな気持ちにさせたものだろうか。

ＰＡＲＴＩ・感謝と挨拶

先日の下校時の事である。いつものようにダイエー前にて28番系統のバスに乗ったところ約一年半振りであったろうか中学時代の友人が目の前に座っていた。どういうわけか自分は声もかけずに、後方の座席に退いた。何が自分をそうさせたのかよくわからなかったが、どうも人間というものは、久し振りに再会すると恥ずかしい気持ちが懐しさを押さえてしまうようで、特に私はその傾向が強いような気がする。相手も勿論私の存在に気づいて、しきりにこちらの方を気にしていたようだが、これも先程と同じ理由で無視してしまい、結局その友人とは一言も交わさずに別れた。彼がバスを

降りた時、私は何とも言えない虚無感に駆られた。どうして、せめて挨拶くらい、いや会釈くらいできなかっただろうか。そんな自分がはがゆくて、またその旧友に対しても何故声をかけてくれなかった…と腹が立つ。こんな状況の中で思うのは、「友人なんてそんなものか。」ということである。過ぎ去ってしまった中学時代のことは、今さらどうしようもないことであるが、せめてこの高校生活だけは、この倉高で三年間いっしょに過ごした友人たちとだけは、いつまでも交友関係を持ちたいと思う。入学当時は遠い昔のようでもそれからの二年余は、あっという間に過ぎてしまった。その間に多くの人間に出会い自分もかなり変えられたと思う。成長したと思う。卓球部の同輩先輩後輩、一年六組、二年四組と経て来た中で得た友人には本当に感謝の気持ちでいっぱいであるし、いつまでも……と思う。これらの仲間は恐らく永遠に私の記憶から消えることはないと思う。本当に有難う。そしてこれからもよろしく。

PARTⅡ・たっきゅう

はっきり言ってこの卓球ほど私の高校生活を締めつけたものは無いと思う。この為に多くのものを犠牲にしてきた。しかし、今は卓球を続けて良かったとか悪かったとかいうことを考える頭を持ってない。二年前の汲泉にこんな言葉がある。「卓球とは憎むべきものではなく、また愛すべきものでもない、ただ私達自身のからだで勝ち得た教訓にほかならない。」と。私も全くこの通りではないかと思う。そうである。結果が現れるのはむしろこれからである。その結果が輝きわたるものであることを信じ、これからますます精進してゆくのである。「卓球」を、決してマイナスにはしない。

PARTⅢ　〝だち〟へ

最後に思いつくまま私の友人について書いてゆこう。思いつくまま一言二言。まず松下君、君には驚かされた。河野君、まるむし。(これについてのお問い合わせは3－10高橋へ)平江君、今度うどん食べに行きます。市山君、思い切って言ってしまえ。大楠（ここから敬称略）やせれ。土田ファイト、河野もガンバレ。中本さん、あんまり○にうつつをぬかしたらいけん。ナバエじいさんくさい。松山アゴやめれ。平櫛○ソ〳〵。安田、修学旅行は忘れましょう。K象補習サボるな。最後にK平、Kさんと仲良く！（Kさんゴメンネ、K平はいい。）

海と太陽（自作詩集『青銀河（ブルーミルキーウェイ）』より
ばっすい）
三組　高田直明

現実を見ると……『嘔吐』

絶望

その日が来ることはないのだ
希望に胸ふくらませ
幻想の実現する日が
なのに――
その日を待てというのか！
夢は破られた
もう　墓で眠るしかない

檻の中

ここはどこだろう？
知らない鳥が断末魔のような叫び声をあげ
黒雲は低くたれこめ
日光すら差し込まない
人々は皆二本の足で立っておれず
地面をはいまわる
草木は枯れ果てて
岩石が無表情な顔をだしている
水の流れも今は絶え
乾ききった大地に風が吹く
ああ……　神様
救いの御手はあまりに遠く
聖歌も祈りも届かない
目をやれば
灰色の地平線は檻のよう……

太陽はまた上るのか
ぼくはどこにいるのか
大地にしっかりと足を踏みしめていない
この不安感はなんなのだ？
上もなく　下もなく　前もなく　後ろもなく
暗黒の空間を浮遊している

脱　自

こんな自分は、もういやだ
やめてしまいたい！
なぜ？
どうして？
こうなったのだろう
こうなるよりしかたがなかったのか！
こんなつもりじゃなかったのに……
でも――
どうしようもなかった
どうすればいいんだ
逃避、過去への逃避、すなはち思い出。
空想病。現実からの離脱。幻想

遠景

オカアサンガ　手ヲ振ッテイル
カキネノ向コウ　ボクンチノ前デ
手ヲ　振ッテイル
「行ッテキマース　オカアサン」
オカアサンガ　ホホエンデイル
オカアサンノアノホホエミ
早ク帰ッテラッシャイト　ホホエンデイル
アア……大好キナオカアサン

オカアサンガ　今日モ手ヲ振ッテイル

手まねきしたらおいで
時よ
幸せな時
そのままで
とまっておいで
それが願い
幸せな時　そのままに

（『ジョカへ』より）

ペニーレイン
降っておくれ　ペニーレイン
時には楽しく
時には悲しく
時には陽気な
――感傷雨よ
しっとり流れる銀の糸
たった一人のメランコリィ
降っておくれ　ペニーレイン
雨だれの音を消して……

小鳥逃げた

小鳥逃げた
私のもとより飛んでいった
私の腕をするりと抜けて
大空高く飛び去った
私はおまえが好きなのに
なぜにおまえは私を嫌う
私が泣いて頼んだら
おまえは帰ってくるだろうか
空を仰いで待ち続ければ
おまえは姿を現すか
逃げた小鳥
二度戻って来ない

メリーゴーランド

回れ　回れ
幼い頃のあこがれを乗せ
回れ　回れ　回転木馬
お前の背で翔んでゆこう
お前のたて髪で夢みよう
羽ばたけ！
羽ばたけ！
木馬よ　天馬（ペガサス）よ
回れ　回れ
時の流れに逆らって

またしても春が過ぎ去る
僕は思い出す甘やかな日ごろを
去って行く季節よ　さようなら
同じほど甘やかに　もう一度来ておくれ

（アポリネール）

超越。卓越。高次世界の自覚。アウフヘーベン。

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る

（高村光太郎）

私の意思

運命なんかー　信じない！
私は私だ
だから　ここにいる
これは　私の意思だ
明日が　あるとしたら
そこにも　私はいる
これも　私の意志だ
なるべくして　なったんじゃない
なるように努めてこそ　なるんだ
それこそ　私の意志だ
運命なんかー　信じない

夢みたものは　ひとつの幸福
ねがったものは　ひとつの愛

（立原道造）

HAPPINESS

陽は上る
ーだから　ハッピネス
鳥は歌う
ーだから　ハッピネス
花は開く
ーだから　ハッピネス
星は輝く
ーだから　ハッピネス
針は進む
ーだから　ハッピネス
踊れ　踊れ
幸福なままに
踊れ　踊れ
一晩中
明日が来ても
それは　ハッピネス

思ったまま進める勇気がほしい
まちがってはいないーと信じたい
すなおにー
　まっすぐ前をむいて歩きたい
明日へー

（『坂道のぼれ』より）

坂の上に　たどりついたら
　そのまま空へ飛びたちたい
羽なんか　いらない
　そのまま落ちて
このからだが　めちゃくちゃに
　くだけ散ってしまってもいい
風になって
　おれは　飛ぶんだから

（同）

高飛び

いつも飛べなかったバー
その高さがわかった時
私の心にあった恐れがわかった
そいつは支柱で支えられていた

そしてー
心がとても軽くなって
ぼくは雲になるんだ

総務部室にて
「あのさー」
「なに？」
「最近、気がついたんやけど、高校生っち

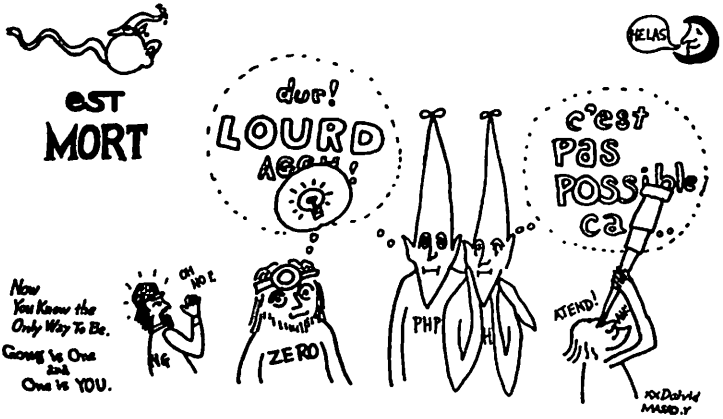
どうして抽象画を書かせたら、大部分のやつが荒野をかくやろな。」
「そういや、詩も陰惨なもんが多いなあ。」
「なぜやろ？」
「精神の荒廃やなかろうか。」
「現代のゆゆしき問題やな」

防護団訓練で

「おまえ、啾唧集なん書く？」
「おれ、詩書くつもりちゃ。」
「あれ、面白く書かんとうけんやろ。」
「でも、おれまじめに書くけ。どうして大学行かないかんのか。なんのためここにおるんか、人生論をぶっぱなしたいんや。」
「アハハ……」
「笑いごとやないやん。」
「そりゃ、おまえがおまえだからよ。」

家で

「ねえちゃん、好かん。」
「どうして？」
「夢がないもん。」
「地道に、現実見て暮らすのどこがいけんのね。」
「おもしろくない。変化がないもん。」
「あんただって同じやないね！」



親友Y宅にて

「俺、時々自分が恐い。もしかしたら、自分の肉親を殺してしまうかもしれん。近い将来であっても、絶対こうだと言いきれんから。」
「ぼくは、信じられるね。」
「どうして、そんなことが言えるんか。明日の天気もわからんくせに！」
「自分が、こうだと思ったら、その通りにできると思う。いやそうしなければならないし、このことを信じなければならんと思うよ。」
「そりゃ、おまえがそう思うだけよ。」
「おまえだって、どうしてそんなこと言えるか。この議論の前におまえだけが意見を通すために、盲目的に前提にしとることがあるやろ。それと同じことよ。」
「そーか。」
「そやないと、明日から何を信じて生きていくつもりか、なんでもやればできると信じな生きていけんぞ。」
「でも、俺、自分でナニ信じとるんか、わからんちゃ。だけ、それで、おまえはまだ救われるけど、おれは救われん。」

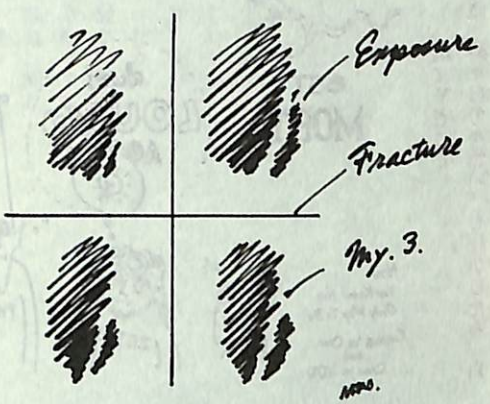
そして……、ついに、

なにもかもいやになった時、
だけどー
たったひとつだけ
信じられるものがあった
それがあれば
どんな道だって生きてゆけると思った
ほんとうにそう思った

からだの中でー
心のずっと奥で
なにかが燃えている
わたしの中のなにかが叫んでいる。
それでも――
一歩ふみ出すことはむずかしいね。

（『坂道のぼれ』より）

そして
一歩　また一歩
わたしたちは歩き続ける。
果てしない明日へ向かって
限りない未来へ向かって
この命尽きるまで、



六組　坂本　薫

まっさおの空。むらなくぬられた青の上にこれまたまっしろの雲。風が吹いていて……そよそよ……やわらかい草が一面に……木はみどりのはっぱを風とたわむれさせていて……。こんなとき私は〝ああ、生きてよかったなあ〟なーんて思ってしまう。草の間には、ちっちゃなちっちゃなバッタなんかがいて！ホント幸せだと思う。

こんなこと書いてると、ロマンチストぶってるみたいでイヤな感じだけど、そんなんじゃなくて、もっと本質的な〝何か〟が、そんな世界にあると思わない？人間を満ち足りた気持ちにしてくれるような何かが。ね！

☆　☆

毎日のように改めて思い知ることは、時のすぎるのはとてもはやいということです。

ところで私の高校生活について自信をもって言えることは、べんきょーをしなかったということだけ。自分でもあきれるほど怠慢に怠慢を重ねた私も、早いもので3年生。3年になってまじめに勉強しようと決心して、だいぶまじめになったと自負しているにもかかわらず、それでも他の人に比べたら、予習もほとんど（昔は全く）してこないし、……まだまだです。（そんなに急に180°転換できるもんじゃないもんね）よって、頻繁に行なわれているテストはひどい苦痛でありまして、自身の基礎学力のなさを思い知るのみであります。みなさん！日々の努力を怠らないようにした方がよろしいですよ。

しかし私は、後悔するまいと思うのです。過ぎたことをくやんでもしかたないし、それになんのかんの言ったって、この過去こそすなわち〝私〟なのですから。

過去というものは、ほんとになつかしいものです。思い出していると、なつかしさで涙が出そうになります。つらかったことも悲しかったこともすべて、過去という柵で囲われてしまうとなにもかも、なつかしいものとしてあたたかく感じるようになるものです。

振り返ってみると、私はけっこう気ままにしたいことをして生きてきたみたいです。私は、人間はしたいことをして生きればいいと思っています。したくないことを苦しんでやる必要はありません。生きることは苦痛であってはなりません。また、いろいろなことを思いつめる必要はありません。すべてはどうでもいいことであって、なるようにしかならないし、固執する必要などないのです。ただここで大切なのは、〝したいことをする〟といっても楽をすることではないということです。〝したくないことはする必要はない〟といっても苦から逃げるのではないのです。何のために生きているのかというと、自分のために生きているのです。だから、自分の満足のいくように生きることが大切なのです。放蕩では満足は得られません。

文章力がないので、思っていることが十分表現できません。非常に無念ですが、よく考えてみて下されば、なんとはなしにわかっていただけるかもしれないと思います。

ほんとは書きたいことがまだまだたくさんあるのですが、御迷惑でしょうからくだらない話はもうこれくらいにしておきます。最後に告白を。

みんなみんな大好きです。すべてを心から愛しています。

えらそうなことばっかり言ってるけど、本当は、すごく弱虫であまえんぼうなのです。この心細さ！さびしさ！自分一人で立っているのがやっとなのです。崩れてしまいそうです。強く生きたいのに…。

いろいろと

九組　山内　健

書いてみたかったのですが、あまり長くだらだら書くと、みんな読んでくれないので短くぶった切って書くことにします。以後文調がころころりんと変わりますので御注意。（たまりませんわん）

①好きな人（もの）

イルカ

これをマリンランドでたわむれてるイルカなぞと思った人はもう先を読まんでいいです。

現在数あまたさぶらふミュージシャンの中で一番好きな人です。なぜなら、イルカはとっても純粋な心をもっているから。昔々のある夜、たまたま「オールナイトニッポン」でイルカを知っておもしろいんだなぁと思ってからというもの、聞けば聞くほどどんどん好きになっていきました。本当にイルカがオールナイトをやめたときは悲しい思いをしました。（あの頃聞いていた人ならこの悲しみ理解して欲しい）ぼくはイルカのあの喋り方が、とっても好きで、あの声を聞くだけで心が弾んでくるのです。

でもぼくがイルカを好きな理由はもう一つあります。それはイルカが、しっかりした主張をもって歌っているということです。「生きているものすべて私たちの仲間なのだから、小さな虫なんかでも殺したりなんかせずにもっと愛してやってください。」この言葉こそイルカの世界の原点なんだと思っています。

ここで最後にぼくの大好きな「いつか冷たい雨が」の歌詩のおしまいのへんを紹介したいと思います。

「人間だけが、えらいんだ」なんて、ことだけは思わないで下さい。
人間以外の者たちにも、もっとやさしくして下さい。
同じ時を生きているのだから、
朝が来れば、
夜も来るし、
生まれて、
そして死んで行く。
私が、土になったら、
お花達よ、
そこから咲いて下さい。

レイブラッド・ベリ

波がわたしを世界から切り離した——空を飛ぶ鳥と、渚の子供たちと、浜辺にいる母から。ひとときの緑の静けさ。そして再び、波はわたしに空と砂と騒ぐ子供たちを返してくれた。湖からあがると、出かけたときとほとんど変わらない姿で、世界がわたしを待っていた。——

これは、彼の処女短篇集「闇のカーニバル」に収録されている「みずうみ」という作品の冒頭である。「SFの抒情詩人」「ファンタジーの大家」「ポーの遺鉢をつぐ幻想文学の第一人者」等の言葉が示すように、ブラッドベリは、単なるSFの領域をはみだしたSFファンタジーの作家であり、自分の一番好きな作家である。彼の夢想の世界は、しばしば十歳前後の子供の心を通して描かれ、そのファンタジック・ラールドは、彼独特の詩の様に流れる美しい文章で巧みに表現され、人を引きこんでしまう強い力をもっている。

まだ初期の作品に多く見られる彼の「恐怖の世界」も、人を戦慄させる力をもっている。それは、所謂ドラキュラなどではなく、大鎌とか風とか虫とかいった現実的でかつ幻想的な匂いのするものであり、それだけに読者をすぐにその作品の中へ溶かしこんでいく。

しかし晩年となってからは、この傾向の作品が、少なくなってしまったことは、とても残念な気がする。

ここでぼくの好きな作品を挙げると、「みずうみ」「集会」「イラ」「霧笛」「万華鏡」「大鎌」などが、すぐ頭に浮かぶ。まだブラッドベリの作品を読んだことのない人には、ぜひとも短篇集「十月はたそがれの国」(創元推理文庫)を読んで欲しいと思う。もしこれが気に入ったなら、サンリオSF文庫の「万華鏡」ハヤカワの「火星年代記」を読んでもらえれば、その魅力は十分感じとれると思う。たまには現実の世界を離れ、ブラッド・ベリの夢想の世界を旅してほしいと思う。

女生徒

ぼくは、なぜかこの「女生徒」という言葉がたまらなく好きなのである。別にセーラー服を着ている姿が好きとかいったものではなく、「女生徒」という言葉のもつ感傷的なイメージが好きなのである。なぜかと聞かれても、理由をはっきり述べることはできないが、一つだけそれを知る手がかり

がある。それは、太宰治の「女生徒」という作品である。これを読んでもらえば、この言葉のもつ魅力が、ぼんやりとわかるはずだと思う。

②いやな（不快な）もの

倉高の女子

（※注　これはなにも女子全員に対して言っているわけではなく、中には本当にいい人も居ると確信しています。）

これは、心の中で何を考えているかが全然わからない、一言で言ってこわい存在である。なんせぼくの友だちを二人も連続してふった奴がいるから恐しい。もっとも二人は「別れた」と言い張っているがあやしいものである。一人はいつまでたっても思い出にふけっているし、一人はそのショックのためか、硬派になってしまった。女が男にふられるのは、悲哀を伴い涙を誘うが、男が女にふられるのは、みじめさを伴い嘲笑を誘う。その娘、仲々顔はかわいいのであるが、心は氷の様に冷たいのかもしれない。女は魔物であるとつくづく感じた。

しかし、このままでは二人が可愛そうである。そこでぼくが二人にかわって言ってやる。

よし、よし、いいか、言うからな、

「〇〇〇のバカヤロ ――」

これでいいかな。（なつかしーいイルカのオールナイトニッポン・バカヤローコーナーを思いだしますねェ。さっき女は云々って言いましたが、イルカは、はずしといてください。イルカ、バンザーイ）

熊の大群

いつも地域社会住民のことを考えて、日夜努力し、電燈というお荷物をふろしきにつつんで、押し売りを営んでいて、それでもなおかつ「自分は最高善だ！」といった顔をした偽善家のアタックNO1。

伸び盛りの若竹の頭をむしりとって、暗孤村に及ぼす被害は甚大である。また服装が乱れていると、襲いかかってくるので注意が必要十分条件である。

ぼくの好きな言葉

①「見よ、君子は冠を正しゆうして、死ぬものだぞ」

中島敦の作品「弟子」のクライマックス、この作品には本当に感動した。

②「よしっ、気合、さっ一本」

わかる人にはわかるはず。

③汝ら断食するとき、かの偽善者のごとく悲しき面容をすな。（マタイ六章十六）

④味の名門、横綱屋

名たれねえちゃんを知ってますか？

⑤平常心

最後は渋く締めくくりました。

嫌いな言葉ベスト（ワースト）1

『スタンダード提出』

ただ、ただ実感です。

以上、際限のないこと書きましたが、ぼくの下手くそな文章にもめげず、最後まで読んでくれた人有難う。最後に一句つくりました。

静けさや足にしみ入るムチの音

わけのわからぬ三部作

七組　深谷健二

第一部、或る日の授業にて

7月×日、火曜日、三時間めの化学の授業の時であった。前の時間が水泳だったせいか、普段よりも、寝ているやつの数が多いように思える。まわりを見まわしてみても、となりの席のSや窓際のTは、目をつぶって下を向いているし、後の席のMやIは、教科書を枕にしてウツぶせている。が、しかし、俺は何とか、20分間も目を開けてネバっている。驚異としか言いようがない。

○　○

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。しかれども授業時間は悪夢の若し。歓びを為すこといくばくぞ、生徒「しけ単」「しけ熟」等を取りて内職す、まことに故有るなり。況んや、陽夏、猛暑我を召くに眠気を以ってし、三時間めの鐘我に聞こゆるに駈け足を以ってすをや。

（三時間目寝教室之机序）

○　○

このような事を思いめぐらしているのもつかの間、「眠気」が、×××の先から頭のテッペンへと登ってきた。教師の声が催眠術の如く聞こえてきた……。

「ア〜〜〜助けてくれ……。力が抜けてゆく……。まだ寝たくはないんだ……。」

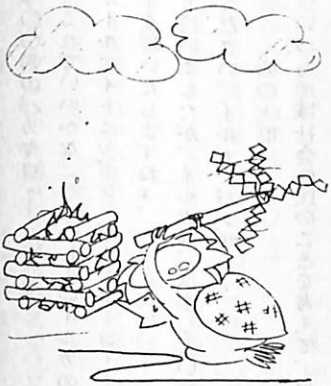
時すでに遅く、俺は、今日も夢の境地に入ってしまった。

※教訓

教師をよく確かめてから寝よう！

第二部、倉高生活の中で

三年間連続、男ばっかしのクラスで快楽（？）の極致に達し、少なくとも二年になるまでまるで女っ気のなかった無線部（さっき出てきたSとMもそうなんだよなあ。）で放課後を過ごしてきたせいか、虚栄心や羞恥心はだんだんうすれ、目立とう精神が身について来たようである。



人間は、自分を表現したいが故に、自分を認めてもらいたいが故に、多少の「目立とう精神」を発揮するのが普通である。それが上手な人は、皆から拍手喝采を浴びるが、下手な人は、「あの人あんなに目だってバカじゃない？。」とか「シーッ。」とか言われるのがオチである。しかも、前者のようになるのは稀で、ほとんど、表には出ないでも後者のようになってしまう。自分も例外ではないようで、以前だったら、シラケル事を恐れて何もしないのが常であった。けれども最近では、少しずつではあるが、変な事もちょくちょく言っているし、そういう事をやって、人を笑わす（人が笑ってくれる）のが一種の快感にさえ思える時さえある。

自分の品位を落とす事を言わずに、「すてきなんだ。」などと言われながら高校生活を迷ってもいいけどねえ……。どうもそんなのは、自分を必要以上に飾るようでイヤだよ。それよりも「低俗！　助平！

阿呆！」とか言われる方が、何となく気楽に友達とつき合えそうだし、「何と言われてもいい、俺は○○については誰にも負けないんだ」と一人つぶやいて、自分を励ますこともできそうだ。

今、「あなたの倉高生活は充実していましたか」と聞かれても、すぐには答えられない。しかし、こういう目立とう精神や開き直りの精神が多少ともついただけでも、「何か収穫があったのだなあ」と思ったりする。この収穫が大きいものか、小さいものかはこれからの過ごし方いかんだろうが、これだけは、ハッキリと言える。

「バカができるのは若いうちしかない」と。

第三部、プロ野球怪説

この汲泉が出る頃にはプロ野球はシーズンオフ、巨人が優勝してない事を願いたいところだが……。さて、どんな人達か、それは、王でも、小林でも、掛布でも、新浦でも、シピンでもありません、ましては江川なんて、とんでもない。そうです、あのライオンズから来た、基、竹之内、真弓、若菜等の選手達です。基は打率で、竹之内はホームランダービーで名を出していたし真弓は守りに定評があり、若菜は今年のオールスター人気投票の捕手部門で第一位という事などは、よく知っているでしょう。

それに比べて九州から去って行ったライオンズは、悲しき事かな前期はドベ、後期もBクラスではないでしょうか。しかし、ライオンズは去っても、ライオンズで育った前に上げた選手が、大活躍しているのはうれしい限り、TV中継を見るかいがあります。

またまたひと言

「ライオンズは、上に何が付こうとも、不滅だ」

思い出すのは、2年前の夏の　つかの間の一位……。

PS・I

こんな稚拙な文章を読んでくれてありがとう。一、二年の皆さん、これで、「私にも書けるわ」という勇気がわいて来たことだろう。

PS・II

やっとこの啾唧集で文壇にデビューを飾ることができる。残るはTV出演のみ。

三組　秦　剛敏

プロフィール（6/3）

昭和36年4月29日誕生。なんてったって現役バリバリ。俺が浪人するわけないでしょう。来年？　うーん、まさか……

小倉北区中井口1の23。〒803で電話番号は561の0154。現在出席番号が33で、

倉高入試の受験番号が444。この数字、不吉な番号といわれるけど俺は、ごろあわせのいい最高の番号だったと思っている。3年3組33番でオール3、そしてオール4、そして通知表はオール5と、文字通り、完成された人間であります。

その1　倉高の昼休み

もうふんどしよ、ふんどし。あれしか頭にないわい。

その2　倉高の先生

いい先生、えらい先生ばっかり。おこられても頭にきませんでした。よう書くわい。

その3　倉高の保健

常に40点ちょいをキープ。やっぱし通知表には2が。瀬口先生ゴメンナサイ。

その4　倉高での欠点

俺がとると思う?俺がとらんわけないやん。でも、実際一年の最初の実力テスト、56番56番56番……とったことあるやつ何人おるか。

その5　倉高の授業

ねむい、ねむい、ねむい、わから〜ん。

その6　倉高の食堂

まずい、まずい、まずい、おばちゃんゴメン。

その7　倉高のトイレ

くさい、くさい、くさい、気持ちいい。ホラ。

その8　倉高の生徒

もっと恥をかけ、勉強もいいけど、それオンリーちゅうのはいかん。そんなことじゃ人の上には立てないよ、本当の話。

その9　倉高の文化祭

○劇…とうとう俺の晴舞台あっこだけやった。

○オセロ大会…でたかった。絶対負けんかった。理由?必殺の引分けがあるんよ、知らんやろう。

○みな歌

とにかく俺はかけていた。劇なんて目じゃなかった。文化祭はこれだけだった。わずか、3分足らずのマグマ大使のゴアに……

……俺はかけていた。

運命の二時半、丁度アトラクションは始まった。その時俺は……ベットからとびおきた。自転車をとばした。ブレーキの効かん自転車を。電柱にぶつかった。ギアがこわけた。タイヤからはシューシューという音が。腕からは血が。しかし何も考えずに俺は走った。着いた。講堂に走った。ビューティフルネームが聞こえた。客をおしわけ控室に走った。戸をあけた。俺は力なくその場にすわりこんだ――ペシャン。

朝10時すぎ、松下と千々松が俺の家に来て、窓をたたいてくれたそうだ。俺がねている2階の窓を。でもおきなかった。俺は。

何人かが声をかけてくれるのがわかった。しかし立ち上がれなかった。立ち上がろうとした時フッと一瞬意識を失い、その場にうずくまった。ワーという歓声とともに。ケサラが始まった。俺は立ちあがった。がすぐに壁にもたれかかった。みんながケサラをスポットにてらされ、満員の客席の前でうれし涙を流して歌っていた時、俺はくやし涙が、流れそうだった。みんなが俺のことをどんなに恥知らずといおうとも俺は何でもやってきた。実際恥とは思っていなかった。俺が恥と思うこと、それはただ一つ、人前で涙を見せることだ。まさに明と暗、映画を見ているようだった。スポット

の前の満員の客席の前でうれしそうに歌うみんなとくらがりで一人ポツンと放心状態の俺。ケサラがおわりすごい歓声とともに

幕はとじようとしていた。その時、裏からこっそり逃げるように帰っていった。終わった。書道部と劇の練習というきつい中、必死にガンバッタみな歌。10時・11時と遅くまで残ってガンバッタ俺のみな歌はわずかの思い出を残して消えてしまった。誰かが声をかけてくれたが、わからなかった。あのみじめさがわかるか、俺は一生忘れない。

家に帰って何分かして、松下と千々松が俺を呼びに来てくれた。学校に行きたくなかった。しかしみんなに謝まらないといけなかった。自転車に乗って前に行く2人を見ながら心の中で何度ありがとうと言っただろう。松下は俺が必ず来る、あいつは死んでなかったら必ず来ると本番前まで校門で待っていてくれたそうだ。いつも、互いの良いとこを無視し、悪い所ばかりさがしあっていたあの松下が。千々松はいいやつだ。やつの本当のよさをみんなは知らないだろう。口ではいえない本当にいいやつだ。上田も田中も心配してくれた。清田、お前と一緒に銭湯に行ったなあ、ゴキブリ子。もしみんながみな歌に失敗していたら、全部俺の責任だった。アトラクションだけでない。みな歌係全員に心配させたのだから。松山、おれの代理ありがとう。本当によくがんばってくれた。俺が飛びこんで行ったあの時井崎は涙を流してくれた。司会大変だったな中村。この一週間ほとんど眠らずにがんばったスタッフの、そしてお前にあとからなんでも好きなことさしてやるといった真子。ようすけガンバッタな。西田、末永、女にふられても気にすんな。平井、深江、道城、池田お前の機械の強さはおどろいた。平野、大分まいったな。総務部長として本当に忙がしかった野上。文化祭も終わり、一人でしょげかえっていた時、笑って握手しに来てくれた桶口をはじめバンドのみんな、本番でとうとう泣いてしまったそうな司をはじめとするヴォーカルのみんな、舞台に出られなかったというだけでしょげていたら怒るかもしれないな、大道具をはじめとする裏方のやつら。心配かけました。瀬口、野口、島津先生方。俺が出なくてガッカリした人もいただろうけど、でもあの日ほど時間の大切さ、友だちの素晴らしさがわかった日はなかったな。みな歌全員が集まってジュースで乾杯した時、ジュースをはきかけてしまったようすけに中村、俺が口からありがとうといえるか、わかってくれ。でもあの後あんなにビショビショにされるとは思わんかったよ。本当にありがとう。

そして、ケサラをみんなで歌ったあの夜、俺がスポットにあたって歌うみんなを見てもこらえた、俺が唯一恥とする涙、あれが最初で最後の俺の涙と思って忘れないでくれ。俺もあの30余人が一緒に流した涙は決

して忘れない。俺の宝として。うれし涙を流せてよかった。くやし涙でなくて本当によかった。

あの文化祭で俺は失敗した。大失敗だった。しかしそれで得たものは大きかった。人間が又一回り大きくなったような気がする。笑って許してくれた、お前がいなくてお前の偉大さが初めてわかったと言ってくれた友よ。みんな待っていてくれ、あと5年、いや10年かかるかもしれない。しかしきっと大物になってお前たちに一人一人頭をさげていくからな。11時すぎ、とまりもあったあの一週間は俺の人生の上で最も燃えた日々になると思うよ。俺を支えてくれたみんな本当にありがとう。

その10　今後

今後といえば運動会か。あんまり出たくないけど俺が出らんわけないやん。おれはだれだ？ふんどしですよふんどし。わかってる？

その11　追加――「私の名前…」

ケサラ～ケサラ～ケサラ～俺達の人生は、涙とギターを道連れにして生きて行けばいいのさ～。ケサラ～ケサラ～ケサラ～俺達の人生は……

しかしやっぱり言いたかったよ、あの舞台あの独特のふんいきの中で「私の名前はゴア、地球を侵略するため、お前達を犯しにやってきた――。マグマ行くぞ――。」

秋夜空想

七組　二村浩史

秋の夜空の青深く
ながむれば
肌寒きも忘れ　見入りたる
さまざまのこと　思ひえがき
わがひとみ　おのずから
かうかうと　かがやきて
われは心満たし
ほほえみ満面にたたへ
懐かしき歌
静かに　うたふ

わがこころ
赤く染まり
淡ひ黄いろのてふてふひとつ
きらめく園のまなかに
黒髪の可憐な少女ひとり
少女よ
われは君を愛す
なによりも君を愛す
少女よ
花つむ可憐な少女よ
浪慢をわれに与えよ

君とよりそひ歩く浜辺
わたあめのように甘い接吻
れもんのようにかぐわしいあなたを
浪慢にくるまりて
われに与えよ

わがこころ
美しく澄みわたり
もはや天上の心地するなり
そよ風は
なんといふかぐわしさぞよ
星は小さく可憐にて
見あげるわれをつつみこむ
ああ
秋の夜空の美しさよ

SUNDAY MORNING（秋）

日曜日の朝
すずめのぴいちくいひけるは
すがすがしき朝のきたしるし
まだおきてうなし

あたたかなるふとんにくるまりて
昼まで寝ぬることを
切に望めども
口うるさき母親
ふとんをわれからはがしとるなり

いと寒き秋風
われをわれにかへせしめたり
まさに腹の立ちけり

母親出てゆき
再びふとんもてき
ふるへるからだをぐるりとつつむ
ああ　なんともいへぬ　このきもちよさ
やがてまどろみ
そして　夢の世界へ舞ひもどる

日曜日の朝は
すばらしき朝なり

卒業写真

――「帰り来ぬ青春」を聴きながら――

九組　亀田英明

ほら、二人ともこんなに笑って
とてもうれしそう

いつも楽しそうに話していた二人
いつも一緒に歩いていた二人

眩いほどの二人の心は
モーツアルトのト短調の響よりも
〝美し〟かった

そして今は

今は　卒業写真が一枚

ただ一枚

理想郷

六組　田畑　純

Ⅰ

僕は一瞬
神経の断ち切れる音を聞いた
遠くでは人の声
よせくる波のような
人のざわめき
とめどもない笑い
その一瞬
物音が全てこの世から消えた
遠まきに人の声
歩みよる時のような
人のざわめき
とまる処ない笑い
次の一瞬
意識の消滅そして幻覚の到来

Ⅱ

あなたの手をふりほどいた時
もつれていた意識が
瞬時にしてほどける
気付かぬうちに根をはった
様々な想いが流れ出す
僕はあなたを愛していたのだ
いく度となくさし出してきた手に
どんな想いがこめられていたか
あなたの想いは
流れよせる銀河のように
今　僕の心をたたく

Ⅲ

何を見ているのだろうか
昇降口の階段にこしかけ
君は
何を見ているのだろうか
何もない空と
ざわめきの往来とに
君は
何を見ているのだろうか
焦点を見失なった君は
力なくこしかけ放心している
つかれた顔を
両の手の甲にうずめるように
君は
何を見ているのだろうか

七月十二日木曜日晴れ

八組　加賀田博司

卓球をやって本当によかったというのが今の自分の心境です。しかしこの心境に至るまでの過程は単純なものではありませんでした。

四月三十日、インターハイ県北予戦の最終日です。自分は九州工業高校のN選手に敗れました。これが自分にとって小倉高校の代表として出場する最後の試合でしたが、試合を終えたあとの気持ちは何ともさっぱりしたものでした。しかし、家に帰っていつも坐り慣れたイスに坐って今日の自分をふり返ってみると、今日の試合のふがいなさに腹が立ってきたのです。あの時もう少し慎重にやっていたら、もう少し思い切りがよかったら、もう少し気合を入れていたらと次々と頭の中に浮かんできて、一つの事をなし遂げたという満足感とは程遠い気持ちになったのです。もしかしたら自分は卓球において大きな悔いを残したのではないだろうか。あの時の自分は完全には燃えつきてはいなかったのではないだろうか。でもしばらくすると今までの妥協という二文字を許さなかった自分も、そんなことを深く考えることはない。人間誰しも青春に悔いを残して生きているんだ。あの四組のカッコイイ柳本を見てみい。と合理的に考えてしまうようになったのです。いつの間にかこういう考え方を覚えたということはクラスで学んだ二年余の日々も無駄ではなかったようです。結局自分はあの〝あしたのジョー〟にはなれなかったのです。

それからまたしばらくたつ間に、さまざまな男子卓球部部室兼卓球場での苦しい思い出が思い出されてきたのです。汗まみれのフットワーク、気合で耐える足上げ腹筋、ひたすら跳ぶうさぎ跳び、慣れたら速い反復横跳び、ランニングでは、スピードあふれる愛宕コース、単調な川沿いコース、坂が勝負の板櫃コース、女も目に入らん西南コース、聞くだけでいやになる金比羅コース、等々。持ち前のず太さと運動神経のよさで何でもぶりぶりこなす菰方、ランニングと筋肉トレーニングに生きる山内、世渡りのうまさとすばしっこさしかない東ら、猛者に囲まれて人一倍鈍く純情な（そこが女学生とOLに人気の秘密）自分がよくもここまで頑張ってきたものだと思うようになり、最近では結局卓球をやって本当によかったと思うようになったのです。

今でもよくラケットを取り出してはながめたり、振ったりしていますが、かってそれは自分の右手の一部であったように感じていたのが、最近は毎日握る時間が減ったせいか、悲しいことに異質なものとして感じられるようになりました。それでもこのラケットは自分にとって木とゴムから成る道具以上に神聖なものなのです。

久々に気合を入れた文章を書いたので、文の構成がうまくいかんかったけどごめんなさいね。（と可愛くせまってみんなの共感を呼ぶ）それはいいけど西武ライオンズは弱い。最後に決まった文章を書きたかった

けど思いつかなかったのでこの辺で終わります。

㊟ 永徳！バレンタイン事件のこと一事も書かんかったぞ。もう勘ちがいして電話なんかすんなよ。

汲泉第二十四号を飾る超大作

「加賀田氏に関する手記」

その1

八組　もりはつを

カガタ君（一年十組→二年六組→三年八組）は、彼を知るもの全てのヒーローである。しかし、その爆笑誘発的天分たるや、とても一言で言い尽くせるものではない。また他の人も、カガタ君を題材に使っているので、ここでは彼の極一部を紹介する。

（その一）ビサイド　ザ　マーク的思考

二年の時である。H教師の数学の時間であった。教師の曰く、「宿題をやってきてないもの手をあげてみい。」ばらばらと手が上り、当然の事ながらK君もその一人であった。「よし、その者たちは自分で気合いを入れれ。」そこで、上げた連中は、その手を自分の頭上に落下させた。ところがカガタ君、こぶしを握りしめ、体中に力を入れ、当に気合いを入れていたのだ。勿論彼には、H教師より特別の気合いが入ったことは記すまでもない。

（その二）パーシスト　イン的執念

文化祭が終って、後かたずけも修了し、皆教室で一息ついていた。ところが、よせばいいのにカガタ君、悪友四・五人と廊下で馬乗りを始めた。まず、一人が台になり、その上に一人飛び乗る、更にカガタ君が飛び乗る、と、「あっ！」遅かった。彼のズボンは裂けてしまった。それにもまして、皆も意地が悪すぎた。当惑するカガタ君を押えつけ、身動きできないのを幸いに、有志二人がK君のズボンを完全に引き裂いてしまった。

一人取り残されたカガタ君、これでは帰るに帰れない。途方に暮れてしまった。しかしそこは友情の森初男（実際はやぶった犯人）のコネで、ムセンブのKK（コガキョウコ）さんに縫ってもらった。その間、カガタ君はパンツ一枚で彼女の側につっ立っていた。イヤーねぇ。

やっとぬえた。でも、KKさん、BFとの待ち合わせであせっていたためか、縫い目がちょっとおかしい。一目瞭然。だからカガタ君、まっすぐ家に帰ればいいのに達（だち）(K)とインベーダーをして帰ったとか。

（その三）ラン　オーバー的轢き逃げ犯

これは、K君の名誉にかかわることですから伏せておきます。

（その四）ディスペアード的境遇

土曜日の四時間目であった。何を隠そうこの時間は、あの、漢文のN先生である。始業のゴング鳴れども、まだ先生はみえない。そこで、**悪と力**のI君は厭がるカガタ君を無理矢理廊下へ追い出し、締め出してしまった。あせるカガタ君、仕方なく非常手段に訴えた。つまり、すきを見計らって窓から中に飛び込んだのだ。しかし、時既に遅かった。飛び込む瞬間を職員室から上ってきたN先生にしっかり見られてしまった。

ほどなくしてN先生やってきて、「今、窓から入ったもの、ちょっと出てこい。」カガタ君仕方なくのこのこと…。「なぜ、あんなことをしたのか。」カガタ君は、ヘビに睨まれたカエルの様になにも言えない。「なぜしたのか。」N先生が再度鋭く問い正す。カガタ君仕方なく、「先生、皆で僕をいじめるんですよ。」（教室爆笑）笑いをこらえたN先生「カガタ、あきらめてくれ。」果して、N先生の名物、げんこつが彼にはまった。続けてN先生の曰く、（悟った口調で）「カガタ、お前、本当にいじめられる運命にあるんやな。」（大爆笑）

（その五）フォール　イン　ラヴ的状態

こんなカガタ君でも発情期はあった。二年の時である。カガタ君は一つ下のYIさんにいかれてしまった。でも彼女は彼の求愛を受け入れてくれない。彼はとうとう堪えかねて、放課後、彼女の教室へ忍び込んだ。それから、彼はなんと、あの……おっとっと。ここから先は口がさけてもいえねえ、いえねえ。（彼の恋愛に関しては、A君とK君とが別欄で詳しく述べていることと思いますのでここでは省きます。）

（その六）イン　スパイト　オブ　ノーギルティ的仕打ち

数学の時間である。まだ恐怖のJ教師はみえていない。そこで先述のI君をはじめとする有志数名が、カガタ君の制服を力でぬがしにかかった。そうこうしているうちにJ教師がやってきた。その気配を感ずるや否や有志らは、己の席へ…。しかし、ぬっせーカガタ君はまだボタンをはめていた。乱れた服装の嫌いなJ教師、教室に入るなりカガタ君へ向い、理由も聞かずに、J教師の年の数と同数もあろうかと思われる多節の竹を彼に惜しみなく降り注ぎ、とどめにつきがはいった。（爆笑耳）しかし誰も彼に同情するものはいなかった。

（その七）イン　ナ　ワード的結論

これは、決してフィクションではありません。ここに掲げたのは、彼の日常生活のごくごく一部です。カガタ君にはげましの手紙を書こう。

（その八）インツー　ザ　バーゲン的追伸

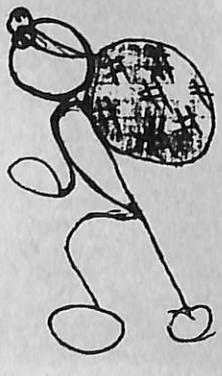
カガタ君、高校生活を愉快にしてくれてありがとう。（友人代表　新町の孫悟空）

（その九）プラス　アルファ

柳本かっこいい！　福富天才！　百恵処女喪失？　祝巨人優勝！　ハーイ！オリビア　竹下景子万歳！　いつもかわいい岡部悦子ちゃーん。

（その十）プラス　ベータ

本当の加賀田君は　こんなまやさしいものではない。（おわり）（はつを）



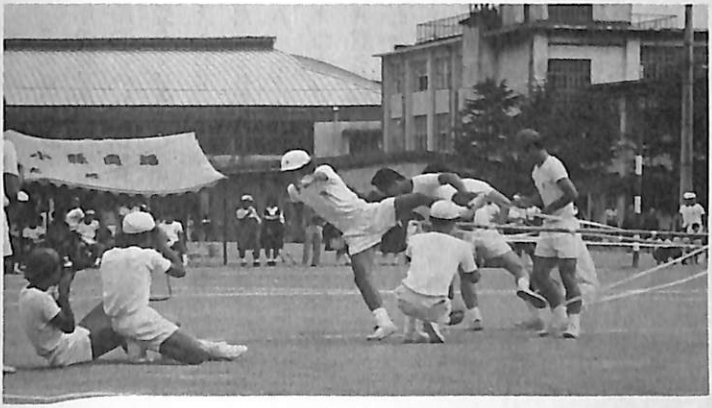
その2

三組　あかみちまさあき

三年x組の加賀田博司（本人の希望により仮名）は、はっきり言って変態である。

あれは去年の一月下旬のことであった。加賀田氏はお目当てのYちゃんのいる一年の教室に出向き、誰もいない教室に無断で入った。ふと見ると体操服が置いてあった。名前を見ると、な、な、なんとYちゃんのではないか。ここで加賀田氏の本能かムラムラと燃え上がり、思わずそれを手にし、じっと見つめた後、ほおずりを始めた。しかし本能はそれでおさまらず次にブルマをおもむろに手に取り、ゴクリと唾を飲むとそれをかぶってしまった。加賀田氏の荒い息づかいが無人の教室に響いた。氏の話によれば、無意識に舌を出してしまったということだ。やがて覆面を取った加賀田氏の顔に悦楽の表情が見え、目はうつろで、口にはよだれがキラリと光った。その後も、ほおずりするわ、匂うわ、ペロペロなめるわ考えただけでも恥ずかしい行為を平気でやり続けた。やがて氏もむすこも満足したのか、ピタリとやめて、事も無げに教室を出て行った。こんな奴が、いていいのか。末恐しくなってくる。不断は、いい子ぶっているのに、陰でこんな鄙猥なことをしている加賀田氏は、変態だ。スケベだ。エッチだ。人間じゃねえ。

最後に、女子の皆さん、体操服を置いて帰るのだけは、やめましょう。もしも置いて帰ったら、翌日、よく確かめて下さい。ほーら、あなたの体操服にも加賀田氏のよだれが……。



その3

三組　掛橋幸喜

昭和54年1月23日㈫

――たそがれの恋――

今日昼休みKとMと図書館に行きました。図書館は暖ったかいし、かわいい女の子もたくさんいるので、僕のように女に全く縁のない男は退屈しません。共通一次は終わったとはいえ回りの倉高生は本当に一生懸命勉強しています。僕らもつまらない雑談などしていましたが、話の内容は当然のごとく女の子のことに帰着していきます。僕は言いました。

「一年生に石野真子ちゃんにそっくりのかわいい娘がおるんやけどなあ。名前はYIというんよ。本当にあの娘はいいなあ。」

その瞬間僕はKとMの目が意地悪く輝いたのを見ました。僕はまずいことを言って

しまったと後悔しましたが、時すでに遅し。KとMはなれなれしく僕の肩に手を回してきて言いました。

「おまえのその切ない想いに今まで気づかなくて友達として申し分けない。」

「まあこういうことはオレたちにまかせろよ。うまくやってやるから。」

というやいなや僕の手から「実戦トレーニング英単語」という本を取りあげて、すばやくその表紙に次のように書きました。

いとしのYIさんへ
君が好きだ！　放課後　卓球部室の前で待ってます。
加賀田　与作

僕は内心喜びながらも顔には出さずに、「な、なにをするんだ。バカなまねはやめろ。」とKとMから本を取り返そうとしましたが、彼らは僕を置いて逃げだしました。僕は必死に彼らを追いました。必死に走ったのですが、僕の百メートル16秒2の鈍足では彼らとの差はひろがるばかりで、ついに彼らの姿を見失なってしまいました。

……

その昼休みのうちにラブレターというかラブブックはYIちゃんのもとに届けられたのだった。

……

5時間目古文、6時間目物理、亀谷先生、木下先生の声が右耳から入って左耳からぬけ出ていくような感じで、僕の小さなハートは高鳴るばかり。

「なんて言おうかな――。Yちゃんかわいいな――。そうだ！渡哲也タッチでせまろうか、いや菅原文太もいいぞ、うん、やっぱり天知茂で行こーっと。」

そんな事を考えているうちに、キーンー、コーンー、カーンー、コーン――　誰が為に鐘は鳴る。僕とYちゃんの新しい門出を祝福しているのだ……。

僕は急いで卓球部室へ行き、新しい体操服に着がえ、「必勝！倉高卓球部」と書いたハチマキをしめました。小春日よりの陽ざしが窓からさしこんでいます。その窓に歩みより外を眺めます。来ました！Yちゃんが来ました！リズミカルなステップを踏んで、レモンの切り口のようにフレッシュな

Yちゃんが図書館の角を曲がり、あと100メートル。僕の耳に真子ちゃんの「日曜日はストレンジャー」のメロディーが流れます。僕は「必勝！倉高卓球部！」と呼ぶとドアをぶち破り外に飛びだしました。Yちゃんあと50メートル。僕は自分に「天知茂、天知茂」といいきかせながら階段を駆けおります。Yちゃんあと20メートル。太陽を背にうけ地上に立つ僕の脳裏に、〝Go for break〟（当たって砕けろ！）という言葉が浮んだ。Yちゃ――ん！

ほおを紅潮させ息をはずませたYちゃんが今僕の目の前に立っている。

僕は天知茂タッチでこう言った。

「お嬢さん、お待たせしました。私が加賀田与作です。お手紙読んで下さいましたね。」

「わたし、これを返しにきたんです。」といってYちゃんは「実戦トレーニング英単語」をさしだしました。僕はそれを受けとりながら、

「返事は、もちろん『OK』でしょう。」

というと、Yちゃんは下を向いて、首を横に振るだけです。

「これはいけない。」と僕は思い話を変えて、

「Yちゃん、僕、天知茂に似てるでしょう」

というと、Yちゃんは言った。

「天知茂というよりは、黒鉄ヒロシね。」

僕は一番気にしていることを言われて、ガーン、となったのですが、しかし気をとり直して、今度は、スポーツマンヒデキでせまろうと思い

「ワーイ　エム　シー　エー」を踊りました。Yちゃんは明らかに軽蔑とわかる目で僕を見ると、

「わたし、友だちを待たせてますから、これで失礼します。」というと僕に背を向けた。

ガ――――――――ン。

冬の夕陽でオレンジ色に染まった僕の瞳の中で、Yちゃんの後ろ姿だけが小さく小さくなっていきました。僕の耳の奥で、渡哲也の「日暮れ坂」がいつまでも響いていました。

なんのために
安らぎに背を向けて
なんのために
ひとり行く
日暮れ坂
ほこりに汚れた
上着を肩に
出合いと別れ
今日もかさねる
ふりむいたらなにもかも
くずれさる
ふりむかずにひとり行く
日暮れ坂

「加賀田氏に関する手記」おわり

GOOD－BYE　霜降り

二組　山田紀代

何も知らぬまま、ただセーラー服を脱いでこの学校に入ってきた。

入学したての頃、私はよく家に帰って泣いていた。何も悲しいことはなかったけれど、はっきりした目標が摑めなくて、無性に焦って何を為すべきかも解からず泣いた。（誰彼となくヤツ当たりなんぞして済まないことをしてしまった。）今も相変わらず私は泣き虫だけど、少なくとも目標のない焦燥の為に涙を流すことはなくなったようだ。もちろん我が身の不甲斐なさには情けなくなるけれど、「どうにかなるさ」てな楽天的な心の寛さ（？）も、「どうにかしてやるさ」てな図々しい根性も身についたように思う。

私は何にでも首を突っこみたがるのが悪い癖で、何か事がある度に何やかやとピョコピョコ飛び回っていた。猫の手よりはましだったかもしれないが、小ちゃなアマガエルの跳ねる姿は他人から見れば滑稽だったろうし、どうかすると甚だ目障りで迷惑だったかもしれない。でも、カエルはカエルなりに井の中を精一杯泳いだ。無理に解って貰おうとは思わない。でも私は、自分なりに頑張ってきたんだと厚かましくも言わせて頂くことにする。もう最後だからね。あっ最後といえば、もう一つ、私、人にひどい渾名ばっかりベタベタ貼りつけてきたけれど、傷ついた人がいると思う。（ごめんね。コックローチ）でも悪気はないのよ。ただ私って正直すぎるのね。

さて、いよいよ霜降りともおさらば。いざとなれば名残り惜しいね。さんざん嫌ったナンセンスな制服だったけど。霜降りから脱皮して、少し広い池に出ていくとしよう。そしてまたゼロから……。

おしまいに、お世話になった多勢の友たち！どうもありがとう。みんな頑張ってね。私も、せいぜい、桜が散らぬように、柳に飛びつくから……。

…青春の終章

三組　伊賀一哉

序章

そう、この三年間の高校生活というものにピリオドを打てば確かに青春の一つの終わり……。

その1　自立編

てれ～っとしとったら、意外に時の立つのっちゃ早いもんでもう高校も終わりやが。どげんしたもんかと思いよっと。（意外に博多弁で迫ってみたり。）そやけんど決してあせってはいけんと思いよっと。人間、辛抱じゃないですが、やっぱり生きるってことは楽しいですよ。（意外に千春の真似して。）

このごろは、あちゃらこちゃらで、大学の不正入試というのが流行しちょって。そんなもんがあるなら大学なんて行かん方がいいんやないかなどと思いますが、やはり、やはり社会の風習と言いますが、何と言いましょうか、そういう一種の流行めいたものに背を向けるわけにもいかず、結局行き着く所は、大学入試突破のためだけの勉強と言う、いやな性格の、－まあ仕方がない

かーなどと、若き青年たちの社会の絶望感にも似た淡い恋心（ちっとも文章になっとらんやないか！）を抱かせるのであります。

その2　立志編

将来どうやって生きていくのかわからないけれど、自分の力を疑いながら何もかも中途半端に生きていくのなら、野に育つ花のように力の限り生きていきたい。（ちょっと言えませんよ。こんなことは。）

終章

〝青春〟って何だろう。今までどれだけ多くの人がこのことを考えてきただろうか。そして今また僕がこの人たちに加わっている。これから後もこの中に入ってくる人がたくさんいることだろう。人類というものがある限りこの問題は、あるのかもしれない。そしてみんな悩むに違いない。そしてみんな明確な答えは、得られないに違いない。もちろん僕にもわからない。だけど、〝青春〟というものに悩んでいる時、その人は、確かに青春そのものだし、青春の中に生きている人なんだ、と言えるような気がする。

あてもなく立ち止まり振り向いたのは
大人なびた君の後ろ姿

忘れない何もかも青春の日を
帰らない日々が駆けぬけてゆく
だけど今夢がある
ささやかな夢だけど
明日があるから

「松山千春『卒業』より」

どうもお騒がせいたしました。

おやすみなさい

青春ZORO

十組　村上ひろし

◎青春パートⅠ　ギャグ編

その1　授業中のギャグとの遭遇

英語＝黒板に〝REVOLUTION〟と書いてあった。俺は「そんなの書くめー」と言った。

社会＝ニュースは太平洋戦争に敗れたことを報じた。A氏「これはたいへんよう。」すると天皇が「もう戦争はせんぞー」と泣きながら言っていた。

理科＝理科はよく理かいできた。物理はもうぶっつり勉強しなくなった。

その2　みな歌のみんなの話

みな歌の準備が始まってみんなあせっとった。それで俺は末永に「すえはながいよ。」と言った。すると秦と松下が共同演技を始めた。松下がまづ下になった。秦は、はた迷惑な顔をしとったけ、みんなはもう止めろ、と言うた。すると井崎は「先がい～先がい～。」と言ってきかんかった。

「平井、ゴミひらい」俺は言った。真子が真剣なマナコで俺を見る。すると、西田が

何か言った。実際、そんな事はムシダった。しばらくして、司は俺に「許してつかーさい。」とあやまってきた。俺は笑って「海老田をいびったらいい」と言った。そしたら俺はふと馬鹿になって「海老田の血液型はABだ」と叫んだ。すると、タケシが「このバチ、タケーシのお」と悩んどった。俺は入口に人の気配を感じて視線をあびた。すると中江が赤面してもじもじしとった。俺は「中へはいれ。」と言った。そしたら菊川が薬を持ってきて「これ効くかー」と言ってきた。折田は「歯が折りた」といってバスを途中で降りた。すると樋口が俺に大きい声で「お前、ギター弾くっち」と聞いてきた。俺は無視しとったら、細川が弦を買ってきてくれたらしい。俺は「その弦細いかー」と聞いた。すると洋介が「お前はようすっけのー」と奴をほめとった。そしたらサイがサイ高のカオして入って来た。「どうしたんか」っち言うた。そしたら「三浦がどっかみよら」と答えた。俺はこの時女子ボーカルの不足を感じとった。すると、片岡が「かたろーか」と言うてきた。山田はジャマだ、と言うし、岩見は「あの娘、イヤミがある」と言う。えらいその話が長くなったけ中山は「なかなかやまんのー」とあくびしながら言った。宮野は「お宮の前で大坪が大つぶの涙を落としとる」と走りこんで来た。そしたら大神が「oh神よ」と祈っとった。矢野は祈りながら「文化祭の時雨が降ったらいややの」と言いよった。『雨に泣いている』俺は口づさんだ。すると高柳が「それ、誰の曲ね」ときいたけ答えた。すると高柳は「そうやった。か柳ジョージとレイニーウッドやったねー」といった。急に俺の身に心配感が襲った。「みな歌きまるかのー」俺は釘丸に言った。奴は「うまく決まるよ」と言ってくれた。俺はHOTした。

（俺もここまではうまく文が続いた。しかしこれ以後の文は、皆にあやまらねばならぬ。）

しかし、俺は急にバーゲンのことが心配になって皆にきいてみた。

「岸本、岸もっとー」「山本、山もっとー」「熊本、熊もっとー」「岩本、岩もっとー」「塚本、塚もっとー」……。無言。

その3　ギャグ編のおわりに

その2で書いたことには、事実は一つもない。そして俺は思った「俺の文章には、むらがみえる」

◎青春パート2　学校生活編

1年生＝倉高に入学した。軍隊にいる心地だった。おもしろない。

2年生＝俺は憧れの男女クラスになった。男女クラスやけ、男が女くらすんかと思うとったらちがう。なんと、某学園出身の俺にとっては4年ぶりのオリンピックだった。最初は驚きのあまり女の子と口がきけんかった。でも文化祭の準備の頃から、少しずつお話しもできるようになって学校くるんがおもしろかった。担任はジロー先生、いつも俺の方をジローと見る先生だ。そしてこの2年1組で、ボーズ、シリ、ミズホ、三平、うなぎ、せいさい、みやざき、坂口、のりあき、池田なんかと楽しくやっとった。特に修学旅行は最高。バスの中で俺は歌った、ボーズもがんばって永ちゃん歌っとった。そしてゲームばっかりしとった。旅行中にSANCTIONがはやった。これは2の1出身の者だけしかわからん言葉よ。そしてこの修学旅行を機にして、クラスは一つになった。変な言葉も流行った。「よかり」とか「しぶい」とか……。とにかく全

てが楽しすぎるほど楽しかった。楽しい事の後には、苦難の道があった。

あんたにあげーた
二年の日々をー
今さら返せとは
いわなーいーわー

――あんたのバラードより――

まさにこの曲である。俺は失恋してしまった。悲しかった。でも……。

そのあとには、村上キャグの基礎となる事件が起きた。二学期のおわりのロングホームルームの時間である。反省会があって、まだ時間が残っとった。それでシリが『あたかも読書』をやろうちいうた。それで、主人公ジロー君の成績の話とか色々あった。もうあと二、三分で終るという時に俺の番が来た。俺の二、三人の友人は、村上ギャグを期待しとった。話は、ジロー君が成績が悪くて母さんが父兄懇談会に呼ばれたということだった。

父さん「母さん、父兄懇談会に行く時の電車はこんだんかい。」

俺は多分そう言った。次を続けようとした。しかし、クラスは爆笑！言うても聞こえんかった。それ以来、村上ギャグはクラスに定着してしまった。俺はそん時以来、渋さを失ってしまった。そして、あっという間に3学期は終った。春休み、みんなで遊んだ。ボウリングしたり、インベーダーしたり……。でもこの2年1組と別れるとなるととてもつらかった。

――実力テストの用紙のうらから――

星の下で

さよならを言わないのは日が昇るから
木々の緑はもう息をふき返してる
それに、お互いに、もう、
悲しみはお疲れさん。
冬の凍りそうな夜に
そんな遠回しな言い方、
男らしくないって
お前が言うかもしれない、
でも星の下で
涙はあまりに冷たすぎる、
だから、さよならは言わない……。

3年生＝受験。でもその前には文化祭があった。

◎青春パート3　ゴエモン編

今、SONYのカセットテープから、俺たちのバンド五右ェ門の最後のあえぎが聞こえてくる。客の歓声が俺の心をジーンとそしてバンドの想い出がテープと一緒に流れていく。

俺がバンドをつくったのは一年の時が最初だった。俺は下手くその固まりやった。そして、メンバーチェンジがゴタゴタあっ

て、二年のとき文化祭に出ようということになった。演奏は下手ながらまとまっとった。メンバーはスガ、タコシ、リョー、コーイチロー、俺だった。無我夢中で練習した。スモークオンザウォーターをヤマハのスタジオで2時間ずっとやったこともあった。そして、奇跡的にもオーディションはパンプキンをぬいて一番でとおった。文化祭の時、俺たちの初ステージ、緊張のみの顔、ひきつって指も動かない。銀バシャ、俺が間違えた。スモークオンザウォーター突っ走ってしまった。俺のギターはリョーの大音量の前に完全に消されていた。ウィングスのハートのささやき、これではみんなが手拍子してくれた。うれしかった。そして、俺の大好きな闘牛士、良かった。ここまでは2年生バンドとしては、まあ良かった。次、ツイストの宿無し、俺たちのバンドでは「弦切り唄」とか「台なし」とか呼んだ。実際、せんかったら良かった。弦が切れた。リズムは合わんかった。おいらは台無し……。この為、俺達は一時不能となった。バンドをやめようとも思った。三ヶ月して、ベースのコーイチローがやめた。そして、マツウラが入った。彼は天才ギタリストの評判があった。事実、最初の練習のときはびびった。ギター3人でベースがおらんかった。この時、前代ゴエモンのリードギターの座をマツウラに明け渡して、ベースをしてくれた。俺にとってはたまらなくうれしかった。そして月1ぺん位で練習した。「三年なってもでるんか?」「さーねん」でも、文化祭近くになって、俺が講堂係の長を、タコシがみな歌のドラムをやるようになってあんまし練習できんかった。そして特に俺がみな歌のボーカルになって声が出んごとなってオーディションの曲目を変更したことはみんなに本当にすまんと思うとる。そんなわけでオーディションはドベだったみたい。本当にゴメン。オーディションが終って恐怖の日が続いた。帰りは9時10時、ザラだった。おまけに俺の声は、世良十フランク永井であのイアンギラン張りの高音は全然出んかった。そんな俺の声をこえ〜ほどみんなが心配してくれた。こん時ほどうれしいことはなかった。北九楽器で最後の練習した時、俺はボーカルやけ歌おうとした。でもバンドのみんなが俺に歌うなと言う。俺は涙が出そうだった。くやしかった。声が何故出んのかと思った。そして、本番になった。声はダミ声だった。悪かった。でもハイウェイスターは歌えた。バーンも銃爪もエリーもロッドの曲もうたえた。マツウラも38度の熱の中がんばった。俺もみんなも精一杯やった。終ったあとみんなはさわやかやった。これが俺達の青春の高校生活の全てだったかもしれない。でも俺はバンドのみんなにすまんと思うとる。みな歌でゴエモン中途半端にやったと思われても仕方ないもん。でも俺は全部精一杯やったつもり……。

テープからエリーが流れる。俺たちの演奏が声がきこえてくる。本当に良かった。俺のゴエモン。

◎青春パートend　みな歌そして今、俺は歌った。

平和で美しい国……

俺は感動した。俺は泣いた。本当にみな歌の一週間やった。ボーカルのみんなの顔が浮かぶ。バンドの顔も、スタッフも…。本当に高校生の限りを尽くした。大道具の苦労、俺はいつも見とるだけやった。幕が降りてタコシと握手した。小学校からの付き合いだけに余計、熱いものがこみ上げてきた。二年の奴らは来年またがんばってくれるだろう。ケサラーどうにかなるさ。

俺の高校生活は、俺に全然似てない松山千春みたいに歌うことやった。今までは。でも村上ギャグが有名になった今からは、ケサラの心を捨てて来年は大学生、絶対。

―青春 ―― 化学のノートより ――

針が刺すかの冷気に
　身にしみる俺の青春
バラ色に憂える果実の
　味はすっぱき君の青春
何が故に青き春　　我が青春　おわり

ある決断

一組　渡邊康雄

それは、ぼくが2年生になってまだ1ヶ月半もたたないときのことであった。

その日は前日の夜更かしがきいていてか、一時間目からすでに睡魔が襲って来た。更に、授業は某歴史ではないか。某歴史の先生のおっしゃられる冗談はあまりにもおもしろ過ぎてもはや冗談ではねえではないか。その上更に席は真中の列の一番後ろとくるではないか。もはや耐えられん……と、夢心地のぼくの耳に先生のお呼びになる声がきこえた。なんと授業が終わるまで前で40分程正座。そしてぼくはその時、心に誓った。(〇×史なんか三年になったら死んでもとらんぞ!!) それからぼくは次の授業から針で指を刺しながら正座の恐怖から逃れるために頑張った。

これは、私が3年生になって某歴史の恐怖から逃れてからまだ間もない時のことであった。

その日もいつものごとく、×〇史の時間は睡魔が襲って来た。素直な私は、感情の赴くままに眠った。少ししてふと顔を上げると、先生がこちらを見つめていらっしゃるではないか、やばい、これは怒られると思いながらも、寝ぼけ顔を引きつらせながら必死にウィンクなどして愛敬を振りまく。なんとかその場はしのいだものの、ほっとするとまた睡魔が襲ってきた。そこで、さっき見つかったのは前に体が傾き過ぎたためと思い、頭を上げたままで睡りについた。すると、頭が前後に不安定にゆれて目がさめた。なんとまたも先生はこちらを見つめられている。今度は、すこし照れながら笑ってごまかしてしまった。それでも眠い時は眠いのだから眠るのはしかたがないなどと、訳の分からんことを考えながらつい、うとうとと夢の中へ……。

と、先生は私をお呼びつけになさって、立て、と、命じなさった。またも愛敬で、などと思って照れながら下を向く、まさか、それが先生の怒りを高めようとは……

先生がおっしゃられるには、今度眠くなったら自分から教室を出ろとのことであった。なんとむごすぎる。その時私は、(共通一次で歴史なんか絶対とらんぞ!!) と強く心に決めた。次の時間からぼくは、スマイルを

目にさしながら教室にとどまるために頑張った。

追　伸

私の回りの人で私を起こしてくれた人々には、たいへん迷惑をかけてしまって、どうもすいませんでした。

僕の受験生活

三組　塩田俊弥

三年になって三組になった。上のクラスになって最初の時、掛橋という奴のとなりになった。この人は、かなり遊び慣れていた人で、僕はこの人の大きな影響を受けるようになった。彼はなかなか成績もよいのだが、それ以上に遊びがよい。彼と付き合い出して、僕は図書館にしばしば行くようになった。僕は勉強をするために行っていたのだが、彼のためになかなか勉強ができない。そして、すぐにインベーダーをしに行くパターンとなってしまった。次に阿部が出てくる。この人もなかなかしたたかな人で、相当に遊び慣れている。僕はこの人にも多大な影響を受けてしまった。良い方面に向ったらよかったのだが、全部悪い方にむかってしまった。何という悪いやつだ。次に中井という奴が出てくる。こいつがまたインベーダーがへたな奴で、一五〇〇点にのるのがやっとだ。彼がプレイしている所に近づくと邪魔をするなと怒る。

「掛橋来るな」というと「ガーン」という音がする。とにかく、こういう環境の中で、僕の受験生活は真っ暗だ。

トロピカルなサウンドに乗せて…
～ボバイ調～

三組　清田徳明

ヘーイ、ヤングエブリィボディ！　エブリィディをハッピーにエンジョイしてる？　アクティブなヤングマンはアウトドアーでニューウエイブにトライしなくっちゃあ。

この間のスクールフェスティバル、いろいろご苦労だったね。小倉のクリアーな空にウエストコーストのホットな風が吹くとき、シャイなあの娘もイタリアンレッドの夕陽のように燃えて、いいつくせないほどハッピーでブルーなフェスティバルだったぜ！　おれも奴のようなフレンドをもってベリーベリーにビープラウドオブさ。

ロスの風が吹きぬけるこの部屋で、この三年間を思い出すと本当にハッピーになれるぜ！　早いもんだぜ、三年間っていうのは。あっという間さ。おれと奴がビックなウエイブ、ビックウエンズデーを追い求めてもう三年もたっちまった。海からナチュ

ラルな風にのせトロピカルなサウンドが聞こえてくるとき、シティ感覚派のおれ達はもうじっとしてはいられない。焼けつくような赤い太陽の中、それにまけじとレインボーに染まっていたあの頃のおれを思い出すと何ともいえない気分だぜ。

卒業して、今度街で出合ったなら、お互い肩をたたくのもいいけどまずジョッキングをやろうぜ。TKS（戸畑の清田の家の前のストリート）からKYS（小倉の魚町の前のストリート）へ続くストレートな道を、ウエストコーストにお似合いなランニングスタイルでイタリアンレッドの夕陽を背中に受けながらジョッキングすると言葉はいらない。すれ違うあの娘も少しブルーに見え、たまらなくハッピーになれるはずさ！

おれの雑記もここまでだがさて今回のエンディングテーマはソルティドッグの香にのったロスの悪い潮風といこう。

SMマガジンはボクらの青春のガイドブックだった……。

むちむちぷりんはボクらにとって夜のバイブルだった……。

辻敬子さんがアメリカで大きく花ひらくとき、ボクらの新しいターゲットは守田佳代子さんだ……。

もう8月、トロピカルムード最高潮のこの部屋の中でこのメッセージを君に送る。

そんな男のひとりごと　PART2[注1]

三組　長瀧研一

5月12日(土)　対東筑戦

決戦の日は来た。中間試験も中日を迎え、グラウンドには誰も応援に来ていない。しかし、この一戦は九州大会出場のためには、絶対負けられない一戦であった。

前半。押し気味に試合をすすめるが、イ[注2]マヒトツ詰めが甘く得点できない。20分すぎ、左ウイング[注3]のクボの前に絶好のシュートボール。しかし、クボはあえなくゴールをはずす。

後半。両者一進一退の攻防を続ける。味方のFW[注4]とHB[注5]に疲れが見え始め、たびたびピンチを迎える。オレはたまらずオーバーラップ[注6]する。終了5分前、右ウイングのジツナリから絶妙のセンタリンがあがる。オフサイド[注7]ぎりぎりで待っていたオレは、すかさず相手バックスの裏に走り込む。ボールがゆっくりと落ちてくる。

「ボレーシュート[注8]しかない。」

オレは思った。ゴールキーパー[注9]が飛び出して来た。打つ。ボールはゴールネットを揺さぶる。と思いきやボールはおれの後方にころがっていった。何のことはない、空振りしたのだ。味方から思わずためいきがでる。このあと、両者決め手なく後半終了。

そしてPK[注10]合戦。東筑が勝って先攻をとる。センターサークル[注11]の中にすわり、順番を決める。ヒラエとジツなりは足をけがしていて蹴れそうにない。一番はキャプテンが行くならわしなのでヤスタケ、以下2番オレ、3番タケナカ(兄)、4番クボ、そして

ラストはナカヤマになった。

まず相手の1番。技[注12]のPKできれいに右すみに決める。GK[注13]のマスオカは一歩も動けない。そしてヤスタケ。期待にこたえて右すみに決める。

相手の2番手も右すみに決める。オレはゆっくり立ちあがってペナルティスポットに向かう。オレの心の中では2つの心が対立していた。

善の心…確実に決めて勝とう。明日は日曜で2試合もあるけど、試験勉強なんかどうでもいいわい。

悪の心…いやいや、ムチはこわいぞ、げんこつもこわい。この際オレがはずしてすんなり負ければ明日は試合がなくなる、試験勉強できるやんか。

どちらが勝ったかと申しますと、これがまた悪の心が勝ったわけで見事にキーパーにとられてしまった。と思いきやキーパー[注14]が動くのが早すぎてやりなおし。2回目は流石に右すみに決めた。

相手の3番手も確実に決める。タケナカはすばらしい力[注15]のPKで左に決める。相手の4番手もしっこく右すみに決める。クボもこれまた力のPKで左すみに決める。緊迫した好ゲームとなりついに最後の5人目。相手はまた右すみへ。5人連続だ。この間キーパーマスオカはとうとう一歩も動かなかった。(あとで聞いてみたら、みんなヤマを左にはっていたそうだ。しかし、実際のところ、ほんとうに動くことができなかったのを誤魔化したのではないかという説もある。)わがチームの5人目ナカヤマにプレッシャーがかかる。はずせば負けだ。しかしそこは百戦練磨の経験をもつ彼だけに、ずばりと真中に決めた。とうとうサドン[注16]デスマッチに突入。相手は左ききをもってきた。プレッシャーのためかどことなくぎこちない。見事にはずす。さあ決めれば勝ちだ。こちらの6番手は次期キャプテンを嘱望されているセグチ。ここ一発のために温存していた秘密兵器だ。非常に考えたPKを右すみへ。その結果6−5で小倉が辛勝。

苦しい試合だったが勝ったのでくつはなかった。宿敵東筑を破ったオレ達に残ったのはさわやかさとムチとげんこつだけだった。

ビギナー及び女性のための用語解説

注1　PART2…PART1は'78年号。

注2　イマヒトツ…かの有名なコモカタ語録の1。他に「オレにも何か言わせんか」等がある

注3　ウイング…ポジション名。一番前の外側に居る人。

注4　FW…フォワードの略。

注5　HB…ハーフバックの略。

注6　オーバーラップ…バックスが攻撃に参加すること。うまい人がこれをすればすばらしいが、へたくそがすればみえみえエゴのプレイ。オレの場合当然前者に入る…わけがない。

注7　オフサイド…これを説明しようとすると原稿用紙10枚くらい必要なので、どうしても知りたい人はルールブックを見てください。

注8　ボレーシュート…空中に浮いている

ボールをノーバウンドで蹴るシュート。決まればよいが、失敗すればこれほどみじめなものはない。

注9　ゴールキーパー…ゴールの番人。

注10　PK合戦…注7に同じ。

注11　センターサークルの中にすわり…PK合戦のときは、両チームともセンターサークル内にすわり、蹴る人以外は動いてはいけない。

注12　技のPK…スピードではなくてコーナーワークで勝負しようというセコイといえばセコイPK。ヤスタケが得意中の得意とする。

注13　GK…ゴールキーパーの略。

注14　キーパー～早すぎて…PKの時キーパーはキッカーがボールを蹴るまでゴールライン上に両足をつけて立って動いてはいけない。もし蹴る前に動いて、しかも蹴ったボールがゴールインしなければやりなおし。

注15　力のPK…コーナは少々甘くてもスピードで勝負するPK。キックに自信のある者がする。

注16　サドンデスマッチ…ゴルフ用語にもあるが、5人蹴り終わった時点で勝負がつかない場合、相手一人ずつ蹴って勝敗を決める方法。

ついしん…一、二年の皆さん、そしてかわいい2人のマネージャーさん、長い間御苦労をおかけしてすみませんでした。どうか合宿はがんばってください。

ついしんのついしん…この文章を読んで感激した人はサッカー部に入って下さい。とくに一年生の皆さん。

北風と太陽にまみれたクラブ活動

九組　中山亮治

銀河系のはるか遠い宇宙でのお話。ここドンバスラブ星雲では第二十四回トッペンラト大会が行なわれていた。まあ、地球で言えば、オリンピックみたいなものである。

その大会の最終日、宇宙一才能のある男を決める種目の決勝が行なわれていた。最後に勝ちのこったのは、サン星人とノースウィンド星人であった。

「さて、毎年決勝戦に何をするかは、予告しておりませんので、発表しましょう。今この会場から程ない所に、他の銀河系とか言うところから来た『ヤンマート』と呼ばれるオンボロ船があります。その船を早く破壊した方の勝ちとします。」

サン星人とノースウィンド星人は、一目散に「ヤンマート」に向かったが、やはりノースウィンド星人のクラウド号の方が速く到達した。

「ムハハ、いただきだぜ。それ、コールドタイフーンをくらえ!!。」

こちらは、「ヤンマート」いや、正確に言えば、ヤンマートの艦内。

「うあ、ものすごい風だ。舵がきかない。古代、いや後醍、どうする。」
「原因は何なのだ。」
「どうやら、右上方の宇宙船からだ。このままでは船が凍りついてしまう。」
「デスラーだな。よし、波動砲準備。」
唯一の無敵武器の波の渦が走った。
そして、こちらは、ノースウィンド星人。
「そろそろ、ばらばらになったかな。うわっ、なんだあれは、船体瞬間移動しろ。」と、からくも逃れた。横で、見物していたサン星人が、
「ムヒョヒョヒョ。無理だったようだな。今度は、わしの番だ。超越サンフラッシュ発射!!。」
そして、またヤンマートの艦内。
「まぶしい。ものすごく熱い光だ。船が溶けるぞ。」
「ちくしょう、デスラーめ。波動砲は使えないのか。」
「だめだ。今使ったばかりだから、エネルギー充てんが間に合わん。」
「しかたがない。ワープしてこの場をきりぬけよう。」
またまたこちらはサン星人。
「ムヒョヒョヒョ。そろそろどろどろに溶けたころだろう。フラッシュをやめろ。やや、なくなっておるぞ。どうだ、これでわしの勝ちだ。」
「まってくれ。残骸が見あたらないじゃあないか。」
「そういえば、しかし、現にないのだからわしがやったのだ。ムヒョヒョヒョ。」
サン星人は、素直に笑えなかった。なぜなら爆破反応がなかったからだが、あくまでも黙り通した。それで、人のよいノースウィンド星人は、負けを認めた。
(ここでコーヒーでも飲んで
一休みして下さい。)
さて、会場に帰って、サン星人が誇らしげな顔をしていると、場内アナウンスが、
「発表します。サン星人が爆破したと思われていた『ヤンマート』は、二万キロかなたに再び現れました。よってサン星人は的を逃しましたので、ノースウィンド星人を優勝とします。」
さっきまでいじけていたノースウィンド星人は、飛び上って喜び、腰をぬかし、あごをはずして笑った。大歓声が場内をうめた。
この大歓声も、もはや聞こえぬ二万キロかなたのヤンマートでは、
「しかし、変な敵だったなあ。古代、いや後醍。」
「ああ、ものすごく冷たい暴風に、今度はぎらぎらの熱光線で……。」
「そうだ。地球へ帰ったら、ひとつこれをもとに童話を書こう。俺、童話を書くの趣味なんだ。」
「なかなかいいじゃあないか、イソップ。ううんと、『北風と太陽』っていう題ではどうだい。」
「うん。まず、マントを着た旅人がいてさあ……。」

暗い宇宙に、二人乗りの農業耕運船ヤンマートは、星を耕し終えて、帰路を急いだ。

〈おしまい〉

最後まで、あきもせずに読んで下さった方、途中とばしてここだけ読んだ人、全く無視して、次の人の文にページをめくったヤツ、どうもありがとうございました。

☆　☆

しっこいようですが、まだ書かせてもらいます。わいは、ブラバンでホルンをブリブリ吹いとります。「ホルンちゃ何か」と思う人も多々おると思いますが、あのデンデン虫のバケモノのような格好をして、ブラバンの縁の下の力持ちで、大切な和音を担当し、独奏としてもすぐれておることを、最近わいも知りました。ブラバンといえば、即、マーチですが、実はわいはマーチが大の苦手であります。なぜかというと、マーチとなると決まってあの恐怖のリズム打ちで、「ウンパ、ウンパ」を最初から最後まで刻み、しまいには気が狂ってしまいます。

わいらにとって、野球の応援はつきものであって、足上げ腹筋もおぞましい応援練習の時も、前方から、ゆうゆうと眺めること（さしたる深い意味はない）ができます。ただ一つ、欠点があります。皆が歌っている時わいらは吹いている、そうです、歌わないから歌詞を忘れてしまうのです。この事実は以外に皆知らないのではないでしょうか。ああ、こわ。

ほいでもってわいは、副指揮でもあったので、講堂の上方でしらじらしく棒を振っておりました。これでこわいのは、繰り返しの回数を数えることです。特に逍遙歌は六番。文化祭最後のわいにとっても最後の逍遙歌斉唱の時、回数がわからなくなりました。前にも書いたように、歌詞は頭にありません。これは一つのカケでした。「ここや」と思って止めました。当たりました。鼻血が出ました。よかった、逍遙歌覚えよっと。わいは、ブラバン生活を一生忘れまへん。

十組　浜田寛昭

なんというか、とり返しのつかない三年間を世俗の雑事にまぎれてアホのごと過ごしてしまった、という気持ち。どうしてこのようになったのかと考えてみると……

その1　科学部に誤ってはいってしまった。

本人は別にはいろうと思ったわけではないが、当時三年の某先輩から死んでも嫌な〇〇部に入部させられそうになって、必死の逃げとして適当にはいったのである。こういう動機は……やはりよくない

よ。この入部はやがて文化祭でのアホの子事件、平尾台での蚊攻め、長行ホンダ事件等々ひどい結末につづいたのであった。

その2　タコベーとの出合い

なんといっても二年生からのぼくの生活を変えたのはこの男である。二年生になって席が隣になったのがケチのつきはじめであった。授業中この男が珍しく起きているときには、なぜかこの男のさそいにのって授業を1/4程聞きのがしてしまっている。それにもましてこれがあの文化祭で恥をさらした「悪血鬼」のはじまりであった。初めはバンドを組むつもりなど全くなく、このタコベーとワテとバンダとハゲの四人でキシャナイ音をだして自己満足を覚えていた。ところがこれにいつもスマイル（うわさによるとニヤケだそうだが）のチャンポンと危険が危い停学寸前、が加わり六人となったとき止めとけばよかったのに、「文化祭の個人発表に出よう。」という横着な夢をもったのである。（後にこのタコベーはジャンケンで負けて悪血鬼を去り、コップ倒しの十八才でも幼稚園の？キンギョがはいったのである。）

その3　文化祭個人発表

ただでさえいそがしい中をぬけまくって、（関係者のみなさんごめんなさい。）練習に通ったのだが、我が悪血鬼の中で音楽センスのある男はハゲひとりしかおらん、というのであるから……この先はいうまでもないと思う。しかしどんなに間違ってもそんな事は日常茶飯事の我々は気にも止めずにごまかしを駆使して、何とか無事に個人発表を終え、（さくらでテープを投げてくださった方、ありがとう！）後に残るのは六人の間の金銭関係のみとなった。（キンギョ、金払え！）。

しかし、この三年間を振り返って思い出される事が山程ある、ということは、まあ結構充実していたんじゃないかなあ。

尚、この文章には特別な人名がつかわれていますが、本名を知って笑ってやろうと思われる方はどうぞぼくの方まで。

未来永却波音不帰欣求不得
又は
眠けを醒ますねりはみがき

四組　坂本　浩一

人間は、その発展過程をなす上で、一種の人間原初的形態への回帰というものが生ずる。ドイツのクラフト・ワークマンも、その著書「アウトバーンとトランス・ヨーロッパ・エキスプレス」の中で、こう述べている。「マン・マシーンは過去へのイルリヒト（狂光）に過ぎない。人間が人間たるには、もはや機械を必要としない。ただ、一握りのソフト・マシーン――エゲ・パシャジが必要なのだ。」ここで言うソフト・マシーンとは、従来の金属機械（ハード・マシーン）と対応しており、自然により生まれ、自然により増加する一種の過程を言っていて、又、エゲ・パシャジとは麻薬のことで、それを嗜むことが、人間原初的形態を一番よく引きだすことができる、という意らしい。そこで、このハード・マシーンだらけの世の中では、どのようにして原初的形態がなされているか、一例をあげて述べてみたい。その一番顕著なものは、格闘技――特にプロレスである。

プロレスと聞くと何を連想するであろうか。流血、反則、野蛮。このくらいならまだいい。八百長、台本のあるスポーツ、サラレス・・・。その所以は何であろうか。ここで忘れてならないのは、プロレスとは見せるスポーツだということである。つまり観客にアピールし、それで人気を得てはじめて一流レスラーとして認められる。ここでの観客にアピールするとは、つまり観客を引き付ける要素を持っている、ということだ。その中身はというと、たとえば、覆面をつける、ドイツやロシア系を名のるハデなラファイターになる、などがあるが、最も大きな比重を占めるのは、試合内容 ― 特に技に関することであろう。近年プロレスの技は多様化してきた。昔だったら腕固めてギブアップとかボディスラム一発でフォール勝ち、中には胴締めだけを七時間やり、それで引き分けなどと単純な技で勝つケースが多かった。が、時代が進むにつれて、寝技から立技へ、そして立体的技へと技の範囲が広がっていった。それはミル・マスカラスなどの人気を見れば一目瞭然である。だが、そうするあまり、レスラーがオーバーなアクションを取ることが多くなった。――これが、プロレス八百長説の権化と言っても過言ではない。

倉高の先生方の中には、なぜかプロレスのことで小生の名を挙げたA師などが主でップの実演をされたK師、レスラーが毎日試合すんのは、手ぇ抜いて試合しとるけやとおっしゃったC師、面接で昨日の試合の結果を聞いたI師、授業中二回もプロレスのことで小生の名を上げたA師などが主である。生徒の中にも、俗悪空手漫画に毒された絵咲や境など、実にアンチプロレスファンが多い。これらの人々は、プロレスに関して断片的知識（ブッチャーが流血したとか、猪木はいつも勝つとか）しか持たずそのため、プロレスは八百やという固定概念が形成される。それが崩壊するのを恐れるため、プロレスをささいなことで中傷する。その比重の多きいのが、技に広く言えばレスラーの強さである。レスラーは頑丈である。それも、ボディビルした者のようにゴテゴテしたみかけの筋肉ではなく、激しい練習によって得た筋肉 ― 内面的力に富んだもの ― である。それがあればこそ毎日試合もできるし、高度な技もどんどんくり出せるようになる。ちなみに、毎日腕立てふせ千回、足の屈伸を三時間ぶっ通しでやれば、レスラーの体に近いものができあがる。このような体だからこそ、様々な攻撃を受けても大丈夫である。が、やはりレスラーも人の子、試合のせいで死んだり大怪我をしたりする。オックス・ベーカーのキックを受け試合後に犯本と節井の二人が心臓発作で死んでいるし、B・オースチンのバイルドライバーで首の骨が折れ句麗崎が死んでいる。ボディスラムの受け身をとりそこねて下半身不随になった負野、S・ハンセンのラリアートで首の骨を折り、それが元で引退した守など枚挙いとまない。なお、漢字書きしたのは仮名である。K師の説明されたニードロップでも、騎士本の耳がそぎ落されている。この技はしてみる

と、けっこう難しいものである。ためしに五十㎝の高さから地面へしてみるがよい。必ず受け身を取る方の足が先に着地してしまう。この高さでさえこうだから、まして3mの高さからすることは並大抵のことではない。しかも、必ず成功する保障はない。だから、受け身足に四割くらい体重をのせる。そのため、素人目には、あまりきいてないように見えるのだ。閑話休題。プロレスで、このようなことが起こるのは稀である。それは、正規のルール、ある程度柔軟性のあるもの、にのっとったスポーツだからである。レスラーが勝とうと思えばそれこそ相手の腕なり足なりのみを攻め、折ってしまえばいい。ゴングと同時に凶器で一突き、そしてフォール勝ち。が、それでファンは満足するだろうか。ここでプロレスとは「見せるスポーツ」だ、というのが大きく伸し掛かってくる。これは、丁度、個人発表で、D・バーブルをやっても通るが、カンやJ・ケイジなどをいくら上手に演奏しても落ちるというのと同じだ。プロレスのプロモーターも商売人である。ゴチゴチのセメントファイトをするレスラーより、ファン受けする者を主に使うのも人情である。レスラーも、人の骨を故意に折ってしまうのはいやなものである。それを平気でやるのは狂人である。いくらリングで荒れ狂っても、リングをおりると温厚な紳士であることは多い。荒れ狂うのは広島ファンだけでよい。が、ファン受けするという意を取り違えて、オーバーアクションに走る者が多い。ファンもそれを取り違えて、オーバーアクションこそがプロレスと思っている者が多い。あの猪木・アリ戦のときもそうだった。これを見た者の中でどれほどの人が、試合後、アリが猪木のキックのせいでエレベーター内で倒れ、米国へもどっても何ヵ月も病院通い、それが引退の一因となった、ということを知っているだろうか。が、この試合は、ショーマン的要素のかけらもないプロレスのある西独では、凄まじい反響を呼んだそうだ。国民性の相違とでも言うべきなのか？

ファンを満足させる、これがレスラーの最大使命であろう。しかし、オーバーアクションしなくとも、真のファンはいい試合をすれば満足する。例えば、西独で猪木とローラン・ボックが戦ったとき、スープレックスや肘打ちの一つ一つが、凄まじい重みを持っていた。だが、派手な技はこのくらいで、あとは寝技が主であった。しかし我々は、非常に満足した。なぜなら、これこそ現状プロレスの忘れかけていた、ストロングスタイル・レスリングだったからだ。そこで、小生は敢えて言いたい。今、必要なのは、うわべのみの見せる要素に重きを置くのではない。古典的ストロングスタイルと見せる要素（オーバーアクションではない!!）を加えることだ、と。

プロレスとは六m四方の囲みの中で、男達の演ずるドラマである。しかし、その中には、藤田まことのような一流俳優が演ずるのではない。レスラーと観客とが一体となって、人間の失われていたロマンを見つけ出すのだ。人間原初的形態の相反する二項目――闘争とロマン――がどのようなものか、発見の手びきとなるのがプロレスであり、それを見る者すべてである。

ついにやってしまった。ここで本音を言いたいと思う。格闘王猪木、新日プロ一番全日コミック、国プロこんにゃく。九スポたまにゃ本当のことかけ、阪神ガンバレ。これでやっと、文化祭ショックから立ち直れるか!?

九組　三浦慎一

Ⅰ　長恨歌

教官重学思神童　御宇多年求不得
三浦家有男初長成　学在霧丘人未識
天生学才難自棄　三月選在小倉校
廻眸一笑百点生　四百俊秀無顔色

後略

このとうりだったらなあ

Ⅱ　鉄則その一「抜け駆けはするな」

修学旅行で、男子クラス二年目というハンディをものともせずに、宿で女性とトランプをしたことが、思い出される。

「大貧民」をやったけど、最初、異邦人の悲しさ、大貧民の指定席であるところの床の上に追いやられた。背後から、「なん、あんた、いっつも椅子がないんやねえ。」とせせら笑う奴がいた。（ＫＩＹＯさん、あんたのことです）これは、自分の情報収集能力の限界を知らずに、物事を一面的なとらえ方をしてしまう人類の愚かさの実例なのだ。

俺は、何度も椅子を確保したんだ。しかも大富豪になったこともある。嘘だと思うなら、知る人ぞ知る市山の憧れの君に聞いてみろ。そういえば、あの時あいつは隣のテーブルに居た。こっちに入りたくてたまらなかったろう。ともかく、部屋に戻ると級友から冷たい目で見られ、一番薄い蒲団を割り当てられてしまった。翌朝はのどが痛かった。

Ⅲ　鉄則その2「何事も仲間と共に」

二年の時、茶道クラブに入った。その前の年も男子がいたと聞いていた。初めての日、作法教室に一歩入った途端、ガァーン。な、なんと、俺一人だった。先輩、同級生はもちろん、後輩にまで冷やかされる仕末。まあ、三年間男子クラスの俺には、いい体験だった。可愛い子もいたし。

Ⅳ　鉄則その3「漢文はガイドを使うな」

ガイドを使い過ぎて、冒頭の漢詩を訳せ

ない方のために、訳も用意しております。
御用命下さい。

十七歳

七組　二村浩史

幼い頃
どうして目は丸いのかと思った
夜　便所に行くとき　おばけが出なければいいと思った
わるいことをするとばちがあたると思った
絵本をみて　自分もおかしの国へ行きたいと思った
かわいがっていたひよこが死んで　涙を流して泣いた
母がこわかった
そして何も知らなかった
自分は何か忘れものをしてしまった
時計の針の元に忘れものをしてしまった
ある日自分は子供でなくなった
自分に何かがおこった
そしてあの日　自分は青年になった
恐かった
つらかった
そして悲しかった。
自分は人生の裏をかいまみてしまった。
今　十七歳
何かちがう
あの頃と　何かがちがう。
人をだますことを知り
疑うことをおぼえ
悪いことをおぼえ
何かがちがった。
宇宙旅行の夢は消え
ネバーランドの夢は消え
かぼそい光が消えてしまった。
自分はかわった
あの日から　かわった。
もう王子様にはなれない
ねずみの国へはいけない。
汽車にのったあの喜び
デパートへ行ったあの興奮
すべて未知への旅だった
すべてが過去の夢だった。
今　自分は着実に大人になっている
金と　名誉と　快楽の　どろにうずもれた
みにくい大人に。
もっと子供でいたかった。
あの時
時間をとめてしまえばよかった。
今はただ　ガラスの向こうに淡い追憶を

求めるだけ
許されるのはただそれだけだ。

できるなら
昔の世界へ
何も知らなかった世界へ
夢と空想のあった世界へ
もう一度　いってみたい……

しかしできない
できっこないんだ！
ああ
俺は自分が憎い！
みにくい大人が憎い！

今度生まれてくるとき
自分は　かもめになろうと思う
空をとぶ　かもめになろうと思う
線の海と　青い空と　大きな白い雲の下で
子供のように
自分はいつまでも飛びまわっていたい。
だから
かもめになりたい……

あいうえお讃歌

あらたなる　希望にもえる　わかものよ
いのちある　この世の中の　いきものよ
うれしいか　俺はうれしく　はねまわる
えがおして　今をはしって　つきすすめ
おれたちの　時代はそこに　まっている

アカイアの　木陰にうもれ　ふたりして
いっぱしの　恋もしたいぜ　十七さい
うっかりと　虚しくすごし　すぎた日は
えいえんに　戻らないから　気をつけな
おいかけて　何かをつかめ　わかものよ

あさっても　明日も今日も　じんせいよ
いまのうち　やっちまいな　そんなこと
うつろなる　人生なんか　ふっとばせ
えらくなり　金もうけろと　だれがいう
おれたちは　ばかにするなよわかいんだ

続続続続続続続坊っちゃん

四組　縄田　剛
筆名　冠部右狂

第十六号から始まったこのシリーズも、ややマンネリ気味。そこで、我こそが救世主としてこの事態を打破してくれようぞ。乞う御期待！

その一・「夜の訪問者」

日々をだらしくすごしていると、ある夜下宿に美しい若い女が坊っちゃんをたずねてきた。聞くと、名はファラ＝フォーセット＝メジャースといって、実はキヨ（知らずんば原本を読め）の孫娘だと言う。髪の長い女で、体つきは、まさしく坊っちゃんの好みであった。

例の如く、坊っちゃんはファラを食事に誘った。夜のネオン街を徘徊したあげく、二人は「甚六屋」という小料理屋にはいって、杯をかわした。やがて、坊っちゃんが少し酔っぱらうと、ファラはこっそりと、バッグから白い薬包を取り出して、手の中に隠した。坊っちゃんはそれを見逃さなかった。

「お前はスラッシュの一味か。」

ファラは正体を明かした。
「その通り、よくわかったわね。私はスラッシュの三番手ファラ、命はもらうわ」
内心ひそかに期待していた坊っちゃんが甘かった。
「やはりそうだったのか」
その言葉が終わらぬうちに、ファラの十六文キックがとんだ。ひらりとかわした坊っちゃん、ピルビン酸スパイク。まともに受けたファラは、必死にアミラーゼチョップで反撃、負けじと坊っちゃんがダリウス光線を発すると、たまらずファラはもんどりうって転倒。ここぞと必殺ガウス落しがさく裂し、ファラは破れ去った。坊っちゃんは意気揚々として下宿に帰って行った。

その二・「旧友即新敵」

翌朝、坊っちゃんは登校するとすぐ校長から呼び出された。「いやな予感がする…」などと言いながら、坊っちゃんは校長室のドアをあけた。そこには、見慣れぬ中年男が立っていた。
「紹介しよう。延岡から赴任してこられた春殿先生だ」
その男は、坊っちゃんを一目見るなり笑い出した。
「ハハハ、忘れたのかい、坊っちゃん。僕だよ。『うらなり』だよ」
「エッ、お前『うらなり』か!?」
どう見ても中年紳士の態である。とても、あのひ弱な人間には見えない。あ然とする坊っちゃんを尻目に、春殿は話を続けた。
「あれからもう数年が過ぎたが、あれ以来僕は人一倍頑張った。そして、人に認められ、人並みの生活ができるようになったのさ。思えば長い苦しみの日々だったなあ」
坊っちゃんは思わず涙した。そして、労をねぎらう意味で、その夜飲みに誘った。
酔いがまわって舌がもつれだした坊っちゃんを、「仕様がないなあ」と言って春殿は近くの公園まで背負って行き、放り投げるようにして降ろした。坊っちゃんはいつしか眠りこんで、まだ起きない。「ムヒヒ」と不気味な笑いを浮かべた春殿は、仰向けになって転がっている坊っちゃんの心臓めがけて十字架のクイを打ちこもうとした。
しかし、坊っちゃんは本当に眠っていたのではなかった。春殿の挙動に不審を抱いたので、眠っているふりをしていたのだった。そうとは知らない春殿は「死ねー」とばかりにクイをふりおろした。坊っちゃんはそれを素早くかわして立ち上がった。
「馬鹿め、おれは不死身だ。きさまもスラッシュの一味か」
春殿はニヤリとして言った。
「そうさ、スラッシュ第七部隊長のシピンだ」
「何、シピン!?」
坊っちゃんは知っていた。シピンはスラッシュでも一、二を争う殺し屋だったのだ。と同時に、彼の弱点をも知っていた。坊っちゃんは、コマツボールを内角いっぱいに

投げこんだ。が、シビンは動じなかった。
「まぬけ。いつまでも同じ手が通用すると思うか。それ、お返しだ。」
ピッチャー返しが坊っちゃんの顔面に命中した。自慢のマスクに傷をつけられて怒った坊っちゃんはインシュリン光線を放った。最近糖尿気味だったシビンはダメージを受けた。坊っちゃん、ここぞとアンドロメダキック、シビン必死にオリオンパンチで防戦、スキをみてエガワじめで反撃に出た。が、シビンの意識はもうろうとしていた。坊っちゃんはチャンス到来と必殺ガウス落しをお見舞いした。勝負あったかに見えた。ところがところが、シビンにはクーロン返しという切り札があった。モロにくらった坊っちゃんは「ウッ」と叫んで気を失った。

その三・「恐怖の地下室」

気がつくと、坊っちゃんはイスに縛りつけられ、暗い倉庫に閉じこめられていた。左腕のデジアナからナイフを取り出すと、坊っちゃんはロープを切った。

真暗闇の中を手探りで動きまわった坊っちゃんは、思わず何かにけつまずいた。デジアナのライトで照らすと、それは古びたミカン箱だった。中には『ちゃいなたうん』と書かれた書類がはいっていた。
「そうか、ここは『ちゃいなたうん』の地下倉庫なのか。」

その時、天井から光がさしこんできた。見ると、そこにはシビンがいた。
「気がついたかね。それでは死刑を執行してあげようかね。ウヒヒ。」
銃弾の雨が降り注いだ。しかし、坊っちゃんの頭は実は防弾アデランスだった。ついで、どこからか毒ガスが噴出してきた。さすがの坊っちゃんも絶体絶命だった。すると、何を思ったか坊っちゃんは逆立ちをした。そしてポツリと言った。
「エネルギー充てん百二十%、発射！」
坊っちゃんは素早くアデランスをはずした。まばゆい光が放たれた。それは、奥の手のPL光線だった。見事、逆転に成功した坊っちゃんは『ちゃいなたうん』から脱出した。シビンは後を追わず、次のチャンスを待つことにしたのであった。（終）

余談・決局マンネリから脱却できなかったのら。すまんのオ。さて、この原稿を書いていたら、近鉄のマニネルがアゴに死球をくらって大ケガをしたそうだ。彼には悪いが、これで南海ホークスの優勝が決まったようだな。なに、西武？知らんなあ、そんなの。そう言えば、昔、西鉄とかいう強い球団があったっけ。よかよか、これからは南海の天下じゃ、ガハハ…。（やっぱり無理かな）

けれども、ここで引き下がっては、男がすたる。二年になり、担任のドラヴィダ先生の目をくすんでは試験場へ行き、総額ウン万円をかけて中型二輪をとった。

倉高にはもう一人単車八〇ノと言われるオトキチがいて、横着にもそやつが一番に免許を手にしていたのだ。

しかも奴と俺は同じクラスであったために体育の時にはガッツ高木先生から、たいへんかわいがられてしまった。

奴は現在マイナス〇点でもうじき免停になってしまう。ちなみに俺は減点ゼロ。—よかりっちゅうことよー。

◎標語① 気をつけろ！赤いバイクとあの煙。

（PART－Ⅱ）

三年間で一番おもろかったんは二年九組のときやのー。

文化祭では、フィーリングカップル5対5に出てなぶり者にされ、「みな歌」では、アタックNo1で恥をかき、バスにも乗れんくなってしもた。

やけど本当おもろかった。おもろい役者がそろっておった。

ホーケイ（北条）を中心としてタバ〇山・センカ岸本・どんぐり上田・女子のKさんと双子だと噂された〇×神屋・常にくだらん質問をしてバカにされたブタイラ。持ち前のカワユサで我クラスの野郎どもを圧倒した。ちんこま、奴は顔にイン〇ンができたというすごい人間であり、家が産婦人科のためいつのまにか治していた。

あと、せっかく紹介してもらったS女学院の女の子に30分でふられたナルサワなど。

※注 奴は後々「父兄ショーカン」のNと呼ばれるようになる。しぶい！

テニス部三年でただ一人レギュラーになれなかったという伝説の玉ひろい富浦、なぞの中国人、マンコーシェン馬場。なんといっても奴は、一年間に一万五千円で三台の新しい自転車を乗りついだ国土無双的男である。

他のクラスの奴では、倉高の生んだ世界のスター鉄人28号の松下とか、10番線の倉高生と言えばすぐわかるN、今だから言えるが、〇〇を飲み急性アル〇ール中毒となり、医者にかつぎ込まれたK、糸引きのMと言えば、泣く子も黙ってしまう。長いアダ名を省略されたサブ、フェラ。いつのまにか定着してしまったコメオ。みんないい

酷暗（こくら）高校の思ひ出

六組 中林敬一朗

（PART－Ⅰ）

何とかかんとか試験監督の目をくぐり抜け三年生となってしまったのである。

ここまで来るのにいろんなことがあったのー。まず、入学してすぐ人のせんことしちゃろうと思って原付の免許を一番にとった。

しかし、学校に乗って来たのを見つけられ生徒指導のT先生からすばらしい御寵愛をうけたのであった。

奴ばかりなのだ。

（ＰＡＲＴ－Ⅲ）

俺はラグビー部であった。だが活動は実質二年と少ししかやってないことになる。

特にテスト前と学年末には、大変迷惑をかけてしまった。（花田先生ごめんなさい。）

俺の思い出は、やはり80ｍ独走トライと、県大会出場である。県大会では、第一シード火山爆破のＴヶ丘と当たってしまい、健闘むなしく78－0でまけてもうた。（実は前半、まぼろしのトライが一つあったんぞ！）

（ＰＡＲＴ－Ⅳ）

三年になると、なっなんと悪夢のような男女クラスになってしまった。

理系の女は恐ろしいでー。その上に女が23人もおりやがって、中には一人ぐらいカワイイ娘入れてくれてもいいやんか！

男にしても○○5人組がおるし、やりにくい。しかしこの少数男子の中にもおもろい奴は一杯おる。弦本と言う奴、（別名ベクツル・しり・よかりと言われておる。）こいつは、本当にいい奴である。見かけ通り、○好きであり、すぐ俺をロウカへおびき出し、その手の話をおっぱじめる。すると大体、4組より山手ファミリーの主、ＳＭ野上がやって来る。

奴は総務部長と言う力を100％利用し、現在もその余韻を使い日夜やりつづけている。

◎標語② 権力は明るい子孫のステップに。

（ＰＡＲＴ－Ⅴ）

来年、またこれを書くようなことになりましたら、みなさんどうか捨てないで読んで下さい。

－メモランダム倉高－

よかり。シィー。インベーダー。ステファニー。Ｋ様。紀代ちゃん。山手ファミリー。

紅葉した成績表。てれんでくれ。売店のお姉ちゃん。事務の姉サン。真理ちゃん。ＴＯＫＩ。最後に一言、安和のどろぼう！

先生へ

校長先生へ。Ｓ先生はいい先生です。あの時はちょっとした休憩だったんです。

Ｙ先生へ。奴はナルサワでもナルセでもありません、ナリサワ君です。

Ｊ先生へ。Ｙ君がかわいそう。そして僕はもっと……。よかり！

Ｇ先生へ。ベルは鳴りましたよ！

Ｈ先生へ。それより近づかんでくれ。Ｓ、好きなら好きっち言え！

Ｍ先生へ。源氏物語の解説してくれー。

Ｎ先生へ。あのゲンコツは一生忘れられんだい。

Ｓ先生へ。熊。九万円。○×選手…。そうや今度塩らーめん食べ

に行きましょう。

F先生へ。バス停で何度も拾ってくれてありがとございました。

四組　日高健二

その一　食堂にて

去る4月28日、3時限後の15分休みに、僕は、いつものように食堂の売店側のテーブルでパンをほおばっていた。すると、突然、ガラス状のものが割れる音と同時に、しぶきが足にかかった。見ると、ある男子（一年か二年だった）が手をすべらせて、コーヒー牛乳を落としたのであった。それで、友達と二人でガラスの破片やこぼれたコーヒー牛乳の後始末をしていたが、そのやり方が、その辺にあるもので済ませようとするため、的を得ず、なんともまどろっこしい。そこへ突如として現れた倉高健女二人、どこから持ってきたか、一人は箒とちりとりを、もう一人は雑巾を手に、あっという間に片付けてしまった。それを見ていた僕は、「ホウ。いいねェ。倉高にもこんな女の子がいたんやなあ。」と思った。ふと上ぐつを見ると、Ⅱと書いてあったので二年生であろう。たった十五分の間に起こった小さなドラマであった。

その二　中央図書館にて

去る6月9日（土）、いつものように図書館へ行き、99の席をとるやいなや、早速お勉強を開始した。（さすがは倉高健児＝健二。お利口さんである。）だんだん気合が入ってきたころ、98と97の席に倉高生の男女が座った。すると、「ムムム。これは何の臭いだ？そうだ、ガムの臭いだ。何という奴だ。図書館でガムをかみながらお勉強とは。（僕の心の中）ガムの臭いにうんざりしていると、この男の友達らしき奴が来て何やら話し始めた。「M上よりもM浦の方がボーカルがうまい。」とか、「S治もあんまりうまくない。」その他S平＝H河氏の話も出た。どうやら、こいつは三年のようだ。ひょっとするとN村ではなかろうか。まったくくだらない話をしている。そればかりかこの男、ガムを口の中に入れたまま、寝てしまったようである。その後しばらく平和が続いたが、やがて女がこのガム男を起こして曰く、「私にもガムくれ。」と。な・な・なんということを。これぞまさしく倉高悪女。真面目一本やりの僕としては、あいた口がふさがらず、そそくさと荷物をまとめてひきあげた。後輩諸君よ。間違ってもこのような

（ムチ）
使用法
1. つつく
2. たたく
3. 説明に使う
たいへん恐しい近代兵器である

連中の真似だけはしないように。さもないと、倉高は滅亡する！

その一、その二を読んでくだらんと思った人は、以後の文章を読む必要はありません。

その三　物理の時間にて

僕の趣味は、質問をすることである。いつのころからか、質問をすることに異常な興味を覚えるようになった。およそ、質問には四つの意味がある。第一に疑問を追求する事。第二に授業の飽きを防ぐ事。第三に教官を当惑させる事。そして第四に目立つ事である。

さて、去年の物理の時間に教生が来たことがあった。だいたい教生の授業というものは、おもしろくないものである。クラス全体がシラけきっていた。何かおもしろいことはないものか、と思っていると、次のような問題があった。「ある20mの建物の屋上から垂直に10m1秒の速さで投げたボールは、何秒後に地面に落ちるか。」ここまで読んで、この文章の誤りに気がつけば、たいしたものである。僕は、この誤りに気がついた。そして、この白けた雰囲気を打開するには、これしかないと思った。そこで、質問はないかと言った時にすかさず手を上げた。「この問題はおかしいと思います。」教生は目を白黒させている。「このボールは永久に地面に落ちないと思います。」ここまで書けば、何を言おうとしているか、わかるであろう。すなわち、常識で考えても、垂直に落ちる。だから、建物の屋上に落ちる。従って永久に落ちない。クラスでも、この考えに共鳴したのか、爆笑であった。いつも真面目な質問ばかりしている人は、こんな質問もあるのだという事を知ってもらいたい。

その四　クラブにて

僕の尊敬する先輩にOさんという人がいた。沢山の男達に交って、一生懸命やっているその姿には胸を打たれた。おまけに、Oさんは楊貴妃やクレオパトラにまさるとも劣らぬ器量良しであった。恐らく先輩や同輩も皆、心引かれていたと思う。しかし、Oさんによって、僕は勝負の世界の恐ろしさを知った。というのは、Oさんと僕と試合をすると、僕が勝ってしまうのである。僕が一本とるたびにOさんの顔がくもる。勝っても全然うれしくなく、むしろ負ければよかったのにと後悔する。しかし、わざと負けるわけにはゆかぬ。まったくスポーツとはかくまで残酷なものなのである。

その五　啾唧集について

今度、啾唧集の原稿を集めるというので最初のしめ切りの時には出さなかったが、汲泉の男がかわいそうなので書くことにした。どんな事を書けばよいのかと思って、去年のもの、一昨年のものをとり出してみ

た。読んでみると、確かに前に一度読んだことのある文章であった。しかし、何か前には全然気がつかなかったことを考えていた。この啾唧集を記念にとっておこう。十年たつとまた違った感銘を覚えるかもしれない。

歩　行

二組　永松利文

これは単なる雑文である。したがって、大学教授の講演とは違い、内容に全く責任がもてない。あらかじめ、ことわっておく。また、敬語はいっさい省いたつもりである。私が日頃から敬語を用いている人は、どうかそれが書かれてあるものとして読んでほしい。

さて、「歩行」は人間としての、もっとも原始的な運動である。その「歩行」をしていると頭がよく働く、というのはよく聞かれることだ。私はよく散歩をするが、実際そんな時に思いもよらなかった考えが浮かんでくることが多い。脳に対する適度の振動と緊張感のためであろうか。とにかくそう考えてみると、猿が人に進化した背景には、手の活用というだけでなく、歩くこと自体の影響が、大きな力をもってそこにあったのではないか、と思える。

私の散歩はたいした距離ではない。しかしそれを始めるにあたっては、大きなキッカケというのがあった。それは書物の推薦ではなく、某先生が私を呼ぶ愛称であった。

「うらなりきゅうり」

自分では自分の顔など見えるわけがない。まして顔色などは。その場で決めた。日に焼けるため、散歩をしようと。

ところで、歩く速さは足の長さに比例するとよく言われる。しかしそれは間違いである。私の歩く速さは遅い方ではない。であるから、人が歩いているのを見て、「無理して大またで歩いて……」などと言うのはやめるべきである。

ここで、歩行の定義を見てみよう。机の上にある「小学館新選国語辞典」を開いてみると――歩行＝歩くこと。あたりまえのことをまじめに書いてある。で、「歩く」をみると――歩く＝あゆむ。これだけしか説明がない。不親切な！と思いつつ、「あゆむ」をひくと、今度は説明があり――あゆむ＝足を動かして進む。これだと「走る」ことも「あゆむ」に含まれるのかと思い、「走る」の方もひいてみる。――走る＝はやく行く、かけて行く。ついでと思い、「かける」を調べる。――かける＝早くはしる。走るが駆けて行くことで、駆けるが早くはしることとなると……。???

ところで、足は基本的に、「歩く」ためのものか「走る」ためのものか。後者の方が強いと思うがはっきりと断言できない。バスの中、それも雨の日でとてもこんでいる時など、立っていると無性に横にある足を踏みつけたくなる。じっとしているのがいやになる。乱暴かもしれないが、このことから少なくとも足は「運動する」ためのものらしいと推定できる。

運動に関して。階段は下りより上りがつかれると言うが、私はこれを、急な坂道における重い荷車を運ぶときにたとえたい。上るときは目標を上に見て、ただそれに向かう力さえ出せばよい。だが下るときは目標を下に見て、しかし力は上の方に加えなくてはいけない。早く着ける所をゆっくりと行く、そして力を加えていくのではなく、

徐々にぬいていかなくてはいけない。下りの方が、きっと疲れは大きいだろう。

さて、現代の人にとって、歩行に欠くべからざるもの、はきものについて見てみたい。思いつく限りのはきものの名称を、辞書で調べてみる。(いつもこう探究心旺盛なら、もっと国語の点もよいのだが……)

はきもの＝足にはいて歩くものの総称。

くつ＝はきものの一種。(何とそっけない)

サンダル＝つっかけ型のげた。(関係ないが、近くに「三太夫」というのがあり、執事と説明してあった。アラシの親は二を執事にしたかったのか、と思いつつ先に行く)

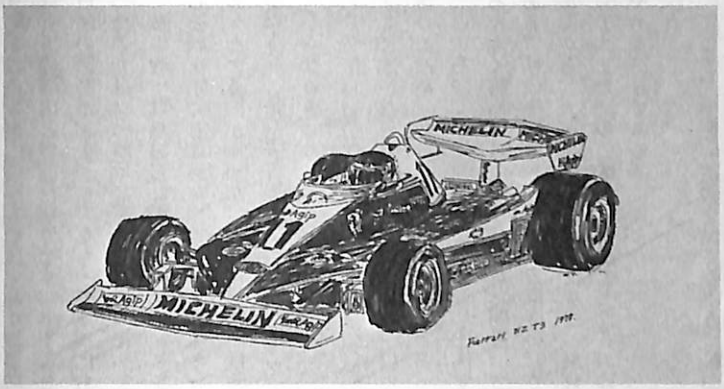
つっかけ＝つっかけること。つっかけげた、つっかけぞうり。

げた＝木の台に歯をいればなおをすげたはきもの。

ぞうり＝わら、竹の皮であんだり、ナイロン、獣皮などで作ったはきもの。

これで幾分賢くなった。

ところで「はきもの」は、足を保護するためにあるのばろうが、逆にそのために足が弱くなったとも言えるのではないか。特に皮ぐつなど足を型にはめ込み、しばりつけるはきものが出てからは、足の指はひどい圧迫を受けている。「足の指が死んでいる」みたいなことを言っていた人がいたが、まさにその通りである。今それは、とても窮屈な思いをしている。だがそんな指でも、



何かふんばっている時には必死で働いている。そんな姿は美しく、声をかけて励ましたくなる。

しかし実際、足の指は働くことが少ない。このままだと、なくなるまではいかなくとも、いつかは五本くっついた人間が生まれる。初めのうちはその者が蔑視の的となろうが、そのうち数がふえてくると、こっちの方が怪しくなる。そして全人類が足の指の境のない人間になったときには、我々は歴史上、猿人と扱われるのではないか。全くの空論だ、という人もあるかもしれない。しかし誰が、絶対にありえない、と断言できるのだろうか。

全くとりとめのない文になってしまった。これでは雑文というのもおこがましい、とにかく、これを読んでくれた方に感謝したい。

追――小林、草西、リトルポンド、武田

ありがとう。

新おどる男

一組　永岡紳一郎

予習をして来た時に限ってなかなか教師が来ない。だれも彼も満足そうな上機嫌な顔をしている。それもこれが満足だと言って外へ表せるような爆発させられるようなものではない。それだけに、優越感のようなものがつきまとう。皆いい顔色をしている。さえた色だ。

「来ねえなァ……。」

そんなことを言っても誰も取り合わない。そう言った本人は周囲から白眼視され、先ほどの気負いなどはなくなっている。

窓の端まで行って腰から先を乗り出して教師の来る方をのぞいてみる者がある。俺も同じことがしたくなる。と、その男が顔を上げて腰をのして、脚をほうり出すようにしてこっちへ歩き出す。教師が見えなかったことが一目で分かる、「やった!!」という顔つきだ。

ふいにどの男も同じ顔をしている気がしてくる。……イライラしている当の問題が片付いたところで、つまり教師が来たところで、集団催眠に陥り、どこか夢の世界へ運ばれるだけだ。そこで見る夢もろくでもないことだ。……　それにしても早く来ねえかと言いたくなる。

きれいな女などを見ても心がはずまない。第一、きれいな女などがいない（ゴメン一組の女子の方々。）隠しようのない事実である。どの女も、男と同じ顔をしている。

その間にも、どどどど……という音をたてて他のクラスでは礼が行なわれる。下の職員室から教師達が階段いっぱいになってひしめいて駆け上ってくる。駆け上って来る時は、目当てがあるから、どこか元気な、いや満面にサディスティクな微笑を浮かべて、やってくる。教壇に立つと、「とうとう来やがった」という気持ちでいっぱいになり「つまらぬ」という顔になる。

俺の方は、教師の来ないのがつまらなく気に喰わない。お互いにせいているのだから同情すればいいのが反対反対といく。しばらくして教師が来た時の有様が見えて来て、来なければいい、教師が来ても、ヤツだけ指名されていればいいというようなさもしい気になってそれが直らない。

俺の知っているのに不幸な男が居た。一年の教室から一階の職員室へ某教師を呼びに行ったが、ただの一度も来たことがなかった。今日こそは……そう思い思いしてまる三年というもの、とうとう一度もやって来ずに、職員室を焼き打ちにし自分も玉砕してしまった。ばかだと言えば本物の馬鹿である。それまでの話だ。しかしせめて一度でも来てやろうという教師が居なかったのだろうか。…不幸な男。しかし今は、俺達が、その教師と同じ気持ちになっている。今の日本全国の高校生のある一部といった感じだ。……

その間に、ムチがピシピシなって隣の教室が騒がしい。ずいぶんの生徒が突かれる。それを聞いて「ザマぁミィ」という気になる。そんな気にならなくてもいい。60分授

業とツキの恐怖は違っても喜んでやればいいのがサディスティクな気持ちになる。

まだ来ない。

そこで生徒手帳を見回すと日本語が書いてある。礼儀、服装、靴、学羽……　なんだってこうだろうとまた不服になる。いつか別のページを見たら、原級と書いてあった。原級ってなんだ?と思っていると俺にもわかる日本語で「進級させちゃらん!!」と書いてあった。

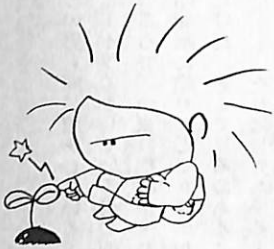
礼儀……

学習……

進級させちゃらん!!……

頭で並べていると足の裏がいやな気になってきた。分かっている。水虫が騒ぐのだ。指の間に白セン菌が付着して……白セン菌というのだかどうだか知らないが、それが表皮に付着して、それが刺激するのだというふうに頭にくる。ボリボリ掻くか。心が決まらない。靴下の指の部分の下に糸が集まっている細い筋がある。ホコリがたまっていることもあり、たまっていないこともある。筋がなくとも親指で掻いた水虫がうまく掻けていれば気がすむが、あれが外れると逃げるにも逃げられないいやな気持ちになる。軟膏もなし、特効薬は教師に貸したまま帰ってこない。どうするか。

そのとき「あ、来た」という女の声がした。いっせいに身構える。廊下の方をのぞいて身構えるのがあり、たいていはのぞこうともしないで身構える。今ごろになって総務が後れて「起立」をかけた。身構えるというのが二段になる。走り込む教師が、スマンスマンと頭を下げる。それを許してやろうというのが第一段。どのへんから当てられるかに目を着けていて、当てられしだいノートを素早く回そうとするのが第二段。第二段の方は、目を着けていたノートがわりに遠くにあり、そうでなかった方が近いと見てとるが早いかその方からガイドを借りて答えてやろうという手の込んだものになる。教師が俺を当てた。周囲のヤツはホットする。思いあきらめたような表情、底の測り知れない受難と言った表情でガイドの方へ顔がねじられる。目だけが答えを追う。ねじれた視界の外れを教師の白いチョークがすうっとすべって行く。



みんなの目がそこへ注がれる。この目がこの三年ほど変わってきた。七七、八年ごろの目とはだいぶ違っている。新しい机、ガラス越しの光線、制服とその色、教室内の眠たげな奮囲気、その全体に対して「早よやめれ」「眠たい」とかいう目をするものばかりである。……目測が外れただけで急いで隣のヤツのノートを見る。隣のノートを見ていると気付く教師の拳固に圧力がかかってきた。

口が開く。こぼれるように、つかえながら答が出る。その答え方がたまらない。急いで答えてしまおうとするため、肝心な所で「もう一回!」の声が飛び出して来る。

むしろ飛ばされて、はじき出されて来る。……答え切らないうちにも座ってしまおうという恰好のまま、どうしてもたじたじとなり、首根っ子を摑んで引きつける。背中からは、ひやかしの声も飛んで来る。

俺のすぐ後ろに机にくっつくようにして背の低い男が居る。おれの左足のところにそいつの右足がつかえている。やはり机にくっつくようにして右脇に男が居る。

その時ちょっとしたことが起こった。ガイドが空中を飛び回っているのである。背が低いだけガイドに飛びつこうとするのが男にこたえたのだろう、後ろへぐっと体を退くようにした。が、少しもさがらない。直接には俺達にもそのガイドには手がとどかない。――そのころになると男がぐっぐっと退くのも速くなった。ガイドを飛ばしている連中は増々高く早く回す。とうとう男はとび上がり出した。――「お答えはお早く願いまぁす。」もとこれは「早よ、答えんか」でやっていた。それを、職員室が焼き打ちになっていかにも教師らしくなく「お答えは」に改めた。焼き打ち以来、教師の言葉遣いが変わって来た。それまでが不服になる。

「お前、何しよん?」

その時、教師が口をきった。「おどったりなんかして……。」

その男はトドメを刺されて、そのうえ滑稽なものとして刺されたのだった。

「おや、まだ踊りよる。」

男の首がちょっと動いた――。

「おや、まだ踊りよる。」

場内爆笑である。俺は教師が憎くなって来た。横目をすると厚味のある顔をしている。それだけに憎ていに見える。

「しょうがないじゃないか。」という言葉が俺の口から出そうになった。「しょうがないじゃないか。俺は予習をやってないんだ。彼はガイドへ逃げているのだ。

「ほんと、お前何しよん?」

それは邪険な声だった。教師は、下男でも突き飛ばすようなけんまくで高い声を出した。「こいつ!」と思ったとき男が振り向きそうにして、しかしそのままのめるように前へ突っこんで行った。教師をナイフで刺したのだ。全員が立って、続いてのめるように俺が突っ込んで行った。総務が続くのが見えた。男がころがるようにして階段を降りて行った。そして職員室へ飛び込むと同時に火の手が上がった。

非常ベルが鳴るのが聞こえて、この間中一人も教室からは飛び出してこなかった。かくてクーデターは失敗に終わった。水虫はどうなったのか分からない。

THE END

P・S　宮崎、山内、菅原、『エレガンス』ありがと。

竹富、はよLP返せ!

ある倉高生のひとりごと

六組　山田眞徳

1.　人生最大のあやまち

倉高に入学した時、俺は勉学に燃えて三年後の栄冠をめざすはずの希望に満ちた若人だった。「絶対クラブなんか入らんゾ」と心に堅く誓っていたのに、あの応援練習がいかんかった。秋竹さんに、「オラオラきさまら応援団をなめとんか」といちゃもんをつけられひざげりをされた。そのときから俺の人生は大きく変わってしまった。それから三日後、ハンドボールコートで練習している応援団の中にあの希望に燃えていたはずの少年の姿があった。

2.　その後一年間

さて、この世界は、『一年、いつもこき使われる人の集団・二年、一年を使い三年に仕える人の集団・三年、現役の大将・OB、神様』で、一年間ほんとに牛馬のごとく使われまくられたが、そんな時の心の支えは、「来年は一年が、一年が入るんだ」という事だけだった。また練習はきついの限度をこえとって、夏の短縮授業のときは、もう地獄で日に何人か一年がぶっ倒れていた。そして夏の大会は対戸畑戦で延長13回の熱戦の末小倉が勝った試合などは、試合が終わると一年はみんな立ち上がれなかった。そして九月、一年生でありながら恐れ多くもセンターに立つことになった。今ざっと数えてみると、一年間で20試合近くセンターに立った勘定になる。その中には第50回春季選抜大会での2試合も含まれている。甲子園で応援できてほんとうに幸せでした。

3.　応援練習PARTⅠ

一年が過ぎ、桜の花も咲きいよいよ一年が入ってきた。待ちに待った応援練習だ。今年はめいっぱいはりきろうと思って、一日目から気合いを入れていった。たぶん二年の中には、一日目に俺からめちゃくちゃされた奴もたくさんいるだろうが、あまり数が多いのでこちらは全く覚えていない。一日目が終わって、先生にうたれて文句を言われてしまった。しかたなく二、三日目はやさしくしたつもりだったが、やはり手がでてしまった。

4.　応援練習PARTⅡ

また一年が過ぎ、桜の花も咲きまたまた一年が入ってきた。再び応援練習の時期だ。今年はちょっとやさしくしようかと思ったが、一年分のストレスを解消するために三日間全力投球でいくことにした。一日目から先生・生徒会役員の制止をふりきって燃えてしまったが、怒るのも疲れるもので三日とも一時間ほどで怒り疲れてあとは歩きまわるだけだった。しかし今年は去年の三倍くらいやったような気がしてならない。でもやっぱり応援練習はいいね。一年がすれちがうごとに頭さげるしね。もう最高。

5.　女

俺は硬派なので女は関係なし。

6. 友　達

俺の主な友達というと、あの明治出身の宮崎と元卓球部のエース山内がぽっと頭に浮かんでくる。いつも三人でアサヒスポーツや横綱屋などに出没してはさわいでいた。どこへ行ってもさわいでいるので、ついに横綱屋のネーチャンなどもうあきらめていっしょにさわぎだすしまつだ。しかし、世間の冷たい目にもめげず三人はこれからもさわぐであろう。

7. 大発見

横綱屋でクリームみつかけを食べるならみつかけとソフトクリームを食べたほうが20円も安上り。

「文化祭的思考」

その一　スチロール切り

今年の文化祭のとき、玄関に三枚青い大きなパネルを装飾第一がうちたてたが、あれはだれが見てもその雄大さに心を打たれ、涙がこみあげてくるものであったろうと堅く信じているけど、あのスチロールを切ったのは何とこの山田君なのであります。連日10時すぎまで、牛丼とコーラでがんばった力作だ。今は牛丼を見ると吐き気がする。だけど、けっこう楽しかった。「きっと来年も隣の学校から手伝いに来るだろうな。」と考えると大変つらくなる。

その二　暗闇恐怖症

これも文化祭直前のことで、10時ごろまで一年一組で作業していたときの話。四人くらいで話をしながら作業していたら、そのうちコワイ話しになりついには愛宕山首つり事件まで出てきた。元来暗いところが苦手な俺はついうっかり悪友宮崎にもらしたら、作業が終わって宮崎と島津先生とおりようとしたとき二人が一斉に走っていって暗闇に一人でとりのこされてしまった。あとで聞くと下まで叫び声が聞こえたそうだ。

8. 好きな物

100点の答案、授業中のいねむり、山口百恵、トマトジュース、黄色いMR50・卓球・金。

9. キライな物

欠点の答案・成績カード・通知表・先生の長話・ムチ・エビ・カイ・タコ・イカ・酒・タバコ・ねちねちした説教・パトカーの後部座席・暗闇。

10. 雑　考

共通一次をあと七ヵ月にひかえた未来に向かってはばたこうとする健全な青少年が今たいへんむだな時間をこの原こうのために費やしてしまった。ホントに大学に行けんかったらどうしょう。でもどの大学へ行っても絶対に応援団だけは入らんことだけは今から断言できるもんね。でもどこでもいいから大学に行きたい。

一九七九年六月十二日四時限目
現国の時間

ソフトクリーム付フラッペ的思考論

七組　二村浩史

ぼくは大学へ行きたい。絶対に。浪人せずに。ストレートで。第一志望に。しかし大学もただでは入れてくれんようだ。入学テストで合格ラインより上の点をどうにかして取らないことには難しいらしい。難しい、というのは中には〝黒いお金〟で裏側から合格することもできるらしいからそう言ったのだが、あいにく僕の志望校はそんな事させてくれないようだし、僕のうちにも〝黒いお金〟に匹敵するようなお金もないようだし、僕自身そんなことしたくないから、どうしても合格するためには入学テストで合格ラインより上の点をとらねばならないのである。しかしボケッとしていたのでは点はとれないからどうしても勉強せざるをえないのだ。せざるをえないというのはおかしいな。だって僕は何よりも勉強が好きだから、と本当のことを言うと明日から学校に来れなくなるから言わないことにしよう。

ところで勉強ってものはすればするほど血や肉となっていくそうなのだが、それは果して本当なのかしら。こんなこというのも何だけど、僕は英語がいくらやっても伸びてくれないのだ。しかし成績が伸びないということはやっぱり勉強不足なのかな。それとも僕が馬鹿なのかもしれない。え？バカ？…僕はやっぱりバカだったのか…。しかし僕の親はそれほどバカでもないみたいだし、親の性質は子に遺伝すると生物で習ったから、それほどバカではないと思うけど。バカというのはちょっとひどいなあ。せめてアホぐらいにしておいてほしいものだ。とにかく僕は今、英語のことで悩んでおるのだ。何でもいいから入試までに成績があがってもらわんと困るのである。ちなみに今僕の一番気に入っているのは、物理だなやっぱし。力学なんかもう最高！中村先生も面白いし。しかし、好きということと成績が良い、ということは別問題なのらしい。僕は自分では沈着冷静なニヒリストと思っているんだけど、へんだなあ、よくボカをやらかすんだなあ。この前の進テの物理なんか八十点は固いと思っていたら、実際は半分だったりしておる。ポカすりゃどうなる？大学入試に落ちるやろ？落ちりゃ何か。悲しいやろう。お？そうやろうが。ということになりかねないから、なんとしてもボカは直さねばならないのである。それでどうすれば直るか。ポッカコーヒーを飲みながら考えた末、結局はボカしないように気を付ける以外にないという結論に達したのである。

ところで、みんなは大学入試をどう考えているのだろう。ピラフを頼んだのに焼きめしを持ってきたと怒っていたM君は、まったく無関心のようだ。僕が食べ始めるまでナイフとフォークを手にしなかったH君は文句無しの成績だからどこでもOKのようだ。ということは、大学に早く行きたいと思いつつも成績がもう一歩という僕は、現在板ばさみ（英語でいうとディレマ・ジレンマではないのだ。試験に出る英単語二百二十九ページにある。）の状態にあるのだ。何でもよいから早く大学へ行きたい。

話しはガラリと変わって、今僕が一番恐れているのは、そう。あの〝女性〟特に同学年のそれである。女性という〝いきもの〟ほど不可思議で理解しがたいものはないと思う。僕の身近な女性といえば、おばあちゃんと母上と姉貴の三人であるが、どうも〝女性〟というイメージの薄い者ばかりだ

からなおさらだ。姉貴なんか全くだ。歩き方はトットットッ。最近の女子校生のようにくねくね、のらりくらりなんていうのとは全然違う。それに何でもズケズケいってケケラケケラと笑ってあとはケロッとしておる。色気もへったくれもない。男もすなるようなY談でも平気で手紙に書いてくるし。見ろ！姉貴がこんなんだから弟は理解に苦しむのだ。ああ、かわいそうな僕よ。僕の頭には、美人でかわゆくあっさりしていて明るく髪はさらりと長く目は大きく切れ長で奥ゆかしく料理がうまく知的でセンスがよく身長は僕よりちと低く化粧しないB87W50H80足はカモシカビキニがよく似合うような女性しかないのだ。こんな女性いると思う？いるわけがない！仮にいたとしても、なんで僕のような男を相手してくれるかっつものよ。ばかやろう。これはみんな神が悪い。リンゴを食ったイブが悪い。人間として生まれた僕が悪いんだ。神よ、いいかよく聞け、あんたのおかげで俺はこうして悩んでおるのだ。自分の責任は自分で取りなさい。僕はもう悟りの境地に達したようだ。則天去私！こ、これだ。これだこれこれ！僕が捜し求めていたものは！漱石よ、ありがとう。

少し脱線したようだが、まあよい。なんといってもこういう未知のことは、大学に行ってから、ゆっくりと研究することにしよう。あっそうそう、早く大学へ行きたいという話をしていたのだった。僕は早く大学へ行きたい。そうだ、早く行きたいのだ。だから勉強するのだ。うん、するする。よし、では今からスタンダード数Ⅲをするぞ。バンザイ！…おっとその前にソフトクリーム付きフラッペ食べてしまわんといかん。あらら、だいぶ溶けてしまった。ガーン。

わが青春のマンガ道

9組　松永　忠
ペンネーム　波野　純

第一章　プロローグ

僕がマンガを書き初めてから、そう、6年近くなるだろうか。それにしてもよくこんな絵が書けるようになったものだ。と最近つくづく思う。そう言えば、たいくつになるといつのまにか手が動いている。(特に○○中など)それに机の上を見ると、いつのまに買い集めたのだろうか、ペン軸が17本、筆が9本、ロットリング、烏口、羽根ペケ、コンパス、絵の具、インク、ケント紙、数えあげればきりがない。よくみると一つ一つにていねいに『JUN』と彫ってある。そして、その道具一つ一つに、くせがある。特にペン軸は、そのくせに合ったペン先しかうけつけようとしない。無理につけると、すねて変な線になってしまう。そういった所がまた実にかわいく思える。

第二章　完成の歓激？

現在にいたるまでに約5本ほどの長編、3本の中編、そして数えきれないほどの一

コマものを描いて来たが、完成するまでの苦労話をば一つ。

ある同人誌にのせる中編ものを考案中、けたたましい電話のベルの音！またそれにも勝るほどのさいそくの声『おたくも忙しいでしょうねェ、いや原稿なんですけどね、いやいやいや…ハハハそんなにおいそぎにならなくてもあさってまでに書いていただければ……用件？いやそれだけですよ、ハハハハ…ガチャン』電話の切れる音が、鐘がハンマーでなぐられたように耳の中にひびく。それから構想に4時間、シノプシスに3時間、シナリオに6時間、ワク取り、ふき出しに5時間半、下書きに7時間、ペン入れに10時間、バックに8時間、修整に2時間、結局2日間睡眠0、そしてその日の昼、あいつがきて『イヤーハハハ、出来ましたか？ホーいやなかなか…でどうしました？いつもさえない顔だけど今日はいちだんと…何？寝不足、いやいけませんな、ハハハ…（急に真面目に）絵は、いいんですけどねェ、ストーリーがちょっと…では今日はBさんの方をのせるとしまして、おたくの方はボツと言うことで…ハハハそれじゃまたよろしくお願いしますよ！ハハハ』冗談きついっスよ！

第三章　我が青春のマンガ道

最近、マンガ（TVアニメやSFアクション劇も含めて）に、いかに殺戮の場面が多いかと言うことに気づき、非常に悲しく思う。その反面そういったシーンのあとの言葉が、胸につきささるようなすばらしい言葉であることにそれ以上のよろこびを感じている。しかしその言葉の意味をしっかりと理解している人なら充分すぎるほど生命の尊さを感じるはずだが、今の現状を見ると少年少女の自殺、非行の急増、無感動不確実性への一途…。とすればなんと殺戮のシーンだけを楽しんでいる子供の多いことか…。いいかえればマンガが完全な商品（悪い意味での）としてしかあつかわれず、興味を引くためにのみエスカレートしてきたのだとも言える。

しかしそれはちがう！　それは本当のマンガではない！マンガとは作者が一番いいたいこと、『これだけはやってほしくない』と言うことを文章でなく絵として視覚的に、つまり、よりわかり易くした物であって、私に言わせれば小説と同等の物である。

私がマンガから学んだもの、またマンガを書くことによって体得した物は、大きい苦しみの後の大きな喜び、生命の尊さ、自分の存在の大きさと小ささ、愛情の強さ、人間の弱さ、最後までやり通すねばり、戦

争の非惨さ、欲の醜さ、友情、etc…、また、それは理想であって現実との壁は硬化テリタイトよりも硬いことも知っている。だが、トマス＝モアの『ユートピア』の中にこう言う言葉がある。

『ユートピアとは、偽のひとつもない所である。もしくは真実の一つもない所でもいい。』

とすれば、マンガこそユートピアではないか！そして私は、いつもこの手に、この胸にユートピアを持っているのだ。

第四章　エピローグ

最後の章に私のいいたい事を…。

大人たちよ！マンガを軽視する前に、読んでみてほしい。そして知ってほしい。一口にあなたたちがいっていたマンガと言うもののジャンルがいかに広いか、そして、いかに多くのマンガ家が、自分の夢をたくし、自分のいいたいこと、『してほしくない』ことを必死に書いているが、あのなめらかな線が出るまでにどれだけ血の滲むような努力をして来たかを。

第五章　おまけ

第五章は、ひまな人だけ読んで下さい。

私のマンガの中からいくつかの言葉を。

「考えることを止めた人間は、牙をなくした狼だ。」

竜次「どうだい釣れるかい？」

老人「一匹でも釣れたらわしゃ釣りをやめるよ。」

「理想は理想によって打ち砕かれるものさ宇宙に不変などありえない。」

「宇宙時代にもなって、まだオールマイティを売り物にしてるやつがいたとはな。」

「人間には満足などありえないのだ。」

「死にたい？ならば死ねばよい。しかし君は死を説明できるのかね？」

分子心父

一組　長野　晃

むかつくばかりの必殺シリーズ

時代劇や忍者物の類いと言っても無数にR。FIRE！もあればホゲタラボンもR忍法千一夜もあれば五連発の旦那もR。鹿し、その中で内容の低俗さ　マンネリさで他をひき離して最悪と鳴門ただひとつ、必殺シリーズ鹿ない。武士道のブの字もなく闇討ち八百長いかさま万歳とIF家康のような姿勢を取って丁る上に全編エログロナンセンス。鹿もとっくにブームの去ったオカルトの要素を今ごろになって取り入れるぬっせさ。当然率は一％を割り、スポンサーとしても打ち霧鯛のはヤマヤマだが、このシリーズ鹿出してもらえない六流コメディアンの藤田まことのバックの暴力団の圧力の為そうもいかないようだ。戸畑の埋め立て地に住んでいる坂倉宏一なる男は、まことんまのことを「コミカルな演技からシリアスな演技まで粉酢オールラウンド役者」と思っ丁るようだが、八百長三重海に負けてやった時の北ノ湖の演技の方が遙かに馬糸言えよう。又、昔々、この番組をみて板

オッサンが、横で見て板人を絞め殺すとＩＦヘルタースケルターの役も果たしていてろくでもない影響鹿与えない。ただ、強いてこの番組の長所を上げるとすれば、和田アキ子の起用で若るように、売れなくなった歌手や俳優を拾ってやるとＩＦことでＲ。この点すらなくなれば、この番組と紅白歌合戦には何の存在価値もない。そのうちに横山ブリンかリンゴスターでも出てくるような気がする。逆に国民的時代劇と鳴門、水戸黄門以外には考えられない。国盗以外の大河ドラマでは荷が重いし、まして必殺シリーズではゴングと同時にラリアートをくって血を吐くのは目に見え丁る。演技の大御所東野英治郎（虎トラ寅、社長学ＡＢＣ、七人の侍）アンドレと並ぶ売れっ子高橋元太郎（大岡越前、江戸を漸る、マッハＧＯＧＯＧＯの歌）を始め、ブタは死ねの奴やウルトラセブンの松坂慶子でさえワンポイントリリーフとＩＦ豪華キャストでＲから四十％も当然であろう。

狂ったダイナモンド

ロック雑誌の中で最悪の差別編集雑誌と家ば、そうクイーンライフ。専科の方が、まだ救いようがＲ。とにかく、オバＱが新作を発表すると数ページに渡って、オバＱの新生面だ新境地だと騒ぎたて、来日コンサートがモノクロページのバンドもＲのに自宅でくつろぐオバＱはカラー。イーノやザッパのように注目に値する人でも日本でマイナーだったらチョン。その点靴屋の二階の星ロックマガジンは、いつ行っても売れ残っ丁るが、カン等をメインにすることがあるだけにフクヤが見捨てないで星芋のだ。又、オバＱライフは女編集長がどうもまずいようだ。ここらで気合のはいった奴が編集長にならない限り、永久にその場しのぎのくだらん雑誌で終わるだろう。今はオバＱ中心だが、人気が落ちてくるとどうなることやら。それから、レコードレビューは耳の悪い奴が揃いすぎている。特に坂倉が気に入っている「作品第二番、ＥＬＰ」の四つ星には驚かされた。十段階評価と間違えたのだと信じたい。

太陽と千歯こき

サーキットの狼　作者は自己陶酔し丁るようだが…。少年アクション　編集部の人は売れると思ったのだろうか…。聖マッスル　キは筋肉のキ。作者は変質者か。ＡＶ行事　ファンクス対ブッチャー　シークか上田対ハンセンを。西崎　金もうけの度に「ファンの為」とほざく偽善の鏡、脱税の星。ダダ　蹴倒されても吹っとばされても…努力賞「だめだ！ウルトラマンは強すぎる。ジャングル大帝　ムーン山よ永遠に。西遊記　ワンパターンの脚本にしらけた妖怪。「悟空の大冒険」の方が百倍は面白かった。山田康雄　全くＣイーストウッドの声にはふさわしくないのにしっこく続けている。大木金太郎。急所打ち専門。こいつと上田馬之助の二人は、みんなでつばをはきかけてふみつけるに限る。家康。奴隷の奴隷にわく蛆。どうして米軍は東照宮を爆撃しなかったのだろう。家康の墓などポリバケツで十分。建物はこわしてバーゲンセールで売ればいい。ストーンズ　スキャンダルだけではレコードは売れない。ロック界のクルーガーよ、早くマウンドを降りろ。解散コール。

天竺への階段

中間考査も最後の科目を残すのみになりま下。チャイムが鳴って一斉に試験は始まりま下。ところが、ポンポリポンの組の監督の先生は来ませんで下。そこでポンポリポンは、みんなの為に職員室へ走ります。

すると、ポンポリポンが下へ降りたとたんに、それを待って板かのように監督のパンポロリン先生が現れま下。見当違いの方からですが。それより少し遅れてPが帰ってきました。P先生は、自分の大巾な遅刻等そっちのけでPに詰め寄りま下。「お前何ふらふらしようか！」「先生が来ないので呼びに行ってま下。」「来とおやないか！」P先生は馬鹿に下目つきでPをにらみま下。Pは心の中で叫びま下。「どうして呼びに行って悪いんだ。先生は何をやっても正しいのか。正義とは何だ。」孟司は言った、「こんなことがあってEものでしょうか。」と。慶王は言った、「いや、いけない。そんな先生が生徒に信頼されるはずがない。鹿しそんな先生がいるものでしょうか。」と。

デブでよろよろの田淵

三重ノ海が台本の必要性を強く感じだしたのはいつ頃からだろうか。綱寸前の若三杉を相手に諸差しになりながら負けた一番で自分の実力を知ったの鴨しれない。何にせよ台本が出来た以上、これまでの様に病気の為の休場の必要は全くなくなったし、最近の台本による好成績は知っての通りであろう。特に優勝争いから脱落するや無気力相撲を展開する千秋楽の頃の輪島につけ入ったと見せかけての演技の4連勝は見事である。三重ノ海が前みつを取るのがうまいのではなく、相手が取らしてやっているのだとIFことを忘れないようにしたい。

ジョン、廃盤に気をつけろ

Jレノン。ビートルズのメンバーの中で一番気が狂っていて一番天才的で、一番価値のRベスト盤〈十曲中五曲廃盤、一曲未発表テイク〉を発表した水戸の御隠居。元ビートルズの連中のソロアルバムの最高傑作は「ジョンの魂」。この渋さには「バンドオンザラン」もかなわない。心の壁、愛の橋は金星と火星を越えて伸びて行く。それにしても寝ころんでいるだけで四十三億円…唖然。復活はいつの日か。

終章　砂普勤の最毛出律句朝食

沈めクラフトワーク！浮かべトッドラングレン！引っこめジャガー！出番だフリップ！もぐれJロード！翔べザッパ！解散だELP！GOGOゴング！カン、ENO、キャラバン、ソフトマシーン、エッグ、トレイス、アフロディテスチャイルドに昔のジェネンス、みんな頑張れ。PS　Rハゲモアがブリンナーになるのはいつの日か。

世間集

三組　宮崎真

一、俺の友人に夜と女が恐しいと言うのがいる。昼間は下級生に応援団の〇〇さんとして知られ、泣く子も黙る勢である。しかしそれが夜になると一人で便所に行くのに大声で「ひと夏の経験」など歌いながらでないと行けぬと言う。人間とはわからぬものだ。

二、再び友人の話だが、元テニス部のキャプテンをしていた男で、パプア生まれの日本育ちという奴がいる。こいつがいつもニタニタ笑っていて、おこりながらニタニタ笑っているから不思議である。世の中にはいろいろな芸が出来る奴がいるもんだ。

三、教師の中で、いつもえらそうなこと言っておきながら、ひどく矛盾する行為をするのがいる。ポケットに手を突っ込み、顎の先で命令する。よくあのような話が出来るものだと感心すらする。世の中には図太い人間がいるものだ。

四、先日食堂でカレーを食っていたYが急に目を見張ったので何事かと聞くと、カレーに肉が入っていると言う。そのへんにいた者一同あわてて皿をのぞきこむと、たしかに肉が入っている。へんなこともあるもんだと一同互いに顔を見あわせて、それでYの時はそれですんだ。しかしよく後で考えてみると文化祭のときまでいたあの黒い犬はどこにいってしまったんだろうか？

五、理系の奴がよく言うことに、文系の奴は幸せだという。どうしてかと聞くと、数学が痛くないからだという。どうも理系の数学というものは痛いらしい。

題なんかいらないヨ

六組　佐々木利容

作文で「A」などいただいたこともないこの僕が〝何故〟投稿しようと思ったのか。理由はなんてことないわけで、汲泉が「今年は啾唧集の集まりが悪い」と言っとるんで、まあそんなわけ。

校門に入った。それまでは良かったのだが、「はていづこへ行けばよいのやら…。」と考えていると黒服が左の方へ行くのが見えた。僕の足は自然に動き出し黒服について行った。きたない建物（あとで旧記念館とわかった）の横を通り抜けた。黒服は右へ曲がった。何やら階段があった。黒服はそれを降りて行き右手のドアに入った。見失うまいと急いで降り同じ様にドアに入った。臭気が鼻を襲った。「くさい!!」黒服はなおも歩いている、そして止まった。ふとゲタ箱を見る。「2年…」しまった。大あわてで来た道をひき返し、向かって右手へ行った。がやがやしている、見るとまっ白のカバン。「やった。」心の中で叫んだ。中へわり込み

自分の場所をさがす。「あった」一年七組十七番。

一年の終わりはじめて通知表を手にした。「5がありますように」と祈りつつあけてみてびっくり「3」がずらー。そしてところどころにアクセントが。横を見ると「アウ」という字が書いてあった。何のことやら考えてやっと納得、答えは合格の「合」だったのだ。あたりまえと言ってしまえばそれまでだが、二年の時は「あたりまえ」が「奇跡」になった。

ここでふと筆（実はシャープペンシル）が止まる。なぜかだらしくなる。暑いせいだろうか（バミューダ一枚でがんばっとります）気がつくといつのまにか筆が進んでいる。不思議だ。

さあ先を進めようー。このへんで趣をかえたいと思う。

僕は日明に住んでます。（なぜこんなことを書き始めたのか自分でもわからん）日明「ヒアガリ」ではなく「ヒアカリ」と読んで下さい。小学校のころ校歌を歌うときひどくおこられました。「♪マナビーノソーノーヨー　ヒーアーガーリーコー」「こらーヒアガリやなくてヒアカリや」

人は日明の住人までを・・・・と言う。日明病院があるからであるが、その病院には精神科の外に内科・小児科もあることをお忘れなく。

どこでもそうだが「住めば都」すよ。

あ〜〜〜ア　時計の針は二時をすぎた。きのうから勉強もろくにせんで（漢文の予習はやった）こればっかり書いとる。書いとる文がもちっとましやったらいいけど、これじゃあ目もあてられんわいな。よくがまんしてここまで読んでくれました読者のみなさんに紙面を借りてお礼申し上げます。しかし、この資源不足の中、こんなくだらんことばっかし書いとって自分の身は大丈夫なのだろうか。秘密警察につかまったらどうしょうか。

まぶたが重い。コーヒーを飲みたいが湯をわかすのがめんどうだ。ここはじっとがまん。やたらとひらがなが多い。疲れたせいだろうか？

さてそろそろラストスパートを。

〈名言〉

天ハ人ノ上ニ人ヲ造リ
人ノ下ニ人ヲ造ラズ

ふとした
くだらない理由で、というのは
おうちに近いというだけで
かの有名な
けい（K）高校をじゅけ
んした。
りつぜんとして試験を受けたのが
つい
この前のように思われる。
くたくたの体にムチをうち
らいとを照らしておそくまで
こーひーをすすりながら
うんとも言わず、ただひたすら
こうしきをつめこむ。
うまく覚えたつもりでも
ばかは死ななきゃ直らないも
んである。
ざっ〳〵として何を言いたいのか
いっちょんわからん。

「倉高生失格」

五組　坂口隆裕

(1)――回想編――

倉高に入学して、右も左もわからぬうちに、ふとしたことで応援団に入部し、苦しい練習を繰り返しているうちに、時はたち、気が付くと、いつしか成績カードの数字が鮮かに変色していた。

これはいけないと踏んばろうとした時、センバツ高校野球出場が巡ってきた。

アルプススタンドを想定した真冬の厳しい練習のかいあって立派な応援をすることができ、甲子園で大団旗を上げることもできき、とても幸運であった。

頬づえをついて甲子園の思い出に浸っているうちに二年生も半ばに入り、修学旅行で浮かれていると、すぐに二年生も終わりようやく三年生、賑やかに文化祭も終了し目をこすってよく見てみると、先生方の目が変わっていた。

「君たちはもう三年だよ、もう後には引けないんだよ。」と白衣の学年主任が叱咤激励してくれた。しかし家に送ってきた成績カードは相変わらずさみしい内容だった。

(2)――友人・恋人編――

嬉しいことに、この倉高ですばらしい友人をたくさん得ることができた。

すばらしい友人に感謝して、紙面の許す限り、簡単に紹介させてもらいます。

○応援団のメンバー（約六名）

○野球部のファイターたち（約七名）

○総務部のまじめ有志たち

（野上君、ゴクローサン）

○三の五のクラスメートたち

○誇り高き悪友たち……（洋介君、秦君、西田君、松下君、井崎君、真子君、浩尚君、その他たくさんの友よ、度を過ぎちゃいけないよ！）

○二年生の○人軍団のメンバーたち

…功君、あとは頼んだぞ。

○愛宕・馬借大学に通っている優しい先輩方……受験頑張りましょう。

○倉高の後輩たち……応援練習でいじめてゴメンな。

○その他、好きな友達をあげるとキリがない。みんないい奴ばかり。

いつまでも仲良くしたいな。

あっ、恋人編の方は、省略します。書くべき人がいないので……。

(3)――随想編――

「ジンクス」……今、ふとこの言葉が浮かんできた。ちょっと気になる事がある。

それは運動会の事である。まず幼稚園の時、かけっこでこけてしまった事に話は始まるのです。その時は、元気一杯立ち上って、二人抜いて堂々三位！

小学校六年生の時も、運動会の百米走でこけてしまい、その時は、運悪く、石の上にこけて、血を出しながら、六位でゴール。

中学校三年生の時も、単走（距離は不明）で、ゴール十米手前でこけてしまい、その時は、何と、足の骨を折ってしまいゴールにたどり着くこともできず、そのまま担架で運び出され、救急車で病院へ。

こんな事書くと、「あいつは案外、運動神経が鈍いんやの。」と思われるかも知れない

が、実はどっこい、運動の方は、まかせとけです。足は速いし、気合は充実しているし（これはあまり関係ないが）、百米走なんぞ、高二の時は12秒8、三年になってちょっと腹が出てきて13秒0、一応、平均以上である。それはいいとしても、ここで振り返ってみると、幼稚園・小学校・中学校とそれぞれの最後の運動会で、必ずこけて怪我をしている。

そしてこけた時の怪我が段々、激しくなっている。

とすると、高校生最後の運動会では、もっと激しい怪我を……。ひょっとすると、こけて、そのまま、さようならという事にも成りかねない。

でも僕が死ぬとどうなるだろう。

まずA子が悲しみ、B子が嘆き、C子が後追い自殺をし、D子は気が狂うだろうし、たくさんの女の子を苦しめる事になるだろう。倉高の高橋校長先生も「本校にとっては、まことに痛手でありますが、県教育委員会発展のためには……。」などと言って悲しまれるに違いない。

でも、三年生は、全員が成績が一番ずつ上がるので、喜ぶかも知れない。

本当に、こんなバカな事ばかり考えているから、いつまで経っても、成績はパッとしないし、女の子には振られるし。

とにかく、僕のジンクスは、こんなに恐ろしい物なんです。

この先、生きていけます様に……。

(4) ― 卒業編 ―

なんだかんだと過ごしているうちに、とうとう卒業が近づいてきてしまった。

それにしても、この高校三年間は、実に短かかった気がする。そして実に楽しかった。

そりゃ、テストなんかで苦しい事もあったけれど、文字どおり「倉高生失格」になる程、勉強はせずに、遊んでばかりで、バカばかり言って、三年間を過ごしてきた。

先生方、大変、御世話になりました。どうも有り難うございました。

倉高バンザイ!!

(5) ― 総括編 ―

ここで、我が愛する倉高後輩のみんなに一言、言葉をプレゼントしたい。

「時には、我を忘れて燃えてみるのもいいさ」、シラケ世代に、陥らぬ様に、くれぐれも……。

愛猫に捧ぐ

八組　平賀由多可

俺の机の上に残る小さな首輪
ただそれだけを残して
君は俺の届かない所へ行ってしまった
ほんの短い間のつき合い
でも俺は一生君のことを忘れないよ

なごり雪のうっすらと積もった
三月のある日
庭で猫の鳴き声がするって
出て行って見ると茶色の大きな猫
それが君との出会いだったね

首輪のひもがひっかかって
動けなくなっていたんだ
それから我が家に住みついた君

オヤジやオフクロも
君のことほんとに可愛がってくれたよ
前は猫なんて嫌いだったのにさ

外で何度も他の猫と喧嘩して
その度ごとにケガをして帰ってきた
一度なんかは目の下ひっかかれて
血だらけで帰ってきたんだ
あの時、君の血のついたシャツ
俺は捨てずに持ってるんだよ

目のケガのせいかいつも涙をためて
昼間も寝てばかりいた君
君がペルシャ猫って高貴な猫だって事
はじめて知ったのもその頃だったな

ある日君がとつぜん元気がなくなって
一日中ぐったりとするようになった
わかってたんだよその時から
君はもうかなり年取ってて
死んでしまうかも知れないって

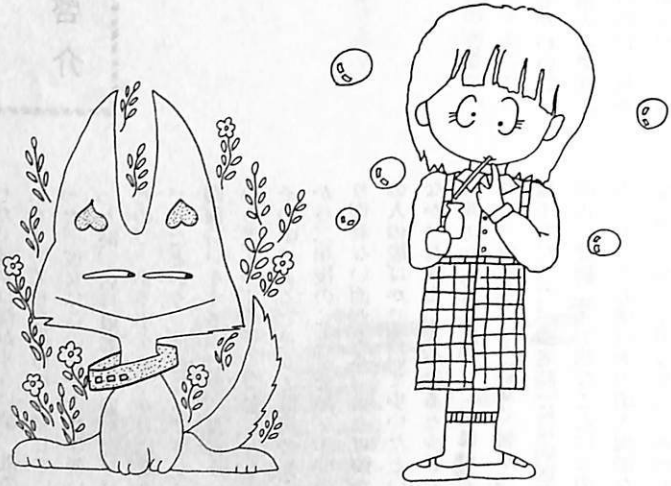
四月のある土曜の夜
俺は君を部屋へつれていって
そばに寝たんだ
何か予感がしたのかも知れない
朝起きて見ると
君は俺の机の下で
ほんとうに静かになってしまってた
俺は動かなくなった君を抱いて
どうしても泣かずにいられなかったよ
どうして一晩中抱いてやらなかったか
そう思うと泣かずにいられなかったよ
覚えてくれてるかい俺のことを
俺の家族のことを
みんなほんとに君が好きだったんだよ

君は今どうしてるんだい？
どこかで楽しく暮らしてるのかい？
そのうち俺も行くから
その時はまた一緒に暮らそうな
君の好きだったものを
たくさん持って行ってあげるからね

俺の机の上に残る小さな首輪
ただそれだけを残して

君は俺の届かない所へ行ってしまった
俺はそれまで知らなかったよ
猫も尻尾を振るんだって
猫も涙をためるんだって
わざわざ俺の机のところまで行って
自らの死に場所に選んだ君
ほんの短い間だったけど
たった一ヶ月あまりだったけど
俺は一生君のこと忘れないよ
いや、死んでも忘れないよ

文芸



おもかげ

二年十組　大和啓介

暖炉の前で
あたたかな寝息をたて
丸くなって眠っている
遊びつかれて
母のもとへともどって
やっとのことで寝ついた
少しだけ寝返りして
笑いをこぼして
その夢はぬくもり
幼年時代へと翔ける

風信子

僕の傍らに小犬が眠っている。犬の寝顔ってとてもかわいいけど、それを見てると思い出すのは車にはねられて、道の端で死んでいた犬――、針金で首をまかれ、車の中へほうり投げられた野良犬――。いずれも人間の手によって運命の選択をなされた。あの犬達の存在はどこに行ったのだろう。僕には人間の手によって押しつぶされたような気がしてならない。しかも、そんな不安や疑問を抱いている僕が典型的な傍観者でしかないということが何よりも嫌でたまらないのである。

今から十二年前の夏の出来事がそんな時、ふと折り重なって思い出される。僕はこの日、葉山コトさんというおばあさんを亡くした。彼女は僕が小さい頃、母の代わりとして僕の世話をしてくれた人で若松で祖母の経営していた日本料理店の女中さんでもあった。彼女はこの店で十数年働いた。しかし、彼女が病の床に入った時、店は最悪の状態だった。祖母は非常に個性的な人格だったので、ある事をきっかけに落ち込む所まで落ちたといった状態だったという。普通ならば彼女のような長い奉行人に対しては、暖簾分けをするのだが、身寄りのない彼女は太宰府の「養老院」という老人ホームに入ることになる。祖母が若松を出て上京したのもその頃である。彼女の危篤の知らせが我が家に届いたのは、それから二年後のこと。その二年間の彼女の生き様は、今の僕には語り切れない面がある。彼女は頭が変になって、人が訪れると、その人の後ばかり連いて歩いたという、つまり、彼女は頼る人がいなかったから、人が来ると少しでも頼れると思ったのであろう。危篤の知らせが届いて父母は太宰府まで車をとばした。僕も連れて。盛夏で、とにかく暑かった。僕等が着いた時は彼女は意識不明だった。「養老院」には病弱な老人だけの部屋があった。木造の古い建物。不思議なことにこの日の記憶は極めて鮮明なのである。もっとも僕はその頃入園前なのだから、そんなに鮮明な訳はない筈だが、子供ながらにその心に焼き付けられた小世界として生き残っている。その病室は八つくらいベッドがあって、彼女が横になっていたのは向こうから二番目の窓側。もちろん冷房なんて無いから、窓を開けていても汗ばむような日だった。そして何

よりも僕が覚えているのは、彼女が自分の顔の前で手を振ったこと。病室の中を飛んでいた蠅を払うかのように。それを見た時、僕は恐くなって病室を出た。今思い出しても、正直言って恐い気がする。寂しさと佗しさの中で痩せこけた老人の最後の抵抗。弱々しい手で〝もう駄目です〟と言ってるように。病棟の外は小さな林があって蟬がうるさいくらいに鳴いていた。数十日間の短命をなげいているように。そして翌朝彼女は息をひきとった。今になって彼女のことを想い出すのは僕自身、無責任な気がするのだがよく考えれば、この十七年間の最大の別離が、彼女との別離だったように思う。今までの僕にとって。

於 母 影

～ 葉山コトさんに捧げる ～

蟬時雨
童心を揺さぶる小世界

清閑さの中に残る人
佗人に微かに揺れる燭光は
細やかな生命の光沢
現世に残した最期の一息に託された夢は
所詮、今や伝説と成り切って
途切れた寂しさを綴るのは今一時

幼ない画像に描写された風景
久しく横たわって……また帰って来て

些細な一場面で呆気無く消えて……現れて……
未知な時間を踏みつぶすだけで
あなたの最後を昔の記憶へ
置き忘れた無責任な僕

白い陽ざしの中で
古い木造病棟は木陰の中
窓を隔てた外界との対称
僕がいる前で、あなたの時だけが過ぎた
他の物を拒絶するかのように
無言の抵抗のままあなたは息をひきとった
究極　外界は蟬時雨　病室は途切れた鼓動

汗でさえ無心に流れ行く静けさの中で
朧々と蟬が鳴いていた
去り逝く運命を背負って
朧々と蟬が今　又鳴く
蘇る人……今一時
密かに於母影を忍ばせて

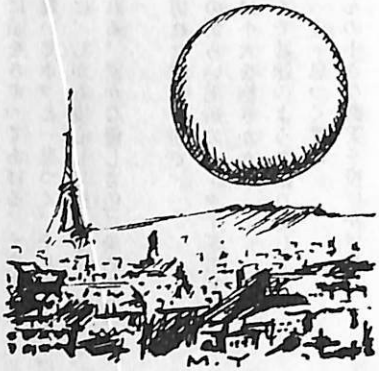
風信子

昨冬、僕は二週間程入院したが、その時、僕が咽喉科で、たまたま眼科が近くにあったので、おばあさんや小さな子が多かった。隣のおばあさんは両目がほとんど見えなかった。向かい側の子はアデノイドでのどをずっと冷やしていた。その時に、久し振りに葉山コトさんを思い出したのである。あの木造病棟、しかも老人しかいない部屋。姨捨山という小説を読んだことがあるが、まさに、そんな山中で亡くなられた彼女のことを。そして、僕は十二年間、彼女に対して何もできなかったことを考えると、ひどく悲しい思いがした。無力な自分を見つけた気がした。

人間である以上、僕は彼女のような人生を忘れたくはない。彼女のように寂しく逝ってしまった人を忘れはしない。運命は不変なものであるとよく人は言うけど、それは生まれた時から、完璧に決められる物ではなく、生きて行く過程で自由になる物であると信じる。ただ結果的に見ると、運とは初めから…なんて思ってしまうだけなんだと。彼女にとっての挫折は店の崩壊だったかも知れない……それだって生まれた時から決まっていた…なんて言ってたら彼女は何の為に生きてきたかわからない。運なんて物にこだわっていては何もできないような気がする。最近は〝運命〟という言葉を利用して、居直ることが多い僕だが、あくまでも、それが結果論であることは忘れたくない。ただ、死というものが生まれた時に決められるただ一つの運命だと確信するのである。僕はまだ若いから死なんてこと考えたこともないし、ましてや死のうなんてことは考えたこともないが、人間にとっての終止符を打つ死という物は、あくまでも本人の同意のもとであり得なければいけないと思う。彼女の死にしても冒頭に述べた犬達にしても、まさか自分がそんな形で死に追いやられるとは思いもしなかっただろう。彼らがそのように思っていた事は明らかである。ただ、そんな彼らの〝思い〟は死後、どこに行ってしまったのだろうか？〝恨み〟として、そのへんに転がっているのではないだろうか？悲しさや

寂しさといっしょに。そして、その上を平気な顔をして僕等は、踏みならしているのではないだろうか？例えば、「仕方が無い」という言葉を武器にして、何もなかったように時間の中に隠しているのではないだろうか？それが僕はひどく気になるのである。

どんな小さな物でも命を宿していることに違いない。こうした物に対して僕等はもう一度見直す必要があると思う。人間って奴は、えらそうにしていて、小さな命の存在を忘れがちの様な気がする。僕を含めて。



哀れ蚊

我まいた殺虫剤に
小さき虫、足をくねらせ苦しむを
目のあたりに見て
我何もすることができず
ただ見ゆるなり
白い紙のただ一点に集中した命
小さき吐息を残したまま
ただ消ゆるなり

我これを見てまだ何もできず
窓をあけて天を仰ぐことも
小さい虫を捧ぐこともできず
この幽けし時
この世に我ほど無力な者無し

風信子

母は葉山コトさんの亡くなった朝、「養老院」を出て太宰府天満宮まで歩いたという。夏の朝の天満宮は閑かだったという。死のあとの閑かさは寂しいくらいだが、その閑かさは忘れられないという。僕もその話を聴いて以来、先入観があるのか、この町を訪れると異様な閑かさを感じる。そしてその中に彼女の面影を見たような気がする。だから毎年、僕はこの町を訪れるのである。そし

て少しでも彼女に対して優しい人間でいたいのである。

僕の傍らに眠っていた小犬が目を覚ます。大きなあくびをしてそのあどけない目で僕をみつけるとすぐ、しっぽを振る。僕は、いつものように頭をさすってあげる。その整った毛並みの中のぬくもりに僕は驚いてホッと一息つく。そして小犬は僕に抱かれてまた、安らかに、しかも安心して眠る……。その間、僕は誰よりも、暖かくなれる。密かな優しさ色に染められて。

途切れた暖炉の前で
目のあらい毛糸のセーターを着て
君は小犬を抱きかかえ
まるで姉妹のような振りをして
ホッと一息つく僕に
ほんの小さな微笑を投げかけた

風信子

蜃気楼

二年十組　岡田啓介

薄汚れた窓から、四月にしては暑すぎる陽の光が顔を照らしていた。たまらなくなって布団を頭からかぶると、自分の吐く息がサウナの蒸気のように顔を蒸した。ええいくそっ、と思いながら公一は布団を足で蹴り飛ばしたが、何かいらいらして又布団の上に大の字になって寝た。朝はどこか腹立たしい。下宿する前、一緒に住んでいた頃母がよく言った、「あんたを起こすのが一番すかんよ、母さんは。何かといんねんつけてぶつぶつ言うんやもん。」公一は立ち上がって部屋を見回した。きたない、と思った。かたずけるのも面倒くさい。布団のまわりには週刊パンチボーイが、きのう寝ながら覚えようとした英語の参考書と一緒に散らばっていた。

「千葉さん、千葉さん。」

その時ドアをノックする音がして、一階に住んでいる大家さんの声がした。

「あ、はいはい。ちょっと待って下さい。」

公一はあわてて、散乱している本やその辺にある紙くずなど何もかも布団と一緒にまるくらめて押入れの中にぶち込んだ。

「今出ます」

もう一度部屋を見回し、Gパンのチャックを上げながらドアを開けた。

「おはようございます。なにか……。」

おばさんは公一が上半身裸だったので、一瞬ドキッとしたようだ。

「ああ、あのね、おとといがお家賃払う日だったでしょ、千葉さんからはまだもらってなかったから、あの……遅れても別にいいけど、忘れてるのかもと思って、それで、あの……」

「あっ、すいません。すっかり忘れてました。いやまいったなあ。」自分で役者やのお、と思った。別に忘れていたわけではない、払えなかったのだ。

「あの、おばさん」

公一は白々しく言った。

「今はちょっとこんなかっこですし、朝め…ごはんもまだだから後で持っていきますから。先月から上がって、八千円でしたね。」

「そうですか、じゃあ、後で……。あの、朝ごはんじゃなくて、もうお昼ごはんの時間ですよ。」

おばさんは、今くれればいいのに、と言いたそうな目をしてこう言うとドアを閉めた。

目付きの悪い人だ。重たそうな足音が階段を降りて行った。この場はのがれたものの、家賃はどっちみち払わなければならない。

日曜日がいけんやった、と公一は思った。悪友たちは、なにかと下宿している公一の所にやって来ては、遊びまくった。県下でも一応進学校であるK学園高校に通っている公一は、去年、父の転勤で下宿することになったのだ。K学校の生徒も結構遊び好きで、あの日も新しいクラスメート達が遊びに来て、公一はドボン

にのぼせて四千九百六十点も負け、四万九千六百円支払う羽目になってしまった。新しい友達なので、得意技の笑ってごまかすことも出来ず、アルコールで気が大きくなっていたことも手伝ってとうとう仕送りの金をやってしまったのだった。

食卓がわりのコタツに腰をおろして、公一は何も考えずにうつろな目付きで部屋の中をながめた。金か……次の仕送りまで2週間程ある。

「めしも食わないけんし、朝抜きで昼はパン一個か二個、二個食うんやったら、うどんの方がいいか。ああ、体がもたんわ。」髪の毛が逆立って、体が熱くなる。目は開いているがどこも見ていない。心の中では、なしかのう、なしかのう、と知らないうちに繰り返していた。

しかし、こうしていてもどうにもならない。公一は洋服を入れてある箱の中から厚手のトレーナーをさがして着た。最近は学校から帰るとトレーニングウェアに着がえて、別に外出もしないので私服はずっと着てなかった。モスゾールのにおいがするな、と公一は思った。

「それでどうするんか、お前。」

心配そうな顔をして正人がこう尋ねた。

その質問に対して公一は「ああ。」と答えただけだった。小学校以来の付き合いの松山正人に相談してみたのだが、やはり気まずい思いがした。

「金貸すど、五千円くらいなら。お前、友だちに借りまくりゃいいやん。」

さっきから横になって天井ばかり見ている公一に向かって少し投げやりに正人がいった。

「お前ん方の天井、きれいやのう。」

公一は、全然関係ないことをいって、さっき正人の母ちゃんがもってきてくれたおかきを、寝たまま手をのばして取った。のりが巻いとう方がうまいのに、と思った。

「千葉あ、お前ドカタせぇや。」

突然正人が思い出したように言った。

「ほら山川がおろうが、筋肉ボーイの。あいつ休みの日に行きようらしいぜ。五千円とか三千円とかいいよったけど。」

「ほんとか?」

公一は足を上げてその反動でおきあがった。おきあがりざまに、おかきと一緒に盆にのせてあったコーラを倒した。

「あ、すまん、すまん。それでどこに行けばいいんか。」

「ようとわからんけど、ほら四丁目に土建屋あるやん。あそこ行ってみたらいいやないんか……」

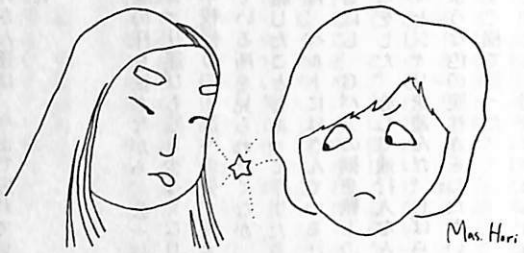
正人はそう答えながら、ベッドのわきにおいてあるティッシュペーパーで、こぼれたコーラを吸い取っていた。

「何でもせにゃ」

公一は土方が何だかみじめな今の自分に一番似合っているように思えた。正人は、まださっきのコーラをティッシュでふいていた。

現場まで行くのにそう時間はかからなかった。色の黒いおっかなそうなおいさん達と一緒になって、公一はマイクロバスの隅でタオルや軍手の入った袋を膝の上にのせて、小さくなっていた。

「こりゃ、学生。」
突然ドスのきいた声で呼ばれて、狭いバスの中でちぢこまった体をバスから降りて伸びをしていた公一は、あわてて返事をした。



「今日、学校は休みなんか。」
「はあ、開校記念日で。」
「ほう、それで休みなんか。しゃれとるのう学生は、よう休みがあってええのう。まあ、頑張れや。」
言葉は少々悪いが、いい人だと思った。本職の人達は、それぞれの持ち場に行き仕事を始めた。公一は何をすれば良いのかわからないので、ちょっと靴のヒモを直したり、手さげの中をのぞいたりして時間をかせいでいたが、こうしていてもしかたない、と思い一番近くにいる黄色い腹巻きのおいさんに聞こうと、歩みよった。すると背後から声がした。
「おい、ちょっとバイト生。」
又、別の人だった。洗ったばかりの作業服には、とれなかった油汚れが模様のようになっていた。
「お前は、そら、あそこのジャリの山をこっちの鉄棒の横に運んでおいてくれ。テオシを使えや。」
「はい、あの……」
「おう、それから休みは3回やけな。」
便所がどこか聞けないままに公一は仕事を始めた。手押し車は、車輪が一つしかついていないので、ジャリをのせてでこぼこの地面を進むのはむづかしかった。体は進まないが、気持ちはもうジャリ置き場についている。公一ははりきっていた。何回か往復しているうちに「休みにしよう」と遠くで声がした。テントの下に行くと、他のおいさんたちは汗をふきながら腰をおろしていた。公一は何だか恥かしいような気まずいような気がして、テントからちょっと離れた木かげにすわった。空に向って、つばをはく。

両方の肩がしびれているようだ。
「あんた、こっち来て座らんかい。そんな離れたとこにいかんでお茶でも飲まんかね」おいさん達は、今まで忘れていたものを思い出したように公一を見た。
「どうか、きついか」
「だいじょうぶっすよ」
シャツの中に手を入れて脇の汗を拭きながら、公一は答えた。
三時をまわると公一のジャリ運びも残り少なくなり、飯場の前の道路にはちらちらと、学校帰りの中高生の姿が見え始めてきた。同じ年頃の奴らに、働いている所を見られたくなかったし、直接関係ないけど、学校を欠席したこともあって学生たちを見ると気まずい思いがした。公一は、ベルトにはさんでいる汗や泥で汚れたタオルをねじって鉢巻きにし、Gパンの裾を靴下の中に入れてわざとおじんくさいかっこをした。そして通行人なんぞ、関係ない、というような風で黙々とジャリを運んだ。しばらくすると、からし色に銀粉をまいたような色の腹巻きをしたおいさんが、「そろそろ終ろう」と公一のすぐ横で言った。
おかしなもので「終り」と聞くと、最後だからもうちょっとはりきって頑張ろう、と思う。せっぱつまってくるとやり出す試験勉強に似ているようだ。
その時、向いの道路に一人の女学生が立ち止まってこっちを見ていた。公一は胸を針でつつかれたような感じがした。視力はあまり良くはなかったが、顔の表情まで見る自信があった。伊崎みどりだ。このまま仕事をしようかと思ったが、目が合って知らんふりは妙に意識しているようで不自然なので挨拶だけでも……だが土方している自分を近くで見られたくなかった。でもこんなチャンスはめったにない、とも思った。
「行こうか、行くまいか」、決断力のない男だ、と自分を叱る。しかし結局、公一の足はみどりの方へ向っていた。にこっと微笑んだのがわかった。中学時代より色気が増したな、と思った。何だかスキップしているようだ。
「何といおうか」と、心の中で繰り返したが、繰り返すばかりで進歩がない。
「こんにちは」
「久しぶりやねぇ」
その時、テントの所で腹巻きのおいさんの呼ぶ声がした。
「学生、終るぞ。バスに乗れ」
公一は、みどりに「ちょっと待って」と言って、テントの所に走っていった。「あの…」帰り仕度をしている現場監督に声をかけた。「ちょっと用事が出来たので、あの…ここから直接帰ってもいいですか」
なるだけ、子供っぽい、素直な少年になっていった。
「まあ、いいやろ、じゃ、ここで日給渡すけな。ごくろうさん」ポケットからくしゃくしゃの千円札を五枚くれた。その札を鼻の所に持ってくると油臭い匂いがして、それが自分の体で稼いだ金に似合っているようで、うれしかった。
テントに置いてあった自分の手さげを取って、みどりの所へもどった。もどりがけに、おいさんたちが忘れていったあめ玉の袋を手さげに入れた。「帰って食べよう」

「あの…伊崎さんは、A高やったかね。」
こんな、とっくの昔に知っている事を聞いて、すぐ次の質問を考える。白けないようにするのが精一杯だ。
「ええ、千葉君はK学園でしょう。」
「うん、まあね。」
「千葉君…さっきはアルバイトで…あの……ドカタを?。」
女の子にとって、土方というのはやはり抵抗があるようだった。でも前にクラスの友だちが、高校生くらいになると女はかわいいタイプより男らしく、たくましい男を好む、と話していたのを思い出して公一は、「ああ、バイトさ。」と、力一杯シブく答えた。答えた後で今度は、「男はやさしくなければいけない。」という何とかの証明の文句を思い出して、この次は優しく迫ろう、と思った。それから二人は、中学時代のことや、今の学校のことなど、歩きながら話し、公一は優しくなったり、シブくなったり大変苦労して、自分の右側にいるみどりの甘い香りや、時々合う視線に胸を高ぶらせていた。
み：じゃ、あたし友達と待ち合わせしてるから。
公：そう、あの明日も又会えるかもね。オレ明日の祭日も又、土方しに行くけ。
み：ええ、でも祭日なら、私、学校休みよ。
公：（しまった、ぬっさい所を見せてしまった）
み：でも、クラブ活動があるから通るわよ。バイト頑張ってね。
公：そ、そうね、がんばるけ。じゃあね。
公：（ああ、今日はいい日やった。五千円もらえたし、……）

「このまま行きゃ、俺もついに彼女ができる……ふっふっふっ。正人の奴、何ちゅうかのう、あいつの女、くっせぇけのう。」
公一は今までのみどりとの会話を思い出し、押さえ切れない笑顔で電車通りの方へ歩いて行った。

公一は、一人ぼうっと部屋の中にいた。意識がはっきりしてくると、たまらなくむしゃくしゃする。それでぼうっとしている。金は全部使ってしまった。今は皆、腹の中にいる。食べている時は、味もよくわからなかったステーキのかすが歯の間につまっていたので、楊子で取って食べると変な味がした。公一はついさっき、ドラマや小説の中でしか聞くことのできなかった失恋してのヤケ食い、を体験した。窓からの夜風がカーテンを動かしている。
「ああ、電車通りなんか通るんじゃなかった。」

みどりと別れた後、電車通りに出た公一は、反対の歩道を二人仲良く歩いているアベックを見つけた。みどりだ。
「待ち合わせの相手は男だったのか、あのヤロー。」
公一は、もう興奮してしまって、二人の後をわからないようにつけて行くと、夫婦は、電停の前にある、わらびという茶店に入っていった。

公一は、相変わらず天井を見上げ、ぼうっとしている。
なぜかこんな時、人間は自分を美化しようとする。公一は窓辺にすわり、星をながめた。
「失恋は青春そのものさ。」
人が聞いてないのを幸いに、好き勝手な事を言う。
「俺の青春って、塩味だな…か、あのCMの塩味の意味は、涙の味のことなのか。ああ、せつないのう。」
たまらない程キザなセリフがポンポン飛び出して来た。
「明日からどうやって稼ごうか。もうあの現場には行きたくないし……たいした顔やねえくせに男とイチャイチャしゃがってから……茶店やらかっこつけて入ってから……ブスめ。あー　俺っちゃなさけねえのう。」
自分で自分がいやになった。気の抜けたようにそのまま横になると、うまい具合に眠気がさしてきたので、公一は眠ることにした。
「千葉さん、千葉さん」
大家さんの声がする。「家賃か」でも、公一は、このまま眠ってしまおう、と思った。

〔協力・オオシマセイジとホイ三兄弟〕

落　下　生—落花生ではありません

二年五組　井上良太

私はあの日、奥多摩の山の中の林道を、ひとり歩いていた。私の頭上には、白い太陽が光っていた。林道といっても、時折トラクターが通ってゆくほどの幅があったので、太陽は容赦もせず、砂利を真っ白くなるまで焼いていた。陽炎か、めまいか、山の木々が歪んだ。

私は黙って歩きつづけた。何度も何度も、砂利に足を取られそうになりながら、それでもまるで、何かに憑かれたかのように歩いていった。私の顔の皮は、つっぱってしまって、ぴくりともせず、まるでお面のようになっていた。その時、風が吹いた。むっと熱い草いきれ、死臭を感じた。私は突然気がついて顔を上げた。空を見上げた。額の上で、汗の流れの向きが変った。太陽は白く透明な空の中の一点の翳りだった。私は下を向き足をはやめた。耳に纏わりつく蝉の声が、みじめに思えた。聞きたくなかった。再び、空を見上げてみた。「絶対だ。」と思った。この無情な空の下、俄に蝉が一匹鳴きやんで、ぽつりと地に落ちる。すず虫やこおろぎは、最後の最後まで虫たちを看取って、葬送曲を奏でつづける。やがては、自分たちにも、死が訪れると知りながら。そして虫たちの屍を隠すため、セイタカアワダチ草が生い繁り、それもやがては立ち枯れてゆく。そして、一輪の野菊が、お墓を飾るためにぽつりと咲く。霜に焼かれながら。

私の頭の中で蝉が鳴いていた。そして私は蝉の声に囲われていた。私は、駆け出したくなった。そんな惨めな声を聞きたくなかった。足が逃げ出そうと前のめりになるのを一生懸命にこらえてなんとか立ちとどまっていると草かげから、幽かにすず虫の声がした。

もう一度、私は空を見上げた。空は、全く地上から離れていた。私は、ここでずっと、虫たちの声を聞いていてやりたくなった。でも私は、もうアパートに帰らなければならなかった。飯の用意ができるのは、私しかいなかったから。「飯くらい、自分たちで食べてくりゃいいんだ。」などと思いながら、私は林道を下りはじめていた。危うく、すべって転んでしまいそうになりながら、ようやく私は、檜町の舗装道路に出た。ここから一キロほど歩けば、氷川の奥多摩駅に出られるのだった。

省線から私鉄へと乗り継いで、五飯田の私のアパートに着いたのは、五時を少しまわったころだった。アパートにはまだ誰も帰ってきていなかった。私は靴を履いたまま、玄関で寝っ転がった。涼しい空気が、音もなく沈んでいた。からだの汗と疲れが、冷たい板張りに吸い込まれてゆく。私は静かに目を閉じた。

目を覚すと、四畳半に蛍光灯がついていて、黒い影が、立ひざついて酒をのんでいた。酒田だった。

「あっ、先輩。いつ帰ったんですか？。」

「今だよ。」

「すぐメシたきますから…。」
「いやいい。」
「どうしてですか？。」
「……どこかに食いにゆこう。」
酒田は本箱の中にたおれている貯金箱に手を掛けた。
「あっ、先輩、それは…。」
と、言いかけて、私は口をつぐんでしまった。私たちは、バイトで稼いだ金で、本を出して、学校で売ったり、著名な文筆家に、送ったりしていたのだった。
「どうせ、今の世の奴らは、俺の偉大さなどわからないのだ。そうだろう、あんな二流三流の戯作家どもに、俺がわかる訳がない。俺は、何世紀か後の人々に賞賛されるため、今は苦しんでいなければならないんだ。さあ、ゆこう。この金でメシでもくらおう。」
と、鍵をこじあけると箱から千円札を何枚か取り出して、ズボンのポケットにまるめこんだ。箱の中には、万円札しか、入れてなかったはずだった。酒田は、何回か、この中から、金を取り出して使っていたらしい。
「おい、どうしたんだ。」
少し酔っぱらった酒田の声が、戸口で唸った。私は彼を恨めなかった。
二人して、アパートの鉄の階段を降りていった。くつの足音が奇妙なリズムで、硬く響いた。
星のでない、まっ暗な品川の空の下、腕を組んで歩くアベックの影が、街灯にぼやけた。道にそった家々の、ぼーっと明るい小さな窓では、食器を洗う音が、カチャカチャ鳴っていた。蛍光灯の鳴る音までもが聞えてきそうな道を、ぶらぶら歩いて、やがて繁華街の白い光につつまれていった。二人は、それを嫌うかのように、場末のラーメン屋に入った。
やがて食べ終って店を出ると、酒田がいった。
「おい、一杯やっていこう。」
「でも……でも近江さん、今日鍵もっていっていないから…。」
「あいつか……あいつは持ってたよ。」

「本当ですか。」
「ああ、本当だよ。」
彼はよろりと歩き出した。もう、かなり酒も入っているようだった。街灯の中を、よろけてゆく酒田の背中を放っておくこともできず、私は酒田の後を追った。
入った店は、もうどうしようもないような赤提燈だった。白けたように蛍光灯がともり、ビヤダルのようなおかみと、ねずみのような、やせこけたおやじ、カタカタまわる、ほこりだらけの扇風機。油がしみて、黄ばんだ値段表。そこいらのテーブルにはこの店といっしょに、年をとり、油のしみたような疲れはてた人々。いじけたどなり声が煙草とともにたちのぼる。その中に紛れこむように、二人は、テーブルについた。
ねずみのおやじが、二級酒を運ぶ。
酒田は、その苗字のように、たいそう酒をくらった。そして、くらった酒の分だけ、マルクスをほめたたえ、ハイデッカーを賞揚し、世の小説家をこきおろした。
「ね、先輩。もう帰りましょう。」
「お前、俺が酔っていると思っているな。酔っ払いの戯言とでも思っていやがるな。俺の目を見てみろ。俺は酔ってなどいないぞ少々、呂律はまわらないが、精神は、素面だ。」
と、まっ赤な目で私の目をにらんできた。たしかに、彼の目はまだゆるんでなかった。
「でも、もう帰りましょう。近江さん、もう帰ってるかもしれないから。」
「また、近江か。近江、近江ってなんだい、あんな女ったらし。もし、お前の恩人じゃなかったら、絶対、住わせないのに。」
「あの人、そんな悪い人じゃないですよ。」
「お前にゃ、まだわからねえんだよ。あいつは何でもかんでも、計算づくめでやってるんだ。そう、何もかもだ。ちょっとした仕草から、飯の食い方、歩き方まで。あいつの書いてる詩にしても、恋にしてもだ。そう全てだ。女にしたところで、あやしくなってくると透かさずあいつの方から身をひいて、今まで一度も、プレーボーイの名を汚がしたことがない。『女は外面似菩薩内心夜叉』でかたずけてるから、あんなに上手に渡っていけるんだ。あんな奴に何がわかる。振られた次の日に見るその女の美しさ——絶望の美だ。透明な…。いやでも、どこか幽かな望みがある……おい、お前。お前はどうしてそうあっさりと生きておれるんだ……。」
何だかわけのわからなくなった様子だから、もう止めさせた方がよいと思った。何とか店を出ると、彼は酒の匂いをぷんぷんさせて私の肩にもたれかかり、大声で歌いだした。しばらくそのまま歩いていたが、余りしつこく絡んでくるので、放っておいて、ひとりで先に歩いていった。彼は、千鳥足でふらふらしていたが突然道にしゃがみこんだ。まっ暗な細い道、裸電球が彼を照らした。私が近づいてゆくと、突然立ち上って、暗黒の空を見上げからからと笑った。汗のにじんだ酒呑顔に、涙か何かが光って見えた。
アパートの階段を上ってゆくと、ドアにもたれた影が見えた。
「近江さん。すいません。だいぶ待ったでしょう。鍵もってなかったんですか。」

「いやたいしたことはないよ。」
奇妙な音をたてて、戸が開いた。一瞬、私には、洞窟のように見えた。スイッチをつけると、蛍光灯が、気がぬけたみたいに、ポツ、ポツ、ポツ……とやってパッとついた。突然現れた現実に私は、すこし驚きを感じた。近江は、何か落ち着かない様子で、部屋のすみに立っていた。
「近江さん、何か食べましたか?。」
「ああ…。」
酒田はまた酒を呑みはじめた。近江は酒田をちらりと見ると、私に言った。
「ねえ、ちょっとお茶でも飲みにゆこう。」
二人して部屋を出た。
「ごめんね、さっきまで酒田さんとどこかへ行ってたんだろう。また連れ出したりして…。」
「いえ、いいんですよ。」
「今日どうしたの、学校に行ってなかったみたいだけど。」
「ええ…。」
「いや別にいいんだよ。そんなことも、たまにはあるさ。」
「多摩にいってたんです。」
「えっ、多摩。またなにしに。」
「歩きに…ハハ…。」
「ふうん。」
そのうち駅前通りに出て、二人は喫茶店に入った。
「何にいたしましょう。」
とまっすぐな足のウエイトレスがやって来た。
「何か食べたいかい?。」
「いえ、僕はもう食べましたから。」
「そう、じゃあコーヒーでも飲んだらいい。」
「それじゃあ僕、チョコシェイクにします。」
「マロンドリアとチョコシェイク一つづつね。」
「はい、マロンドリアにチョコシェイク一つづつでございますね。」
とまっすぐな足の後姿を、何となく見ながら近江は口をひらいた。
「それは、いいとして……南大東島って知っているだろう。今度いくことにしたんだ。」
「…南大東島…。」
「そう、断崖絶壁にかこわれた、一面さとうきび畑の孤島。」
「でもまたなんで、南大東島になんか…。」
「今みたいなままで暮していても仕方ないだろう。だから大学に休学届を出して、一年間、南海の太陽の下で生きてみようって思ったんだ。そりゃまったくの見知らぬ土地だから、苦労も多いだろうけど、あっちじゃ人手が足りないそうだから、…体一つでやってみようってね。」
「一年間も…。」
「ああ、休学届出しちゃったからね、こんな街で、鼠みたいに生きるよりはましだろう。ね、君も行かないかい。」
「……えっ、ええ…。」
「そうだよね。まだ一年生だからね?。無理だろうね。でも南大東島って一口で言うけど、向うに渡るのはなかなか大変だよ。

一旦沖縄まで行って、そこからは郵便船で行くんだ。その船がまた随分と小さいものだから、ちょっとでも時雨たらすぐ欠航しちゃうんだ。もしかしたら島に渡るだけで半月かかるかもしれないんだ。」

と、言って近江は、沖縄までの飛行機のパンフレットと沖縄からの船便のメモをテーブルの上に広げた。

まっすぐな足のウェイトレスがマロンドリヤとチョコシェイクをはこんできた。近江は食べはじめた。

私は、無造作に広げられたパンフレットを見詰めていた。私は酒田を思い出した。彼は今頃まだ酒を呑んでいるのだろう。

仄暗い喫茶店の中、流れるムード音楽に近江の食器の音が幽かに交った……。

「はやく飲まないと氷がとけて薄くなっちゃうよ。」

近江が、軽く叱るような口調で言うのに、ふっと自分が喫茶店にいることを思い出した。

「あ…はい…でも酒田さんがこのこと聞いたら、何て思うでしょう。」

「うん。言わない方がいいだろうな、あの人には。」

「ええ。」

「ねえ、何かあったの。今日はやけに静かだね。」

「…え、そうですか。」

「うん。最近あまりマンドリン弾かないみたいだけれど、マンドリンクラブもうやめちゃったの?。」

「はい…一時行かなかったら、いつの間にかやめてしまったみたいになっちゃって……この間部室に行ったら、みんなに白い目で

見られて……」
「ふうん……でもさみしくないの。」
「やっぱりさみしい…真夜中にふっと目が覚めたら、遠くでマンドリンの音が聞こえるみたいな気がして……」
何となくストローを口で弄んでいるうちに、チョコシェイクがズズズと音をたてた。
「こんな都会にいるとね……丁度いまごろが、いちばん田舎が恋しくなるものだよね。俺もそうだったよ、君はたしか九州の…」
「久留米です。筑後川の」
「それじゃ、楠とか櫨なんて木があるんだろう。この間友達に教えてもらったよ。」
「えっ、楠木や櫨を見たことなかったんですか?。」
「あぁ、うちは北海道だからね。」
そんな調子で、彼が食事を終えるまで話を続けた。でも、やはり、沖縄行のパンフレットが、頭上照明に光って、あった。

アパートに帰ると、酒田はひとり酒の匂いをたてて、静かに眠っていた。
私達は、蒲団を敷いて酒田を寝せ、そして私達も床に就いた。が、私はどうも寝つかれなかった。できることなら、私も南大東島にでも行ってしまいたかった。そんなことのできる近江が羨しかったが、一緒に行く気にはなれなかった。酒田は可愛想だけれど、私よりは、ずっとましだと思った。
私は、そっと起き出して、アパートの戸をあけ外に出た。マンドリンをもって。

まっ暗な道を通って、近くの児童公園の、水銀灯の下のベンチに腰を掛けた。こんな都会のスシ詰めアパート…ほとんど弾くこともできず、ただ磨いてばかりいる私のマンドリンが、淋しく光った。
そっと弾いてみた、涙が出そうになった。哀しくうれしかった。今、自分の心を打ち明けられるのは、お前だけだ……と。生れてから、いまだに日の目も見ないこの楽器…それを思うと、不憫で仕方なかった。しばらく動かしつづけた手を、好きな和音で止めた。静寂…水銀灯の下の私には、まわりの物も何も、闇さえ見えなかった。私は恐る恐る立ち上った。

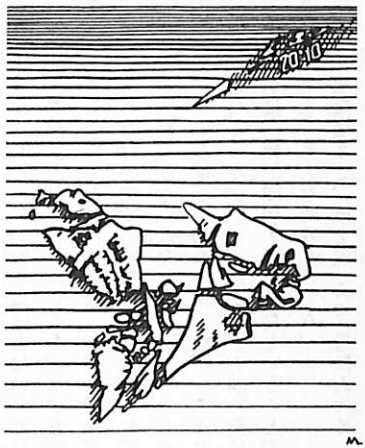
できるだけ音をたてないように、私はアパートの鉄の階段を上り、戸口に立った。小窓から、光が漏れていた、そっとノブを回して戸をあけた。酒田の寝ている横で、スタンドに灯をつけ何かしていた近江が、こっちを向いた。
「どこへ行っていたの?。」
「ちょっと公園に…」
「ああ、マンドリン弾いてたの。」
と、彼は私の手のマンドリンに目をやった。マンドリンの丸い胴が、きらりと光った。
「何してるんです?。」
近江は机の上の書類を、がさがさかき集めて、トンと角をそろえた。
「さっき話してた例のことさ…」
すこし気まずそうに近江が言った。机の上の書類の中には、貯

金通帳があった。
「もう、行っちゃうんですか。」
つい声が大きくなってしまった私を制しながら、小声で
「あさっての朝9時に船があるんだ。だから、それまでに沖縄へ渡らなきゃいけないんだ。」
酒田が起き出してきた。
「おい、すこし静かにしてくれよ。なんだ、お前帰ってたのか。またマンドリンか。マンドリン弾くのもいいが、人が寝てることくらい考えてくれよ、ふん、マンドリンか…萩原朔太郎の真似でもしてる積りか。」
「そんな……」
「日本の三大不思議は、サク太郎と太宰みたいな奴がのさばってることと……」
三大不思議とは言ったものの、三番目が出てこないらしく、彼はまた酒をついだ。酒呑みながらも、まだ三大不思議の一つが気になるらしく、じろじろ私の顔を見ていたが、突然しゃべり出した。
「だが、お前の書いているものは、ありゃ一体何だ。」
「えっ」
「小説だよ。よくまあ、あんな面白くもないものを書けるな。太宰と横光の下手なところばかり受け継いでやがって、ひとりよがりで、舞台の様子が何もわからん。まあ、お前のなんか読んでも何も得るものがないから、仕方ないがなハハ…。」
「酒田さん、いくら何でも、そこまで言うことはないじゃありませんか。まだ高校でたばかりなんだから…描写力なんて、それなりの目ができないとなかなかだって、あなただって知ってるでしょう。」
「何言ってんだ。だからわからない奴には仕方ないって言ってんだ。描写力なんて、誰が言った。それにしても、だ。お前の詩にしたところで、どうしようもない代物だな。お前の詩は完全に閉じてるよ。書いてあるだけの物でしかない。裡に秘めた世界ってものがないんだよ。広がりがないんだよ。よく、あんなせせっこましいもの書いて、そんな面しておれるよ。俺が、こんな奴らと一緒にいることからして、不自然だ。だがよ、お前ら俺に感謝しとけよ。お前らの名は、俺の同居人であったということで、何世紀か後の人民の知るところとなるんだからな。」
と、言うと、一升瓶を抱えて、襖を隔てた三畳に入っていった。
近江が、その後姿にくすっと笑った。
その笑い、なぜか私には気になった。

次の朝、目覚めると、近江の寝ていた所には、黄色い畳があるばかりだった。私は、咄嗟に起き上った。机の上に包みが見えた五万円つつんであった。押し入れの中の近江の旅行鞄がなくなっていた。走って玄関口へ行った。靴はなかった。戸には鍵が閉っていた、そして新聞受けの中、鍵が入っていた。
近江はもう、いなくなっていた。
酒田が起き出してきた。
「おい、どうしたんだ朝っぱらから。俺、二日酔いになっちまったみたいだ。静かにしててくれよ。」
「近江さんが……」

と、言いかけて、やはり言わない方がよいだろうと思い、
「…いなくなっちゃた。」
「なに、何か持ち出していやしねえか？。」
「何も……五万円お…」
「なに、五万円持ち出してやがるのか！。」
「いえ、置いていってるんです。」
「そうか、それならいいじゃないか。いつかこうなるとは思っていたよ。だが…立つ鳥あとを濁さず…か、うん立派な奴だよ。」
と、ひとりで首肯いた。
「酒田さん、あんた何とも思わないんですか、何とも。」
「なんだよ。何そんなに怒ってんだよ、そんな大声出されると、頭に響くから静かにしてくれよ。ああ、お前、今日学校どうするんだい。」
「行きますよ、当然。」
「俺は寝とくから、鍵閉めて行ってくれよ。ああ、まだ行くの早いだろう。何か作っておいてくれよ。じゃあな…」
と、欠伸しながら襖を閉めた。
　私は着る物を身につけると、何も作らずに、バタンと戸を閉め出ていった。酒田の態度が気に喰わなかった。人のことなど何も考えないのか。酒ばかり食って何もしないくせに、「数世紀後に俺は、神とあがめられるのだ、だと」ふざけるな。畜生、あいつに近江さんの行き先を教えてやろうか――とその時、不意に思った。私が腹を立てているのは、酒田に対してなのだろうか、と。私はあんな行動をとれる近江に対して、そして、何もできない自分に対して苛立っているのではないか。
　そう考えいるうち、酒田への怒りは消えていった。

　その日は、ただ一日中、ぼうっとしていた。講義を聴いても聞こえず、かと言って眠っている訳ではなく、矢鱈と汗ばんで、そして疲れた。
　そして茫然としたまま電車にのりこみ、知らないうちに、アパートへ帰りついていた。
　珍しく酒田は新聞を読んでいたが、無造作に、新聞紙をばさっと投げると、にこにこしながらやってきた。
「今、帰ったの？。」
「はい、ただいま。」
「今日、パチンコで煙草三ケ分勝ったんだ。お前にもチョコレートを取ってきてやったよ。」
「…チョコレート…」



「今日、何か食いにゆこう。何だか実に爽快だ。」
言った後で、別の意味にとられたのではないかと、すこし気まずそうにしていたが、胸のポケットに勝ってきた煙草を投げこむと、突っ掛けを履いた。
ガチャリと戸を閉め、鉄の階段。こんな街中、どこからか蟬の声——
「まだ、ちょっと早かったかね。」
と、空を仰いだ。
「どこで鳴いてるんでしょうかね、あの蟬？。」
「うん、どこだろうね。この辺に、蟬の棲めそうなところなんてあったかね。」
「先輩、秋って好きですか？。」
「うん、嫌いじゃないよ。俺はあの、紅葉って奴が大好きでね。それに、すずむし、月、悪いものはないねぇ。」
「僕は、嫌いですよ。もみじは紅くなる前に一度枯れるんですよ人目につかないように葉の先の方から、そしてその後で霜に焼けて紅葉するんですよ。だから紅葉って死んでしまった葉っぱなんですよ。そんなの僕いやです。絶対、何と言われても、いやですそれに、みんな死んでしまうし…」
「ふうん。でも俺たち人間の目から見て美しかったら、それでいいんじゃないかね。」
などと酒田が美感を講じている内に、またこの前のラーメン屋に着いた。彼の話は、テーブルについても終らなかった。
「おじさーん、餃子ラーメンの大盛二杯ね。それとビール。おつまみつけてね。」
そう言うとまた話をつづける。
「だから恋や芸術っていうのは生活とは相対するものなんだ。だから恋だけやってちゃ生きてゆけないし、生活を追っていたら、芸術なんてできない。中学や高校の頃、恋をしてたら成績が下った、なんてことあっただろう。」
と、言うと彼は子供っぽく笑った。ビールが、はこばれた。彼はコップに波々と注ぐと、一気に飲み乾した。
「だから俺が言っているんだ。生きている間っていうのは、どうしたって生活の汚れってものが付き纏うから、生きてる間に認められる奴は、本当のものじゃないんだ。わかるか。」
「…ええ…だったら、僕たちって何なんですか。」
「これだよ。」
と、彼は、おつまみのピーナツを抓み上げた。
「地上で咲いた花は地面の中で実を結ぶ。うん、まさしくこれだ。」
彼はひとりで納得して、おつまみのピーナツをひとりで食べてしまった。
餃子ラーメンとビールで満腹になっても、店を出てからも、彼の話は続いた、まだ明るい空の下、蟬は鳴き止んではいなかった。歩いて行くうちに、じっとりと汗ばんだ。
アパートの階段を上ってゆくと、見知らぬ男が戸口の前に立っていた。グレーのスーツの上着をとって、ブルーのシャツに赤いネクタイ、二十七・八のエリート社員といった風な男だった。
「あの、私大庭出版の松村と申す者です。…あっ名刺をどうぞ。」
男は、脱いだ上着から名刺をとり出した。酒田の瞳が、きらりと光った。

「近江剛さん、いらっしゃいますか。」
「近江……」
二人は同時に呟いた。酒田の顔が青ざめた。私の口が、心にもなく、動きはじめる。
「…はい、いました。」
「あの方の詩が、我が社の詩雑誌の新人賞に内定いたしましたので…あの先程からお電話差し上げていたのですが、留守の様でしたので、編集長が、何が何でも連れてこいと申しまして…あの、そちらの方でしょうか？。」
松村とかいう男は酒田の方を見た。酒田の唇が、ふるえていた。
「いえ…近江さんは、今朝、南大東島に発ちました。」
言ってしまった後で気がついた。酒田の顔が一瞬、電気が走ったように引きつった。そして、すっと回れ右して、階段を転げ落ちるようにして走り去った。
「あの……どうしたんでしょうか。」
酒田の後姿を遠く見ながら「近江は、やはりすべてを、計算に入れていたんだ」と思わずにはおれなかった、それでも、私のこの饒舌は――
「あ、何でもないんです。時々あることですから、どうぞ気になさらないで……あの近江さんですが、明日の朝9時に沖縄から、南大東島への船に乗ると言ってました。でも、沖縄のどこから乗るのかわかりませんが…。」
「いや、どうもありがとう。そんなのは調べればすぐに分ることですよ。しかし、驚きましたね。南大東島ですか、詩の才能も大したものですが、タレント性まで、備えてらっしゃる。これは、現代を代表する詩人の出現かもしれませんねぇ。」
編集者は帰った。酒田は帰らなかった。
マンドリンはいつになく、ぴかぴか光っていた。私は、弾く気もしない程、疲れていた。
私は眠った。気持悪くなる程深くねむった。なぜか涙も流れ出た。
目覚めると9時だった。気怠い光が窓を白く滲ませていた。腫れ上った目で考えた。十五時間、眠っていたのか…
何も覚えがない気がした。ひとり切り離されたような気がした。
このアパートは、私一人には広すぎた。
私は、目覚めたそのままの形でアパートを出た。学校へ行く積りだった。積りだったが、行かなかった。省線を新宿で降りると地下街をぐるぐるとまわっていた。
今頃はもう、近江は、あの編集者に会っているだろう。ふっとそう思った。ただ歩きまわっていても仕方なかった。
地上へ上った。雲が低く垂れこんでいた。ここには蟬はいなかった。灰色の地面と黒い雲で挟みこまれた空気を、自動車と人々が攪拌していた。もう家に帰ろうと思った。
電車に揺られているうちに駅を一つ乗りすごしてしまった。面倒臭いのでその駅で降り歩いて帰った。
アパートの階段を上りながらマンドリンを思い出した。あれをもって、どこかへ行こう。
鍵は開いていた。酒田が帰っていた。また酒を呑んでいた。黙

って流しへ行って水を一杯呑んだ。酒田を見やった。彼は私にも気付かないほど、激しく酒を呷っていた。

もう何も言うまい。とマンドリンを入れていた戸棚を開け、手を入れ……ない！

なかった。

酒田を見た。相変らず、酒を呷っていた。

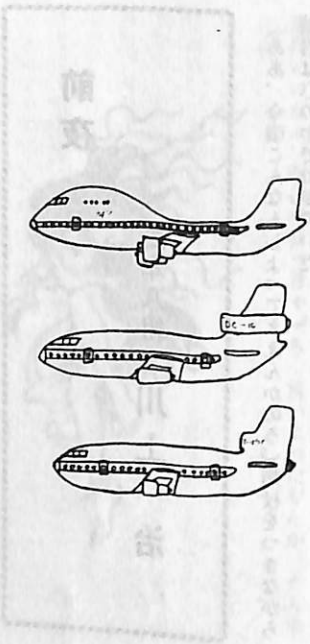
私は、そのまま家を出た。

私は奥多摩行きの電車の中にいた。

マンドリンを酒に替えた酒田に、腹が立ったからではなかった。近江にに対してでもなかった。

私は来るべきところへ来た、という気がしていた。

黒雲は更に低く、電車の中は、真昼なのに点灯し、雨の匂いがしてきそうだった。



小さな駅にとまるごとに、暗い湿った空気の下蟬の声が重苦しく響いた。

電車が、奥多摩に着くのと同時に、大粒の水が降りだした。

駅を出た。睫毛に水滴がついた。

私は、あてもなく走り出した。

走りながら、ようやく分ってきた。

何のかのと言っても、裏には自分はなかった。白紙、だからだ。

蟬の声など聞えなかった。雨の匂いを感じた。痛いほど強く雨が降りつけた。息が切れた。大きな水溜りの中、立ちどまる。雨が降っていた。ずっとずっと遠くまで。

林道へ入った。

「何かわからないが、何かするんだ。」

切り通しに、赤く濁った水が流れていた。

もう雨の音さえ聞こえないような気がしてきた。

激しくゆれ動く木の葉の向うに、不気味に静まりかえった奥多摩湖があった。

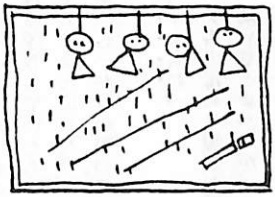
前夜

二年八組　川上　治

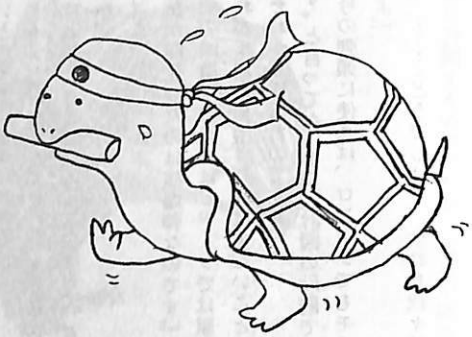
（ああ、今頃こんなんしよってええんかのう。）頬杖をつきながら誠治は心の中でつぶやいた。
（明日から二学期がはじまるっちゅうに、まだ宿題が半分以上も残っちょる。）
（妹の奴に頼んで手つだってもらおーかのお。）
（いや、やめとこ。そんなんしたら、あとでアホにされる。そのうえこっちの弱みまで握られる。）
（今から頑張ろうかのお。）
（何か起こって、今月が七月にならんかのお。）
（腹へったのお。）
（今晩徹夜かのお。）
今は夜中の一時。みんな寝ているとみえて、家の中はシンとしている。
「ボーン。」
時計の音が無情にも誠治の耳を突き刺し、彼を独白の世界からつれもどした。
（あっ、もう一時や。）
（腹へったのお。）
（はよせな、宿題が終わらん。）
（あと、何が残っとるんかのお。）
（うーん、何々、えーと、物理の問題集があと20ページ、と現国の問題集があと46ページ。それと化学の問題集があと12ページ、か。）
（きついのお。みんな終わるかのお。）
（どれから、手つけようかのお。）
（どれが一番簡単かのお。）
（んー、物理と化学は、答えがあるけ、それ丸写しにすりゃえーか、現国の方は本質的に簡単やけすぐすむ、と。うーん、どれからいこうかのお。）
（それにしても腹へったのお。）
（よし、腹がへっては何とやら。何か、食ってからにしよう。）
椅子をキシませないように慎重に立ちあがると、誠治は、一階のキッチンへと、降りていった。
誠治が冷蔵庫や冷凍庫や戸棚の中をあれこれと物色していると、「パチッ」という電気をつける音がして、誠治は一瞬視力を失った。
「うわっ、オイワ。」
「キャッ、泥棒。」
「あ、なーんか、お前か。あんまりおどかすなっちゃ。何しよんか、今ごろ。」
妹のひきつった顔を見て、だんだんお岩みたいになってきたのうと思いながら、誠治は小声で聞いた。

「お兄ちゃんこそ何しよるん。」
誠治の顔を見て、だんだん人相が悪くなってきたわ、と思いながら、妹の美香が聞き返した。
「あー、ちょっと腹がへったけな、何かねーかと思って……。」
「私もいっしょ。で、何かあった？。」
「ああ。食パンが四枚と、コーラが1ℓ用のビンに半分くらいあるみたいやのお。」
「ふーん。なら半分ちょうだい。」
「ああ、えーよ。どうせ一人で食いきれんけ、半分もってけや。お、ところで、お前、今ごろまで何の用で起きとるんか。」
「えっ、えーその…ちょっと、つまり、その…宿題が……ね。」
「つぁーらんのお、お前。宿題くらい七月中におわらしとかんか、まったく、もう計画性のない……。
だいたい、お前はグータラなんやけ、……。
お前、俺が、『宿題せんでええんか』ち、聞くたんび、『うん、まだいいんよ。明日やるっちゃ』ち、言いよったやんか。そんなことやけ、今ごろからやらないけんようになるんぞ……。
『いつまでも、あると思うな、金と明日』、よく覚えとけ……。」
美香に、30分程度説教していたら、ひどく、自分がみじめに思えてきたので、やめることにした。
「……。じゃあ、しっかり頑張って、明日までに全部やり上げれよ。」
「うん、お兄ちゃんもね。」
誠治の背中に、美香の毒ぬり短剣が深々と、ツカまでつきささった。誠治は、一瞬立ちどまったが、そのまま自分の部屋へ上っていった。
（チキショー、あのガキャ、知っとったんか。）
（知って、30分も黙って聞きよったんか、くそー、なめやがって。）
誠治は、コーラをコップに注ぎ、一気に飲みほそうとした。
「ゲボッ、ゴボッ、ゴボッ。」あまりの口惜しさにむせてしまったのだ。
（ウー、くそっ。いつかお返ししてやるけの。）
「ボーン、ボーン。」
（うわっ、もう二時か。）
（あちゃー、変なんとかかわったんで、時間が足らんごとなりそうやのお。）
（はよ始めな、ホントに間にあわん。）
（でも、こげな心境じゃ、やる気になれんのお。）
（よし、気分なおしに一杯やるか。）
誠治は、机の一番下のひき出しの一番奥にいれてあるウイスキーの小ビンを取り出した。振ってみる。

「チャッポン、チャッポン。」
（一回分ぐらいしかねえのお。）
（ま、しゃあねーか、全然ないよりマシやろ。）
コーラが底の方にわずかに残ってるコップにウイスキーのビンを傾け、よく振って、最後の一滴まで出す。そのビンを、残りのコーラで、いっぱいにする。蛍光灯にすかすと、何ともいえない色である。
（うーん、美味そうやのお。）
「ゴクリ」
（うー、やっぱうめェー）
「ゴク、ゴク」
（わーお、腹わたにしみわたる。）
「ゴク、ゴク……ポタ。」
（あー、美味かった）
「ゲーピック」炭酸とシャックリが同時に出た。
（ふー、ええ気持ち。）
（でもまだ物足りんのお。）
（もうちょっとだけ欲しいのお。）
（おお、そーいえば、梅酒があったのお。よし、あれ飲も。）
誠治は、コッソリ父の部屋にしのびこみ、物音をたてないように細心の注意を払いながら、酒ビンを片手に自分の部屋にもどった。
（このビンでええんかのお、よーわからんけど、色がよー似とるけ、えーやろ。）
誠治の家では、梅酒を一度大きなビンでつくり、そのあとで他の小ビンに移しかえることになっているので、誠治には、よくわか



らなかった。
誠治は、コップになみなみと酒を注ぐと、
「ゴク、ゴク、ゴク、ゴク……。」と一息に飲みほした。
（うわーすげえ。梅酒ちゃ、こんなんきくもんやったんか。）
胸が、カーと熱くなるのを感じながら、またもコップを満たす。
今度はゆっくりと、
「ゴクン。」
（フー、うめえ。人生ちゃ、いいもんや。）
「ゴクン。」
（フン。宿題くらい、何かっちゅうんじゃ。）
（宿題やっていってても、実力テストで悪かったら、一緒やないか。）
「ゴクン。」
（あーあ、宿題とか、もー、どーでもええのお。）
（あんなんしてもなんも、役に立たんわい。）
「ゴクリ」
（よし、もうやめや。せんかっても死なせんわい。）
誠治は酒ビンを手に、ごろん、と大の字に横になった。からだはポカポカ、頭はフワフワ、天国にいるような気分になっていた。
（あー、ええ気持ちや、このままどっかに飛んでいけそうやのお。）
（う、何かまぶたが重くなってきたのお。）
（ま、えーか。どうせ、宿題とかせんのやけ。）
誠治は、奈落の底におちていくように、眠りにおちていった。
誠治がしっかりと握っていた酒ビンのレッテルには、「ラム」と書かれてあった……。



記録

三年七組　高瀬英樹

ドイツの敗戦はもはや決定的であった。そして、我が国の戦局は非常に不利だった。アメリカに対して科学力の差はいかんともしがたい。一人の日本人技術者として、情けない気もする。だがまったく望みがないわけではない。今回のドイツ派遣では、ドイツが大戦中に開発した、あるいは開発中の機密兵器を残らず我々に提供してくれるという。レーダー・射撃照準装置・ジェットエンジン・ロケット・音響魚雷、どれを取っても喉から手が出るほど欲しい物ばかりだ。

やがて、我々は無事ドイツに到着した。一行はそれぞれの専門で班に分かれて、それぞれの目的地へ向かった。私はV二号ロケットを見学しに行った。ロンドンへのV二号発射の様子を見ていると、後ろで二人のドイツ人が話をしている。何となく聞いていると、どうやら何か新兵器を開発したらしいことが分かった。

「そうだ、やっと出来上がったよ。総統は開発中止を命じられたが、こっそり研究を続けた甲斐があった。こいつをV二号に取り付ければ……。」

「しっ！」

もう一人がさえぎった。私に気付いたらしい。一体何なのだろう。そう思い振り向くと、一人は技師のようで、もう一人は軍人のようであった。私は技師風の男に話しかけた。

「いったい、何が完成したのですか。」

「……。」

「私は今度日本から技術交流のために来た者です。ドイツの技術は何でも学びたいと思っています。」

「そうですか。ドイツと日本は友人だし、まだ完成したわけでもないし……。ではお教えしましょう。」

「おい！大丈夫か。」

と、もう一人が言う。

「いいさ。実は私が開発したのは核爆弾なのです。」

「核爆弾！この前の派遣隊の話では、ドイツでは原子の破壊に成功したので、それが兵器に利用されればすごいことになるということでしたが、それが完成したのですか。」

「ええ、そうです。と言っても、まだ設計図の段階ですよ。だが、これをあのV二号の弾頭に使えば、ロンドンでもモスクワでも、一発で廃墟ですよ。」

「それはすごい。……どうでしょう、それも我々に譲ってはもらえませんか。」

「そうですね、まだ実験もしてないのですが。」

「是非お願いします。」

「まあ日本がアメリカを攻撃してくれれば我が国も助かるし、では、設計図と説明書の写しを差しあげましょう。あとは、あなた方自身で完成させて下さい。どうです大佐、いいでしょう。」

そう聞かれて軍人風の方は、

「うーん、確かにそうだ。総統閣下は開発中止を命じられた事でもあるので、個人的な事として君に譲るという形で、公式記録には載せないでおけば良いだろう。」
「どうも有難うございます。」

こうして私は原子爆弾というおまけ付きで、V二号ロケットの設計図と姿勢制御装置の実物を手に入れることが出来た。他の者も、それぞれ様々な物を手に入れた。目的を遂げれば長居は無用である。いつ連合軍が攻めて来るか分からない。急いで品物を伊号潜水艦に積み込んだ。夜に紛れて出航、一路シンガポールへ向かう。

帰途、皆の声は明るい。大きな収穫を思えば当然だ。日本に帰り着くまで時間はたっぷりある。それまでに少しでも収穫物の整理や使用手順などを考えねばならない。また、まだ完成してない物は、完成への手順を考えるなど、やるべき事はいくらでもある。

私はまずV二号の用い方について考えてみた。V二号の射程はせいぜい三百キロである。これを米国の主要部に撃ち込むには、米国沿岸まで進出しなければだめだ。そして今の戦況から考えて大型艦で沿岸に近づくのは無理であろう。となると、唯一の手段は潜水艦だ。幸い現在我が海軍では潜水空母ともいうべき伊四百型を建造中である。これにV二号発射装置と、今回手に入れたレーダーやシュノーケルなどを取り付ければ完璧だ。

さて、問題は原子爆弾だ。詳しく説明書を読めば読むほどに、その恐ろしさが分かってくる。これ一発で高性能爆薬一万トン分以上の破壊力を持ち、爆心から一キロ以内の建物はすべて破壊され焼けてしまうらしい。さらに、その後には放射能のため、生物は存在できないというのだ。戦争にこれほど効果的な兵器はないが、もし、これを都市に落とした場合、そこに住む人々は今まで人類の体験したことのない、恐ろしい被害を受けるのだ。年寄りも女も子供も大勢が死ぬのだろう。生き残った者も、二度とその町には近づけないだろう。かつて人類の経験した、どんな災害よりも悲惨な光景が展開するのだ。だが、日本が勝つにはもはやこ

れしかないのだ。我々の生きる道はこれなんだ。たとえ我々が使わなくともドイツが、ドイツが使わなくともいつかはどこかの国がこれを使うだろう。それならば、どんなに恐ろしい結果が待っていようと、心を鬼にしてこの爆弾を完成させねばならない。それをやるのは私だ。後世に悪魔と呼ばれようとも、これを完成させねばなるまい。よし、私は必ず完成してみせるぞ。と、こうして私は原爆の完成を決意したのだ。

♡　♡　♡　♡　♡

「お父さん。ここから先はちぎれていて分からないや。これは一体何のことだろうね。えらく古い日本語だよ。それに知らない言葉も多いし。大体、原子爆弾って何だろう。」

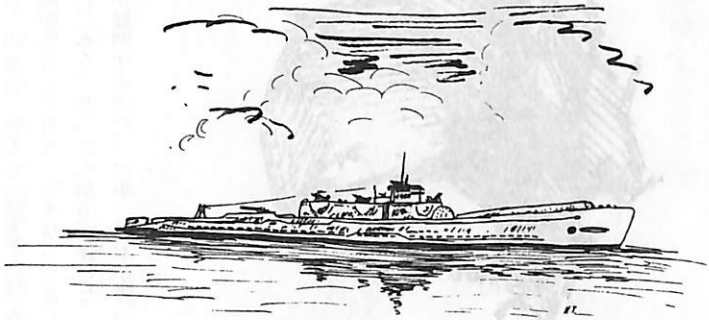
「さあ。原子というのは物質を構成している粒子のことだろうが、爆弾っていうのは分からないな。どこかで聞いたような気もするけどね。ひとつ、中央記録センターで調べてみるか。」

父親はそう言うと、息子に右の二番目の手を伸ばして、その古い紙の束を受けとりながら左の腕を二本使って記録抽出回路のキーをプログラムした。数十秒後、壁のスクリーンに回答が現れた。息子が三つの瞳を輝やかせながら読んだ。

「ゲンシバクダントイウコトバハ、セイショノナカニデテキマス。ソウセイキ、ダイイツショウノイチ。バンブツハゲンシバクダンヨリウマレル。セカイノハジメ、イダイナルカクユウゴウ、チキュウヲオオウ。ネツトヒカリノアト……

〈終わり〉

付記・大戦中日本の保有した潜水艦百九十隻中喪失百二十七隻。



地獄のピエロ

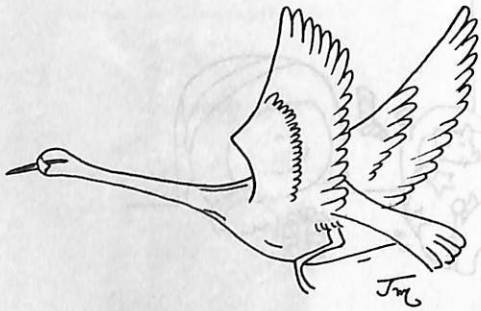
二年九組　前川修一

やけさ　もうきついんよ
どこにさ　そんな価値があるんとゆうん
何がさ　俺をつってんだよ

ズタズタさ
愚痴なんて　自分じゃ言いたくないけど
聞いてくれる人を探してしまう
なんで～　もう

死　なんて美化された言葉より
生　なんて蹴とばされた言葉の方が　醜く思えるから
　一歩でも　美化された言葉と知りながらゆらめいてしまう
けど　俺は　恐い　やけ立ち止まり
　振り返り　生という地獄に突びこむ
針の山を越え　血の池をくぐり　俺は歩む
　どこへ？

新聞見ても　TVを観ても
俺の極楽は遠ざかる
ユートピアはそこにはない
未来への道は既に遠い



俺だけがそう悲観しとるんかもしれん
未来を求める事が　わがままなんて誰が言った
ヤバイはずはない

俺だって　小さい時から　弱い者をいじめてきた
殺してきた
遊び半分にカエルを爆竹で吹っ飛ばし
その内臓が四方に飛び散るのを
まるで花火を見るように手をたたいた
無力の者をいたぶり、火にかけ、水をかけ　たたいて
いじめるだけいじめて　一番みじめな殺し方で殺した
ここまで大きくなるのに
うそもついた　人も傷つけた
何人もの友を裏切り　他人を辱しめて　自分を正当化してきた
そして俺の罪は深くなり
地獄の門は開きつつある

けど　昔なじみの行為は
未来へのkeyやった
自分で自分を悔やんで泣いても
最後は自分を悲劇のHEROに追い込んで　その悲劇の不幸に
酔い、自分を嘆き　あわれみ　そして狂った

だから　地獄は深い

くもの糸も落ちては来まい
俺は奈落の底でもがく
号泣して　号泣して
鬼にもがれた腕を探し
鬼に取られた足を求め
俺は　わめき　のたうち回り
罪を　くり返しながら生き抜く

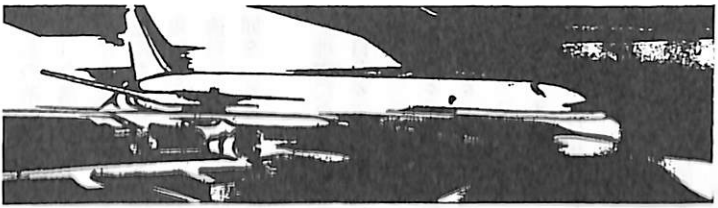
地獄に自らを落とすことによって
自分を正当化し　自分を逃げの体制に持ち込む

自分を悲劇の主人公にして
同情をあおぐ

俺は一体いつから　人の情をあてにするくらい
　弱い男に成り下がったのだろう

何が悪い
親が悪い　教師が悪い　環境が悪い　社会が悪い
　自分が悪い
何々のせいだと言い切れないし
　罪はかぶせられない
だけどかぶせて　かぶせて山となりけり
己れの醜さを　否定しながらも肯定するしかない

地獄に自らを　たたき込んだ罪を受け
罪を受ける事で　自分を正当化しようとした自分を呪い
　俺は　火を吹く
俺は　醜い自分の姿を呪いながら
　俺は　火を吹く
燃える火に　時を見つけながら
ゆらめく炎に　自分を映しだして
　俺は　火を吹く



三年短歌

藤村の　熱き心を　わが胸に　伝へ流るる　千曲川かな　山口哲史

白樺の　清き姿に　魅せられて　ふとつかの間の　思ひにひたる　山口哲史

車窓より　さわやかに風　舞ひおりて　ほのかにただよふ　初秋の香　平　淳一

山なみの　白樺林　見るほどに　飛ぶ鳥かへる　山のきはかな　吉田洋介

雲海の　かなたに浮かぶ　き峰の　奥つ方にぞ　富士は見えける　久保善嗣

秋深き　信濃路を行く　バスの窓に　甲斐駒せまり　心はずみぬ　山路昭彦

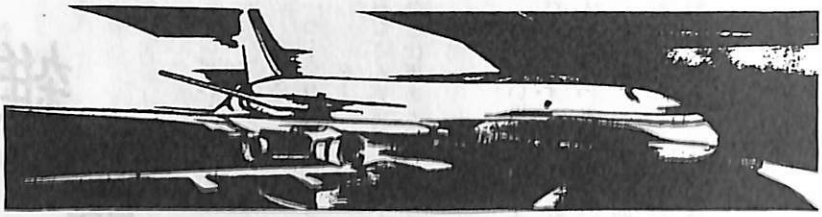
錦なす　もみぢの中に　中禅寺湖は　鉛色に　ひそみたりけり　坂井恭治

杉木立　静まりてあり　いにしへの　君が造りし　栄華の極み　赤井敬子

眼鏡ふき　目をこらせども　思はずに　ふさかりけるかの　眠りねこ　林田佳子

白樺の　林の中の　月見草　摘みて思ひ出　押し花にして　泉　理子

にぎはへる　バスの窓より　外を見れば　わが目も染まる　山峡の秋　小賀山千春



翁あり　城の木かげに　座りゐて　草笛吹ける　心ゆかしき

片岡優子

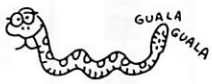
木々の間に　はるかにのぞむ　湖の　波もなく音もなく　そのしずけさは

高力美由紀

車窓より　目をこらしゐれば　月出でて　暗き樹海に　富士は浮びぬ

古家　淳

雑感



ザンゲいたします
一つ…これからまじめにこの狭い部室にかようことを…
一つ…全身全霊を傾けてお仕事をすることを…
みなさん御苦労さまでした。
ひと仕事あとのジュースは最高でした。
（S子）

☆

だいたい汲泉人というのは、伝統的に遊び人のはず。そして今年も予想違わず遊び人！　だったはず……。
BUT！　この一年間でどうにか本誌発行にまでこぎつけたのは、ソフトボールで鍛えた体とジュースの誘惑のおかげ。かな
（M・K）

☆

この小さな本を一冊作り上げるにあたり部外の多くの方々の御協力をいただいたことに深く感謝いたします。
特に親身になって啾唧集を御世話していただきました三年三組宮崎氏、六組山田氏に頭を下げるものであります。
今後ともよろしく御願いいたします。
ありがとうございました。
（早見）

☆

汲泉はソフトボール大会では一回戦で負けました。僕はみんなに大変期待されていました？が、全くヒットが打てなくてどうもすみませんでした。このつぐないはなんとしてもしようと思っています。
それにしてもE・S・Sは去年にひき続き三位でした。まあそれで許して下さい。それにしても宮さん、夏休みはあまり出席しないですみませんでした。
（H・Y）

☆

「雑感書け～！7行書け～！」と冷たい冷たいお言葉が○○君から飛んできて必死で書かされました。でもこれ以上とても続けられそうにありません。お許し下さい皆様。
あ――――――――雑感。
（いなじ）

☆

僕は今年ついにこの福岡県立小倉高校に入学した。しかしこの汲泉に入ったことで人生がメタメタになりつつある。それにしても今年入泉した一年は、明経率80％!!
（よしながたかしはしかたがなしよ）

☆

雑感などこの私に書かせないでください。汲泉24号の最後を飾るこのページを汚さないために……。
たいへん真面目だった汲泉人の皆様どうも御苦労さまでした。
（すみえ）

☆

1コカ・コーラのミニボトルが当った。
2知らんかった三年生と仲良しこよしになれた。
3総ム部の『異常』君と仲よしになり、数学の宿題を借りられた。
以上、夏休みの大部分を汲泉部室にてすごした利。
a宿題がまだ、$\frac{5}{6}$残っている。
b夏休みあけの実力で半分以下をとる自信がでけた。
c昼食代のため一ヶ月分の小遣い消える。
以上、夏休みの大部分を汲泉部室にてすごした害。
（ハルクン）

今年は前年にもまして、私にかかる重大なプレッシャーをはねのけ、みごとに汲泉発行にあいなることになりました。この汲泉の出るころには、阪神タイガースもめでたく優勝しているころでしょう。こうなりましたのも私と掛布選手のありがたい活やくと、信じてうたがいません。

（汲泉の小林）

☆

今朝はめずらしく早く目が覚めた。まだ真暗で、お星さまが輝いています。早起きの乳牛屋さん、新聞屋さん……毎日、御苦労さん。いつもなら、おかあさんに起こしてもらうようにたのむんだけど……。今日は、早く目が覚めちゃったので、お当弁を自分で作ろうっと！　でもおかあさんご飯を多めにたいているかな。

なんとか、かんとかいってるうちにもう汲泉第24ごうが出き上がりつつありますが、何もしてない私めに雑感を書かしてくれてその上カット3枚が載って、うれしいのひとこと。

そろそろ、ご飯ができたかな？

（朝寝ぼうの朝御飯）

☆

精一杯やりました。あくまでもできうる範囲で…。

（○○ツキマユミ）

☆

今年は、どうしてか雑感が書けません。どうしてでしょうか？

そうです、今年は仕事をちっともしてないのです。ゴメンナサイ宮さん……

それにしても今日の高校野球、箕島と池田とどっちが勝つのでしょうネ！

（アイちゃん）

☆

コカコーラが飲みたいです！

名ばかりの部員でごメんなさい。

これからはシャキッとするから、コーラ用意しとってネ。

（ちさと）

☆

特集について一言

今年の特集、かき氷器で砕いてみました。いちご水でも、メロン水でも、金時でもお好きな様にしていただいて下さい。

練乳でもおいしいかと思います。

閑話休題、読んだ後の感想（文句だったりして）を汲泉人にぶつけて下さい。

BUT、読めよ。ちり紙交換に出さんでくれ〜〜〜！

プシューン　プシューン　300点

（前ポン）

☆

別にありませんから書きません。

（重藤のテシタ）

☆

汲泉とはむなしいクラブです。夏休みまで学校に出てきて、苦労のあげく作り上げた本も、ほめられるどころか、ケチをつけられるばかり。これほど益のないクラブは他に類を見ないでしょう。愚痴ばかり申し上げてきましたが、これをもって私の雑感とさせていただきます。字数制限の八行でした。

（Y・M）

☆

ここはどこでしょう？小さくてむさくるしい部屋。机が2つ、長いす4つ。何となく見たことがある部屋だなァーと思っていたら……「こら！はよ雑感書かんか！おまえが最後なんぞ。」という幹事の声。何と夢ではありませんか。あーあ、ここは汲泉部室！あのー24号できたって本当ですか？

（露破亜蠹）

■グラビア。今年の汲泉部員は三年生がいなかったため、修学旅行その他の写真を集めるのがきつかった。（ハル）

■生徒会。今年も原稿の集まりが悪かった。特に行事は後々までのびて、結局載せられないものもあった。来年は全生徒会行事を載せたいものだ。（ま）

■クラブ。近年、マンネリ化してきたように思われる。クラブ紹介の良い機会なので、もっと部の特徴を前面に押し出してほしかった。写真も少なかったようだ。（ま）

■啾唧集。寄稿部数は例年並みであったが、長編ものが多かったためページ数だけは去年と肩を並べるものが出来あがった。しかし、クラブと同じくマンネリ化傾向が強いようだ。啾唧集は自分の言葉を文章として残すものだから、その意義にかなった原稿が少なかったことが悔やまれる。（M）

■「我々高校生は、どうあるべきか」というテーマに基づいて特集を組んだが、テーマが大き過ぎたのと、私達の力不足で深く追求することができなかった。今後の特集に期待したい。（ま）

■文芸。今年は部数・ページ数共に多かった。しかし、そのわりには駄作が多いようであった。（ハル）

■最後に、編集・写真・カット・etc…。御協力して下さった先生方・生徒の皆さん、ありがとうございました。

編集委員

二年一組	大石聖子
二組	三浦啓子
	石松澄枝
	奥田浩三
三組	黒瀬雅子
四組	稲益美香
	大神志津香
	古川雅邦
六組	安部浩二
	早見務
	吉田英夫
八組	川上治
	重藤将仁
	藤田伸也
九組	前川修一
	宮本義弘
一年二組	秦瑞子
四組	竹山まゆみ
五組	吉永敬

汲泉　第24号

昭和54年11月１日発行

小倉高等学校生徒会◆北九州・小倉・愛宕町
有限会社 岩田印刷所◆北九州・小倉・下富野

KYYUSSINEN